
流星のロックマン～地球、4度目の危機!?!～

充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロツクマン〜地球、4度目の危機!??

【Nコード】

N2642J

【作者名】

充

【あらすじ】

スバルがレゾンの力で地球に戻って来て二ヶ月後のある日、スバル達は、6年生になるために始業式出していた…

そして、始業式とともに始まる新たな敵の地球征服作戦…

スバル達は、この作戦を止めて地球を救う事が出来るのか？

〜7月28日、無事に完結いたしました。今までありがとうございました(充)〜

プロローグ(前書き)

初です

プロローグ

「?????」

「おい！シュック！！地球の様子はどうだ！？」

「は！バルアナ様！！どうだと言われましても、人間がウジャウジャしております」

「そうか…なら、そろそろ…地球を征服するか！」

「はい！承知いたしました…なら、我がバルアナ隊を召集しますか？」

「ツフ！当たり前だ！！今すぐに召集せよ！！」

「かしこまりました！！直ちに召集させます！」

「ふ……フハハハ！！…ついに地球を我が手に…フハハハ！！」

「コダマタウン」

「おいスバル！！起きろ！！遅刻するぞ！」

「うん…後5分…むにゃむにゃ」

「何回目の「後5分」だよ！！始業式とか言っちゃつに遅れるぞ！」

「!?!?!は!?!?!そうだった!?!?!今日…始業式だ!?!?!」

「やっと起きやがったか…早く用意しろ!?!?!」

「そっだね!?!?!」

僕は、急いでベットから起きて学校に行く用意をした。

プロローグ（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

感想書いてくれたら嬉しいです

始業式（前書き）

プログラム短くてすみません（-o-）

始業式

『早く行かないと遅刻するぞ!』

「分かってるよ!」

『だいたい、お前ももう少し早く起きろよな!毎日起こしている俺の身にもなってみろ!』

「はいはい、ありがとうウォーロック」

僕は、ウォーロックに嫌みを言われながら用意をしてリビングに向かった

「スバル、急ぎなさいよ」

「分かってるよ、行ってきま〜す!」

「行ってらっしゃい」

分かってると思うけど、今は母さん（あかね）だよ

このまま走っても間に合わないな……よし、駄目元でウォーロックに頼もう!

「ウォーロック!」

『何だよ？電波変換ならしねえぞ』

「うー！……分かったよ……」

『ほら、走れ走れ』

そして、スバルが学校に着いたのは

「星河！……一体、何時だと思ってる……！」

「はあはあ、す……すいません」

（これにこりたらもう少し早く起きてくれるだろ）

チャイムが鳴った後だった

「スバル君！始業式からいきなり遅刻って……ふざけてるの……！」

「す、すいません……！」

僕は、先生に謝る時よりも一生懸命謝った

何でかって？いやいや、だって相手は……

「委員長、スバル君が座れませんよ！」

「！？そうね…スバル君後で屋上に来てね」

「はい…」

相手は委員長だからね…

―始業式後―

「え〜、これから一年間このクラスの担任の育田です、よろしく」

「よろしくお願いしま〜す！」「よろしく」

「よろしくお願いしま〜す！！」と皆が声をそろえて言う

「ハツハツハ、元気があるな。」

では、皆から自己紹介……はいらないよな？」

「もちろんで〜す」と皆が言った

っえ？何で自己紹介がいらなかった……そりゃ、僕たち6 - Aは去年のクラスと全く同じだったからね

「よし、では転校生を呼ぶぞ！」

「え！！？」と皆が八毛る

「いきなりですわね…」

「そうですね…」

「いきなりすぎるだろ…」

委員長、キザマロ、ゴンタの順で言った

「なんか、空気がおかしいぞ〜ほらほら、皆元気に転校生を迎えようじゃないか」

「はい！〜！」

「じゃあ、こっちに来てくれ！」

「はいはい」

転校生二人が教室に入ってきて来ると、6 - Aに沈黙が走った

……沈黙って言うより皆声が出なかった

「じゃあ、自己紹介をしてもらおうかな？」

「じゃあ、私から…え〜っと、響ミソラです、これから一年よろしくね」

「じゃ、次は僕だね：双葉ツカサです、前に同じクラスだった人も
そうじゃなかった人もよろしく」

「じゃあ、自己紹介も終わった事だし二人の席は……」

「ミソラちゃんは、僕の隣に!!」

「いやいや、僕の隣に!!」

「いやいや、絶対僕の隣に!!」

.....

クラスの男子がミソラちゃんの席を争奪している間に僕は

「ツカサ君、こっちにきなよ」

「そうだね、ありがとう」

ツカサ君を僕の後ろの席に誘った

「ハツハツハ、響は人気者だな」

「先生、私：スバル君の隣がいいです!」

「!!!?!」

ミソラちゃんがそう言うと、クラスの男子の視線が殺気を乗せて僕を睨んだ。

「そうか、星河、いいか？」

僕は、クラスの男子から「断れ」という視線が伝わって来たが

「いいですよ」

「よし、じゃあ響の席はスバルの隣だ」

「やった、スバル君ありがとう！」

「どういたしまして」

僕は、ミソラちゃんには弱いのかも知れない……

始業式（後書き）

変な所で、切ってますいませんm（
| |（
m

感想、お待ちしてます

始業式〜〜（前書き）

やっと、学校が終わりました（・o・）

始業式〜2〜

育田先生が、明日からの予定を説明している時に、僕は気になっていた事を聞いた

「そつえば、ミソラちゃん、どうしてコダマ小になんか来たの？」

「それわね…スバル君に会いたかったから」

「!?!?」

ミソラちゃんは、そう言つて僕に抱き着いた!

「ちょ!み…ミソラちゃん!!離れてよ!」

「もうちよつとだけ〜」

ミソラちゃん、何か猫みたい…

じゃなかった!!

「駄目!離れて!」

「スバル君、私の事…嫌い?」

ミソラは、涙目（演技）になりながら聞いた

「うー…そんな事はないよ！」

「、なら、いいじゃん」

「はああ…じゃあ、後少しだけだよ」

「うん！ありがとスバル君！！」

「どういたしまして」

正直、ミソラちゃんに抱き着かれていると委員長と他の男子（ツカサ君以外）からの視線がとても痛いんですけど……

「おーい、星河と響、その辺にしとけ」

「はい」

ミソラちゃんは、先生に言われると僕から離れてくれた

そして、時間が来て先生が

「じゃあ、また明日な」

と言うと、みんなは

「はい、先生さようなら」と言って帰っていった

「スバル君！帰る」

「うん…あ…！」

「どうしたの？」

「いや、ちよっと委員長に呼ばれてて…」

「ふうん、じゃあ、私も着いて行くね」

「え…？まあ、別にいいと思うけど」

「じゃあ、早く行く」

「そうだね」

僕達は、委員長が待つ屋上に向かった

「で、何でミノラちゃんまでいるのかしら？」

「そんなのいいじゃない」

「まあ、いいけど……じゃあ、本題にスバル君！」

「は……はい……！」

今の状況を簡単に言いと、軍隊の指揮官と部下見たいな感じだ

「何で呼ばれたか、分かるわよね……？」

「……委員長、その前に一つ聞いていい？」

「何？」

「なんで、A組の男子が全員いるのさ!？」

「ああ、それは……何で、スバルがあんなにミソラちゃんと仲がいんだよ……！」

「え!？」

「そつだよ、何でミソラちゃんと仲がいいんだ!？」

「だそつよ……？」

「だそつって……それは、……ブラザーだからかな？」

「何で、お前とミソラちゃんがブラザー何だ!??お前とミソラちゃんには接点が無いだろ……！」

「うー？それは…そうだけど…」

どうしようー!!

ちょっとまずいかな……

僕が、そう思っているとミソラちゃんが「別に関係ないでしょ!」
と、助け船を出してくれた

ミソラちゃんがそう言うと、男子達は黙った…

黙ったって言うより、ミソラちゃんに怒られて悲しんでるようにも
見えるかな

「スバル君、行こ!」

「え!?!あ、うん」

僕は、ミソラちゃんに言われて一緒に帰った。

始業式〜〜（後書き）

いや〜、結局委員長がスバルを呼び出した理由は何だったんでしょ
うね？（笑）

感想、お待ちしてます

ウイルス大量発生！？（前書き）

やっと、バトルに行きそうです。・・・い

ウイルス大量発生!?

―帰り道―

「それにしても、ビックリしたなあ」

「何が？」

「ミソラちゃんが、いきなり転校してくれんだもん。一瞬、夢でも見てるのかと思ったよ…連絡くらいしてくれてもよかったのに」

「ごめんね、それに連絡したらビックリしないでしょ？」

「そりゃあ、そうだけどさ」

「でしょ」

「ハハハ…」

僕は、正直ミソラちゃんとやっていけるのかと思った…

「そういえば、ミソラちゃんは、これからどこに住むの？」

そう、さすがにベイサイドシティからコダメ小に毎日通うのはキツイはずだ

「それはね、ス……」

ミソラちゃんが、僕の質問に答えようとした時…

ドゴーン……!!

学校の方から、まるで爆発音みたいのが聞こえてきた…

「い…今の音、何!!?」

「分からない…行ってみよう!」

「そうだね」

僕達は、急いで今来た道を走って戻った

僕達が、学校に着くと、そこには…

「ブロロ、フレイム・ブレス!!」

「「ジエミニ・サンダー!!」」

オックス・ファイアとジエミニ・サンダーが複数のウイルスと戦っていた

「スバル君!こんな数のウイルス、見たことないよ!!」

「……………」

「?…スバル君?」

「……………」

「ちょっと、スバル君!!聞いてる!?!」

「え!?ゴメン、考え事してた…」

「…この状況で、何の考え事してたのよ!?!」

「すみません!!ゴメンなさい!!」

ミソラちゃん!!顔怖い!

「まあいいわ、それより早くゴンタ君達を助けよう」

(いいんなら、あんなに怖い顔して怒らないでよ…)

「そうだね…行くよ！ウォーロックー！」

『おつよー』

「トランスコード003、シューティング・スター・ロックマン」

「トランスコード004、ハープ・ノート」

僕達は、ロックマンとハープノートに電波変換した。

ウイルス大量発生！？（後書き）

ハーブノートのトランスコードって、004で合ってますよね？
^|^:)

感想、お待ちしております

見たことの無いチップ？（前書き）

今回から、書き方変えます、すみませんm（
|（
m

見たことの無いチップ？

「オックス！大丈夫！？」

「よお！ロックマン、全然余裕だぜ！！」

「よく言うよ…さつきまで、俺はもう駄目だとか言ってたくせに…」

「何だと！！ジエミニー！！そこになおれ！！」

「嫌だよ、ほらまたウイルスだよ！」

「っけ！俺はまだまだやれるつつの！…フレイム・プレス！」

オックスの攻撃で、ウイルスの10分の1がデリートされた。

が…

「…………へらないな（ね）…………」

スバル達は、ハモった…すると、突然ゴンタが「ツク」と声をだし電波変換が解かれ倒れた

スバルは、ゴンタを抱えながら「ゴンタ！？大丈夫！？」と聞いた

「も…うだ…め」

「しっかりして、ゴンター！」

「腹…減った…」

「……………」

スバルは、ゴンタをその場に放り投げた

「！？ちょっと、なにしてるのロックマンー！！」

「いや、何となく…ちょっとイラってしたから」

「「分かる気がする」「」

「ちょっと、ジェミニー！！？」

「あー！ゴメン…」

「分かればいいの、ロックマンも一応謝って！」

ハーブノートは、一応をとても強調した

「わかった、ゴメンよゴンタ…」

(なんだか凄く切ないぜ…)

ゴンタは、心で思った

「じゃあ、そろそろウイルスを撃退するか」

「そうだね」

「じゃあ、行つくよ〜!! ショックノート!!」

「ハープ何かに負けるか! ツカサ、行くぞ!」

「うん」

「「ジエミニ・サンダー!!」」

「先を越されたか!… スバル、行くぞ!」

「そうだね… バトルカード、ブレイクサーベル!」

スバル達の活躍で、ウイルスは後100体ぐらいになった…が

「さすがに疲れたわね…」

「そうねミソラ…ミソラ!! 後ろ!!」

「え!？」

ミソラが、後ろを向くと目の前に

「ググワァー!!！」

見たことの無いウイルスがいた…

「キヤー!！」

「ミソラちゃん!?!危ない!!！」

見たことの無いウイルスはミソラに口を広げ牙を向けた

ミソラは、殺されると思い、目を閉じた

しかし、ミソラに痛みが走る事はなかった

「あれ?」

ミソラが、そっと目を開けるとそこには、青色が目の前に広がった

「ロックマン!？」

「大丈夫だった？」

「私は大丈夫だけど…ロックマンは？」

「僕は…一応大丈夫だよ」

スバルは、口の上下を掴んで、ウイルスが口を閉じるのを封じていた

「ウォーロック！」

「ああ、任せるスバル！ビーストファンゲ！」

ウォーロックの活躍？で、ミソラは傷一つ付かなかった

「ありがとう、ロックマン！」

「どういたしまして、よし、行くよ!!!バトルカード、マッドバルカン！」

「私も、パルスソング！」

「なんか、また燃えてない？あの二人は、疲れを知らないのかな？」

「くそ、俺達も負けてられねえ！！ロケットナックル！！」

「そうだね…でも、ちょっと疲れたよ…」

「ツカサ君！泣き言を言ってる暇は無いよ！！」

「ロックマン！？そうだね…ロケットナックル！」

「そうだよ、ロックバスター！」

そして、

「はあはあ、後1体、はあはあ」

「後1体…ロックマン、任せたよ」

「そうだね…ロックマン、任せた」

「っけ、仕方ないけど今回は任せるぜ…」

「ええええ！？どう考えても、しんどいから後よろしく的なアレじゃない！！？」

（（バレた！！））

ミソラ達は、スバルの言うとおり、しんどいから後よろしく見たい

な感じでスバルに後を任じたのだ

一瞬沈黙が流れる…

最初にその沈黙を破ったのは、ハーブノートだった

「そ…そんな事ないよ、それより早くそのウイルスを倒して!」

「…分かったよ…バトルカード…!!!??」

「どうしたの?」

「いや、フォルダーに見たことの無いチップが……」

「何でもいいから、早く倒してよ!」

「何でもいって、それはヒドインじゃ……」

ちなみに、ツカサとヒカルは…「あの二人、元気だな…どこにあんな体力があるんだろう?」

「そんな事、俺が知るか!」

「だよな?」

とか言っていたりする

見たことの無いチップ？（後書き）

戦闘シーンが上手く書けない（-o-;）

誰か、アドバイス下さいm（| | m
感想、お待ちしております

えええええ!!? (前書き)

何か、書き方が毎回変わっていくような…:すいませんm) |) m

ええええええ!!??

「もういいよ、ウォーロック行くよ!」

『おう!つてマジか!?!』

「マジだよ!!バトルカード、キングブレイク!!」

スバルがそう言うと、スバルの左手が電気と炎を浴びたソードに変わり、スバルはそのウィルスをランプのKの字の形で切り裂いた

ウィルスは、うめき声を出す前にデリートされた・・・

「ロックマン!!かっこよかったよ」

そう言うと、ハープ・ノートはロックマンに抱きついた

「ちょ!!ハープ・ノート、離して!!」

「何で?いいじゃん それとも...嫌なの?」

「いや、まあいいつか...」

「スバル君って、女の子には弱いよね」

「まあ、それがスバルの良いところなんだろう、ツカサ？」

「まあ、そうだねヒカル」

そう言うと、二人は電波変換を解いた

「スバル君、僕達はそろそろ帰るよ」

『じゃあな、ウォーロツク』

「うん、バイバイ、ツカサ君」

「バイバイ、ツカサ君」

ツカサは帰って行った

「僕達も、帰ろうか？」

「そうだね」

二人は、そう言うとミソラが離れてから電波変換を解いた

僕達は、息を揃えて叫んだ

『うるさいー!!』

『ゲ、ハーブ何でお前が!?!』

『何でって、私はミソラのウィザードなのよ?いるに決まってるじゃない!』

『そうだった…もしかして、これから毎日コイツと顔を合わせるのか…?』

『そうなるわね…よろしくね』

『…嫌だああああ!!スバル!!何とかしてくれ!!』

「ウォーロック、僕には何も出来ないよ…そういえば、母さんは知ってるの?」

「知ってるよ」

「…ウォーロック、急いで帰ろう!」

『そうだな…オフクロに止めてくれって頼むぜ!』

スバルは、急いで帰った…ミソラを置いて…

『あ、ウォーロック！待ちなさい！！ミソラ、電波変換して追うわよ！！』

「もちろん！そのつもりよ！…スバル君、私を置いて行くなんて…その代償は高いわよ！！トランスコード004、ハーブ・ノート！！」

ースバル家ー

「ただいまー」

「おかえり。あれ、ミソラちゃんは？」

「母さん！何で言うてくれなかったの！？」

「何を？」

「ミソラちゃんが、家に住むって！」

「その事ね、だって言わない方が面白いじゃない」

「面白って…それだけ？」

「そうよ」

『オフクロ！今すぐに止めてくれ！！』

「あら、ウォーロック、何で？」

『何でって、そりゃハーブが…』

『私になによ？』

『!?!?』

ウォーロックが振り返ると、ハーブがいた…もちろんミソラも

「あら、ミソラちゃん、おかえり」

「おじやまします〜」

「ミソラちゃん、これからここに住むんだから、おじやましますじやなくてただいまでしょ？」

ミソラは、頬を赤くして「え!?!?…た…た…だいま」と言った

「かわいい〜!ね、スバル？」

「え!?!?あ、うん」

『で、ウォーロック、私が何だって!?!?』

『ああん!?!?』

『何だって!?!?!?』

(ハーブ、委員長みたい…)

『うー!?何でもありません!』』

『そう、ならいいわ…スバル君のお母さん、これからよろしくお願
いします』』

「こちらこそ、よろしくね、ハーブちゃん」

と言う訳で、ミソラはスバル家に住むことになった

えええええ！！？（後書き）

何か、王道ですね（^| ^；）

っっていうか、既にネタ切れになりそうです（・o・；）

感想、待ってます

夕食（前書き）

やっと夕食にまで行きます！

一日がなかなか進まない（・o・）

夕食

ースバルの部屋ー

「そついえばさ、ミソラちゃんはこれからどこの部屋で寝るの？」

「どつって、ここだよ」

「え！？…ええええええええええ！！？」

「スバル！！うるさい！！」

「ゴメンなさい！」

「つたく、スバルは」

(正直、母さんの方がうるさかったよ…じゃなかった)

スバルは、顔を赤めながら「本当に！？」と聞いた

ミソラは、上目遣いで「嫌？」と聞いた

「う！…分か…って、流石にそれは駄目だよ！母さんに部屋を用意して貰おう」

『そつだぜスバル！こんなやつがいたら、体が持たねえ！』

『あら、ウォーロックそれは聞き捨てならないわね！』

『ハーブ！？聞いてたのかよ！？』

『当たり前でしょ！！ずっと聞いてるわよ！！』

『お前、委員長に似てるな……』

『ポロン …… ウォーロック、ちょっと付き合いなさい！！』

『嫌だ！』

『あなたに拒否権は無いのよ！！』

『んな訳あるか……って離せえええ！！』

『来なさい！！』

『す、スバル！助けてくれえええ！！』

『ウォーロック、頑張れ！』

『スバル！！助けてくれえええ………』

ウォーロックは、ハーブに拉致られた……

「……………」

「良かったの？」

「いいんだよ…ッ」

（スバル君の顔が…黒い!?）

（ウォーロック…僕が委員長にやられてる時にいつも笑ってる事は知ってるんだよ…今回は、それのお返しだよ!）

「スバル君?おゝい、ス〜バ〜ル〜君!」

「あ、ミソラちゃん、どうしたの?」

「それはこっちが聞きたいよ。スバル君、何回呼んでも我、個々にあらずみみたいな感じだったし」

「ああ、ゴメン。ちょっと考え事してたから…」

「…もしかして、ルナちゃん…?」

「う〜ん、まあ、そんな感じかな。何で?」

「そうなんだ…何となくだよ」

（なんか、今のミソラちゃんの笑顔…好きじゃないかも…）

「スバル君!」

「?何?」

「あの、その スバル君は好きな人 いる?」

「え？い、いきなりだね？」

「いいから、答えて！！」

「……………いるよ……」

「！！！？そつか……………私もいるんだ」

「へえ、そうなんだ…誰？」

「それはね…ス「スバル」、ミソラちゃん、ご飯よー！」「

「分かったー、今行くよー！…で、誰？」

「…先に、ご飯食べようよ」

「え！？…そうだね！お腹も空いたし」

（そういう訳じゃないんだけどなあ、まあいいかな）

「「いただきまーす！！」」

「どつぞ」

スバルとミソラは、黙々と夕食を食べていると、あかねが話を切り出した

「そういえば、スバル、ミソラちゃんと付き合ってるの？」

スバルはちょうどお茶を飲んでいたので

「ぶーー!!!」

「キャ！ちよつとスバル！！汚い！！」

「スバル君！大丈夫！？」

「ゲホ、ゲホ！大丈夫だよ 母さん！いきなりなに言うのさ!？」

「何って、質問しただけじゃない!!」

「内容だよ!!」

「ああ、内容ね まあ気になったから聞いたんだけど…まずかった?」

(絶対わざとだよ、スバル君のお母さん…)

「まずいよ!!」

「でも、気になってなかったらそんなに慌てないでしょ？」

「!!!!?」

スバルとミソラの顔が、どんどん赤くなっていった

「ご馳走様!!」

そして、スバルはすぐに部屋に戻って行った

「ウフフ、可愛い息子ね」

(は・・恥ずかしくて顔を上げられないよ)

「ミソラちゃん、顔を上げて」

「…はい」

顔を上げたミソラの顔は、まるで茹タコみたいになっていた

「ミソラちゃんは、スバルの事が好きなのね？」

「は…い」

「スバルのどういう所が好きなの？」

「どこって…上げたらキリがないです…」

「そう スバルも幸せ者ね」

「え？」

「だって、こんな可愛い子が好きになってくれてるんだよ？」

ミソラは「可愛いだなんて、そんな…」と言って、顔を赤くしている

「これからも、スバルをよろしくね」

「はい！！スバル君を好きな気持ちは誰にも負けません！！」

「ウフフ、そうね」

「ご馳走様でした！！」

「お粗末さまでした」

ミソラは、スバルがいる部屋に向かった

（よし、スバル君に・・・告白しよう！）

夕食（後書き）

さてさて、ミンラちゃんのご白は成功するのか？ 楽しみにして

いて下さい（笑）

感想、待っています

告白(前書き)

寝てました(・o・;))
すいませんm)
m

告白

ミソラは、スバルの部屋に向かってスバルの部屋の前まで来ていた

(ふう、…よし！スバル君、どう反応するかな？)

そして、ミソラは、スバルの部屋に入って行った

「スバル君！」

「……………」

しかし、スバルは本を読んでいるため気づかない

「っもう、スバル君ったら！！！」

そう言うと、ミソラはスバルの隣まで来て、耳元で「スバル君」と弱々しく呟いた

「！？み…ミソラちゃん！ビックリしたあ」

「へへへ、だってスバル君、本に集中してたからさ」

「ああ、ゴメン」

「良いんだけどね…さっきの話の続き…聞いて」

「うん」

「私が好きな人は スバル君だよ！」

「え!!!?…:…僕!?!」

「そう、スバル君！」

「僕か… ミソラちゃん、お世辞？」

「!?!?スバル君…鈍感過ぎ！」

「え!?!?そう?」

「(こっぴなつたら…:) そうだよ…えい！」

「わあ、ミソラちゃん!!!?」

ミソラは、スバルにのしかかった

そして…

「スバル君…好きだよ」

「!?!?!?」

ミソラは、スバルとキスをした

「……………ゴメン、スバル君……………」

「……………」

「スバル君？」

「……………」

「え、ちょっと大丈夫！？顔が凄く赤いよ！？」

とか言ってるミソラの顔も赤い

「だい じょ……………つぶ……………じゃないよ！！」

「え！？スバル君は……………嫌だったの？」

「……………嫌だった……………」

「そつ……………じゃあ、私もう帰るね……………」

「ミソラちゃん、話は最後まで聞くもんだよ？」

「……………うん……………」

「僕が言った「嫌だった」って言うのは、ミソラちゃんがキスをし

た事じゃなくて、ミソラちゃんに先に行動された事が嫌だったんだよ…（せつかく、本を読んでるフリしている考えたのに…）

「！？それって…スバル君！大好き！！」

「ちょっと、ミソラちゃん！抱き着くのは止めて！」

「いいじゃん、もう両思いなんだから」

「まだ、大事な事言っていないよ。だから離して？」

「大事な事？…分かった」

「ありがとう……」

「……」

次第に、二人の顔がもつと赤くなっていった

「ミソラちゃん！」

「はい！？」

「僕と…付き合ってください！」

「スバル君……喜んで！」

そつみソラが言うと、ミソラはスバルにまた抱き着いた

告白（後書き）

いや、なんか変な感じでしたね（苦笑）

感想、待ってます

戦い宣告！？（前書き）

なんか、変な感じになりました（-o-;）

戦い宣告!?

「スバルく、ミソラちゃん、お風呂沸いたわよー」

「わかったよ母さん……ミソラちゃん、そろそろ離してくれない？」

「何で? いいじゃん」

「いいじゃんって、何分抱き着いてるの?」

「? まだ30分だよ?」

「……まだって……ミソラちゃん……(ミソラちゃん、時間感覚おかしくない?)」

(……!! 良い事思い付いた …… スバル君、覚悟してよ)

「ミソラちゃん、お風呂に入るから離してよ」

「嫌だよ……一緒に……入る?」

「!?!? な、な、何言ってるのさ!! ……一緒になんて入らないよ!!」

「え〜!! ……いいじゃん!!」

「良くない!! ……」

すると、ミノラは「絶対に?」と涙目（演技）で聞いた

「うー?（ミノラちゃん、その目は卑怯だよ）」

ミノラはしまいに「駄目?」と上目遣い+涙目（演技）で攻めてきた

（僕の理性が 飛びそう…）

「良いでしょ?」

「……………分かつ……………」

スバルが、答えようとしたら下から「ただいま」と言う声が聞こえて来た

「あら、大吾さんお帰りなさい。今日は遅かったわね?」

「ああ、ちょっとな…あかね、スバルいるか?」

「ええ、上にいると思うわ」

「そうか…スバル!ちょっと来てくれ!!」

「分かった!ちょっと待って!!」

「ああ！」

「大吾さん、わざわざ下で言わなくても」

「ハツハツハ、そうだな」

「っもう、大吾さんたら」

「ミソラちゃん、悪いけど離れて？」

「…分かった」

スバルは、ようやく自由を手に入れた

「じゃあ、ミソラちゃん、先にお風呂に入ってね」

「分かった（っもう、スバル君のお父さん、良いところで帰って来るんだから…）」

スバルは、リビングにいる大吾の所に向かった

「お帰り、父さん」

「ああ、スバルちょっと話があるんだ」

「うん、何？」

「…ここじゃなんだから、展望台に行くか？」

「分かった、母さん行ってきます」

「行ってらっしゃい」

―展望台―

「で、話って何？」

「話はだな…今日、変なウイルスと遭遇したか？」

「変なウイルス？…ああ、そういえばいたような」

『いたぜ！』

「うわ！…ウォーロック！？いつからいたの？」

『さつき帰って来たぜ。（ハープから逃れるのは、キグナスから逃げるより大変だったぜ）』

「ウォーロック、それは確かか？」

『おうよ！まあ、俺とスバルで倒したかな』

「そうなのか？」

「うん、そうだよ」

「そうか……」

『大吾よお、それがどうかしたのか？』

「ああ、ちょっとな……」

「『……』」

「ありがとう、話は終わりだ」

「父さん……何を隠してるの？」

「スバル……今は、何も言えないんだ……」

「父さん……」

「でも、近々また戦いが怒るかもしれない……」

「え！？」

『よっしやー！！腕がなるぜ！！！！』

「悪いな、今はそれしか言えないんだ……」

「分かったよ、父さん」

「帰るか」

「僕は、もう少し残るよ……」

「そうか……じゃあな」

「うん」

大吾は、スバルを置いて「腹減った」とか言いながら、家に帰って言った

「ウォーロック……」

『何だよ？』

「また、戦いが始まるんだね？……」

『らしいな、嫌なのか？』

「そりゃね……でも、戦わないとみんなを守れないんだよね……」

『そつだな』

「……今のままで、みんなを守れるかな？」

『さあな、敵がどれだけ強いかわかってないしな』

「そっだよね?…」

『恐いのか?』

「うん」

『そっか…でも、お前は地球を3回も救ったんだぜ?もう少し、自信を持ってよ』

「…そっだね。ありがとう、ウォーロック」

『ツケ、柄にも無い事言ったかな?』

「ハハハハ、そっだね」

『フン、帰るか?』

「そっだね?」

そして、スバルとウォーロックは家に帰って行った

「?????」

「バルアナ様!」

「どうした、シュック?」

「はい、小手調べに地球に送ったウイルス共ですが…」

「どうかしたのか？」

「全てデリートされました」

「…それは、本当か？」

「はい」

「そうか…フハハ、面白い！シュック！！」

「は！」

「次に、地球に誰か一人を送れ！人選はお前に任せる！」

「は！承知致しました」

シュックは、人選をするために何か変な部屋に入って行った

そこには、カプセルに入った電波体があった

戦い宣告！？（後書き）

うーん、敵軍の名前が思い付かない（-o-;）

誰か、いい案くださいm（-）m

感想、待ってます

一緒に！？（前書き）

更新、遅れました（-o-;）

すみませんm（- -）m

しかも、遅れたわりにはしよぼいです（^ - ^ ;）

一緒に!?

「スバル家」

「ただいま」

「お帰り、スバル」

「お風呂、空いてる?」

「今は大吾さんが入ってるわ」

「分かった」

「上がって来たら、呼ぶわね」

「ありがとう」

スバルは、自分の部屋に向かった

「スバル君!お帰り」

「あ!ミソラちゃん、ただいま」

「何の話だったの?」

「ちょっとした話だよ」

「へえ〜…じゃあ、一緒にお風呂、入ろうよ」

「……はいいいい!?!」

「さっき、言ってたでしょ?」

(ミソラちゃん、覚えてたんだ、どうしよう…何とか逃げないと…!! そうだ!)

「ウォーロック!?!」

「何だよ?」

「電波変換だ!」

「!?!」

「はあ? 何でだよ?」

「いいから!」

「意味分かんねえ…分かったよ」

「さすがウォーロック! じゃあ、行くよ!」

「おっ!」

「させない!」

『ツゲ！ハーブ！？』

『ちょっと来なさい！！』

『嫌だ！！』

『うるさい！！』

『掴むな！離せ！！』

『あなたに拒否権は無いのよ？』

『何言ってるやがる！！』

『こっちに来なさい！！！！』

『嫌だああ！！スバル！助けてくれえ！！！！』

「うん、今助けるよ……トランスコー」そうはさせないよ、スバル君
！！！！」

そう言つと、ミソラはスバルの両手を抱き着いて塞いだ

「ちょ、み……ミソラちゃん！！離してよ！！」

「いーやーだー！！！！」

『助けてえええええ……………』

「…ゴメン、ウォーロック…」

ミソラは、ウォーロックがいなくなった事を確認したら、スバルから離れた

「っさ、早く入ろう」

「（仕方ないか…こうなったら、自分の理性が無くなるまで頑張るしか…）駄目！」

「スバル君のケチ！」

「な！？ケチって、何かおかしいでしょ！これが普通だよ！」

「う！？（こうなったら…）」

「分かった！？」

すると、ミソラは奥の手の上目遣い+涙目（演技）で「どうしても…駄目？」と聞いた

「う！？（ぼ…僕の理性が飛びそう…）だ 駄目だよ！」

「（！目が泳いでる もう少しだ！）絶対に？」ともちろん上目遣い+涙目（演技）で聞いた

「……入いんなきゃ駄目？」

「うん、駄目」

「はああ、仕方ないな…今日だけだよ？」

「やった！ありがとう、スバル君だーい好き！！」

「ちよっ、ミソラちゃん、抱き着かないで！」

「いいじゃん」

「はああ」

「えへへへ」

（やっぱり、僕はミソラちゃんに弱いかな…次は頑張ろう！！）

（やったね、これからも、これで行こうかな）

こうして、スバルはミソラと一緒に風呂に入る事になった

一緒に！？（後書き）

「僕、どうなるんだろう…充さん、何とかしてよ」

「スバル君、自分で何とかしろ！！俺は知りません！」

「逃げないで！」

「って事で、読んでくれてありがとうございました。感想、お待ちします」

「無視！？」

「おめでとう」

「……………」

お風呂（前書き）

この話から、「／」は顔が赤くなるほど恥ずかしい時を表します

「結局、僕はどうなるんだろう」

「今から、それが始まるんだよ！！」

「そうだね、じゃあ早く読もう！」

「ちなみに、俺の文章力はいつもの通りです）・〇・・（）」

お風呂

「スバルー、お風呂空いたわよー」

「はい」

「じゃあ、行こっか」

「……はい……」

スバルは、渋々ミソラと一緒にお風呂に入る事になったが、スバルはあれからはずっとどうにかならないかを考えていた…

(……駄目だ！ウォーロックがないから、電波変換は出来ないし
用事が出来たって言っても、多分待ってるだろうしな はああ、
気が重いよ……)

「何してるの、早く行こっ」

ミソラはそう言うと、スバルの手を握った

「分かったから、とりあえず離してよ」

「だーめー!」

「何で!?!」

「逃がさないため」

「……はああ」

スバルとミソラは、お風呂場に向かった

「あら、ミソラちゃん、スバルと入るの?」

「はい!」

スバルは、「母さん! 助けて」と視線を送る……が

「そう、よかったわねミソラちゃん」

「はい それじゃあ」

「行ってらっしゃい」

「行ってきます」

(何で、お風呂に行くだけで、行ってきますとかいる訳!?!? ……女の子って、よく分からないや)

「スバル、頑張れ!」

「父さんまで…はぁあ」

「ハハハハ」

かくしてスバルは、ミソラと一緒に入るためお風呂場に着いた

「スバル君、目閉じて」

「うん」

スバルは、目を閉じた。

「……………まだ？」

「まだだよ、目を開けないでね」

「はい」

「……………もういいよ」

「ん」

スバルが目を開けると、そこには…

「ノノノミソラ ちゃんノノノノ」

「／／／じろじろ、見ないで／／／」

バスタオルで体を巻いているのミソラだった

もちろん、二人とも顔は真っ赤だ

「ミソラちゃん、先に入ってた」

「分かった 逃げないでね？」

「分かってるよ」

ミソラは、先にお風呂に入った

スバルは、服を脱いでタオル一枚でお風呂に入って行った

そして、スバルが入るとミソラは既にバスタブに浸かっていた

「／／／スバル君／／／」

「／／／ミソラちゃん／／／」

「先に入ってるよ」

「うん、あんまりこっち見ないでね？」

「っもう、スバル君ったら、分かってわよ！」

「うん、ならよかった」

(もうちょっと、スバル君の体を見ときたかったな)

スバルは、黙々と体や髪の毛を洗った

「じゃあ、次は私の版だね？」

「そうだね」

ミソラは、そう言うとバスタブから体を出してスバルがいる場所に
来た

「／／／うわ！？み　ミソラちゃん！？／／／」

「？スバル君、どうし……………」

ミソラは、今の自分の体の状態を見た

「…………／／／！！？スバル君、早くバスタブに入って！！／／／」

「／／う うん！／／」

スバル、ミソラに言われたとうりバスタブに入った

（ああ、恥ずかしかった…スバル君、怒ったかな？）

（ミソラちゃん…やっぱりかわいいな）

二人が思っている事は、全く逆だとは誰も気づかなかった

お風呂（後書き）

何か、変な感じになりました（-o-;）

そういえば、まだ、敵の軍隊名を募集してます（^| ^）

感想、待ってます

お風呂くそ (前書き)

深夜更新：眠いです (. . .) ZZZZ

『じゃあ寝ろよ！！』

『そつよ、寝なさい！！』

何かすいません (. . .)

お風呂〜〜

「ミソラちゃん…長いよ…」

「女の子は、皆長いの」

「でもさ、30分はさすがに…」

「掛かるもん」

「そう…でも、さすがに僕 先上がるね」

「えー！もうちょっと我慢して？」

「（結構きついよ）分かったよ」

「ありがとう」

「はあぁ」

「フンフンフンフン」

（ミソラちゃんの鼻歌のリズム、どっかで聞いた事あるな……あ！
ハートウェーブだ）

「ミソラちゃん、今の鼻歌、ハートウェーブだよね？」

「え？そうだよ」

「やっぱり」

「エヘヘヘ、いつも聞いてくれてるんだね？」

「うんー！」

「ありがとう」

「そういえば、歌手活動はどうするの？」

「歌手活動は、次にやるライブでしばらく休止するよ」

「へえーそうなんだ……って、ええええええええ！？」

「言っただけだったっけ？」

「言っていないよー！！」

「そうかあ、ゴメンね」

「いや、いいけどさ……そうかー、ミソラちゃん歌手止めちゃうんだ

……」

「うん、でもいつかは分からないけど、また再開するよ」

「そうなんだ！じゃあ、ミソラちゃんの歌手活動が再開するのを楽しみにしてるよ……一人のファンとして」

「スバル君……ありがとう でも、まだ止めてないよ？」

「あーゴメン」

「いいよ。よし、洗い終わった」

「やっとかあ…じゃあ、僕は上がるよ」

「!?!?何だよ!」

「何でよって言われても…」

「その…一緒に浸ろうよ…」

「ノノノミソラちゃん…」

ミソラは「ね、いいでしょ?ノノ」と赤くなりながら、上目遣いで聞いた

なぜ、私が涙目の演技をしないかって?

それは、シャワーで涙が出ないと言っね、んーやっぱり、もうちょっと演技の練習をすればよかったかな

「うー?（やっぱり、上目遣いは禁止にして欲しいな）分かったよ」

「ありがとう スバル君!」

そう言うと、ミソラはスバルに抱き着いた

「何で、抱き着くの！？しかも、狭いバスタブの中で!？」

「気にしない気にしない」

「つま、いいけどさ(本当は良くないけど、また上目遣いされたら困るしな)」

「スバル君」

「何？」

「呼んでみただけだよ」

「……ミソラちゃん…僕、もう無理……」

スバルは、ミソラに寄り添うようにして倒れた

「え！？スバル君！？ちょっとスバル君、大丈夫!？」

「む……り」

「ちょっと、スバル君!!」

「……………」

「どうしよう！…とりあえず、スバル君をバスタブから出さなきゃ…タオルしてて良かった」

ミソラは、とりあえずスバルをバスタブから出してあかねを呼びに行った

お風呂くゞ (後書き)

『おい、スバルは大丈夫なんだろうな!!?』

さあね!

『お前、スバルに何かあったら俺の爪が火を噴くぜ!!』

それは困る!!

『ツケ!! だったら…分かって…ゲフ!!』

ウォーロックの上にヘビーストーンが落ちてきた

ウォーロックよ、さようなら

『俺は…生きてる…ぞ』

分かってるよ!! さすがに殺さないよ!

『変な所で…優しいな』

あっそ、ありがとう

『……………』

ウォーロック…気絶したか…

読んでくれてありがとうございました!!

感想、待っています

約束（前書き）

深夜更新です（-o-;）

ってか、無くなったと思っていたブラックエースが見つかりました
！！

テンション上がるー！！！！

約束

「スバル君のお母さん！」

「あら、ミソラちゃんどうしたの？」

「スバル君が倒れました！！」

「え！？スバルが？」

「はい！」

「分かったわ！大吾さん！」

「ん？どうした？」

「スバルが、お風呂場で倒れたから、スバルをスバルの部屋に運んで下さい！」

「倒れたって 分かった」

大吾は、スバルが倒れたお風呂場に向かった

「後、ミソラちゃん？」

「はい？」

「一緒に住んでるんだから、「スバル君のお母さん」なんて言い方は、止めてね？」

「…分かりました、スバル君のお母さん」

「ミソラちゃん？スバル君のお母さんじゃなくて…」

「／／／お おかあ さん／／／」

「よく出来ました」

「／／／／／」

「お〜い、スバルを運んだぞ〜」

「ありがとうー大吾さん！」

「じゃあ、私はスバル君の所にいます！」

「そうしてやって」

「はい」

「でも、その前に、タオル一枚じゃあ風邪引くわよ？」

「あ はい／／／／」

「先に着替えなさいね」

「／／／はい／／／」

そう言うと、ミソラは着替えてからスバルの部屋に向かった

「うーん」

『おい、スバル！！起きろ』

「うーん」

『起きろって！』

「コラ！ロック君、起こしちゃ駄目！」

『？何でだよ！？』

「スバル君、倒れたんだから安静にさせてあげないと」

『こいつ、倒れたのか？』

「そつよっ？」

『スバル……（こいつ、一体何されたんだ？）』

「分かったんなら、静かにしてね」

『おつ！（暇だなー）』

「……もう、起きたよ」

『「スバル（君）！！」』

「おはよう……」

「スバル君、大丈夫！？」

『スバル、一体何をされたんだ??』

『あんたは、黙ってなさい!!』

『ツゲ！ハーブ!!？（巻いたと思ってたのに）』

『こっちに來なさい!!』

『（…抵抗しても、無駄だな）分かったよ…』

『あら、結構素直ね』

『まあな…』

『じゃあ、行きましょう』

『ああ（スバルが何されたか、聞きたかったぜ）』

ウォーロックとハーブは、またまたどこかに行ってしまった

「スバル君、大丈夫？」

「うん、なんとかね」

「よかった … 本当によかったあ … うう」

「ミソラちゃん！？ 何で泣いてるの!？」

「もしスバル君がいなくなったらって考えたら … なんか涙が出ちゃって」

「ミソラちゃん … 大丈夫だよ！」

「え？グス」

「僕は、ミソラちゃんが嫌って言うまで側にいるよ … それに、僕は君を命に変えても守ってみせるよ！」

「スバル君 … 約束だよ!!」

「もちろんだよ!!」

「スバル君、大好き」

そう言うと、ミソラは上半身だけを起こしているスバルに抱き着いた

「ミソラちゃん？」

「このままにさせて」

「分かった(ミソラちゃん、何か猫みたい…前にも、こんな事思
ったような…)」

(スバル君…ありがとう)

ー10分後ー

「そろそろ、寝る?」

「うん」

ミソラは、スバルから離れた

「ところで、ミソラちゃんはどこで寝るの?」

「ここだよ?」

「じゃあ、布団を貰ってくるね」

「いらないよ?私、このベッドでスバル君と寝るし」

「え!?!…ミソラちゃん 女の子だよね?」

「私が男に見える?」

「いや、そっじゃなくてさ」

「いいじゃん、一緒にお風呂に入った仲じゃない」

「うー？（それを言われると、反論出来ない）」

「ねー！」

「分かったよ」

「ありがとう　じゃあ、お休みな」

「…あのー、ミノラちゃん？」

「何？」

「何で、抱き着くの??？」

「気にしない気にしない」

「凄く寝づらいんですけど」

「ZZZZZ」

「えー!?寝るの早ー!…仕方ないか…僕も寝よう」

こうして、スバルの一日は過ぎた…

約束（後書き）

やっと、一日が終わりました（・o・）

感想、待ってます

朝ごはん(前書き)

最近、よく寝てしまっ(・o・;))

夜更かしが多い(^ | ^ ;)

朝ごはん

―翌日―

『スバル!! 起きやがれ!!』

「う〜ん…後5分」

『（またかよ）駄目だ! 起きろ!』

「ZZZZZ」

『寝るなあ!!--!--!』

「ロツク君! スバル君はまだ起きないの?」

『おう お前、起きるの早いんだな』

「そりゃね」

『ミノラは、仕事で早起きするから朝には強い方なのよ』

『そりゃ、楽でいいわ それに比べて…スバル!! 起きやがれ!!』

「ZZZZZ」

『はああ、コイツ本当に朝が苦手だな…』

「ロック君、大変そうだね」

『そうね　しかし、あのウォーロックでも起こせないなんてね』

「本当だね。フフッ」

『フフッ』

二人は、スバルを起こしているウォーロックを見ながら笑った

『おい!!--!』

「何?」

『...こいつ、起こしてくれ...』

『珍しいわね、あなたが人にものを頼むなんて』

『うつせー!!--!』

『()よっぽど大変なのね(ミソラ、どうするの?)』

「うーん　どうしようかな」

『何かいい方法がある?』

「.....!!--!あるよ」

『そうなの?じゃあ、早くしてあげて。早くしないと、ミソラの努』

力が水の泡よ』

「そつだね」

『????何言つてんだ?』

『あなたは、知らなくていいの!』

『何でだよ!気になるだろうが!』

『後で分かるわよ!』

『だったら、それを早く言え!』

『うっさいわね!ちよつと待ちなさい!』

『ツケ!』

『さあ、早く起こして上げて』

「うん…スバル君、起きて」

「ZZZZZ」

「起きないと…!」

ミソラはそつ言つと、スバルの鼻をつまんだ

「ZZZZZ」

「こづなったら…最終手段だ」

そう言うと、ミソラはスバルの唇にキスをした

「ZZ!?!んゝ!?!」

「!おはよう」

「…おはよう…じゃなくて、何でキス!?!」

「だって起きなかったもん」

「それだけ?…」

「うん」

「……お休み」

「え!?!ちよつと!?!時間!」

「え?…や…ヤバいいい!?!」

スバルは急いで学校に行く用意をした

「スバル君!?!いきなり慌ててどうしたの?」

「いや、だって時間が…」

「いや、朝ごはんを食べる時間はあるよ？」

「あれ？本当だ……」

「スバル君、寝ぼけないでよ」

「……はい」

「さ、朝ごはん食べよ」

「そうだね」

スバルとミソラは、リビングに向かった

「おはよう」

「母さん、おはよう」

「ご飯、出来てるわよ」

「はい」

スバルとミソラは、テーブルに座った

「あれ、父さんは？」

「大吾さんは、もう出掛けたわよ」

「そうなんだ。いただきまーす」

「いただきまーす」

「ん？母さん、味変わった？」

「フフフ、今日の朝ごはんはミソラが作ったのよ？」

「え！？そうなの？」

「うん」

『ハーブ、お前が言ってたのは……』

『「これの事よ？」』

『（しょうもねえええ！……！）……』

「おいしい？」

「うん！おいしいよ」

「ありがとう」

「フフフ、良かったわねミソラ」

「うんー！」

(この二人、昨日より何か打ち解けてない?)

「もっと食べてね！」

「うん」

それから、スバルはミソラの手料理を黙々と食べた

「そろそろ、用意しなさいね」

「はい」

あかねに言われて、二人は学校の用意の続きをした

ピンポンー！

「はい？」

「白金です、スバル君いますか？」

「ちょっと待ってねー。スバルー、ミソラー、ルナちゃん達が来たわよー」

「分かったー、ミソラちゃん、行くっ」

「うん」

「行ってきまーす!」

「行ってらっしゃい」

スバルとミソラは学校に向かった

「あれが、星河スバル… ロックマン… あんなやつが、あのウィルス達をデリートしたのか… さて、あいつがどれほどの者か楽しみだな」

スバル達に、危険が迫って来た

朝ごはん(後書き)

感想、待ってます！

登校（前書き）

今日、風邪をこじらせました（・o・:~）

今は、だいぶ楽です！

しかし、文章は、多分いつもより駄文です（^| ^:~）

すみません）（:~:~）

登校

「みんな、おはよう」「」

「「「「「！！！！？……………」」」」」

ルナ、ゴン太、キザマロ、ツカサはミソラを見てビックリしている

「みんな、どうしたの？」

「……どうしたもこうしたもないでしょ！！何で、ミソラちゃんがスバル君の家から出て来るの！？」

「え！？それは」

「私が、スバル君の家に住みはじめたからだよ」

「「「！！！！？」「」」

この言葉にツカサとスバル以外は、とてつもなく驚いた

「何で、ミソラちゃんがスバル君の家に住むのよ！」

「そうだぜ！何でスバルん家に！」

「そつですよー！」

「いや、僕に言われても…っつか、時間！」

「」「」「」「……！！！！！！」「」「」「」

「急ぐわよー！！！」

「はい！」

「おう！」

「遅刻は、駄目だよね トランスコード！ジェミニ・スパーク！」

「うわ！ズルイぞツカサ！」

「でも、遅刻はさすがにね」

「うー！ なら、トランスコード！オックス・ファイア！」

「二人とも、ズルイわよー！！！」

「すまねえ、委員長！先に行ってるぜ！」

「あー！待ちなさいー！！！！！！！」

「ま、待って下さいー！委員長ー！」

二人は、電波変換をした二人を追い掛けた

「スバル君、私達も電波変換する？」

「え？いいけど ウォーロック、いい？」

『駄 ！（ハープの殺気！！）』

「ウォーロック？」

『いいぜ』

「本当に！？ありがとう」

「じゃあ、行こっか」

「そうだね」

「トランスコード！！！！」

「シューティングスターロックマン」

「ハープ・ノート」

二人は、電波変換をした

「……………」

「ほら、早く行いじ」

「……そう思うなら、とりあえず離れてよ……」

そう、ハーブ・ノートはロックマンに抱き着いていた

「だめ」

「……なら」

「……」

ロックマンは、ハーブ・ノートをお姫様抱っこをした

「／／／／」

「じゃあ、行くよ！／／／」

「／／うん／／」

そして、二人はコダマ小学校に急いで向かった

登校（後書き）

短いですね）・・・い）

感想、待っています

勝負(前書き)

二回目の投稿です(^| ^)

勝負

「コダマ小学校・屋上」

「着いた！／／／」

「そうだね／／／」

「じゃあ、離すよ／／／」

「ちょっと待って／／／」

「どうしたの？／／／ん！？」

ハープ・ノートは、お姫様抱っこをされたままロックマンにキスをした

「／／／／／／」

「運んでくれてありがとうがとね／／／」

「どどどどういたしまして／／／／」

スバルは激しく動揺している

そして、ロックマンはハープ・ノートを地面に降ろした

(屋上で良かった こんな所を他の人に見られたら、みんなから何されるか…想像しただけでも怖いよ)

「スバル君、早く教室に行こ」

既にミソラは電波変換を解いていた

「うん」

スバルは、電波変換を解いてミソラと一緒に教室に向かった

「教室」

「ギリギリセーフ!!」

スバルは、自分の席に座って言った

ついでに言うと、当然スバルはミソラと一緒に教室に入ったので、クラスからの視線が痛かった

「大変だね」

「本当だよ 何か学校が疲れるよ」

「ゴメン、スバル君」とミソラが涙目（演技）で言った

「うわわわ、ミソラちゃんのせいじゃないよ。ね、ツカサ君！」

「え！？あ、うん、そうだよ！（ミソラちゃん、演技上手いな）」

ツカサは、ミソラの演技を見破った

「ありがとう」と笑顔で答えた

そして、育田が教室に来た

「よし、それじゃあ、出席をとるぞー」

そう言うと、育田は出席を取りはじめた。

―数分後―

「よし、全員いるな…みんな、1時間目は算数だぞー」

（げ！！？最悪だ…こんな時に事件が起きてくれたらな）

スバルがそう思った直後だった

「キヤアアアアアア！！！！！！！」

「！？今のは声は！？」

『スバル、変な周波数を感じる！！』

「行こう！」

『おう！』

「トランスコード！シューティングスター・ロックマン！！」

『俺達も行くぜ！ツカサ！』

「うん！トランスコード！ジェミニ・スパーク！」

「ハープ、行くよ！！」

『あの二人が行くんなら、大丈夫なんじゃない？』

「でも、行こう！」

『分かったわ』

「トランスコード！ハープ・ノート！」

「よし、みんな行こう!」

すると、クラスの人達が「三人とも、頑張れ!」と言った

「みんな、ありがとう!」

そうスバルが言うと、みんな悲鳴がした方向かった

『完璧に遅れたな』

「ああ…でも、今から行ける雰囲気じゃないし…どうする?」

『ブロロロ、もう少し後に行くか』

「そうだな!」

「ちょっと、ゴン太!何で行かないのよ!?!?」

「委員長!?!いや、雰囲気的に…」

「しのごの言わずに行ってらっしゃい!」

「はい!トランスコード!オックス・ファイア!」

オックス・ファイアも遅れながら向かった

「公園」

「お！以外と早かったな」

「お前はいつたい…それに、さっきの悲鳴は…」

「ん、俺が出したんだぜ、結構リアルだっただろ？」

「何のために？」

「それは…ロックマン！お前の实力を見るためだ！」

「何！？」

『スバル、来るぞ！！』

「うん！」

『ツカサ、俺達も行くぜ！』

「分かってるよ！」

『私達も行くわよ』

「勿論」

「……ウェーブバトル、ライド・オン！！」「」

「勝負だ！ロックマンー！ー！」

勝負（後書き）

戦闘を上手く書けるか、分からない（・・・）

感想、待ってます

戦闘（前書き）

今更ですが、ジエミニニの中身はヒカルです（＾|＾；）

戦闘

「ロックバスター！」

「ロケットナックル！」

「シヨックノート！」

スバル達の攻撃は、全て命中し辺りに砂埃を立てた

「何か、言うほど強くなかったね」

「そうだね」

『スバル！油断すんなー！！』

『ミソラもよー！！』

「え！？あ、うん」「

二人は、見事ハモった

そして、砂埃が収まるとそこに立っていた謎の電波体は…

「何だつて!？」

「嘘!？」

「やっぱりね…」

「このていどか?もうちょっとやると思ってたんだけどなー」

無傷だった…

「次は、俺から行かせてもらおうよ!マシンガン Spreッド!！」

謎の電波体を放った攻撃は、マシンガンのように連射され当たると、周りに誘爆する仕組みになっていた

「!?!バトルカード、バリア!」

ロックマンは、直ぐさまバリアを張ったが、相手のあまりの連射力にバリアは直ぐさま破られた

「グワアアアア!!!」

「キヤアアア!!!」

「うわあああ！！」

ロックマンは三人の真ん中にいたため、マシンガンスプレッドはロックマンに命中しその誘爆でハーブ・ノートとツカサにも命中した
そして、三人はそのまま倒れ込んだ

『スバル！！』

「ツク！（体が動かない）」

『ミソラ！！』

「うう（駄目 体が動かない それに 意識も…）」

『ツカサ！！』

「ヒカル（意識が）」

「こんなもんかー、つまんないなー！ロックマン達がこの程度なら、地球征服も簡単だね」

（！！？何だつて！？地球を 征服するだと！）

『そんな事はさせないぜ！！ロケットナックル！！』

「よっつ」

謎の電波体は、軽々とヒカルの攻撃をかわした

『ツクソ！！なら、エレキソード！』

ヒカルは、謎の電波体との距離を縮め近距離戦に持ち込もうとした
…が

「甘いね！マシンガン Sprett！！」

『グハアアアア！！』

ヒカルは謎の電波体に対して、一直線で向かったため、マシンガン Sprett をもろに喰らいそのまま倒れた

『ツクソ』

そして、ヒカルは気を失った

「うーん、こんなに弱いのかー… ちょっとがっかりだなー」

謎の電波体がそう呟くと、どこからか「まだいるぜ！！」という声

が聞こえた

「誰だい？」

「オックス・ファイア様、参上だぜ！！」

「堅そうなアーマーだね」

「おうよ！行くぜ！フレイム・ブレス！！」

オックス・ファイアの口から炎の柱が出て来る

「これは、避けるのが面倒だな…アクアレーザー！！」

謎の電波体は、右手に持った銃から青いレーザーを出した

そのレーザーは、フレイム・ブレスを破りオックス・ファイアに命中した

「グハ！！ツク、何て威力だ」

『おい！ゴン太、しっかりしろ！！』

オックス・ファイアは電波変換を解かれその場に倒れた

これで、ロックマン以外は全員気を失った

「これで、全員かな？ それにしても、この子可愛いな」

謎の電波体が言っている子とは、勿論ミソラの事だ

「よし、連れて帰っちゃおう！」

謎の電波体は、そう言つと電波変換が解かれているミソラに近づいた

「待て！！」

「ん？あ、ロックマン、まだ意識があつたんだ」

「ミソラちゃんから 離れるー！」

「ん？この子、ミソラちゃんって言つのか 可愛い名前だなー」

「離れるー！」

「うるさいな、マシンガン Sprett!」

そう言うと、謎の電波体はロックマンに向かってマシンガンスプレッドを放った

「バトルカード、スーパーバリア、ムラサメブレード！」

ロックマンは、マシンガンスプレッドを避けるどころか謎の電波体に向かって走った

「何!?!」

「うおおおお!!」

ロックマンは、スーパーバリアを張ったがさすがに全ては耐えられなかったが、ロックマンの攻撃は謎の電波体に命中した

「グハ!!」

「ク!!」

「やるな、ロックマン!!」

「はあはあ」

「今回は、引かせてもらおう。さらばだ!!」

「！！待て！！」

しかし、謎の電波体は目の前かはもういなかった

ロックマンは電波変換を解いた

「ツク、逃がした」

『仕方ねえよ。それより、ミソラ達をどうにかしねえと』

「うん、そうだ…ね」

そう言うと、スバルは、その場に倒れ込んだ

『おい！！スバル！スバル！』

（体が動かないや…意識も ヤバ い…かな）

そこで、スバルの意識は途切れた

戦闘（後書き）

戦いの所が、書くの下手だ（-.-;）

誰か、アドバイス下さい！

感想、待ってます

足手まとい(前書き)

書いてる内に、スバルの言ってる意味が分からなくなってきた

(. . .)

すいません m ((m

足手まとい

「病院」

「ZZZZ」

「スバル君、なかなか起きないね」

あれから、3日経ち、ミソラとツカサは退院し、今だに入院しているのはスバルとゴン太だけでゴン太は一日前に意識を取り戻した

ちなみに、ゴン太が目を覚ましてから病院の食料は普通の3倍近く減っていているのは言うまでもない

『仕方ないわよ、あんだけ強い敵を一人で退けたんだもの』

「そうだね 私、また足手まといになっちゃったね」

『ミソラ』

「私だって、強くなってスバル君を助けたいよ」

『…』

「なのに 私はいつもスバル君の足手まといになって…」

『 なら、強くなりましょう!』

「うん…もう、スバル君の足手まといにはなりたくない!」

「……足手まとい何かじゃ ないよ」

「!!スバル君!」

「ミソラちゃんは、足手まといなんかじゃ ない!」

「スバル君…でも、スバル君がこんなにボロボロになったのは私達を助けるためでしょ?」

「うん(正確に言うと、ミソラちゃんを守るためだけだね)」

「もし、私達があそこで意識を失っていなければ、スバル君はもう少し楽に戦えたよね?」

「だろうね でも、僕があいつを退けられたのは君達(正確に言うと、ミソラちゃんだけけど)を守りたいって言う心が大きくなっただけだよ」

「スバル君」

「僕は、勝つために戦ってるんじゃない!友達を ミソラちゃんを守るために戦ってるんだ!だから、ミソラちゃん達は足手まといなんかじゃない!第一ミソラちゃん達がいないと僕はあいつを退けられなかったと思う」

「でも、私はスバル君を助けない」

「もう、助けられてるよ」

「え!?!」

「僕は、もうミノラちゃんに助けられてるよ」

「……………」

「僕は、本当は臆病者だ、だからメテオGの事件の時も本当は怖くてしかたがなかった。でも、君の笑顔を思い出すと、僕はその笑顔をずっと見ていたって思ったんだ。だから、僕はMr・キングの野望も破る事が出来たんだ」

「スバル君」

「だから、もう自分を攻めないで……」

「……………うん（でも、やっぱりねもつとスバル君の力になりたい！だから、だから）」

「良かった」

「ありがとう、スバル君」

「え!?!あ、うん」

「じゃあ、私は帰るね」

「うん」

「じゃあ、また明日」

「ばいばい」

「うん、ばいばい」

そう言うと、ミソラはスバルの病室から出た

そして、ミソラは、強くなって、スバルの力になると心に誓った

「?????」

「ちょっと油断しました…:すいません、バルアナ様」

「よい、それでロックマンとやらの強さはどうだった?」

「はい、あいつ自体は弱いのですが、友達を守ろうとすれ心が強くなる。あいつ自体の力も強くなるようです」

「そうか、ご苦労だったな…:アーク、少し休むがいい」

「は…:ありがとうございます」

そう言うと、謎の電波体もといアークはカプセルがある部屋に戻っていった

「友達を守るために強くなる…ようは絆だな 我が1番嫌いな言葉だ……」

バルアナの弦きは誰にも聞こえなかった

足手まとい（後書き）

スバルの言ってる意味は、簡単に言つと「ミノリちゃん達は足手まといなんかじゃない」って事です（・・・）

分かりにくいですね（・・・）

すみません（・・・）

感想くれたら嬉しいです

記者会見（前書き）

何か、変な展開になってしまった（・・・）

記者会見

―3日後―

「スバル君、だいぶ元気になったね」

「うん、おかげさまでね」

「私、何もしてないよ？」

「毎日お見舞いに来てくれるじゃない」

「それだけだよ？」

「それだけで充分だよ」

「スバル君、ありがとう」

そう言って、ミソラはスバルに抱き着いた

「ミソラちゃん！？急に抱き着かないで！」

「いいじゃん それとも、嫌だった？…」

ミソラは、お得意の涙目で言った

「……いいけど」

「良かった」

（僕、ミソラちゃんの涙目に弱すぎじゃない？）

それから、数分後、ミソラは離れた

「ミソラちゃん、テレビつける？」

「うん、いいよ」

そう言って、スバルはテレビをつけた

そして、チャンネルを回していると、記者会見を今にも始めようとしている大吾がいた

そして、テレビの右上には「ロックマンの正体は！？」と言つ題名らしきものがあった

「えええええ！？」

「そう言えば、お父さんが「今日は重要な日だ」って言ってたけど、この事だったんだ」

「父さん…せめて、子供には教えようよ…ね、ロック?」

『!?急に呼び方が変わったな!』

「気分だよ」

『何かむなしいぜ…でも、大吾はお前に言ってたぜ?』

「え!?いつ?」

『おとついだったっけ、お前が寝てる時だ』

「父さん…せめて起きてる時に話してくるよ…」

そして、大吾の記者会見が始まった

「えー、この度は集まって頂きまことにありがとうございます…それでは、質問をお願いします」

「大吾さん、この地球を3度も救ったロックマンは本当に貴方の息子のスバル君なのですか?」

「はい、ロックマンは家の息子のスバルです」

「貴方は、それをいつ知ったのですか?」

「私が宇宙にいる時から知っていました」

「宇宙にいる時？それは、なぜなんですか？」

「それは、あの子が一度宇宙に来た時にロックマンになったスバルにあったからです」

「そうなんですか。それで、貴方は自分の息子をこんなに辛い戦いをさせて何も思わなかったのですか？」

この質問には、さすがの大吾もイラツとしたのか

「そんな訳ないでしょう！心配で仕方がなかったですよ！」と怒り口調で答えた

「じゃあ、なぜ貴方はスバル君にこのような戦いをさせたのですか？」

「…それしか、地球を救う方法がなかったからです。もし、スバルが戦わなかったら既に地球は我々の知っている地球ではなかったでしょう…だからこそ、私はスバルに地球を託しました…それに、あいつは俺の子です、そう簡単には死にませんよ」と、大吾は笑って答えた

そして、直ぐにシャキツとした顔に戻ると大吾は

「でも、スバルだけに頼っている訳には行きません。だからこそ、私達は私達が出来る範囲であの子達をサポートしています」

「そうですか。ありがとうございます。」

そう言うと、大吾は「これで記者会見は終わります」と言い裏に帰って行った

記者会見（後書き）

感想、待っています

会見と探索(前書き)

深夜更新です

題名が意味不(- . . - ;)

今回、スバルが壊れます(^ | ^ ;)

会見と探索

「父さん……」

「どうしたの、スバルく「最悪だああ！！父さん、何でこんな会見開いたんだよ！馬鹿じゃない！！馬鹿でしょ！！あの人絶対馬鹿だよ！！」」

スバルは、いきなり大声を出した……ここが病室だった事を忘れて……

「スバル君、うるさいよ……」

「……ゴメン……でもさ、父さん、絶対馬鹿でしょ！」

「……でも、これで私も堂々と記者さんに言えるね」

「何を？」

「スバル君と付き合ってる事」

「……ミソラちゃん それだけは、本当に止めてね」

「何で？」

「だって、そんな事を発表されたら、僕は町を歩けないよ」

「大丈夫だよ、私決めたもん 今から言ってくるね」

「!!!? ミソラちゃん!? 止めてー!」

ミソラは、スバルの歎きを聞きながらもマスコミがいるであろう場所に向かった

勿論、電波変換をして…

「ロック、どうしよう!」

『俺が知るか!』

「…よし、ミソラちゃんを止めよう! ロック、電波変換だ!」

『駄目だ!』

「何で!?!」

『お前はまだ体の傷が完治してないだろ』

「……ロックが、普通の事言ってる……」

『悪いのか!?!』

「いや、いいけどさ…あゝあ、退院したらどうしようかな…とりあえず学校はヤバいかな…はあああ」

『学校は行けよ』

「そうだね…はぁぁぁ」

『まあ、今は体を治す事だけを考えたらどうだ？』

「そうだね…」

そして、1時間後にまた記者会見が行われていた…

勿論、ミソラだ

しかし、スバルは寝ていたのでこの会見があつた事を知らないのであつた

この会見の内容は、ミソラには恋人がいてその人はロックマンこと星河スバルだつて事。そして、次のライブを最後に歌手活動を休止するという事だつた

「ふうー、会見やつと終わったよー」

『そうね。で、これからどうするの、スバル君の所戻るの？』

「そうだね」

『ミソラは、本当にスバル君が好きね』

「うん、私はスバル君が好きだよ！」

『フフフ、じゃあ行きましようか?』

「うん トランスコード、ハープ・ノート」

ハープ・ノートは、スバルの病室に向かって行った

「?????」

「アーク、地球に向かえ!」

「は!」

アークは、既に怪我の治療を終えていた…

「分かっていると思うが、星河スバルは抹殺しろ」

「肝に命じております」

「ならよい…それでは、頼んだぞ」

「御意」

そして、アークは地球に向かって行った

アークは、地球に行く途中「あの言葉遣い疲れるなー」とか思っていた

「バルアナ様、良かったのですか？」

「何がだ？」

「アークを地球に向かわせて、アークでは星河スバルには勝てませんよ」

「フハハ、そんな事は分かっている。別にいいのだ、あいつは捨て駒なのだ。我々ビッグバンだな」

「そうですか。でも、なぜ私やバルアナ隊を出さないのですか？」

「フフ、一気に片が付いてもつまらんからな」

「なるほど、分かりました」

「星河スバル：やつを殺すのは、もう少し後だ 強くなったあいつを殺して、人類の希望を無くしてやる……フ、フハハハ！」

「バルアナ様、それで例の件ですが」

「おお、何か分かったか？」

「はい、地球にパーツがあるようです」

「そうか…シュックよ、地球に行ってそのパーツを探ってきてい」

「御意、それでは、行って参ります」

そう行つて、シュックは地球に向かった…勿論、アークには見つからないように

「ついに、あの力が我が手に あれで、私は最強になるのだ！フハハハハハ！今日は、笑いが止まらんわ！フハハハハハハ！……」

それから、30分間バルアナの笑い声は絶えなかった

会見と探索（後書き）

何か、無理矢理だ（^| ^ ;）

感想、待ってます

デートの約束（前書き）

何か、右腕が痛いです（-o-;）

デートの約束

「病院」

(スバル君、会見見てたかな?)

ハープ・ノートは、少しドキドキしながらスバルの病室に入った

そして、スバルの病室に入るとハープ・ノートは少しがっかりして
電波変換を解いた

「…スバル君、寝てるし」

『ロックも爆睡よ どうする、ミソラ?』

「……起こす」

『どうやって?』

「こじやって」

ミソラは、ハープに対して笑顔を向けながら言い、スバルの方を向
いた

「スバル君 大好き」

ミソラは、そう言うとスバルの鼻をつまんでキスをした

「ZZZ ん!? んゝん! んんん!」

ミソラは、スバルが顔を赤くしながら苦しそうにしている様子を見て、スバルとのキスを止めた

「!スバル君、おはよう!」

「はー、すーはー……ミソラちゃん、死ぬかと思ったよ!」

「ゴメン」

「(謝る気無いよね?)(…ってあれ?ミソラちゃん、会見に行ったんじゃない?)」

「会見は終わったよ」

「……ミソラちゃん(僕の人生、さようなら)」

「ノノえへへ、さすがに、恥ずかしかったよノノ」

「(じゃあ、言つなよ!)(そうなんだ)」

「うん そういえば、スバル君、明日退院だよね?」

「あれ、そうだったっけな　ちょっと待って」

「うん」

「…ウォーロック！起きろー！！！」

『フが！？な、何だ何だ！？敵か！？』

「明日って、僕退院だっけ？」

『……スバル、それだけか？』

「うん」

『…そうだよ！じゃあな、俺は寝る！』

「分かった、ありがとうロック。お休み」

そして、ウォーロックはまたまた眠りに着いた……まだ夕方の5時
だと言っのに…

「と言っ訳で、明日退院だよ」

「じゃあさ、明日退院祝いにデートしようよ」

「え！？うーん…」

「駄目？」

「いいよー」

「やった！ありがとうスバル君！大好き！」

そう言つと、ミソラは上半身を起こしているスバルに抱き着いた…

「ちよっ、ちよっとミソラちゃん！離してよ」

「……」

「？あれ？ミソラちゃん？おーい、ミソラちゃん？ん？」

「……ZZZZ」

「嘘！？寝るの早！！」

『ミソラは、会見で疲れているのよ』

「そうなんだ…」

『フフフ。でもスバル君が近くにいと安心するんだろっね』

「そうなのかなあ？」

その後、二人はたわいもない話をしていた

スバルの病室から10KM離れたウェーブロードには、アークがいた

「へえ、星河スバルは、明日あの可愛い子とデートなんだ…！、良いこと思いついちゃった…にしても、星河スバルの部屋に盗聴器を仕掛けて良かったあ。それにしても、あの二人寝てるからって少し油断し過ぎだよ」

そう、アークはスバル達が寝ている間に電波をなるべく残らないようにしてスバルの病室に入り盗聴器を仕掛けたのだ

「…明日が楽しみだな 早く明日にならないかな？」

アークは、行く宛ては無いのだがウェーブロードを歩み始めた

ーアメロツパー

「ふう、ようやくくっつけられたか……」

そう言ったシュツクの回りには、ウイルスやサテラポリス達の屍があった……

「後二つか……気が遠くなりそうだな……」

そう言つと、シュツクはまたどこかに飛び去つた

デートの約束（後書き）

……皆さんは、もう気づきましたよね？

シュツクの集めているものは……そう、アレです！

ある場所は適当だけど）・〇・（

感想、待っています

すれ違い(前書き)

明日は部活OFFF!!

今からテンションが上がります!

すれ違い

―翌日―

AM 7:30

「んん」

ミソラが起きた

そして、ミソラは目の前いっぱい広がるスバルの顔を見て少し恥ずかしくなった

（何で、私は病院で寝ているんだろう？たしか、昨日はスバル君に会見したよっていう発表をして あ！そうだ！スバル君とデートの約束してその後に私がスバル君に抱き着いてそのまま寝ちゃったんだ・・・私、寝すぎかな？）

実際、ミソラは昨日の夕方5時頃から寝ているので14時間30分寝ている

（うーん、これからどうしようかな…スバル君を起こそうかないや、やっぱり服を買いに行こうかな…でも、こんな時間に開いている店ってあるのかな）

ミソラがいろいろ悩んでいると、ハーブが起き出した

『んん。あら、ミソラ、早いわね』

「あ、ハープ！うん、目が覚めちゃって」

『そりゃそうよ、あなた14時間以上寝ているだから』

「えへへ、そうだよね」

ミソラは舌を出して「やっちゃった」っていう顔をした

『ミソラ、今のはスバル君に見せた方がいいわよ』

「え？あ、うん。分かった」

『それで、これからどうするの？』

「うーん、服を買いに行きたいんだけど こんな時間に開いてる店
つて無いよね」

『あら、そんな事？』

「そんな事？」

『それなら、外国に行けばいいじゃない』

「あー！そうよー！」

『フフフ、じゃあ行きましようか?』

「うん!トランスコード、ハープ・ノート!」

ミソラはそう言うと、外国……アメリッパに向かった

ーコスモウエーブー

「ハープ、アメリッパって確かこっちだよな?」

『そうよ』

「ありがとうハープ」

ハープ・ノートは、ハープと会話をした後、アメリッパに繋がる道を進んだ

そして……

「!?!ハープ!あの電波体!」

『そうね、あの電波体から強い電波を感じるわ……』

(…後の二つは一体どこにあるんだ 早く見つけなければ…)

コスモウェーブで、ハーブ・ノートとシュツクはすれ違った……だが、ハーブ・ノートは恐怖で足がすくんで歩けない状態で立っているだけで精一杯だった

「ハーブ、か、感じた？」

『ええ、あの電波体から強い電波……そして強い殺しの電波を』

「そうだね……ハーブ、私歩けないみたい」

『それが普通よ、少し休んでから行きましょ』

「うん、ありがとうハーブ」

『どういたしまして』

そうハーブが言うと、ハーブ・ノートはその場に座り込んだ……

(そういえば、さっきすれ違ったあのピンクの電波体：普通の電波とは何か違うかったような　そう、まるでロックマンのような……まあい、今はそれより残り二つのパーツを探さねば！)

そして、シュツクはまた違う国に向かった…

すれ違い（後書き）

すれ違っただけです、はい。

それより、シュックの技名どうしよつてか今頃考えます…

誰か、いい案下さい。。。………（m）（m）

初喧嘩（前書き）

何だか、変な展開だ…（-o-;）

初喧嘩

ー10分後ー

「……ハーブ、ありがとう。もう歩けるよ」
『そう？なら、行きましよう』

「そっだね」

そして、ハーブ・ノートはアメロッパに向かって行った

ーアメロッパー

「やっと着いたね」

『そっね』

ハーブ・ノートは少しハーブとの会話をし服屋を探してウエーブロードを歩きはじめた

そして、歩いているとハーブ・ノートの目の前に、切り刻まれたウイザード達が沢山いた

「ハープ、この有様は……一体なんだろ」

『…多分、さつきすれ違った電波体の仕業ね。それに、ここらへんにはウイルスの残留電波もあるわね…』

「そう…可愛そうだね」

そう呟いたハープ・ノートの目には、涙が溢れていた

『ミソラ そうね（ここに残っている電波 もしかしたら、スバル達より強いかも ちょっとマズイわね…）』

「…よし。ハープ行こう」

ハープ・ノートは、涙を拭きながら言った

『そうね、ゆっくりしていると時間が遅くなるわよ』

「あ！ハープ！急ごう」

『フフフ、そうね』

ハーブ・ノートは、服屋を探してウェーブロードを駆け回った

そして、ハーブ・ノートはようやく服屋を見つけ30分掛けて服を
買い急いで日本に戻った

ー日本・スバルの病室ー

「はあはあ……」

『お疲れ、ミソラ』

「はあはあはあ……うん」

『それにしても……』

現在、AM10:30…しかし、スバル達は

「ZZZZZ」

『ZZZZZ』

熟睡していた…

「はあはあ……っもう！スバル君！」

「ZZZZZ」

「……っもう！」

ミソラは、頭にきたのかいきなりスバルにキスをした

「ZZZ……んん！？んー！！」

「！」

ミソラは、スバルとのキスを止めて「おはよう、スバル君」と言
った

「……ミソラ？」

「／／え？　今、何て言ったの？／／」

「……ZZZZZ」

「……！！スバル君！！起きて……！！」

ミソラは、今まで出した事の無いようなでかい声でスバルを呼んだ

「！…！？…おはよう、ミソラちゃん」

「……」

「どづしたの、ミソラちゃん？」

「スバル君の馬鹿ー！！」

「え！？なぜ怒られたの！？」

ミソラは病室を走り去って行った

「…何で僕は怒られたんだろう？…」

『さあな…ハープにでも聞いたらどうだ？』

「そつだね……駄目だよ、ハープもないよ」

『マジか！…とりあえず、謝って来たらどうだ？』

「だね。ロック、ハープの電波を追える？」

『ああ、行くか』

「うん、ナビゲーションよろしく、ロックー！」

『おつーお』

そして、スバルも少し早い退院手続きをしてミソラを追いかけた

「……もう少し、様子を見ようか それともこれを有効に使うか
どうするか」

アークは、一人考えていた

ーコスモウェーブー

「こっちに…あるのか？無かったら、むだ足だか…とりあえず行っ
てみるか」

そして、シュックはシャーロに繋がる道に向けて歩き始めた

初喧嘩（後書き）

感想、待ってます

誘拐（前書き）

深夜に更新 目がー（-o-;）

誘拐

ーバス停ー

「はあはあ、何か今日 私、よく走るなあ はあはあ」

『そうね』

ミソラは、スバルの病室からバス停まで約1200Mある道のりを走ってきた スバルには到底出来ない芸当だ

「…私、スバル君に嫌われたかな?…」

『うーん、分からないわね』

「……」

『ミソラは、どうしたいの?』

「それは / / / スバル君と ずっと一緒にいたいよ / / /」

『フフフ、なら、する事は一つじゃない?』

「…そうだね、私、謝って来る!」

『そうしなさい』

「うん！」

ミソラは、スバルに会いに行こうとした時、遠くの方からこっちに向かって走って来る人影が見えた

そして、その人影はミソラの方に近づいて来た

「スバル君!？」

「はあはあ、はあはあ、さすがに 疲れたよ…」

スバルは笑いながら言った

ミソラは、スバルの笑顔にドキっとした

「どうしたの!？そんなに走って来て!？」

「どうしたのって、ミソラちゃんが出てちゃっつからね…」

「スバル君！」

「ミソラちゃん！」

二人は、同時に言い放った

「何？」

「先にどうぞ」

「スバル君から言つてよ」

「いやいや、そこはアイドルのミソラちゃんから」

「そんな事を言つたら、スバル君はこの地球の英雄じゃない」

「それは、ロックマンだよ」

「ロックマンはスバル君でしょ？」

「いや、まあそうだけど…」

「じゃあ、スバル君から言つてね」

「…分かつたよ」

スバルは意を決したような顔をしてミソラを見た。

「ミソラちゃん！」

「…何？」

「正直、ミソラちゃんは何で怒ったのかは分からない」

「……」

「でも、ミソラちゃんが出て行ったのを見て、ミソラちゃんを追いかけなきゃって思った。それに、僕はミソラちゃんの側にいたい…だから、許して。ゴメン」

「スバル君…それは、私が言う台詞だよ」

「え？」

「私も、スバル君の側にいたい。だから、ゴメンなさい」

「ミソラちゃん…勿論、僕はいいよ!…ミソラちゃんは?…」

「私も、いい。悪いけど、そこまでだよ」

ミソラがスバルの問いに答えようとすると、どこからか声がした

『『『「!?!?」「『『『

「星河スバル、悪いけどこの子は預かるよ!」

そう言うと、アークはスバル達の前に現れた

「お前は、あの時の!!」

「久しぶりだな ふん！」

「キャア……」

「ミソラちゃん!!」

『ミソラ!!』

ミソラは、アークの一撃で気を失った

そして、アークはミソラを担いだ

「じゃあな、ロックマン ロツポンドーヒルズの屋上で待ってるぜ
ちなみに俺の名前はアークだ」

「待て!アーク!!」

「じゃあな」

そう言うと、アークはミソラを担いだままロツポンドーヒルズの屋
上に向かった

「……………ウォーロック 行くよ!!」

『おう!』

「トランスコード! シューティング・スター・ロックマン!」

スバルは、ロックマンに電波変換してアークを追いかけた

ーシャーロー

「ここには 無いようだな」

そう言ったシュックの周りには、無残に散ったウィザード達が散らばっていた

「次は アフリックにでも行ってみるか」

そう言うと、シュックはアフリックに行くためにアフリックに繋がるコスモウェーブを探すため、コスモウェーブに向かった

誘拐（後書き）

めっちゃ無理矢理ですね
すいません（・・；）

感想、待ってます

ウイルス…？（前書き）

題名の意味は…読めば分かると思います

ウイルス…？

『スバル！ウイルスだ！』

「！？」

ロックマンは、ロッポンドーヒルズの屋上に向かう途中のウェーブ
ロードでウイルスに遭遇した

ウイルスの数は分からないがそのウイルスはロッポンドーヒルズの
屋上までいた…

「っく、邪魔だー！バトルカード！キャノン、トリプルスロットイ
ン！ギャラクシーアドバイス！インパクトキャノン！」

ウイルス達は、ロックマンの攻撃で4分の3ぐらい消滅したが、
残ったウイルス達は全く見たことのないウイルス達だった…

「このウイルス達は、一体何なんだ！？」

『俺が知るか！とりあえず、やるぞー！！』

「そうだね！バトルカード、マッドバルカン！」

しかし、ロックマンの攻撃は全て跳ね返された

そして、ウイルス達は一カ所に集まりだした

「一体、何が起きるんだ!？」

『とりあえず、今だ!スバル!』

「うん、そうだね!バトルカード、ロングソード!」

ロックマンは、左手をロングソードに変更しウイルスが集まった場所に向かって走り出した

「うおおおお!」

『待て!スバル!奴らの周りの電波がおかしい!』

「え!?!う! うわああああ!」

ロックマンは突如放たれた光によって跳ね返されてしまった

そして、その光の中から出て来たのは…まるで見たことのない、1体のウイルスだった…

見た目は、まるで人間…目が黄色で髪の毛は茶色、そしてチャラチヤラした服装だ

「あれは 一体何？」

『そりゃ、ウイルスだろう 多分だがな…』

「フ、フハハハ、ついに、ついに電波体になった！」

『「何！！？」』

「ん？キサマらは…へへ、調度いいぜ！俺の腕試しになりやがれ！」

「嫌だと言ったら？」

「どつちでも殺す！！！」

そう言うと、謎の電波体は右手を剣に変えロックマンに襲い掛かって来た

「ヒヤハー！！！」

「つく！バトルカード！ソード！」

ロックマンも対抗して、ソードを出した

「へ！そんなちっぽけな剣で俺の剣が受け止められるかな！？」

「君の剣も同じ様な物じゃないか！」

「見た目だけじゃねえんだよ！…サイクロンスラッシュ！」

そう言うと、謎の電波体の剣は風を帯びてロックマンに襲い掛かった

「風には、風だ！バトルカード、ウィンディアアタック！」

「甘いぜー！！」

「何だつて！？ぐは！」

ロックマンも対抗してウィンディアアタックを使うが、謎の電波体の風には勝てなかった…

そして、ロックマンは体を切り刻まれた

「はあはあ、何でこんなに」

「教えてやるぜ、一振りでも、風が敵を切り刻むんだよ！！」

「つく！」

『おい、スバル！少しマズイぞ！』

「分かってる…でも！」

ロックマンは、そう言つと謎の電波体と距離をとつた

「遠距離攻撃はどうだ！！バトルカード、マッドバルカン！」

そう言つと、ロックマンはマッドバルカンを発射した

だが、謎の電波体は避ける動作をしようとはしなかった

そして、徐々に風が謎の電波体の周りに集まり始めた…

「こんな攻撃、避けるまでもねえぜ…サイクロンリフレクト！」

そう言つと、周りに集まつた風が謎の電波体を取り囲み、ロックマンからの攻撃を完璧に防いだ

「つくそ！どうしたら…」

『俺が知るか！』

「じゃあ、今度はこっちから行くよ!」

「!...!...くそ!ミソラちゃんが危ないのに」

ロックマンがこう思っている内に、謎の電波体は距離を詰めて来ていた

ーコスモウェーブー

「にいさん いい物がそろってまっせ」

「.....いらん」

「そつ言わずに 見るだけでも...」

「だから いらんと言っているだろう!」

「そこを何とか!」

シュツクは、変な電波商人に捕まっていた...

ウイルス…？（後書き）

はい！

題名の意味は解りましたよね？

感想、待ってます

初めての友達（前書き）

題名が、思いつかなかった（-・-・-）

初めての友達

「行くぜ！」

「つく！バトルカード、ブレイクサーベル！」

「っへ！サイクロンスラッシュ！」

ロックマンのブレイクサーベルと謎の電波体のサイクロンスラッシュがぶつかった

「うおおおおお！」

「！？ブレイクサーベルにヒビが」

「うりゃー！」

「うわああああー！」

ロックマンのブレイクサーベルは折れて、謎の電波体の一撃は完璧に決まってロックマンはその場に倒れた

そして、ロックマンは謎の電波体の一撃により意識が朦朧としていた…

「うっ…」

「へへ！ちよろいな！」

『スバル！起きろ！』

「うっ…」

「これで最後にしてやるよ！」

謎の電波体はそう言うと、ロックマンに近付いた

「うっ…（もう駄目だ…僕は死ぬのか）」

『スバル！諦めるな！お前が諦めたらミソラはどうなる…！』

「！？」

「終わりだ！サイクロンスラッシュ！」

（そうだ、僕はミソラちゃんと 約束したんだ！ミソラちゃんを…
守るって…！）

そのとき、ロックマンを黒い光が包んだ

「!?何だよこれは!?!」

「うおおおおお!」

E I S P G M 起動… ノイズ率 999%…

「ファイナライズ! ブラックエース!」

ロックマンが、そう言って黒い光の中から出て来た

そして、その姿は黒い不死鳥みたいだった

「な 何だよ! そのお前!?!」

「お前を」

『「倒す者だ!?!」』

「やれるもんならやってみやがれ! サイクロンスラッシュ!」

「一撃で決めてやる! ブラックエンドギャラクシー!」

ロックマンは黒い球体を作って謎の電波体に投げつけた

その球体は、謎の電波体を包んだ

そして、ロックマンはその球体を斬った

「うがああああ！」

「……………」

その一撃で勝負は決まった

謎の電波体は、その場に倒れて今にも消滅しそうな状態だった

それを見たロックマンは、ファイナライズを解除し謎の電波体に近付いた

「へ やるじゃ ねえか……」

「うん 友達を守るためなら僕は、何だってするよ」

「友達か……そんなに、友達が 守りたいか？」

「うん、大切な大切な友達だからね」

「そうか……俺にも 友達がいたら その気持ちを 分かれたのにな……」

「……君は、もう僕が友達だよ」

『そつだぜー！』

「お前ら…ありがとな うう！」

「大丈夫！？今すぐ病院に！」

「気に…するな 俺はもう…手遅れだ」

「そんな！」

「だが…最後に 友達を…守る力ぐらいは ある… エアロヒール…」

「！？体の傷と痛みが…無くなっていく…」

「これは 風でお前の 細胞を活性化させて 治癒する技なんだ…俺の力を…受けとってくれ」

謎の電波体がそう言うと、謎の電波体は光を出した

その光は、ロックマンの体に入って行った

「ありがとう」

「へへ…じゃあな」

そして、謎の電波体は光となって消滅した

「……行くぞ、ウォーロック」

『ああ、そうだな』

そして、ロックマンはロツポンドーヒルズの屋上に向けて走り出した

ーコスモウエーブー

「にいちゃん、頼むから見てくれよ」

「しっさい……」

シュックは、そう行ってアフリックに向かった

初めての友達（後書き）

感想、待ってます

風（前書き）

タイトルがおかしいかな（・・・）

風

「ロツポンドーヒルズ・屋上」

「やっと来たか」

「ミソラちゃんはどこだ!？」

「さあね どこだろうね」

「とぼけるな! ロック! ハープの電波分かる!？」

『ああ、だが何か変だ…ハープの電波が貧弱過ぎる』

「ああ、それはねあの子が暴れるからちょっとお仕置きをしたんだよ」

「お前…絶対に許さない!!」

『俺も同じだ!』

「ハハ、別に許してくれなくていいよ…もっとも、君はここで…」

その時、アークの顔からさっきまでの笑顔が無くなり、真剣な顔になった

死ぬんだから！」

そう言うと、アークはロックマンに対して銃での攻撃を始めた

「マシンガン Spreddo！」

「バトルカード！マッドバルカン！」

ロックマンの攻撃は、アークの攻撃に全く歯が立たなかった
それを見たロックマンはすぐさま回避した

「お、やるね」

「まだまだだ！バトルカード、シュリシュリケン！」

「硬そうだね でも、甘い！」

アークは、軽々とロックマンの攻撃をジャンプして避けた

「くらえ！アクアレーザー！」

「！！、バトルカード、バリア！」

ロックマンは、すぐさまバリアを使ったがアクアレーザーの前では、全く意味が無かった

「ぐはあああああ！」

「まだまだ行くよ！マシンガン Spredd！」

「ぐわあああああ！」

「へへ、アクアマシンガン！」

この攻撃は、水属性の攻撃を連射する攻撃だ

「ぐは！」

ロックマンは、その場に倒れた

それを確認したアークは、ロックマンに近付いた

「これで終わりかな？」

「まだだ…まだ終わって…ない！」

「何!?!」

ロックマンは立ち上がり、黒い光がロックマンを包み、黒い球体となった

「!?!、何だこの光は!?!」

そう言うと、アークはロックマンから離れた

「はあああ!ロック!行くよ!」

『おう!いつでも行けるぜ!』

ピーピー、ノイズ率999%

「ファイナライズ!ブラックエース!」

そう言うと、ロックマンは黒い球体を破って姿を現した

「変身した!?!」

「行くよ!」

そう言うと、ロックマンは右手を剣に変えアークとの距離を一気に

詰めた

「な！？早」

「はあああ！」

ロックマンは、アークを斬りつけた

「ぐは！」

「まだまだだ！うおおおおお！」

そして、そのままアークを斬り刻んだ

アークはボロボロになりその場に倒れかけたが、アークは倒れなかった

「へえ…やるじゃん」

「まだ倒れないのか…なら！」

『行くぜ、スバル！』

「勿論だよ！…ブラックエンドギャラク」そうはさせるか！ブレイクショット！」「」

アークは、ロックマンがブラックエンドギャラクシーを使う前に、技をロックマンに放った

「!?!この距離じゃあ、避けられない!シールド!」

「無駄だ!それには、ブレイク機能が着いているぜ!」

「な!?!ぐは!」

アークが放った攻撃は、ロックマンのシールドを破ってロックマンに直撃した

「はあああ!マシンガン Sprett!」

「ぐはああああ!」

アークはロックマンのシールドを破った直後、マシンガン Sprett ドを放った

ロックマンは、強制的にファイナライズを解除され、その場に倒れた

「変身しても、その程度か...この程度なら、君はあの子を守れない

ね

「!?!?…(そうだ、僕はあいつを倒すために戦うんじゃない!…僕は、大切な友達を守るために戦うんだ!!)」

…その通りだぜ!

その時、ロックマンの頭に声が響いた

…ロックマン、お前に俺の力を与えるぜ!お前の大切な友達を守る力だ!

(うん!ありがとう!)

…へ!礼なんていらねえよ!俺達は 友達だろ?

(うん!勿論さ!)

…何回聞いても、友達はいいもんだな ロックマン いや、スバル!奴を倒して、お前の大切な友達を助ける!

(うん!…また会える?)

…さあな だが、俺はお前を見守ってるぜ!

(ありがとう 最後に…君の名前はなんだい?)

…さあな 俺は、ウイルスから生まれた身だからな

(そうなんだ なら、君の名前はウインドだ！)

…いきなりだな！でも、ウインドか サンキューな、スバル

(どういたしまして)

…へへ スバル！仲間を助ける！

(うん！またね、ウインド)

…またな、スバル！

そして、ロックマンの頭に響く声は収まった

「そろそろ、殺すか」

「まだだ、まだ死なない！」

「え！？」

そう言うと、ロックマンは立ち上がった

立ち上がったロックマンの周りには、風が漂っていた

風（後書き）

はい、奴の名前がウインドになりました（＾Ｏ＾）

「おう！、スバルに感謝だぜ！」

そうだね！

感想、待ってます！

ファイナルフォーสライズ(前書き)

題名は、少しネタバレです(････)

ファイナルフォースライズ

「うおおおおおー！」

「風？一体、何が起きているんだ？」

アークがそう言うと、ロックマンは風に包まれた

…フォースPGM ダウンロード完了…フォースPGM起動…

そして、風から出て来たロックマンは、バイザーが黄色で髪の毛は茶色、そして体は透き通る様な緑といる見たことのない姿だった

「何！？また変身だと！？」

「ロックマン、サイクロンフォース！」

『おっしゃー！行くぜ！』

「まだまだ、ロックー！」

『へっ？』

「…ファイナライズだ」

『はああ！？そんなんしたら、エースPGMが潰れるぞ！？』

「行くよ！」

『じゃあねえな…』

エースPGM起動 ノイズ率999%…警告 警告 至急二ノイズ
ヲ取り除イテ下サイ…警告 警告…

『大丈夫なのかよ…』

「はああああ！」

ロックマンが叫ぶと、ロックマンは黒い光に包まれた

そして、黒い球体から出て来たのは、体は透き通る様な緑で羽は黒く、バイザーは黄色のロックマンだった

「ファイナルフォーススライズ！サイクロンエース！」

「何だ！その姿は！？」

「一撃で…」

『「決める！！」』

「やれるもんならやってみやがれ！」

「はああああ！」

ロックマンは、風で球体を作り、それをアークに向かって投げた

「へ！その程度の風…オーバーデッドレーザー！」

アークは、赤黒い色のレーザーをロックマンが投げた風の球体に向かって発射した

「うおおおおお！」

「………一気に決める！！はあああ！」

「な！？嘘だろ！？」

風の球体はアークが発射したレーザーを破りアークに直撃した

そして、アークは風の球体に閉じ込められた

ロックマンは、右手を黒い剣に変えた

「終わりだ、アーク！サイクロンエンドギャラクシー！！」

ロックマンは、剣で風の球体を何回も斬った

そして、最後に力を溜めて風の球体を斬った

「うがああああ!」

『終わったな』

風の球体から出て来たアークは、既に下半身が無く上半身も右手は光に変わっていた

「つく…やるな」

「ミソラちゃんはどこだ!」

「あの子は、この下にいるよ…」

それを聞いたロックマンは、地面を斬り裂き下の階に向かった

「ハ　ハハ…最後はこんなにも呆気ないねかよ…少し　悲しいかな
」

アークは、そう呟くと光となってこの世から消滅した

アークの呟きは誰も聞いてはいなかった

下の階に行ったロックマンは、ミソラを見つけた

ファイナルフォーサイズ(後書き)

変な所で切りました(- . . . ;)

すいません m (| |) m

感想、待ってます

救出（前書き）

明日から、また学校だ
嫌だなあ（・・・）

救出

「ミソラちゃん！」

「ZZZZZ」

「……寝てる」

ミソラは、床に丸まって気持ち良さそうに眠っていた

ミソラは、全く怪我をしていなかった

「良かった 本当に良かった」

『ハープも、大丈夫そうだ』

「そう、良かった、二人とも無事で……」

『安心するのは、まだ早いぞ！』

「え!?!」

『後ろを見やがれ』

ロックマンは、ウォーロックに言われ後ろに振り向いた

そこには、ウイルスが10体程いた

「ウイルスか ロック！行くよ！！」

『ああ スバル！なるべく早く決めてぞ！』

「え！？、あ、うん」

『行くぞ！』

ロックマンは、ウイルス達に向かって走り出した

「バトルカード、スカルアロー、ソードファイター！」

ロックマンは、スカルアローでダメージを与え、止めにソードの連発でウイルス達を仕留めて行った

しかし、途中でロックマンがうずくまった

「ぐー！！」

『どうした、スバル！？』

「体から 力が抜けていく！」

『何！？』

ロックマンがそう言うと、ロックマンの姿はサイクロンエースからサイクロンフォースへと変化した

「ブラックエースの力が…消滅した！？」

『ああ、そうみたいだな…エースPGMも壊れちゃったみたいだし』

「そうだね　とりあえず、残りのウイルスを倒そう！」

『ああ　右だ！スバル！』

ウォーロックと話していると、右からウイルスが襲い掛かった

が、ロックマンは軽々とその攻撃を回避した

「くらえ！サイクロンスラッシュ！」

ロックマンの反撃は、ウイルスに直撃しウイルスは全てデリートした

「ふう、終わったね」

『ああ しかしおかしいな』

「何が？」

『いや、エースPGMが壊れているって事はノイズの影響をもちに受けるって事だろ？』

「うん」

『でも、今、俺達はノイズの影響を受けていないだろ？』

「あ！ 確かにそうだね」

『もしかしたら、このフォースPGMに何か秘密があるのか？』

「かもね 後でWAXAに行ってみよう」

『そうだな』

「とりあえず、ミソラちゃんを起こそう」

『そうだな』

そう言って、ロックマンは電波変換を解除してミソラに近付いた

「ミソラちゃん、起きてー！」

「ZZZZZ」

「ミイソーラーちゃん！」

「ZZZZZ」

「はぁ…全然起きないや」

『こいつ、スバル並だな』

「…なら！」

そう言つてスバルはミソラにキスをしようとした時、ミソラが起きた

「うーん…！！、スバル君！？」

「あ！おはよう、ミソラちゃん」

「何してるの？」

「え？ いや、まあ…全然起きないからキスをしようかと」

「……………スバルの変態！」

「えー！？ひどいや」

「えへへ、嘘だよ」

そう言つと、ミソラはスバルにキスをした

「んん!!」

「……えへへ」

「…ミソラちゃん、帰ろっか」

「うん」

『待て待て待て!!』

『あんたは黙ってなさい!』

『いやいや、今回は黙らねえ!スバル!今からWAXAに行くんだろ!?!』

「あ! 忘れてた」

「どう言う事、スバル君?」

「まあ、ちよつとね ミソラちゃん、先に帰ってる?」

「ううん、一緒に行くよ」

「分かった、じゃあ行こっ」

「うん」

そう会話をする、二人はウェーブライナー乗り場に向かった

「アフリッカー」

「まずは、どこから探そうか」

シユツクは、アフリックに着いていた

「待て！」

「ん？キサマは一体誰だ？」

「俺は、WAXAアフリック市部のサテラポリスね者だ！お前は一体誰だ！？」

「ふん！うるさい虫だ ライジングブレイク！」

「な！？ぐはああああ！」

サテラポリスのウィザードは、一撃でデリートされた

「ふん、腕ならしにもならん」

そして、シュックはアフリックを搜索し始めた

救出（後書き）

エースPGMが壊れました（-.-;）

ブラックエース、さようなら？

感想、待ってます！

故障（前書き）

題名は、本編にはほとんど出て来ません（・・・）

そして、深夜更新です…もう寝ます（・・・）ZZZZ

故障

「ウェーブライナー乗り場」

「どうしよう、ミソラちゃん」

「私に言われても」

今、二人が悩んでいるのは…ウェーブライナーが少し故障し、出発時間が少し遅れると言う事と周りの人々が「あれって、アイドルのミソラちゃんじゃない？」とか言っている事だ

普通なら、電波変換して終わりだが、今だに、ミソラがハープ・ノートだと言う事はごく一部の人が知らないのです、ここで二人が電波変換してしまうと、ミソラがハープ・ノート だとばれてしまう

「…ロック 何かない？」

「俺が知るか！」

「ハープ、何かない？」

「そうねえ…ミソラ、ちょっと耳を貸して」

「？、いいけど」

ハーブは、ハンターV Gに耳を近付けハーブの耳打ちを聞いた

「!!!… / / / ハーブ、本気? / / /」

『あら、別にやらなくてもいいわよ?』

「 / / / …… 分かったわよ / / /」

「ミソラちゃん、何かいい方法が思い着いた?」

「 / / / うん 一応ね / / /」

「どんな方法!??」

「 / / / それはね… スバル君が電波変換して私を連れてWAXAに行くの / / /」

「 / / / …… 分かった… / / / それしか、方法はなさそうだし」

「 / / / ありがとう、スバル君 / / /」

「トランスコード、シューティング・スター・ロックマン!」

スバルがロックマンに電波変換すると、周りにいた人々は「うわ、ロックマンだ! って事はやっぱりあれはミソラちゃんだ! 急げ、サイン貰いに行こう!」とか言っていた

「ノノミソラちゃん、急ぐっ！ノノ」

「ノノっん…ノノ」

そう言っていると、ロックマンはミソラをお姫様抱っこした

「ノノノえ！？ちよっ、何でお姫様抱っこなのノノ」

「え？だって、この方が早いからノノ少し恥ずかしいけどノノ…
じゃあ、行くよー！」

そう言っていて、ロックマンはミソラをお姫様抱っこしたままWAXA
に向かった

ーウエーブロードー

「ミソラちゃん、ここなら電波変換出来るよ？」

「そうだね トランスコード、ハープ・ノート」

ミソラは、ハープ・ノートに電波変換した

が、ロックマンからは離れなかった

「???、ミソラちゃん、離れてよ?」

「え、もうこのままでいいじゃない」

「良くないよ! 恥ずかしいし」

すると、ハーブ・ノートは、お得意の涙目(演技) + 上目遣いでロックマンを見つめて「ロックマンは、私が嫌なの?」と言った

そうすると、ロックマンは「う! 分かったよ それに、僕は君が嫌いじゃないよ」と言った

「ありがとう、ロックマン」

「どういたしまして」

そして、ロックマンはハーブ・ノートを抱っこしたままWAXAに向かった

ーアフリッカー

「これは、何の石碑だ？まあ、どうでもいいか…」

シュツクが見つけた石碑には、こう書いてあった

…2000年前 水祭り ミズンド 光熱斗 & amp; ロックマンエ
グゼ

と書かれていた事はシュツクは知らなかった

「ここには無いのか？」

シュツクが、そう呟くと「見付けたぞ！手配犯！」と聞こえてきた

声が出た方に視線を動かすと、そこには50体近いサテラポリスの
ウィザードがいた

「やれやれ、分からん奴らだな…マーズインパクト…！」

そう言うとシュツクは、右手を上に掲げて手の平に巨大な隕石を作
り出し、その隕石に炎を纏わせた

「抵抗するなら、容赦はしないぞ！」

「うるさい、消えろてる」

そう言うと、シュックは手の平に作った隕石をサテラポリスのウィザード達に投げつけた

そして、隕石はウィザード達に当たり、ウィザード達は「ぐはああああ！」と叫び声を上げながら消滅していった

「ふん！うっとうしい奴らだ…次は、どこを探そうか」

シュックは、そう言ってアフリックを後にした

故障（後書き）

なんか、シュツクが強すぎるような…まあいいか！！

と開き直る作者でした（ ）

感想、待ってます！

お願い（前書き）

今回は、何だか変な回です（・・；）

お願い

「WAXA・玄関前」

「着いたね」

「うん」

そう言うと、ロックマンとハーブ・ノートは電波変換を解い

「じゃあ、行こうか」

「そうだね」

そして、二人はWAXAへと入り指令室へと向かった

「指令室」

「「こんにちは」」

「おお！スバルにミソラじゃないか！」

「あ！暁さん！元気そうだなによりです」

「まあな」

暁は、ウォーロック達が帰って来た時に、一緒に帰ってきてそのまま病院に入院していた…つい3日前までスバルとは違う病院に入院していた

「で、今日はどうしたんだ？…サクサクサクサク」

「えーと、まずエースPGMが壊れました」

「そうか…サクサクサ　！！？」

暁は食べていたうまい棒を地面に落とした

「え？　嘘だよな？」

「本当です…」

「………うわあああ！どうすんだよ！あれのバックアップなんてとってないぞー！！」

「………すみません」

「はああ…それだけか?…」

「まだあります」

「まだあるのかよ」

『シドウ、ちゃんと話を聞きましょう』

「分かったよ、で、なんなんだろう?」

「エースPGMは壊れたけど、新たにフォースPGMを手に入れました!」

「フォースPGM??それは何だ?」

「これです」

そういつて、スバルはハンターV.Gをシドウに見せた

「これがどうしたんだ?」

「これを使って新たな変身が出来ました」

「へえ、それは凄いいじゃないか!良かったな」

「そうなんですけど、ちょっと調べて欲しいんですけど?」

「ん?まあ、いいけど 何を調べるんだ?」

「エースPGMが壊れたのに、ノイズの影響を受けなかった事に着いて調べて欲しいんです」

「分かった、任せろ！また明日来てくれ」

「分かりました」

そう言うと、スバルはフォースPGMを暁に渡した

「それじゃあ、僕達はこれで」

「……………」

「ああ、じゃあまた明日な」

「はい」

「暁さん！」

「ん？どうした、ミソラ？」

「その、私にもそのエースPGMを作って欲しいんです！」

「「え！？」」

「お願いしますー！」

そう言つと、ミソラは深々と頭を下げた

「ミソラ…いいだろう！正し、条件がある！」

「何？」

「無茶はしない事…勿論、スバルもだぞ？」

「え？あ、はい 分かってます」

「分かりました」

「よし、でも、いつになるか分からないぞ？」

「はい、出来るだけ早くして下さいね」

「ハハハ、分かったよ」

「それじゃあ、僕達、帰りますね」

「おう、気をつけてな」

「」「さようなら」

暁に用事を伝えた二人は、家に帰って行った

「コスモウェーブ」

「…次は、どこへ行くのか…」

シュツクは、今だにどこへ行くか迷っていた

「アメリッパか？ よし、アメリッパに行くか…」

シュツクは、次の目的地をアメリッパに定めた

そして、シュツクはアメリッパに行く道を探し始めた

「?????」

「ふむ、アークが死んだか」

「はい、バルアナ様」

「次は、誰を地球に送ろうか…」

「私が行ってもよろしいですか？」

「お前がか？…いいだろう、行って来い」

「は！」

そう言うと、バルアナと喋っていた電波体は準備をするため部屋に戻った

お願い（後書き）

感想、待っています

アークと友達（前書き）

最近、題名がおかしい様な（-・-・;）

深夜更新です（^| ^ ;）

アークと友達

「スバル家」

「「ただいま」」

スバルとミソラは、家に帰って来た

あかねは、パートで出掛けており大吾はまだWAXAにいるのだろ
う

「誰もいないね」

「そうだね」

「明日は、学校行くの？」

「うん、さすがに行かないと勉強が…」

「そう 私、明日休むから」

「え！？何で？」

「そろそろ、ライブの練習とかしないとね」

「ああ、そうだね」

「スバル君、来てくれるよね？」

「勿論！」

「ありがとう じゃあ、私夕食作るね！」

「うん、ありがとう」

ミソラは、そう言うと台所に向かった

スバルは、自分の部屋に入ってベッドにダイブした

「ふうー、今日は疲れたな……」

『そうだな』

「あれ、ロックにも戦って疲れるってあるんだね」

『当たり前だろ！』

「ハハハ」

『つたく』

「…アーク、あいつもウインドと同じ様に友達を知らないのかな……」

『多分、そうだろうな』

「アークも、ウィンドと同じ様に友達を知ったらあんな事はしなかったのかな」

『さあな…だが、俺はあいつと戦っている時になぜかは分からないが、殺気みたいのを感じなかった。これは、俺の推測だがあいつはただ友達がどんなものかが知りたかっただけなんじゃないか？』

「……………」

『それに、ミソラは誘拐されただけで怪我とかは無かったしな…』

「そうだね。もしかして、僕はとんでもない事をしたのかな…」

スバルが自分を攻めた時、また頭に声が響いた

…自分を攻めるな！悪いのは、全部俺だしな

（君は！…アーク！）

…よお！

（何で僕の頭の中に）

…さあな、よく分からないさ。まあいいけどな

（僕は、あんまり良くないんだけどね）

…まあ、そう言うなって

(ハハハ、分かったよ)

…俺は、友達と言うのを知らなかった

(いきなりだね!?)

…ハハハ、そう言うなって それで、その青いのが言ってた通り俺は友達について知りたかった

(そうなんだ)

…だがな、今、お前と話をしてやっと分かった こうやって笑いなから話せるのが友達だってな 悪いな、自己完結しちまって

(いいよ、君の納得の行く答えが見つかったんでしょ?)

…ああ

(良かったね、アーク)

…星河スバル ありがとう

(アーク、フルネームは止めてよね!僕達、友達でしょ?)

…いいのが、お前を友達だと思って

(勿論!)

…ありがとう、スバル

(どういたしまして、アーク)

…ハハハ、友達とほいいもんだな

(そうですね？ それと、もうミソラちゃんを誘拐とかしないでね
！)

…分かってるよ

(良かった)

…お前、あの子が相当好きだな？

(！？／／い、いきなり何だよ！？／／)

…ハハハ、分かり易いやつだな！じゃあな！友達を、あの子を守れ
よ！

(うん！絶対守ってみせる！)

そう会話をすると、頭に響く声は無くなった

そして、スバルは目を開けた

『どうした、スバル？』

「アークと友達になった」

『そうか って、何だってええええええ！？いつの間に！？』

「さっき、頭にアークの声が聞こえたんだ その時にね」

『…そうか、俺の推測は合ってたかライザー刑事？』

「ライザー刑事って何だよ？ 合ってたよ」

『マジで！？俺、スゲー！俺、探偵になろうつかもな！』

「知らないよ！」

『知つとけ！』

この後も、夕食が出来るまで二人は話をしていた

ーコスモウエーブー

「そののにいさん、ちょっと見ていかねえかい？」

「いらん！」

「そつ言わずに なめなめ」

「うるさい！俺はアメリツパに行くのだ！離せ！」

「おーアメリツパに？なら、コイツを「いらん！」」

シュツクは、また商人に絡まれていた

アークと友達（後書き）

ここで、皆さんに質問です！

皆さんの一番好きなバトルカードまたはバトルチップは何ですか？

（ ^ | ^ ）

答えてくれたら、嬉しいです！

感想、待っています

見栄（前書き）

深夜更新：最近多いな（^| ^ ;）

見栄

それから、15分経ち、ご飯が出来たとミソラがスバルを呼びに来た

「スバル君、ご飯だよ」

「うん、分かった」

二人は、リビングへ向かった

テーブルには、料理がたくさん並べられていた

「うわ！これ、ミソラちゃんが全部作ったの！？」

「そうだよ」

「凄いね！」

「！／／ありがとう　／／／」

二人は、椅子に座った

ウォーロックとハーブは、ハンターV.Gから出て来てウイザード専用の食べ物食べていた

『『『いただきます!』『』』』

「もぐもぐ、おいしいよ!ミソラちゃん!」

「ノノノありがとう、スバル君ノノノ」

その後、スバルは美味しいといいながらミソラの手料理を食べた

元々、スバルは少食だが今回はミソラと同じくらい食べた

『『ごちそうさまでした!』『』』

『『お粗末さまでした』『』』

「美味しかった」

「スバル君、それ何回も聞いたよ」

「それだけ美味しかったって事だよ!」

「ノノノスバル君　ありがとうノノノ」

「どういたしまして!…ミソラちゃん、明日は学校に行かないんだよね?」

「うん、スバル君に会えないのは少し寂しいけど」

「ライブだから、仕方ないよ」

「…スバル君ありがとう」

「そのかわり、ライブ絶対成功させてね」

「勿論 …じゃあさ、ライブ成功させたら私のお願いを聞いてくれる？」

「いいよ、正し失敗したら僕のお願いを聞いてね？」

「（スバル君のお願いって何だろう…）いいよ」

「約束だよ」

「勿論 …指切りしようよ」

「いいよ」

「「指切りげんまん嘘ついたら針千本飲ーます！指切った！」」

『…ミソラ、これは絶対に成功させないとね』

「そうだね、ハーブ」

『スバル、お前は明日学校行くんだよな？』

「うん、そうだよ？ どうしたの、ロック？」

『勉強とか大丈夫なのか？』

「……………ロック」

『ん?』

「今すぐ、委員長の家に行くよ!」

「『『え!?!?』』」

「トランスコー…」

「ちよつと待って!」

スバルが、電波変換しようとしたらミソラがそれを止めた

「何、ミソラちゃん?」

「何でルナちゃんのところに行くの!?!」

「勉強を教えてもらいに」

「なら、キザマロ君でもツカサ君でもいいよね!?!なのに、何でルナちゃんのところに行くの!?!」

「だって、電波変換したら委員長のところが一番近いし…」

「じゃあ、私が見てあげる!?!」

「え!?!?...ミソラちゃん、勉強出来るの?」

「なめないですよ！勉強の一つや二つ！」

「良かった！なら、早く僕の部屋に行こう！」

「え！？…ちょっと待って、片付けもあるし」

「あ！ そうだね、なら後で教えてね」

「う、うん」

そう言うと、スバルは自分の部屋に戻って行った

「どげしよ、ハーブ」

『ミソラ、あなたは何で見栄を張ったの？…』

「だって、スバル君がルナちゃんのところに行くって言うから…っ
い」

『まあ、分からなくもないわね…でも、これはあなたで何とかしな
さい…』

「…はい」

『はああ、ノートとかはあるでしょうっ？』

「うん、ノートはあるぞ」

『なら、それを見せてあげれば？』

「！！そうだね、ありがとうハー普」

『どづいたしまして』

こうして、ミソラは片付けをこなしていった

見栄（後書き）

皆さんに質問です！

小学6年って、大体何を勉強するんですたっけ？（・・・）

感想、待ってます

家族（前書き）

最近、題名がすぐに出て来ない）・・・（

家族

「ふう、やっと片付けが終わったね」

『そうね あれから30分経ってるわね』

「そんなに経ってるの!？」

『そうよ?気づかなかったの?』

「うん」

そう、ご飯を食べ終わったのがPM7:55…現在は、PM8:30なのでミソラが片付けを始めてもう30分以上経っていた

「ヤバい!早く部屋に行かなきゃ」

ミソラは、ピンク色のエプロンを外してスバルの部屋に向かおうとすると「ただいまー」と言いながら、あかねが帰って来た

「あー、お帰りなさい」

「ただいま、ミソラ 今日疲れたわね あーミソラ、ご飯作ってくれたの!？」

「え！？あ、はい 勝手に使ってゴメンなさい」

「謝らなくて良いわよ、むしろ感謝するわ！それに、ミソラはこの家の一員なんだから料理を作るぐらい全然OKよ！」

「！！ / / / ありがとうございます / / /」

「敬語は止めなさい、ミソラ！」

「え？ / / / 分かった お母さん / / /」

「よろしい」

(お母さんには勝てないなー)

「それより、今日の夕食何だか多いわね…」

「はい！、今日はスバル君の退院祝いなんで！」

「なるほどね…そう言えば、スバルはどうしたの？」

「スバル君は…あ！スバル君に勉強教えるんだった！」

「あらあら、急いで行かないとね」

「でも…」

「私なら、大丈夫よ？少し疲れたぐらいなんだし料理ぐらい自分で並べて食べるわ」

「すいま ゴメンなさい」

「良いのよ、こんな作業 さあ、早くスバルの所へ行きなさい？」

「はい！」

そう言うと、ミソラは急ぎ足でスバルの部屋に向かって行った

ミソラが、スバルの部屋の前に来た時、ミソラの耳に「飛び交うシグナルそれぞれの今日を乗せてー…」と聴こえてきた

「これって…私の…」

『そうみたいね 良かったわねミソラ？』

「うん！」

ミソラは、スバルの部屋に入って行った…スバルに勉強を教える方法を考えずに…

「アメリッパ」

「ここがアメリッパ 騒がしい国だ」

シュツクは、アメロッパに到着していた

「しかし この馬鹿でかいドームは何だ ん！？この石碑は、アフリックにもあったような」

シュツクは、さすがに気になったのか石碑を覗いた

石碑に書いてあったのは

200年前のレッドサントーナメント優勝者、光熱斗&mp・ロツクマンエグゼ

と書いてあった

「200年前：ロツクマン これは、面白い事が出来そうだな…しかし、今はアレが先だな」

そう言うと、シュツクはアメロッパでの探索を始めた

「?????」

「バルアナ様！準備が出来ましたので、地球に行って参ります」

「そうか では、行ってこい、サイブ！」

「は！」

バルアナがそう言うと、サイブと呼ばれた全体が青色で目が赤く髪の毛は緑のショートヘヤーで服装はクールを匂わせる服装の電波体は地球に向かった

「しかし、まさかあのウイルス達からあのような電波体が生まれるとはな さすがは、あの種類のウイルスだ 良く分らん性質だな

……ZZZZZ」

バルアナは、そう呟くとゆっくり目を閉じた

家族（後書き）

最初に言っておきますが、サブには何の意味もありません）
- ;)

感想、待っています

自分への嫉妬（前書き）

題名のネーミングセンスが全く無い（・・・）

こんな作者ですいませんm（）（）m

自分への嫉妬

「あれ？スバル君」

「ZZZZ」

「寝ちゃってる」

スバルは、音楽を鳴らしながら机に俯せになり眠っていた

『ウォーロックも寝てるわね』

「スバル君、音楽を鳴らしながら寝ちゃ駄目でしょ（どうやって勉強を教えたらいいかって考えてた私が馬鹿みたいじゃない…）」

『でもミソラ？』

「何、ハーブ？」

『スバル君、凄く優しい顔して寝てるわ』

「…私より、私の歌がいいのかな」

『（ミソラ、これは少し考えれば分かるでしょ！）ミソラ、スバル君を起こして聞いてみたら？』

「…そうだね」

そう言うと、ミノラはスバルを起こした

「ん…おはよう、ミノラちゃん」

「おはよう じゃなくて！」

「どづしたの？」

「スバル君は その あの」

「ミノラちゃん？」

「私と私の歌のどっちが好きなの!？」

「…?いきなりどづしたの? (そもそも、質問の意味がちょっと…)」

「いいから、答えて!！」

「(どづしたんだろ、ミノラちゃん?) (そりゃ、両方好きだよ?)」

「歌も？」

「うん…そもそもミノラちゃんが歌っている歌なんだから いったいどづしたの、ミノラちゃん？」

「え、いや、何となくかな…（ちょっと考えたら分かったのに…自分の歌に嫉妬した何て言えないよ!）」

「変なミソラちゃん」

「…ゴメン」

「でも、そんなミソラちゃんも / / / かわいいよ / / /」

「え! / / / ありがとう / / /」

「 / / / どういたしまして / / /」

スバルとミソラはお互いに顔を赤めながら言った

「うーん お風呂入って来よう…」

「じゃあ、一しょ」「駄目」「

スバルは、ミソラが言いきる前に言った

するとミソラは、頬を膨らませて「スバル君のいじわるー」と言うて少し怒った

「いやいや、いじわるじゃないでしょ じゃあ、入って来るね」

そう言って、スバルは部屋を出た

「うーん スバル君、忘れていたのかな？」

『さあね、ミソラは覚えていて欲しいの？』

「えーと…正直に言うと、覚えていて欲しくないよ」

『フッフ、そうでしょうね』

「っもう、分かってたんなら言わないでよ」

『ゴメンなさいね』

そうして二人はこのような会話を続けた

ーコスモウエーブー

「…地球への行き方が分からん このままではバルアナ様に叱られる」

サイブは道に迷っていた

そして、サイブは徐々にイライラし始めた

「…ここから、地球を攻撃する…それは無理か」

サイブが悩んでいると、「兄ちゃん、ちょっと商品見て行かへんか？」と商人が声を掛けて来た

「お前は誰だ？」

「ただの電波商人ですよ 見て行かへんか？」

「（コイツから、感じとれるこのオーラは一体）行かん」

「そうかい まあ、道ぐらいは教えたるわ あっちに行ったら地球やで」

「あっちか！ すまない、助かった」

「いえいえ、また来た時は見て行ってな」

「気が向いたらな」

そう言うと、サイブはようやく地球に向かった

「あいつは、ロックマンに勝たれへんな　今まで見たやつでロックマンに勝てるのは、あの商人の事を嫌ってるやつぐらいやな」

そう言うと、電波商人はコスモウェーブを歩き始めた

「アメロツパー」

「…」

シュックはあの大きなドーム（コロッセオ）に入っていた

そこには、剣の形をした化石が刺さってあった

「おじやへ、二つ目か」

そう言うと、シュックは刺さっている剣を自分に取り込んだ

「あと一つか」

そう呟くとシュックはコスモウェーブに戻った

自分への嫉妬（後書き）

今回で、シュツクの探している物を分かった人は多いと思います（笑）

スバルの思い（前書き）

題名が、思い着かない すいませんm) | (m

これ、毎回言っているような) . . . (

スバルの思い

「スバル君、遅いなー」

『何言ってるの！まだ10分しか経ってないじゃない！』

そう、スバルがお風呂に入ってから10分しか経っていないのだ

「でもさー はあぁ」

『っもう、ミソラったら そんなに暇なら、ライブで歌曲を確認したら？』

「大丈夫だよ、今回は、絆と、ハートウェーブの2曲しか歌わないしさ」

『あら？2曲だったかしら？…まあ、いいわ』

「そうだよー」

『…ミソラ、最後のライブなんだから絶対成功させなさいよ』

「勿論だよ、ハーブ」

『フッフ、まあ、失敗したらスバル君に何を言われるか分からないしね』

「そうだね 絶対成功させなくちゃ！」
『フフフ、そうね 』

こうして、ミソラはライブを絶対に成功させると強く誓った

それから5分後、スバルがお風呂から出て来た

「ミソラちゃん、お先」

「はいはい」

「ミソラちゃん、入って来なよ？」

「そうだね、入って来るよ」

そう言つと、ミソラは服等を持ってお風呂に向かった

「…ロック」

『何だ？』

「ウイルスを倒しに行くよ」

『お！、いきなりどうした？』

「…今日、もしウィンドが力を貸してくれなかったら、僕はミソラ

ちゃんを助けられなかった だから、もっと強くならなくちゃ!」

『そうか よし、なら行こうぜ!』

「うん! トランスコード! シューティング・スター・ロックマン!」

そして、ロックマンはウイルスを倒しにぶらぶらし始めた

—5分後—

「暗いね」

『そうだな』

「見つからないね」

『そうだな』

あれから、ずっと歩いているが、ウイルスには一回も会わなかった

すると、前の方にウイルスらしき影があった

しかし、その影は人の形をしていた

『ウイルスだ! スバル、行くぞ!』

「うん、バトルカードロングソード!」

ロックマンは、その影に斬り掛かった

すると

「げ!ちよつ、スバル!止めろ!」

「え!?!」

影から、声が聞こえたのでスバルは斬り掛かるのを止め、その影に近づいた

「あ 暁さん!?!」

「そうだったく、折角これを届けに来てやったのに」

そう言って、暁は自分のハンターV.GからロックマンにフォースP
GMを送った

「ありがとうございます」

「気にするなよ、これもヒーローの仕事だ…サクサクサクサク」

「そう言えば、ちょっと変なんですけど」

「サクサクサク 何がだ？」

「ウイルスがないんです」

「ああ、それは俺が倒したからな」

「え？そんなんですか」

「何か悪い事でもしたか？」

「え？いや、良いんですよ でも、そんな簡単に变身しても良いんですか？」

「ああ、あれから俺も鍛えたし、アシッドの方のプログラムも少し変えたんだ、だから、もう長時間の電波変換も簡単に出来るんだ」

「へえ、凄いですね」

「だろ？」

『んな事はどうでもいいんだよ、アシッド！勝負だ！』

『あなた やっぱり短気ですね』

『うるせー！勝負だ、勝負！』

『…どっどっします、シドウウ？』

「そうだな スバル、やるか？」

「良いですよ？」

「よし、決まりだな トランスコード、アシッド・エース！」

こうして、アシッド・エース改め、暁とロックマン改め、スバルとの戦いが始まった

スバルの思い（後書き）

次は、アシッド・エースとロックマンの戦闘が始まります！

皆さんに質問です、アシッド・エースの技名を教えてくださいませんか？

何しろ、ロックオンソードしか知らなくて）・・・（

ヒーロー対ヒーロー（自称）（前書き）

上手く書けなかったかも…（-.-;）

楽しんでくれたら幸いです！（^| ^）

ヒーロー対ヒーロー（自称）

「本気でいきますよ、暁さん！」

「勿論だ、俺も本気だ！」

「バトルカード、ブレイクサーベル！」

「ロックオンソード！」

二人は、距離を詰め互いにソード系で戦いを始めた

「はあああああ！」

「さすがに、ロックオンソードだけじゃ無理かなら！」

「！？」

そう言つと、アシッド・エースはロックマンとの距離をとった

「行くぜ、ウイングブレード！」

そう言つと、アシッド・エースは凄いスピードでロックマンとの距

離を詰めた

「！、バトルカード、ヘンゲノジュツ！」

しかしロックマンは、攻撃が当たる前にヘンゲノジュツを使ったのでアシッド・エースの攻撃は何とか避けた

しかし、アシッド・エースはロックマンがヘンゲノジュツを使うのが分かっていたのか、直ぐに後ろを向いた

「甘いぞ、ロックマン！くらえ、タバフレイム！」

「え！？、がは！」

ロックマンは、アシッド・エースの攻撃をまともに喰らい少し後ろに吹っ飛んだ

「やっぱり、強い！」

『まだまだだぜ、スバル！』

「うん！」

「掛かって来い！」

「バトルカード、スーパーバリア、ロングソード!…行くぞおお
おお!」

ロックマンは、体をスーパーバリアで守りながら右手をロングソ
ードに変化させアシッド・エースに突っ込んだ

「バリアか、ならー!ウイングブレー!そうはさせない!バトルカ
ード、キャノン!」

ロックマンは、左手をキャノンに変えアシッド・エースが攻撃体制
に入る瞬間を狙って撃った

勿論、アシッド・エースは攻撃体制だったので防御する方法が無い
のでロックマンのキャノンをもろに喰らった

「がは!」

「まだまだ!うおおお!」

「つく!、ロックオンソード!」

アシッド・エースは、急いでロックオンソードでロックマンに切り
掛かったが、ロックマンはそれを避けずにそのままアシッド・エ
ースを斬った

「ぐは！」

「ここだ！バトルカードブレイクサーベル、ウィンディアタック！」

「がは！」

アシッド・エースは、ロックマンの攻撃によって吹っ飛ばされた

「つく！さすがだな、ロックマン」

「そっちこそ」

「フ アシッド！アレをやるぞ！」

『仕方ないですね、シドウ』

「行くぞ ファイナライズ！」

「え！？」

そう言うと、アシッド・エースは黒い光に包まれアシッド・エースは黒い球体の中に入った

「はああああ！」

アシッド・エースがそう言うと、黒い球体を斬って出て来た
その姿は、まるでアシッド・エースが暴走した時の姿だった

「ファイナライズ、アシッド・イリーガル！」

「暁さん、その姿、大丈夫なんですか!？」

「勿論だ!何たってヒーローだからな！」

「(ヒーローは関係ないと思うけど)そうなんですか」

「さあ、お前も変身したらどうだ？」

「え?... ロック、行くよ！」

『おっ!』

「はああああ!フォースチェンジ！」

ロックマンがそう言うと、ロックマンの周りを風が包み込み、ロックマンは風の球体の中に入っていた

「...」

ロックマンが、風を斬って出て来た

「フォースチェンジ！、サイクロンフォース！」

「よし…じゃあ、第2ラウンド開始だ！」

さらに激しい戦いの火蓋が切って落とされた

ヒーロー対ヒーロー（自称）（後書き）

やっぱり、戦闘シーンを書くのが下手です）・・・；

こんなで、この先やって行けるかな）・・・；

アドバイスとかあれば、教えてくださいm）——（ m

感想、待ってます

第二ラウンド（前書き）

ヒーロー対決の決着が着きました！（^| ^）

楽しんでくれたら幸いです！

第二ラウンド

二人のヒーローは、適度な距離をとっていた

「……………」

「…ロックマン、動かないなら、俺から行くぜ！ロックオンソード！」

「はやぐは！」

アシッド・イリーガルとなった暁の攻撃は、アシッド・エースの時より早くなっていたので、ロックマンは攻撃を防ぐ事が出来なかった

「まだまだだ！コガラシ！」

「まず！サイクロンダッシュ！」

「何！？」

ロックマンは、アシッド・イリーガルのコガラシを受ける前に風のパワーを使って逆にアシッド・イリーガルとの距離を詰めた

「サイクロンスラッシュ！」

「つく！ロックオンソード！」

「はあああああ！」

「な！？ソードにヒビが！？」

「うりゃー！」

「ぐはー！」

ロックマンの攻撃は、アシッド・イリーガルの剣を砕きつつアシッド・イリーガルを斬り付けた

アシッド・イリーガルは、ロックマンの攻撃を受け後ろに飛ばされたが、アシッド・イリーガルは飛ばされている間にロックマンに攻撃を放った

「つくそ！ なら、これだ！ギザホイール！」

「な！？ぐはー！」

ロックマンは、攻撃を受けて飛ばされているアシッド・イリーガルに追撃をしようとしていたので、防御が間に合わなかった

そして、ロックマンも後ろに飛ばされた

しかし、二人ともヒーローなので少しよろめきながらま立ち上がった

「はあはあ、はあはあ」

「はあはあ、さすがだな、ロックマン」

「はあはあ、そっちこそね」

「まあな…ロックマン！これで決めるぞ！」

「え？」

「はああああ、オメガレーザー！」

そう言うと、アシッド・イリーガルはロックマンに向かって、今のアシッド・イリーガルの最強技を放った

「やばい！サイクロン」間に合わないぜ！」

「ならどうしたらいいんだよ!？」

『キングブレイクだ!』

「え?...分かった!」

『行くぜええ!』

「うん!バトルカード、キング…あれ?」

『どうした、スバル!?時間が無い、早くしやがれ!』

「でも『でもじゃねえ!』」

「…分かったよ バトルカード、SFB!(サイクロン・フォース・ビックバン)」

『え!?!』

「はあああああ!」

「何!?!」

そう言うと、ロックマンは右手の剣に風をまとわせ、その剣を前に
勢い良く突き付けた

突き付けた剣からは、横向きの竜巻が発生しアシッド・イリーガルの
オメガレーザーを破ってアシッド・イリーガルを直撃した

「ぐは!」

そして、直撃した竜巻をロックマンは剣を上振り上げると、竜巻

は横向きから縦向きに変わりアシッド・イリーガルを閉じ込めつつ
少しずつダメージを与えて行った

「く！これは、少しマズイか…」

「まだまだ終わらない！はあああああ！」

そう言うと、ロックマンは右手の剣で竜巻に閉じ込められたアシッ
ド・イリーガルを風の力を使い、素早く、そして何回も斬り付けた

「ぐはあああああ！早く、ここから脱出しないと」

そう言うと、アシッド・イリーガルは竜巻の上に向かってジャンプ
した

しかし、ロックマンはそれを読んでいたかのように先に竜巻の上に来
ていた

「な！？」

「これで最後だ！サイクロントルネード！」

そう言うと、ロックマンは右手の剣から竜巻に向かって竜巻を放つ
た

放った竜巻と、元々あった竜巻がぶつかってその場で爆発を起こした

「ぐはあああああ！」

そして、爆発が起きたせいで発生した煙りが収まった

そして、爆発が起きた場所にいたのはフォースチェンジが解けたロクマンが立っており、ボロボロになりファイナライズが解けたアシッド・エースが横たわっていた

「決まりですね」

「つく、そのようだな」

そう会話すると、アシッド・エースは持っていたリカバリーを使うと、ロクマンとともに電波変換を解いた

「さすがだな、スバル！さすがは地球を三回も救ったヒーローだな」

「いえいえ、暁さんも強かったですよ！」

「ハハハ、まあな」

「ハハハ…そう言えば、このフォースPGMについて何か分かった
んですか？」

「ああ、少しな…まず、そのシステムにはノイズ耐制がある…それ
も、かなりのな」

「そうなんですか？…なら、ファイナライズも出来るんですか？」

「それは、少し厳しいな」

「なぜですか？」

「まず、このフォースPGMにエース機能を入れるのがかなり難し
いんだ」

「と言うと？」

「第一に、空いている容量が少ない事だ…ブラックエースに変身す
るだけなら、まだ何とか入れれるんだが…」

「だが？」

「相性が、結構悪いんだよ」

「相性？」

「そう、相性だ まあこの先も研究を重ねるからまだ分からないけ
ど、今は無理だな」

「そうですか 分かりました」

「じゃあな サクサクサクサク」

そう言って、暁はうまく棒を食べながらWAXAに帰って行った

「僕たちも帰ろうか」

『そうだな』

そう言って二人は家に帰って行った

第二ラウンド（後書き）

今回は、少し長くなりました（あんまり変わって無いけど）・・・；
）

感想& a m p・アドバイス、待っています！

夢（前書き）

今回は、無理矢理あのヒーローを出しました！

本当に無理矢理です（・・・；）

夢

「スバル家」

「…ふう、気付かれなかったようだね」

『そうだな』

スバルは電波変換をしてロックマンになっており、自分の部屋の中から静かに帰って来た

ロックマンは、自分の部屋に入ると電波変換を解いた

「疲れたね」

『そうだな、もう寝るか？』

「うん、そうするよ」

そう言うと、スバルはベッドにダイブしようとしたが、スバルは布団が不思議と膨らんでいるのを見つけてダイブするのを止めた

「…ミニラちゃん？」

そう言うと、スバルは布団を勢い良く上に上げると、そこには真ん中につづくまる様に寝ているミソラがいた

「…ミソラちゃん そんなに真ん中に寝られたら、僕が寝れないよ」

『ドンマイだな、スバル!』

「楽しそうに言うな!これは、本当に寝れないよ! それに明日は学校だから、早く寝なくちゃ!」

『…じゃあ、何で暁と勝負したんだ?』

「え!?そ、それは…(明日が学校だって事を忘れてた何て言えないよね?)」

『お前の事だ、どうせ忘れてたんだろ?』

「う! はい、そうです」

『…自業自得じゃねえか!』

「ちよっ、ウォーロックうるさい!耳元で大声出すな!」

『知るか!…俺は、もう寝る!』

「え！？ちよつ、待って『ZZZZ』」

「本当に寝るな！この、馬鹿ロック！」

しかし、スバルが何を言おうとその声はウォーロックには届かない

「…どうしよう 寝れないよ」

「なら、一緒に寝ようよ」

「え！？み、ミソラちゃん！？」

「お帰り、スバル君」

「起きてたの！？」

「当たり前だよ、まだ10時30分だよ？」

「結構な時間じゃない？」

「そう？私は、まだまだ起きていられるよ？」

「（ミソラちゃんは、仕事関係のせいで時間感覚が小学生じゃない…） そうなんだ、凄いね」

「何かありがとう、スバル君 じゃあ、寝ようよ」

「一緒に？」

「一緒に」

「……ちよつと下に行つて来る」

「ダメ もう寝るよ」

「（これはいつものパターン？）まだ眠たくないな」

「さつき、ベッドにダイブしようとしてたじゃない」

「…参りました」

「よろしい じゃあ、一緒に寝よう」

「はああ、分かったよ」

こうして、スバルはミソラと一緒に眠りに入った

―スバルの夢の中―

「―ール君」

「……………」

「ーバル君」

「……………」

「スバル君！」

「うわ！？ビックリした　！？君のその姿　君は一体何者なんだい
！？」

スバルが見た人物には、体のベースは青で体の真ん中らへんには赤と少し黒が入ったマークがあり、目の色は緑色で所々に黄色があり、背中には青色の四角い物が着いていた

「僕の名前は、ロックマンエグゼ　エグゼでいいよ」

「僕は、星河スバル」

「知ってるよ」

「え？あ、そうだったね　そう言えば、今日は何で僕の所に来たの
？」

「…今、この地球はある組織によって攻められているよね？」

「うん、そうだよ」

「その組織の名前は、ビックバン」

「ビックバン」

「そして、そいつらはある物を探しているんだ」

「ある物？」

「そして、そのある物って言うのは……………」

「え！？何て言ったの！？」

エグゼは、何かを言ったがスバルには聞き取れなかった

そして、エグゼの体は段々と薄くなって行った

「待って！もう一回言ってよ！」

しかし、スバルの願いは届かずエグゼは消えて行った

そして、スバルは目が覚めた

『お！スバルが自分で起きる何て珍しいな』

「え？あ、そうだね」

『何か、変な夢でも見たんじゃないか？』

「え？まあ、そんな所だね」

『そうなのか？まあ、どうでも良いけどな　ってか、起きたんなら早く用意しやがれ！』

「そうだね」

そう言うと、スバルはベッドから出ようとしたが何かに掴まれていて、ベッドから出られなかった

スバルは、布団の中を確認するとミソラがスバルをきっちり掴んでいた

「ミソラちゃん」

「ZZZZZ」

「ウォーロック、今何時？」

『ん？今は・・・6時過ぎだな、それがどうかしたか？』

「・・・お休み」

『はああああ！？ふざけんな！起きやがれ！』

「ZZZZZ」

『寝やがった…俺が起こすのかよ』

ウォーロックは、
凄く嫌な顔をして
呟いた

夢（後書き）

何か、話があんまり進んでいないような……（……）

感想、待ってます！

起床& a m p・最後の…（前書き）

題名の「最後の…」は、読んだら多分分かります（^| ^）

起床& a m p・最後の…

1 AM 8 : 0 0 1

『起きやがれ、スバル!』

「ZZZZZ」

『起きろー!』

「ZZZZZ」

スバルは熟睡していた

ウォーロックは、いつも通りに起こしているが、無論スバルは起きない

しかも、今日は珍しくミソラも寝ているので、スバルを起こす役はウォーロックしかいなかった

『スバル、起きろー!』

「ZZZZZ」

『…スバル、起きろー！』

「ZZZZ」

「うーん ロック君うるさいよ」

ウォーロックが大声でスバルを起こしていたため、ミソラが起きた

『お！ミソラ、悪いけどスバルを起こしてくれ！』

「……分かった」

ミソラは、右手で目を擦りながら返事をした

「…スバル君、起きて 学校に遅れるよ」

「ZZZZ」

「…スバル君 起きてくれないと、キスするよ？」

「ZZZZ…！！」

スバルは、ミソラの一言で目が覚めた

「あれ、起きちゃったの？」

「うん（なぜだか、ミソラちゃん表情が「起きなくて良かったの」ってかんじの表情だ） おはよう、ミソラちゃん」

「おはよう、スバル君」

『スバル！起きたんなら、早く用事しやがれ！』

「おはよう、ロック 今何時？」

『8時5分だ』

「え！？ヤバいじゃん！早く用意しないと、委員長達が来ちゃうよ！」

そう言うと、スバルは急いでベッドから出て服を着替えて学校に行く用意をした

スバルは用意が終わると、ミソラと一緒に朝食を食べにリビングに向かった

リビングには、白ご飯とみそ汁、焼き魚と卵焼きが並べられていて、既にあかねと大吾は朝食を食べていた

「おはよう、スバル、ミソラ」

「スバル、早くしないと遅れるわよ」

「おはよう、父さん 分かってるよ、母さん」

「おはよう、お父さん、お母さん」

二人は席に着いて朝食をとりはじめた

ちなみに、現在8時13分 委員長達が来るのはだいたい20ぐら
いだ

なので、スバルは大急ぎで朝食を食べた

勿論、ミソラはゆっくり食べている

そして、スバルが後少して朝食を食べ終わるといふ所で、家のチャ
イムが鳴った

「きつと、ルナちゃん達ね スバル、行ってきなさい」

「うん、そつするよ」

そう言うと、スバルは朝食を少し残してテーブルを後にした

「じゃあ、行って来ます！」

「はい、行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃい、スバル君」

「おう、行って来い！」

こうして、スバルは家を出た

学校は、8時30分までに教室に入らなければ遅刻扱いとなる

ちなみに、現在8時20分：遅刻扱いまで後10分：

ーコスモウエーブー

「次はどこに行こうか…」

シュツクは、今だに次の目的地を考えていた

「うーむ…」

「兄ちゃん！また会ったな」

「お前は、あの時の商人！」

「そや、とりあえず見て行ってーな」

「見ん！後、どっか行け！」

「見てくれたらな」

「お前もしつこいな！」

「当たり前や！それが商人や！」

「そんなの知らん！」

「知つといて！」

「…拉致があかん」

そう言って、シュツクはその場を立ち去ろうとした

しかし、シュツクの頭に声が響いた

…シュツクよ

（この声は バルアナ様！？）

…そうだ シュツクよ、今すぐに戻って来い

(え？今すぐですか？)

…そうだ、最後のあれが見つかった

(それは、本当ですか!?)

…勿論だ シュツクよ、早く戻って来るのだ!

(は!)

シュツクは、そう会話するとバルアナの所へ向かった

「そう言えば、前に道を教えてやったやつはロックマンに会えたんやろか?…まあええわ」

そう言うと、電波商人は歩き始めた

ー日本・バイサイドシティー

「へっくしゅん! 誰かが私の噂でもしているのか?...それより、ロックマンは一体どこにいるのだ!」

サイブは、今だにロックマンに会えていなかった

「出てこい、ロックマン！」

「あんた、うるさいよ！」

「え！あ、これは失礼した」

シユツクは、あまりにも大きな声で叫んだので近くにいた電波体に怒られた

(ロックマン、早く出てこい！)

サイブは、心の中で叫んだ

起床& a m p・最後の…（後書き）

分かりましたよね？（笑）

そろそろ、あれの名前を言っても良いですよ？（皆さんは、分か
つてると思いますが）（笑）（

感想、待ってます！

遅刻（前書き）

今回は、ちょっと早めの更新です！

遅刻

「スバル家前」

「スバル君！遅いわよ！」

「え？結構早く来たと思うけど、言い訳は聞かないわ！」

「…委員長、それは、スバル君に少し悪いのでは？」

「問答無用よ！」

そうやって、ルナはキザマロとスバル　そしてなぜかゴン太を睨んだ

「「ひっ！」」

「何で俺まで!?!」

ちなみに、ツカサはその様子を笑って見ていた

「あれ？そういえば、ミソラちゃんはどうしたの？」

「そうです、ミソラちゃんはどうしたのですか！」

「もしかして、風邪を引いたのか!？」

「え? ああ、ミソラちゃんはライブの練習があるから今日は休みだよ」

「そうなの」

「そうなんですか」

「今日は、ミソラちゃんがないのか」

キザマロとゴン太は、明らかにテンションが下がった

「…ねえ、ルナちゃん」

「何、ツカサ君?」

「時間大丈夫なの?」

「え?...!?!? 皆、急ぐわよ!」

「」「」「」

「ほら早く!」

そう言って、ルナは急いで学校に向かった

「こうなったら、スバル！俺達も電波変換だ！」

「そうだね！」

「え？ちよつと待って下さいよ！」

「待てないぜ！トランスコード、オックス・ファイア」

「ごめん、キザマロ！トランスコード、シューティング・スター・
ロックマン」

二人は、電波変換をしウェーブロードにいた

「ごめん、キザマロ じゃあー！」

「悪いな、先行ってるぜ！」

二人は、ツカサと同様に猛スピードで学校に向かった

「待つて下さいよー！…二人ともひどい」

この後、キザマロが遅刻したのは言うまでもないだろう

「?????」

「只今戻りました、バルアナ様」

「おう、シュック 早速だが、お前には200年前に行ってもらおう」

「え？ 200年前ですか？」

「そうだ、200年前だ そこに、最後のオーパーツがある…そう、シノビのパーツがな！」

「御意!…しかし、どうやって200年前に行くのですか？」

「それはだな 私の力を使う」

「バルアナ様の力を!？」

「そうだ、私の力とある機械で時間を歪ませ200年前へ行く道を造る」

「そんな事が可能なんですか!？」

「無論だ…なあ、Mrキング」

バルアナの隣から、いきなりMrキングが姿を現した

「無論だ…しかし、それをすればバルアナの力を随分と使うぞ？良
いのか？」

「ああ、私は構わん！ シュツクよ、道を造るまで少し待っている」

「は
」

シュツクは、その返事をする则ち自分の部屋に戻って行った

遅刻（後書き）

キザマロかわいそうでした（笑）

それと、バルアナ達が探していたのはオーパーツでした！

皆さんは、分かってましたよね！

感想、待ってます！

軽い説教（前書き）

題名が……思いつかない！（-o-;）

軽い説教

ーコダマ小学校ー

現在、朝の会が終わり少しの間自由時間になっている

「委員長もスバル君もゴン太君もツカサ君も酷いじゃないですか！」

キザマロは、遅刻したせいで先生にこっぴどく怒られた

「ごめん、キザマロ」

「面目ねえ、キザマロ」

「ごめん、キザマロ君」

ルナ以外の三人は、すぐに謝った…が、ルナは謝らなかった

「ふ、ふん！知らないわ、あなたがちゃんと時間を見て行動していれば大丈夫だったんじゃないかって!？」

「うー!…(委員長もぎりぎりだったくせに…)」

「ちょっと、ルナちゃんそれは言い過ぎじゃない？」

「何よ？何か文句でも？」

「大有りだよ…あの時、ルナちゃんが皆に時間を教えていればキザマロ君も間に合ってたんじゃない？」

「そ、それは…」

ルナは、ツカサに軽めの説教を喰らうと下を向いてしまった

「ルナちゃん、ちゃんと謝った方がいいんじゃない？」

「……そうね キザマロ、ごめんなさい」

「え？あ、いえいえ、もう気にしないで下さい」

キザマロが答えると、ルナは「ありがと」と、誰にも聞こえない様に呟いた

そして、この「キザマロごめんなさい」イベントは終了すると、先生が教室に入って来た

「そろそろ、一時間目始めるぞー」

皆は「はい」と行って自分の席に向かった

勿論、中には「めんどくせえ」とか「早いよー」とか言ってる人も
いる

そして、スバルが席に座ろうとすると先生が「あ、星河は職員室に
行ってくれ」と言った

「え？（僕、何かしたっけ？）何ですか？」

「あー、行けば分かるさ」

「…分かりました」

そう行って、スバルは教室からでて職員室に向かった

「廊下」

「僕、何かしたっけな？」

『したんじゃねえか？』

「うーん、考えても考えても分からないよ……」

『じゃあ、逃げちまつか？』

「冗談は止めてよ、第一逃げたら明日が怖いよ…（委員長とかが）」

『っへ、なら覚悟を決めてさっさと職員室に行きやがれ！』

「そうだね…はああ、気が重いよ」

『危なくなったら、電波変換して逃げちまったらいいじゃねえか』

「うーん…まあ、電波変換は最終手段って言うことで」

『ハハハ、当たり前だぜ』

二人は、楽しい？会話をしながら職員室に向かった

「?????」

「いや…暇だ」

シュックは、バルアナに言われた通りに部屋に戻って200年前に行く準備をした

そして、準備が終わったため今はとても暇だった

「バルアナ様、まだだろうか」

その時、部屋のドアが開いた

「よお！」

「…」

「暗いじゃねえか！今から200年前に行こうってやつがそんな暗い顔でいいのか!？」

「…お前が、明るい過ぎるのだ グライよ」

「そつか？結構普通なんだけど」

「お前の普通は、少しおかしいのだ」

「ハハハ、そう言うなって…生きて帰って来いよ」

「ふん！お前に言われんでもそのつもりだ それと、お前が暗い顔で言つと何だか腹が立つ」

「はあ！？何だよそれ!？」

「うるさい、黙れ！」

「いやいや、お前の性だろ！」

「そうだな」

「謝れや！」

「お前に謝るなら、自害した方がましだ！」

「何だよそれ！結構酷いだろ！」

「うるさい！」

「何だとー！」

「黙れ、黙れ！」

「黙れって言われたからうるさくしてやる！」

「お前は子供か！」

「うるさい！」

「立場が逆転してるではないか！」

「関係ないね！」

「あるだろ！」

「ない！」

「ある！」

「ない！」

.....

そして、このやり取りは後15分は続いたそうだ

軽い説教（後書き）

はい、新キャラです！

「これから、よろしく！」

感想、待ってます！

鬼じっし、開始？（前書き）

題名は、読めばきつと分かります！

鬼ごっこ、開始？

―職員室―

「失礼します、6年A組の星河です」

「おお、星河君やつと来てくれたか！ こつちだ」

スバルは、教頭先生に呼ばれ職員室の奥にある校長室に入った

校長室には校長先生とマスコミみたいな人が5人ぐらいいた

「おお、星河君 早速だがこの人達のインタビューを受けてくれ」

「ええ！？嫌です！」

スバルは元々目立つのが嫌いなのでインタビューなどは絶対に嫌だった

「まあまあ、そう言わずに」

校長がそう言うと、スバルはウォーロックにしか聞こえない声で「

…ウォーロック、行くよ」と呟いた

勿論、ウォーロックもスバルにしか聞こえない声で『おつ』と返事をした

「星河君？」

「トランスコード、シューティング・スター・ロックマン！」

スバルはロックマンに電波変換をした

勿論、他の人達は電波変換の瞬間は初めて見たので驚きを隠せなかった

なので、マスコミ達は「ロックマンだ！」などと言っていた

「星河君！受けてくれるんだな！」

「すみません、校長…失礼します！」

「え！？ちよっ、待ちなさい！」

しかし、校長の声はロックマンには届かず、ロックマンはウェーブロードに向かった

ーウエーブロードー

「ふう」

『世界のヒーローは大変だな』

「もう、人事だと思って」

『人事だしな』

「ロック、酷いよ…」

『ハハハ、悪かったよ』

「本当に思ってる？」

『おう、勿論だぜ』

「じゃあ、仕方ないから許して上げるよ」

『おう、サンキューだぜ！』

「しかし、これからどうしようか…」

スバルが、これからの事を考えていると、遠くの方から「待てー、ロックマン！」という殺気だった声が聞こえた

「オックス・ファイア!？」

「待てー、俺の牛丼ー!」

「?…意味が分からないよ」

ロックマンが、そう言うとオックス・ファイアは立ち止まってロックマン今の状況を説明し始めた

「あんな、校長先生が「星河スバルを捕まえた人には、叶えられる願いなら、その人の願い事を叶える」って言ったんだよ…だから、俺はお前を捕まえて毎日給食を牛丼にして貰うんだぜ!だから、俺に捕まれ、ロックマン!」

「嫌だよ、断じて断るよ!」

「それなら、力ずくだぜ!」

「ごめん、オックス・ファイア…僕は逃げるよ!」

「あ!…待ちやがれ!」

「嫌だよ!」

そう言って、ロックマンは猛スピードでウェーブロードを逃げはじめた

勿論、オックス・ファイアはあまりスピードがないのでロッキーマンは楽に逃げれた

鬼ごっこ、開始？（後書き）

何か変な展開ですね（汗

感想、待ってます！

鬼じっくじっくそ (前書き)

一回目ですな、鬼じっくじっく (笑)

鬼ごっこっ〜っ〜

「ふう、ここまで来れば大丈夫だよね」

『さあな』

「しかし、校長先生もこんなに大袈裟にしなくてもいいのに」

『それだけ、インタビューを受けさせたいんだろ？』

「そうかもね」

二人が会話をしていると、遠くの方からピンク色でギターを持っている電波体がロックマンに近づいて来た

「あれって、ハープ・ノートだよね？」

『そうだろうな』

「でも、何であんなに真剣な顔をしてるんだろっ？」

「私のロックマン、待って！」

「…え？私のロックマン！？もしかして」

そう言っつて、ロックマンは素早くその場から逃げはじめた

しかし、ハーブ・ノートはオックス・ファイアより断然早いのでそう簡単には逃げられなかった

「待てー、私のロックマン！」

「僕は、誰の物でもない！」

「いや、私がロックマンを捕まえたらロックマンは私の物だよ！」

「やっぱり、校長先生の仕業か！」

ロックマンが自分の推測が正しかった事が分かると、今まで以上に必死で逃げた

「こうなったら…マシンガンストリング！」

ハーブ・ノートがそう叫ぶと、手に持ったギターから五本の弦がロックマンに向かって放たれた

「嘘でしょ!?!」

「当たれ!?!」

ハーブ・ノートが放った五本の弦は、上手くロックマンに当たり、
ロックマンの自由を奪った

ハーブ・ノートは、そのままロックマンを引きずり学校に向かった

「痛い！痛いってミソラちゃん！」

「我慢して！（フッフ、もう少しでロックマンが私の物に…）」

「仕方がないか…ロック、やるよ！」

『マジかよ！？…ま、いっちょやってやるか！』

「うん…フォースチェンジ！サイクロンフォース！」

ロックマンは、引きずられながらもサイクロンフォースへと変身し
た

「え！？、何その姿！？」

「はあああああ！風神、カマイタチ！」

そう言うと、ロックマンは回りの風や空気を使ってカマイタチを無
数に作り、作ったカマイタチでマシンガンストリングの弦を全て斬

った

「ずるいよ、ロックマン！」

「そんなの、関係ない！サイクロンダッシュ！」

ロックマンは、風の力を使って今まで以上に早く逃げた

そのため、ハープ・ノートはロックマンに追いつけなかった

「くっそ、ロックマン、必ず私の物にしてあげる！」

『…ミソラ、ちょっと思ったんだけどね』

「何、ハープ？」

『何でそんなにロックマンを自分の物にしたいの？』

「だって…」

『だって？』

「…もし、誰かにロックマンが捕まって、ロックマンを捕まえた人の願いが「ロックマンと私が付き合う」だったらって思っちゃって…」

『(カワイイ嫉妬ね) そうね、ならロックマンを追い掛けましょ
うか』

「うん！」

そう言って、ハープ・ノートはロックマンを追い掛けた

ーベイサイドシティー

「ふう、ここまで来たらさすがに大丈夫だろう」

『ああ、そつだな』

「しかし、何でミソラちゃんが校長先生が言った内容を知っている
んだろう?」

『俺に聞くなよ!』

「そつだね」

二人は、この時知らなかった

ロックマンが、本当の敵に近づいてしまった事に……

「?????」

「……まだか!？」

あれから一日たったが、まだ命令は来なかった

「これなら、まだいろいろな国を散策していた方がまだ良かったです……」

シュツクは、少し涙目になりながら呟いた

鬼じっつじっつ〜そ〜 (後書き)

今日、左足の裏に水ぶくれが出来て結構痛いです (泣)

感想、待ってます！

鬼じっぴんぽん (前書き)

まさかの三回目 (> | <)

それと、今回は少し長いです

鬼じっぴ〜

「しかし、今日は疲れるね」

『そうだな』

ロックマンは、ベイサイドシティのウェーブロードをポツポツと歩いていた

「しかし、ミソラちゃんは学校を休んでるからまだ分かるけど、ゴン太は学校どうしたんだろ？」

『さあな、聞いてみたらどうだ？』

「そうだね…じゃあ、ゴン太に電話しようか」

ロックマンがゴン太に電話をしようとする、後ろから「その必要はないよ」と聞こえた

ロックマンは、少し驚いて後ろに振り向いた

「あ、ツカサ君とヒカル君」

「やあ、ロックマン」

『早速だが、俺達に捕まってもらうぜ!』

「え!?!それはちょっとマズイかな」

そう言つて、ロックマンは少し距離をとつた

「いやいや、ヒカル ちょっと待つてよ」

『はあ?何でだよ!?!さつさと捕まえようぜ!』

「僕はロックマンに話があるんだよ」

『うち!分かつたよ』

ヒカルは、とても不機嫌そうに答えた

ヒカルが、少し後ろに下がるとツカサが話を始めた

「ロックマン、君を捕まえると校長が願いを叶えてくれるのは知つてるよね?」

「うん」

「それでね、それを聞いた全生徒が学校を飛び出して君を捕まえに行つたんだ」

「え！？ 全生徒（皆、どれだけ願いを叶えたいんだよ…）」

「それで、今日の授業は…」

「授業は…もしかして」

ロックマンが、そう言つとツカサはロックマンに向かって走り出し「そうだよ、今日の授業は「ロックマンを捕まえる！」だよ！」と言つた

「嘘でしょ！？」

「エレキソード！」

「つく、バトルカードソード！」

ツカサは、ロックマンとの距離を一気に詰めて攻撃を放つたがロックマンはその攻撃をギリギリ防いだ

「さすがだね、ロックマン でも！」

『俺がいることを忘れるなよ！』

「！？」

ヒカルは既にロックマンの後ろに回り込んでいるので、ヒカルの目の前にはがら空きのロックマンがいた

『ロケットナックル!』

勿論、ロックマンに防ぐ暇は無くヒカルの攻撃はロックマンに直撃した

「がは!」

「はああああ!」

「しまっー」

ロックマンは、ヒカルからの攻撃を受けたせいでツカサの攻撃を防いでいたソードへの力が緩くなってしまい、ツカサはロックマンのソードを折った

「っく!」

ロックマンは、攻撃をギリギリかわしたががすり傷を負ってしまった

「はあはあ、さすがだね、ジェミニ・スパーク」

「ありがとう、ロックマン」

『当たり前だぜ!』

「さてっと…じゃあそろそろ、本気で行こうか、ロック!」

『当たり前だぜ!』

『何の負け惜しみだよ!』

「……………」

「はああああ、フォースチェンジ、サイクロンフォース!」

ロックマンが、そう言うと当たりに風が舞い、ロックマンはサイクロンフォースへと変身した

『何だよ、その姿!?!』

「ロックマン また強くなったんだね」

「まあね じゃあ、行くよ!サイクロンスラッシュ!」

ロックマンは、素早くジェミニ・スパークとの距離を詰めた

「しまっー」

『早い!』

「はああああ!」

「『ぐわああああ!』」

ロックマンは、一気にジェミニ・スパークを斬った

だ
ジェミニ・スパークは、攻撃を喰らったせいで少し後ろに吹っ飛ん

「つく!」

『ツカサ、行くぞ!』

「うん!」

『スバル、来るぞ!』

「こっちだって、やるよ!」

『マジか!?!』

「うん でも、威力は下げるよ?」

『だろっな』

「『ジエミニ・サンダー!』」

「バトルカード、SFB!」

ジエミニ・スパークは、今持てる最強の技を、ロックマンは、今の姿で最強（威力は4分の3ぐらい）の技を放った

二人の技がぶつかり合うと、SFBはジエミニ・サンダーを破りジエミニ・スパークに直撃した

「『ぐはああああ!』」

「これからだよ!」

そう言うと、ロックマンは竜巻を上に向け、竜巻に閉じ込められたジエミニ・スパークを数回斬った後、ロックマンは竜巻の上空に向かってジャンプした

『ツカサ、上だ!』

「え!?!」

「遅いよ！はああああ、サイクロントルネード……！」

「ヒカル！」

『おう！』

「『ジエミニ・サンダー！』」

ジエミニ・スパークは、力を振り絞ってロックマンが放った二発目の竜巻に対して、二発目のジエミニサンダーを放った

しかし、ジエミニ・サンダーは竜巻の威力を少し下げただけで、あっさりと敗れた

そして、ロックマンが放った竜巻は先に放った竜巻とぶつかり、煙りをだしながら爆発を起こした

煙りが消えると、そこにはボロボロになったジエミニ・スパークとサイクロンフォースを解いたロックマンがいた

「つく……」

『つくそー！』

「……ごめん、少しやり過ぎたよ」

「本当だよ……」

『あれはズリイだろ…』

「大丈夫 じゃないよね？」

「『当たり前だよ』」

ジェミニ・スパークは、そう言うと気絶した

「…やり過ぎた」

『当たり前だろ！風神、カマイタチで良かっただろ！』

「あ！…そうだね」

『お前、忘れてただろ』

「え！？そんなごどないよ」

『嘘つけ！言った言葉、全部に濁点がついてるぞ…！』

「え！？ すいません」

『まあ、俺はいいんだが』

そう言って、ウォーロックは気絶したジェミニ・スパークを見た

「…とりあえず、病院だね」

『そうだな』

ロックマンは、そう言って二人を何とか担ぎ、病院に向かった

―結構離れたベイサイドシティのウェーブロード―

「ん？この強い電波は…ロックマンか！ようやく見つけた！」

サイブは、目を輝かせて言うと強い電波を感じた場所に向かって走り出した

鬼じっぴんぽんぽん (後書き)

今回は、鬼じっぴんぽんぽんより戦闘でしたね (^-^;))

感想、待ってます！

鬼じっじっではなく戦闘(前書き)

正直、題名の鬼じっじっはいらないですね) じゃあ付けるな!

鬼じっじ？ではなく戦闘

「ねえ、ロック？」

『何だよ？』

「二人を運ぶの手伝ってよー」

『嫌だ！』

「んな！、ロックのケチ！」

『うつせー！お前が、サイクロントルネードを使うからだろ！？』

「うー！…分かったよ…」

そう言うと、ロックマンは頑張って二人を担いで病院に向かった

途中、いきなりツカサの電波変換が解除されて一人になったためロックマンの負担が軽くなった

「あれが、ベイサイドシティの病院…」

『…デケェな』

「うん でかいね」

ロックマンが見たのは、コダマ小学校の二回りぐらいでかい病院だった

「あと少し」

『ほら、頑張れ頑張れ』

「人事だと思つて」

『へん！人ご…スバル！構えろ！』

「へ？」

『つく！伏せる！』

「え？」

ロックマンは、ウォーロックに言われた通りその場に伏せた

数秒後、ロックマンの頭上を一本の矢が通り過ぎ、町のビルに当たつてそのビルは崩れ落ちた

ロックマンは少し唾然とし、直ぐに後ろに振り向いた

「っふ、よく避けたな」

「君は、誰だ!？」

「俺は、サイブだ」

「…ビックバンの手先か!」

「な!なぜビックバンを知っている!？」

「いろいろあるんだよ! 君達は一体何が目的なんだ!？」

「…まあ、今から死ぬやつ的事だから、教えてやってもいいか俺が知っているのはお前の抹殺と…」

「僕の抹殺と？」

「…後は、僕を倒してから聞くんだな!」

そう言うと、サイブはどこからか弓と矢を取り出した

「サイブ、ちょっと待って」

「いいだろう」

ロックマンは、近くの公園に行きツカサをベンチに寝かせた

ツカサを寝かせると、ロックマンはサイブが待つウェーブロードに

戻ってきた

「待ってくれて、ありがとう」

「ふん、友への最後の言葉だ 待ってやるのは当然だ」

「最後じゃあない…それに、あまり時間を掛けられない…だから！」

「だから？」

「一気に終わらせる！フォースチェンジ、サイクロンフォース！」

そう叫ぶと、ロックマンはサイクロンフォースへと変身した

「ふん、サイクロンフォースか 最初に言っただけでやる」

「何を？」

「お前は、僕に勝てない！」

「勝つんだ！」

「それは無理だ、ロックマン」

「何！？」

「その姿には、弱点があるんだよ」

「……………」

「だから、僕が勝って君は負けるんだよ」

「そんなの、やってみなくちゃ分からないよ！」

「じゃあ、やってやるう」

「当たり前だよ！行くよ！」

「無謀なやつめ…来い！」

こうして、二人の戦いの火蓋は切って落とされた

鬼じつじつ？ではなく戦闘（後書き）

はい、サイブが言った通り、サイクロンフォースには弱点があります

まあ、無理矢理の弱点ですが…

感想、待ってます！

サイクロンの弱点(前書き)

今回は、サイクロンの弱点を徹底的に攻めさせました！(多分)

弱点は、読んでくれたら分かります！

分からなかったら、メール下さいね！

サイクロンの弱点

「サイクロンダッシュ！」

ロックマンは、サイブより先に動きサイブとの距離を縮めようとした

「残念だけど、君のスピードでは僕には追いつけないよ」

「!?!」

サイブはそう言ってサイクロンフォースのスピードと同じぐらいのスピードでその場を離れた

「つく!これじゃあ、近づけない!」

「そう、そして僕はこの距離でも攻撃が出来る!」

そう言って、サイブは弓に矢をセットした

「しまっ——」

ロックマンは、サイブが攻撃してくると気付き素早くその場離れようとした

しかし、サイブは「遅い！マツハアロー！」と言って、矢をロックマンに向かって放った

その矢は、ロックマンの移動スピードより早かったためロックマンに直撃した

直撃したため、ロックマンは少しよろめいた

「つく、でもこの威力なら、まだまだ行ける！」

「だろうね　でもこれだけじゃ終わらないんだよ！」

「何！？」

ロックマンが、サイブの方に視線をやるとそこには弓に矢をセットした状態のサイブがいた

「マツハアロー！」

「ぐは！」

「それから、アイスアロー！」

サイブは、マツハアローをロックマンに当てると直ぐに冷気を帯びた矢をロックマンに向かって放った

アイスアローのスピードは、まあまあ早い物だったがサイクロンフォースのロックマンなら普通に避けれるスピードだった

しかし、ロックマンはマツハアローを受けてよろめいていたのでアイスアローに気付くのが遅れ、アイスアローはロックマンに直撃した
アイスアローが直撃した左手は、見事に凍りついた

「がは！」

「ハツハツハ、ブザマだねロックマン」

「つく…まだまだ！バトルカード、SFB！」

ロックマンは、サイクロンフォースの唯一の遠距離技のサイクロントルネードの一発目をサイブに向かって放った

「残念、その技は君と同じぐらいのスピードの僕には効かないよ」
サイブは、そう言って竜巻に飲み込まれた

ロックマンは、サイブが竜巻に入った事を確認すると竜巻を縦向きにした

「はあああああ！」

ロックマンは、凍った左手庇いながら声を上げて竜巻に近づいた

普通なら、このまま竜巻を斬って上からさらに竜巻を当てて爆発させて終わるはずだった

しかし、サイブはロックマンが竜巻を斬る直前に竜巻から出て来た

「何!？」

「残念だったね、この技は何回か見ていたからね それに君と同じスピードだから、脱出方法さえ分かっていたら、君が竜巻を斬る前ぐらいには出れるしね」

「つく…でも、まだ諦めない！」

「うーん、ちょっとしつこいか じゃあ、そろそろさようならだね…ブレイクアロー！」

「…エアロシールド！」

ロックマンは、もう逃げる力が無くなったため新たな防御技を出した

ロックマンの新たな防御技は、風が何十にも重なってロックマンを包み込んだ

エアロシールドは、サイブのブレイクアローを弾き返した

「へえ、やるね（あの矢、一応バリアとか貫通するんだけどね……）
…でも、ブレイクアロー×5！」

「つく、エアロシールド！」

サイブはブレイクアローを5発連続で放った

ロックマンは、またエアロシールドを使い身を守ろうとした

「無駄だよ！、1発だけなら防げたかも知れないけど、5発はきつと無理だよ！」

「はああああ！」

「無駄だつて言ってるだろ？」

「無駄じゃない！」

「…じゃあ、今何本弾いた？」

「3本だよ、後2本だ！」

「…やってみ」

「言われなくても…はあああ！」

ロックマンは、声を上げて力を入れ後2本の矢を弾き返そうとした

しかし、ロックマンはこの時「ビキ」と言う音が聞こえた

そして、エアロシールドは4本目を弾いた瞬間に砕け散った

ロックマンは、エアロシールドが砕け散ったせいで5本目のブレイクアローをもろに喰らった

「がはあああ！」

ロックマンは、ブレイクアローを喰らいサイクロンフォースが解かれその場に倒れた

「ついに、ロックマンも終わりかな…」

『おい、スバル！しっかりしろ！』

「…（まだ負けられないんだ！それに、ツカサ君を病院に送らないといけないんだ…）」

ロッキーマンは、そう思うと気を失った

サイクロンの弱点(後書き)

分かりましたよね？ (^ - ^ ;

なんか、サイブが強すぎるような…

感想、待ってます！

弱点解説(前書き)

昨日、完璧に寝てました。・・・

すみません m ((m

弱点解説

「じゃあ、殺すか」

そう言っつて、サイブは弓を引きながら確実にロックマンを殺すためにロックマンに近付いた

『つくそ、スバルは殺させねえ!』

「ああ、そう言えば君が残ってたね」

『うるせー!おら、ビーストフアング!』

ウォーロックは、近付いて来たサイブに向かって唯一の技のビーストフアングを放った

しかし、勿論ながらサイブは悠々とかわした

「そんな技当たらないよ」

『つく』

「…そうだな、君も死ぬんだから冥土の土産に教えて上げるよ」

『あん、何をだよ！？それに俺は死なねえ！』

「きつと死ぬよ 教えるのは、サイクロンの弱点だよ」

『何！？（ちよつと気になるぜ…）』

ウォーロックがそう言うと、サイブは弓を下に向けて話を始めた

「まず、サイクロンは基本的に近距離戦向きの姿だ」

（確かに、そうだな…）

「だから、普通なら遠距離戦には弱いはずだけど、そこであるスピードだ」

『？？意味が分かんねえ！』

「まあ聞け あのスピードのおかげで、相手が遠距離戦向きなやつでも近距離戦に無理矢理連れ込んでいるんだ…だから、だから、今までは、遠距離戦だろうと関係なかったんだ」

『…そうか！』

「分かったようだね…そう、ならサイクロンの同じスピードの奴が遠距離戦で戦ったら、勿論勝つのは遠距離戦の方…つまり、サイクロンの弱点は…」

『 同じスピードで遠距離戦の奴には弱い』

「その通り 何か質問は？」

サイブは、笑いながらウォーロックに言った

『でも、サイクロンにも遠距離技があるじゃねえか！』

「ああ、あのSFBの事ね」

『そつだ！』

「あれは、必殺技みたいな物だろ？あれを何発も撃てる訳がないだろ」

『うー』

「それに、あれはサイクロンと同じスピードなら簡単に避けられるしね」

『…（確か、コイツは簡単に避けたな）』

「じゃあ、質問タイム終了ね」

そう言って、サイブは弓をウォーロックに向けた

「さようなら、ウォーロック」

『つく!』

「ブレイクアロー!」

サイブは、ウォーロックに向かってブレイクアローを放った

しかし、どこからか「『ジェミニ・サンダー!』」と言う声が聞こえ、その電撃はブレイクアローを撃ち落とした

「誰だ!?!」

『今の技…もしかして!』

「そのもしかしてだよ」

そう言って、ウォーロックの前にジェミニ・スパークが現れた

「お前らは!?!」

「ジェミニ・スパーク参上 ってね」

『ウォーロック、早くロックマンのところに行け』

『お、おっ』

そう言つと、ウォーロックはロックマンのところに向かった

「な、待て!」

『待ちやがれ!』

「こつから先には行かせない」

「なら、お前らを殺すまでだ!」

『っへ! やれるもんなら』

「やってみてよ!」

こうして、サイブとジェミニ・スパークとの戦いが始まるうとしていた

弱点解説(後書き)

ちゃんと、説明できましたかね？

感想、待ってます！

新たなフォース(前書き)

更新、遅れました

すみません！

新たなフォース

「行くよ、ヒカル！」

『勿論だぜ！』

「さっさと片付けてやるよ」

そう、二人の戦いが始まるうとした、その後ろから「待って！」と声が聞こえた

「え！？」

ツカサが驚いて後ろを振り向くと、そこには先程まで気絶していたロックマンが立ち上がっていた

「大丈夫なの、ロックマン？」

「うん、それに僕よりツカサ君の方が危ないでしょ？」

「…ばれてた？」

「うん」

「じゃあ、後は頼むよ」

ツカサは、そう言ってロックマンにのしかかるように倒れた

「ヒカル君の方も、大丈夫なの？」

『当たり前だ！ツカサとは鍛え方が違うんだよ！』

「そうなんだ　じゃあ、ツカサ君を頼むよ」

『んな！俺も戦う決まってるだろ！』

「…こいつは、僕がやるよ」

『（何か訳ありか？）　じゃあねえな』

そう言って、ヒカルはロックマンからツカサを預かってロックマンの後ろの方に退いた

「ハッハッハ、またやられに来たのかい？」

「そう何度もやられないよ」

「フン、でも、サイクロンはもう通じないし…まさかノーマルフォームでやるのかい？」

「いや、まだあるよ」

「何？」

「はあああああ！フォースチェンジ！」

ロックマンがそう叫ぶと、灰色の光がロックマンを包み込み、灰色の球体となった

「サイクロン じゃない？」

サイブがそう呟くと、ロックマンは灰色の球体に銃で穴を開けて、球体から出て来た

「フォースチェンジ、パニッシャーフォース！」

出て来たロックマンの姿は、体はに灰色、バイザーの色は白、髪の毛は銀、腰には二個のホルダーの中に二個の銃が入っている

バスターの変わりには、スナイパーが着いている

スナイパーは、バスター程早く、連射は出来ないが命中率が99.9%と言う高い性能を持っている

「そんな姿、聞いてない！」

『俺もだ、スバル！』

ちなみに、ウォーロックは今までどつりに着いている

「実はね…」

そう言うと、ロックマンはどうやってパニッシャーフォースを手に入れたかを説明し始めた

ーロックマンが気絶してすぐの事ー

(僕は、このまま死ぬのかな…)

…今死ぬのは少しおかしいだろ？

(！？ この声は、アーク！)

…よ！ で、今死ぬのはおかしいだろ？

(でも…)

…お前、友達を守るんじゃないのか？今死んだらお前の友達は
どうなる！？

(！？ そうだ、僕は友達を守る！)

…そうだ！ 俺の力を分けてやるから、勝てよ！

(ありがとう、アーク！)

…っへ、友達なら当たり前さ

(じゃあ、行って来るよ)

…おう、頑張れよ！

(うん)

— 現在 —

「つてな訳さ」

『なるほどな』

「まあ、君を殺すから関係ないけどさ…じゃあそろそろ死のうよ
！」

「僕はまだ死なない！…僕は君を倒す！」

「倒す？…ッフ、面白い やれるものならやってみろ！」

「言われなくても！」

こうして、ロックマンとサイブによる二度の戦いは幕を開けた

新たなフォース（後書き）

無理矢理こじつけた感じが丸出しだ…

感想、待ってます！

PFB(前書き)

題名は、ネタバレです、すいませんm | | m

ちなみに、更新は夜中です) . . . (

「ブレイクアロー！」

サイブは、ロックマンに向かってすぐさまブレイクアローを放った。しかし、ロックマンは慌てずに右手をスナイパーに変え左手をスナイパーに沿えると、その銃口をブレイクアローに向けて「バスタースナイプ！」と叫びエネルギー弾を放った。

バスタースナイプはブレイクアローを撃ち抜き、サイブに襲い掛かった。

「何!？」

「くらえ！」

「つく!間に合うか?」

そう言うと、サイブはロックマンのサイクロンフォースと同じぐらいのスピードで左側に向かって逃げようとした。

だが、バスタースナイプはサイブの右足をかすった。

サイブは、かすった足の方に視線を下げた。

「つち!かすったか」

「まだだ!」

「何!?!」

そう言うと、サイブはロックマンの方に視線を向けた

そこには、スナイパーを向けたロックマンがいた

「今度は外さない!」

「なら、マツハアロー!」

そう言って、サイブはロックマンにマツハアローを放った

しかし、ロックマンはそれを読んでいたかのようにバスターズナイブを放った

「な!?!」

「甘いよ!」

「つくそ!」

勿論、バスターズナイフはマツハアローを撃ち破りサイブに襲い掛かった

しかし、サイブも撃ち破られるが分かっていたかのようにその場を離れた

サイブは、読んでいたかのようにその場を避けたおかげで、かすり傷を負わなかった

しかし、ロックマンは2回もサイブの矢を撃ち破ったため元々持っていた推測が確信に変わった

「やっぱり、君にも弱点があるね」

「な！？ そんなもの、俺にはない！」

「じゃあ、教えて上げるよ、君の弱点を……」

「うるさい！ アイスアロー！」

サイブは、ロックマンに向かってアイスアローを一気に2発放った

ロックマンは、右手のスナイパーを戻して腰にある2個のホルダーから、銃を2丁取り出した

そして、その2丁の銃をアイスアローに向けた

「アクアショット!」

ロックマンがそう言うと、2丁の銃からは青色のエネルギー弾が2発のアイスアローに向かって放たれた

そして、アクアショットとアイスアローは相殺した

「つくそ!」

「…君の弱点は、一発一発の威力が弱い事だよ」

「分かってるよ、そんな事!でも、そんな事を嘆いたって威力は変わらない!だから!」

「!?!」

サイブは、弓を空に向けて「サウザントアロー!」と叫び放った

「どこを狙っているんだ?」

「今に分かるさ くらいな、ロックマン!」

サイブがそう言うと、ロックマンの上空から、ロックマンに向かって何千本もの矢が降り注がれた

「死ね、ロックマン！」

「死なないさ！」

「何？」

そう言うと、ロックマンは顔と両手を空に向け「マシンガンスプレッド！」と叫び2丁の銃から無数の弾が放たれた

マシンガンスプレッドは、連射系の技だが当たると周りにも誘爆する仕組みなので、サウザントアローはロックマンが放ったマシンガンスプレッドにより全て撃ち落とられた

「何！？…つくそ！」

「…これで終わりだよ…バトルカード、パニッシャーフォーセピックバン PFB」

そう言うと、ロックマンは2丁の銃をショットガンのような形にした1丁の銃に変形させた

「つく、なら…ブラッティアロー…！」

「シューティングオーバーレーザー！」

ロックマンは今の姿の最強の技の青い色をしたレーザーを、サイブは自身の最強の技の周り赤黒いオーラを纏った矢を放った

「うおおおあ！」

「はああああ！」

二人の技がぶつかると、ロックマンが放ったシューティングオーバーレーザーはサイブのブラッティアローを破って、サイブに直撃した

「ぐわああああ！」

サイブは、シューティングオーバーレーザーを喰らうと、すぐに光となって空に舞い上がった

「はあはあ 倒した…」

『そつだな』

「はあはあ、さすがに疲れたよ」

そう言うと、ロックマンはパニッシャーフォースを解きその場に倒れた

『げ！スバル、おいスバル！』

しかし、ロックマンはウォーロックの呼びかけには応じなかった

PFB(後書き)

最近、更新速度が低下しています)・o・:・(

すいませんm(_ _) m

感想、待ってます！

鬼ごっこ終了(前書き)

まだ鬼ごっこは続いてました(笑)

鬼ごっこ終了

ーベイサイドシティ・病院ー

「うーん…」

スバルは目覚めると、自分が今いる部屋は見覚えのない部屋だった

「…ここは、どこ？」

スバルは、そう呟くと体を起こした

(そうだ、ロックに聞こう…ってあれ？ロックがない？)

スバルは、ウォーロックに今の状況を聞くためハンターV.Gを手にとったがそこにはウォーロックの姿がなかった

(うーん 多分だけど、ここ病院だよね？でも、何で病院？…)

スバルがそう考えていると、病室の戸がガラガラと音を出して開い

た

戸を開いたのは、ミソラだった

「あ、スバル君起きたんだ！」

「うん、そうだよ」

「良かったー！私心配したよー！」

そう言ってミソラはスバルに抱き着いた

「／／／ちょっと、ミソラちゃん／／／」

「／／／えへへ、いいでしょ／／／」

ミソラは、上目遣いで言った

スバルは、上目遣いで見られると「／／／いいけどさ／／／」と言った

「／／／やった！スバル君、捕まえた　／／／」

「？…ミソラちゃん、何を言ってる…あー！も、もしかして」

「これで、スバル君は私のスバル君だよ」

「しまったああああ！…忘れてた！」

そう、元々スバルはミソラ達から逃げるためにベイサイドシティまで来たのだ

「！？ いきなり大声出さないで！」

「え？、あ、ゴメン」

「分かればいいよ」

そう言って、ミソラはさっきより力強く抱き着いた

「そういえば、今何時？」

「今は、4時だよ」

「って事は、2時間ぐらい寝てたのか…」

「そうだよ…にしてもビックリしたな」

「何が？」

「だってさ、スバル君を追い掛けてたら遠くの方で凄い電波が残っていて、それに近付いたらそこには…」

「そこには？」

「ロックマンとツカサ君が、気絶してるんだもん」

「え！？、僕気絶してたんだ……」

「そつだよ、だから私とロック君とヒカル君で二人を運んだんだよ」

「そうなんだ、ありがとうミソラちゃん」

「どういたしまして」

二人は、この後たわいのない話をした

――1時間後――

「そろそろ、行こっか？」

「いってらっしゃい」

「何言ってるの、スバル君？」

「へ？…もしかして」

「そつだよ、学校に行くのよ」

「で、でも入院してるから今日は…」

「スバル君、残念だけど もう退院出来るんだよ？」

「へ？…な、何で？」

「だって、元々気絶しただけ何だから起きたらもう退院でしょ？」

「…でも、ロックが『俺がどうした？』」

スバルが、ウォーロックがいないからどうやって行くの？って聞こうとした矢先、ウォーロックはタイミング悪く帰って来た

「……………」

「行こっか？」

「…はい」

この後、二人は電波変換して学校に向かった

「……………」

「遅い！遅すぎる！」

シュツクは、あれからもずっと待っていたのだがバルアナからの呼び掛けが全くなかった

「まさか、バルアナ様忘れてるんじゃない……」

シュツクが、そう言った直後だった

「シュツク、こっちに来てくれ」

シュツクは、この呼びかけを聞くと素早くバルアナがいる部屋に向かった

鬼ごっこ終了(後書き)

今週から、テスト一週間前に入るんで更新速度が落ちます(- 0 - ;)

感想、待ってます！

取材（前書き）

今回は、グダグダです（-o-;）

取材

―コダマ小学校―

「着いたね」

「はああ…気が重いなあ」

「行こっか」

「（嫌だああああ） うん…」

二人は、電波変換を解いて校長室に向かった

ちなみに、現在PM4：30分

校長室を逃げ出したのはAM8：45分

―校長室―

「失礼しま〜す スバル君を連行してきました〜」

「おお！響君、ありがとう！」

（ミソラちゃん、連行って…）

校長は、感激の顔をしてミソラを出迎えた

「早速だが、星河君」

「はい…（とても気が重い！）」

「取材を受けてくれたまえ」

「スバル君、早く受けて帰ろう」

「…分かったよ、ミソラちゃん 校長先生、取材を受けます」

「おお、そうか！では、早速こっちに来てくれ」

そう言うと、校長とスバルはミソラを置いて校長室の奥にある部屋に向かった

その部屋に入ると、取材陣が4人いた…

（良かった、1人は帰ったみたいだ）

スバルが、取材陣が1人減った事に少し喜んでいた

しかし、スバルがそう思うとスバルがいる部屋の戸が開いた

「すみません、ちょっとトイレに行っていました まだ取材は始まってませんよね？」

「始まってませんよ」

「良かった、間に合いました」

入って来た取材陣が、元々いた取材陣と話している間スバルは（地獄に墮とされた気分だよ）と思っていた

「それでは、そろそろ取材を始めますね」

「どうぞ」

こうして、スバルにちとつての地獄が始まった

「まず、星河君は世界を救ったロックマンだよね？」

「はい」

「どつやって、ロックマンに変身しているの？」

「それはちょっと」

「秘密かい？」

「はい、すみません」

「気にしないでくれ。じゃあ、次の質問：君は地球を3度も救った訳だが、恐くはなかったのかい？」

「恐かったです」

「じゃあ、どうして逃げなかったんだい？」

「それは…大切な友達を守るために 大切な人を守るには逃げる訳には行かなかったんです」

「なるほどね…その大切な人って言うのは、あの国民的アイドルの響ミソラちゃんだね？」

「／／／はい／／／」

「ハハハ、照れなくていいよ。本人も会見で言ってたしね」

「そうでしたね」

「あれは、本当だったんだね」

「え？あ、はい」

「お熱いんだね」

「////////」

スバルは、取材陣達の質問に顔を赤くして下を向いた

「じゃあ、最後の質問だ」

「はい」

「もし、また地球に危機が迫ったら 君はまた戦うのかい？」

取材陣は、今までとは違う顔付きでスバルに聞いた

「はい、大切な人達を守るために戦います 命をかけて」

スバルはこの質問を聞くと、顔付きを今までとは違い真剣な顔付きで答えた

取材陣は、スバルの「命をかけて」の部分に衝撃を受けた

「そうか…星河君、今日はありがとう」

「いいえ では、僕はこれで」

そう言って、スバルはその部屋を出た

「…あんな子供が命をかけているのに、私達は何も出来ないのか…」

この日、取材陣と校長は自分達の無力感を感じた

「?????」

「待たせたな、シユツクよ」

「いえ、気にしないで下さい」

「そうか では、今から200年前の世界に行ってくれ」

「は！ しかし、どうやって行けば」

「それは、あのサーバーにアクセスすれば、おのずと道が見えるだろっ」

「分かりました それでは、行って参ります」

シュツクは、バルアナにそう告げでサーバーに入って行った

「後少しで、オーパーツが全て揃う！ フッフ、フツハツハツハ！」

この後、バルアナは笑い続けた

取材（後書き）

やっと、シュツクを200年前に飛ばしました！

…本当、やっとだよ…

感想、待ってます！

ミソラの扱い方(前書き)

数学のワークが終わらない(- 0 -)

ミソラの扱い方

―校長室前―

「あ、スバル君！」

ミソラは、そう言って校長室から出て来たスバルに抱き着いた

「ノノノちよっ、ミソラちゃん、離してノノノ」

「やーだよ」

(こっつなると、ミソラちゃんは普通にしても離れてくれないんだよな…なら)

スバルは、これまでの経験からミソラの扱いが少し分かって来ていた

「ミソラちゃん」

「何？」

ミソラはスバルに呼ばれて、上を向いた

すると、スバルはすかさずにミソラにキスをした

「／／／ん　／／／」

スバルは数秒経つとミソラから離れた

「／／／ミソラちゃんが、離れてくれないからだよ！／／／」

「／／／うん　ゴメンね／／／」

さすがのミソラも、学校でのキスは恥ずかしかったらしくミソラは下を向いて答えた

「／／／じゃあ、帰ろうか／／／」

「／／／うん　スバル君／／／」

「／／／何？／／／」

「／／／今、顔上げられないから　／／／」

そう言つて、ミソラはスバルの服の背中の方を右手の親指と人差し指で軽く握つた

「／／／こうしていい？／／／」

「／／／うん／／／」

そう会話すると、二人は学校から家に帰つた

ちなみに、帰り道は二人とも黙つていた

ースバル家ー

「／／／ただいま／／／」

「お帰りなさい あら？二人とも顔が赤いわよ？」

「／／／なんでもないよ／／／」

「あらそう？ っで、ミソラはどこに行つてたの？」

「／／／ちよつと、学校に／／／」

「じゃあ、ライブの練習はどつしたの？」

その言葉を聞くと、ミソラの顔色は赤から白にそして青になった

「忘れてた！ 行って来ます！」

「行ってらっしゃい」

ミソラは、そう言って家を飛び出した

ミソラは、家を出ると電波変換をしてライブの練習をするためベイサイドシティに向かった

ミソラが出ていくと、あかねは「全く、ミソラはスバルの事になると周りが見えないんだから」と呟いた

「母さん、今日のご飯はどうするの？」

「そうねえ…何がいい？」

「ハンバーグ！」

「じゃあ、ハンバーグでもしましょうか」

「本当！？やったね！」

「そのかわり、宿題を終わらせるのよ？」

「……はい」

スバルは、そう言つと自分の部屋に向かった

「?????」

「……そろそろ、バルアナ隊を使うか　まずはやつだな」

そう言つて、バルアナは王座から立ち上がりどこかに向かった

「サーバー内」

「……道が、崩れている」

シュツクは、先程から道が崩れていて先に進めなかった

「さて、どうしたものか　めんどくなつて来たわ!」

そう言って、シュックは崩れている場所に飛び込んだ

「……何だ、あの光は？」

シュックが飛び込むと、そこに光っている穴が現れた

シュックは、そのまま穴に飛び込んだ

ミソラの扱い方（後書き）

スバルの行動が、大胆過ぎるって書いてて思いました（笑）

感想、待ってます！

200年前の世界(前書き)

今回は短めです

何しろ、一応勉強しないとまずいので・・・(；)

200年前の世界

―秋原町―

今、この世界では朝早く道には学校に遅刻しそうで走っている少年がいる…彼の名は光熱斗そして、彼のネットナビはロックマンエグゼ…二人は地球を破滅の危機から6度も救ったと言う事は、一般的には知られていない

「遅刻だ遅刻うー！」

『熱斗君、急がないとヤバイよ！』

「分かってるよ！…ってか、何で起こしてくれなかったんだよ、ロックマン！？」

『何度も起こしたよ！起きなかつたのは熱斗君でしょ！…？』

「…急げー！」

熱斗は、急ぎに急いで学校に向かった

「…あれが、あの石版に書いてあったロックマンと光熱斗か…何だ

か拍子抜けだな…」

シュツクは、一人呟いた

…ちなみに、シュツクはあの穴に入った後、熱斗の家の犬小屋の電脳に落ちていた

そこからでもシュツクには、なぜか外の景色が見えていたので二人を見つげるのに、そう時間は掛からなかった

「さて、オーパーツは一体どこにあるのだ…」

そう言うと、シュツクは違う電脳に移動をし始めた

―秋原小学校―

「ふう…ギリギリセーフだぜ」

「っもう、熱斗ったら」

「仕方ないだろ、眠いんだから」

「私だって眠いわよ!」

「ちょっと、そこうるさいわよー」

「「すみません」」

熱斗との会話でメールが大声を出したため、まりこ（先生）に怒られた

そして、クラスメートはメールの発言で大爆笑していた

無論、デカオも…

「デカオ君まで！…ひどい！」

そう言って、メールは少し涙目になっていた

「う、ゴメン、メールちゃん」

しかし、メールはデカオを無視した

「ドンマイ、デカオ！」

「面白そうに言っな！」

「ハハハ、ゴメンゴメン」

「つくうー、ムカつくぜ！」

「おームカついたら、どうするんだ？」

「…勝負だ！」

「無理やりだな、おい」

「行くぜ、熱斗！」

「いいぜー！」

そう会話すると、二人は席から立ち上がり黒板の前まで来た

「プラグイン、ロックマンエグゼ、トランスミッション！」

「プラグイン、ガッツマン、トランスミッション！」

「おーい、授業はどうするのー？」

二人には、もうまりこの話は聞こえなかった

エグゼとガッツマンは黒板の電腦にプラグインされた

『手加減はしないよ、ガッツマン』

『当たり前でガス、ロックマン』

「負けないぜ、デカオ」

「俺だって負けないぜ！」

「バトルオペレーション、セット、イン！」

こうして、熱斗とデカオはネットナビを使ってするネットバトルを始めた

「これは、少し面白そうだな」

そう言って、シュックは二人から少し離れた場所でバトルを観戦し始めた

200年前の世界（後書き）

感想、待ってます

200年前・ネットバトル(前書き)

久々の更新！

テストも後1日で終わりです！

200年前・ネットバトル

「行っけー！ガッツマン！」

『了解でガス！うおおおお！』

ガッツマンは、唸り声を上げてエグゼとの距離を縮めて行った

「バトルチップ、ガッツパンチ！スロットイン！」

そう言って、デカオは手にもっているPETにチップを入れた

すると、ガッツマンの右手が巨大化した

「っへ！なら バトルチップ、ダッシュコンドル！スロットイン！」

そう言うと、エグゼの右上らへんに緑色の鳥みみたいな物体が現れた

「ロックマン、それを使ってガッツマンの懐に入れ！」

『うん！はあああ！』

そう言うと、エグゼは右手で鳥みたいな物体を掴み素早いスピードでガッツマンに近づいた

無論、ガッツマンにはそんなスピードに対応するスピードがないので簡単に懐に入る事が出来た

『ガス!?!』

「今だ、ロックマン!バトルチップ、フウアツケン!」

そう言って、熱斗はフウアツケンのチップをPETに入れた

すると、ロックマンの左手はソードに変わった

『はあああああ!』

『ぐわああああ!』

エグゼがガッツマンをソードで斬ると、ガッツマンは後ろに吹っ飛んだ

「ガッツマン!」

「留めだ、ロックマン!バトルチップ、キャノン、スロットイン!」

すると、エグゼの左手は普通に戻り鳥の様な物体も無くなった

そして、エグゼの右手はキャノンへと変わった

『行っけー!』

そう言うと、エグゼはキャノンをガッツマンに向かって放った

『ぐはああああ!』

ガッツマンは、避ける事が出来なかったので、キャノンが直撃した

そして、ガッツマンはその場にPLUGOUTと残して、デカオのPETに戻った

「……………呆気ないか? じゃあ、そろそろ探すか」

シュックは、少しがっかりした様子でその場を去った

「っへっへん、また俺の勝ちだな？」

「つくそー！」

「二人とも、放課後に居残り掃除ね！」

まりこは、二人のネットバトルが終わると直ぐさま言い放った

「「えー！？」」

勿論、教室は大爆笑の渦に吞まれていた

「放課後・居残り掃除後」

「やっと終わったぜー」

「あー カレー食いたい」

「なら、作ってやるっか？」

「えー！？いいのか！？」

熱斗は、目を輝かせて行った

なぜなら、デカオのカレーは凄く美味しいのだ

「いいぜ？」

「マジかー！サンキュー、デカオ！」

「気にすんなよ！そのかわり、また後でネットバトルだ！」

「OK」

そう言って、二人はカレー屋のマハラジャに行くために学校を出た

「あ、熱斗ー」

「メールちゃん」

「何、メールちゃん！？」

「あ、デカオ君…熱斗、一緒に帰ろう」

「ゴメン、メールちゃん 今から、マハラジャに行くんだ」

「え、マハラジャ？じゃあ、私も行く！」

「いいか、デカオ？」

「勿論だぜ！（このまま、上手い行けばメイルちゃんと…ムフフフ
フ！）」

こうして、3人はマハラジャに向かった

200年前・ネットバトル（後書き）

ちなみに、今のところテストはほとんど撃沈です（-o-;）

勉強したのにー！（;|;）

感想、待ってます！

200年前・オーパーツ発見(前書き)

ネタバレですね(^ | ^ ;)

ってか、やっとテスト終わりました！

疲れたー

200年前・オーパーツ発見

―道中―

「それにしても、久しぶりだなー、デカオのカレー」

「そうだったか？」

「そうだよ…いろいろあったからなー」

熱斗は、どこか遠くを見つめながら言った

無論、他の二人も何があったのかは知っている

「そうだね」

「…よし、俺様がとびっきりのカレーを作ってやるぜ！」

「っお！サンキュー、デカオ！」

三人は、会話を楽しみながらマハラジャに向かって行った

しかし、熱斗のPETに電話が掛かってきた

「どうしたの、名人さん」

相手は、名人だった

しかし、名人の顔付きはとても真剣の様な顔付きだった

「さんは知らない、事件だ」

「何だって!?!」

「場所は、マハラジャっていうカレー屋だ!急いで向かってくれ!」

「了解です、名人さん!」

「さんは知らない」

そう言って、名人は電話を切った

「皆、急いでマハラジャに向かおう!」

「うん!」

「おう!」

三人は、走ってマハラジャに向かった

「熱斗に名人から電話が来る少し前」

「しかし、一体どこにあるのだ？」

シユツクは、熱斗とデカオのネットバトルが終わると直ぐに最後のオーパーツを探し始めていた

しかし、オーパーツは今だに見つからなかった

「はあ…あれほどの力があるのだから、どこかに強い電波があるよ
うなものだが…」

そう呟くと、またオーパーツを探して歩き始めた

「……ん？この反応は…オーパーツか!？」

シユツクは、少し反応を感じると直ぐさまその反応がある場所に向
かった

「…マハラジャ？何だこゝは」

シュックは、反応があったマハラジャの電腦に来ていた

「…しかし、この場所にいるウイザードはまるでサーカス団だな」

そう、シュックが見たのは頭から炎を出している赤いナビと、背中に電気を帯びた棒みたいなのを背負った黄色いナビと、ボールに乗った少し薄い赤色のナビと、防止を被った薄い紫色のナビだった

「ちょっと、マジックマンちゃんと働いてよ」

「OKー、カレードマン」

「エレキマン、邪魔だ！」

「何だと、お前の方が邪魔なんだよファイアマン！」

「何だとー！」

「やるか！」

「はいはい、ちゃっっちゃと仕事を終わらせようね！」

そう言いながら、カレードマンは乗っているボールをエレキマンと
ファイアマンに投げつけた

「げほ！」

「がほ！」

二人は、避ける事が出来ずにボールを喰らった

「……やっぱり、サーカス団か？ いや、もしかして漫オコンビとか
か？」

シュツクは、なぜかマハラジャにいるナビ達を漫オコンビかサーカ
ス団かで迷っていた

しかし、よく見るとカレードマンはカラールーが入っている鍋を混
ぜているので、シュツクは直ぐにカレー屋だと分かった

「しかし、いい匂いだ…ん？ あそこにあるあの化石の様な物は…ま
さかオーパーツか！？」

そう言うと、シュツクはその場からマジックマン達がいる場所にあ

るオーパーツに向かって走り出した

200年前・オーパーツ発見（後書き）

ここで、皆さんに質問です

デカオはクロスフュージョン出来ましたっけ？

感想&amp;回答、待ってます！

200年前・オーバーツ戦争？（前書き）

速めの更新（^o^）

ぐるナイ面白いー！（
）

200年前・オーパーツ戦争？

「ん？誰だ貴様は？」

「私は、シュック…そこにある化石を渡して貰おう」

「この恐竜の頭の型をした化石の事かい？」

「そうだ」

「残念だが、それは無理だな」

「なら…力ずくだ！」

そう言うと、シュックは背中にある剣を右手で握った

「先手必勝！落雷！」

エレキマンがそう言うと、シュックに向かって電気を落とした

しかし、シュックはそれを楽々と避けてエレキマンに近づいた

「その程度の電気 当たる訳がないだろう！ライジングブレイク！」

シュックは、握った剣に電気を帯びさせエレキマンを斬った

「ぐわああああ！…俺が 電気で 負ける だと…？」

そう言うと、エレキマンはその場にPLUGOUTと文字を出してその場から消え去った

「エレキマン！…よくも、エレキマンを！フレイム・タワー！」

ファイアマンは、シュックに向かって炎の柱を出した

しかし、シュックにはまた軽々と避けると少しファイアマンと距離をとった

「行くぞ」

「勝手に来やがれ、ファイア・アーム！」

そう言うと、ファイアマンは両手をシュックに向けると炎をシュックに向かって放った

「はああああ！蒼炎流、3の型」

そう言うと、右手に持っている剣には炎が纏っていた

そして、シュックは右手を下に下げてファイアマンがファイアアームを放っているにも関わらずファイアマンに向かって走り出した

「何、向かって来るだ!?!」

「嘘!?!?...なぜだか、ロックマンを思いだすねー」

こんな時に、なぜかクラウドマンはロックマンを思い出していた

「はあああああ!」

「燃え尽きる!」

そう言って、ファイアマンは炎の出力を最大にまで上げた

「くらえ！」

「……飛炎斬！」

そう言うと、シュツクは右手を下から上に勢いよく振り上げると剣の残像は弧を描いた

弧を描いた残像は、そのまま斬撃となった

その斬撃には炎を纏っていた

斬撃はファイアームを打ち破って、ファイアマンに向かって行った

「何！？俺が炎で負けるだも！？」

「終わりだ……」

そう言うと、炎の斬撃はファイアマンに直撃した

「ぐはああああ！」

数秒後には、ファイアマンの姿はなくPLUGGOUTの文字があった

そう言うと、右手に持っている剣には炎が纏っていた

そして、シュツクは右手を下に下げてファイアマンがファイアアームを放っているにも関わらずファイアマンに向かって走り出した

「何、向かって来るだと!?!」

「嘘?!?!:なぜだが、ロックマンを思いだすねー」

こんな時に、なぜかカロードマンはロックマンを思い出していた

「はあああああ!」

「燃え尽きる!」

そう言って、ファイアマンは炎の出力を最大にまで上げた

「くっえ!」

「……飛炎斬！」

そう言うと、シュツクは右手を下から上に勢いよく振り上げると剣の残像は弧を描いた

弧を描いた残像は、そのまま斬撃となった

その斬撃には炎を纏っていた

斬撃はファイアアームを打ち破って、ファイアマンに向かって行った

「何！？俺が炎で負けるだ！？」

「終わりだ……」

そう言うと、炎の斬撃はファイアマンに直撃した

「ぐはああああー！」

数秒後には、ファイアマンの姿はなくPLUGGOUTの文字があった

「ありやりや、ファイアマンまで……これはちょっとマズイねえ……」

「……………」

「さあ、早く化石を渡した方がいいんじゃないか？」

「…どじする？」

「……………渡ししょうか……………」

「だね」

「最初から、そうすればいいのだ」

そう言ってシュックは、化石に近づいた

「そこまでだ！」

だが、そこに青いナビが現れた

200年前・オーパーツ戦争？（後書き）

∴ 早く現代に戻さないと (^| ^ ;)

感想、待ってます！

ウイルス狩り（前書き）

今回は、現代編です！

久々にスバルが出ます！

ウイルス狩り

ー現代・スバル家ー

「よく食べたー」

スバルは晩御飯のハンバーグをたくさん食べたため、お腹が膨れていた

『よっしゃー、スバル！ウイルス狩り行くぜー！』

「え？…もう動けないよ」

『成せば成るだ、行くぞ！』

「はああ、分かったよ…トランスコード、シューティングスター口ツクマン！」

スバルは、電波変換をして窓からウェーブロードに飛び乗った

ーウェーブロードー

「はああ、ロックバスター！」

ロックマンは、ウェーブロードに乗ると直ぐにウイルスに教わっていた

『次だ次！』

「うっぷ…出そうだよ…」

『ん？何だあのウイルス？』

「ってか、あれってウイルスなの？」

ロックマンが見たのは、全体が緑色で頭が花の形をしている人型の電波体だった

「おや、君がこの時代のロックマンかい？成る程、確かに似ているな」

『いつ、何言ってるんだ？』

「さ、なあ…」

「君には恨みは無いけど、デリートしてあげようか…」

そう言うと、緑色の電波体は腕に付いている棘が沢山付いた鞭をロ
ックマンに向かって放った

「つく！バトルカード、ブレイクサーベル！」

ロックマンは右手をブレイクサーベルに変形させて鞭を防ごうとした
しかし、鞭はブレイクサーベルを避けてロックマンを縛った

「ぐはぁ！…つく、棘が」

「フハハハ、さようならこの時代のロックマン」

そう言うと、緑色の電波体は縛った鞭に力を入れて更にきつくロッ
クマンを縛った

「ぐは！」

『スバル、フォースチェンジだ！』

「う、ん…フォースチェンジ！」

そう言うと、ロックマンの周りに風が起きた

その風は、鞭を切り裂きロックマンを包んだ

「何が起きている!?!」

「今に分かるさ は!」

そう言っつて、ロックマンは剣で風を斬って出て来た

「フォースチェンジ、サイクロンフォース!」

「何だその姿は!?!」

「今言っただでしょ…! 一気に終わらせるよ、サイクロンスラッシュ!」

そう言っつて、ロックマンは緑色のナビとの距離を一気に詰めた

「な、はや!」はああああ!」「うわああああ!」

ロックマンが緑色の電波体を斬ると、一撃で緑色の電波体は消滅した

『一体、何だっただあの電波体は』

「さあね…でも」

『でも、何だよ?』

「お金が、5000ゼニーも増えたよ!」

(ゼニーって…)

「よし、どんどん行こう!ウォーロック!」

『え、あ、おう』

その後、ロックマンはウイルスを狩りまくった

140分後1

「さすがに疲れたね…」

『そつだな…』

ロックマンはあれからずっとウイルス狩りをしていたので、ゼニーは凄く貯まったが疲れも凄く溜まった

「そろそろ帰ろうか」

『ああ』

そう言っつて、ロックマンは家に帰ろうとした

だが、帰る途中綺麗な歌声が聞こえてきた

「この声は…ミソラちゃん？」

『だな』

「行ってみようか」

『マジか？』

「うん」

『はああ…分かったよ』

ロックマンはミソラの歌声が聞こえる方向に向かった

ウイルス狩り（後書き）

次回も多分現代編です！

感想、待ってます！

歌声（前書き）

はい、やっぱり現代編です！

2000年前は、いつ書こうかな…

歌声

「展望台」

「あ、ハーブ・ノートだ」

ロックマンはウェーブロードにギターを手に持っているハーブ・ノートを見つけた

しかし、ロックマンはハーブ・ノートには近付かずに、ハーブ・ノートに見つからずに歌声が聞こえる場所に向かった

「ふう…」

『お疲れ様、ミソラ』

「ありがとう、ハーブ」

『そろそろ帰りましょうか』

「いや、後一曲歌うよ」

『まだ歌うの？』

「勿論」

『分かったわ』

「ふう…よし歌うよ!」

そう言うと、ハーブ・ノートは深く深呼吸をした

「飛び交うシグナル それぞれの今日を乗せて 同じ周波数 重ね
あい君と話す 迷い ためらいを振り切り そこに あるはずの道
を行こう 見上げる空は 心に 積もる 願いの色 描く 夢を映
し出す 必ず いつか この手に 触れる明日への地図 強く 高
く 届くまで 輝いて」

ハーブ・ノートは、自分の曲を完璧に歌った

ロックマンは、その歌声を聞いて直ぐさま拍手をした

「ロックマン!?!」

「凄かったよ!」

「いつからいたの!?!」

「いやー、何て言うのかな そう!心に響く感じがいつもより凄か
ったよ!」

「…あの〜、ロックマン?」

「やっぱり、CDより生の方がいいよね!」

『…会話になって無いわね』

「うん」

『っけ!おい、馬鹿スバル!』

「ロックも、そう思うでしょ!?!?」

『駄目だな、完全にファン魂に火が付きやがった…』

『そうみたいね』

「おい、ロックマンー」

「うん、やっぱりミソラちゃんは歌手を止めたら駄目だよね!」

「『』……………『』」

その後、15分ぐらいスバルは可笑しくなっていた

—15分後—

「そろそろ、帰ろうよロックマン」

「え？あ、そうだね」

『やっと帰れるぜー』

『そうね』

こうして、二人と2匹？は家に帰って行った…

しかし、途中でロックマンは空を見上げた

「綺麗な星だね」

「え？あ、そうだね」

「…ハープ・ノート、先に帰ってて」

「え！？どこに行くの？」

『まさか！』

「展望台！」

『止めてくれー！』

「じゃあ、私も行く」

『ミソラ!?!』

「だって、ロックマンは行くんでしょ?」

「うん」

『マジかよ……』

「じゃあ、私も行かないとね」

『…ミソラ、お腹は大丈夫なの?』

「へ?どう言っ!」

ハーブ・ノートがどういう意味かと聞こうとすると、ハーブ・ノートのお腹がロックマンに聞こえない音で鳴った

「ノノノ!?!ノノノ」

「どうしたの、ハーブ・ノート?」

「な、何でも無いよ…私、やっぱり帰るね!」

「分かった、じゃあ」

「あじゃあ」

ハーブ・ノートは、急いで家に帰って行った

「さあ、行こうか！」

『誰か、助けてくれええええええええええ！』

しかし、ウォーロックの叫び声には誰も返答しなかった

歌声（後書き）

次回は多分200年前編です…多分ですが（^| ^ ;）

感想、待ってます

思い出(前書き)

現代編です (^ | ^ ;)

過去編に行かねええええ (- . - ;)

次は、過去編にしたいです！

∴ 多分

思い出

―展望台―

「……………綺麗だね」

『……………スバル』

「……………」

『そろそろ帰らねえか？』

「後ちよっと……………」

『……………スバル それ何回目の後ちよっとだあ！？』

「……………さあ……………」

『15回だ、15回！』

「ふうーん……………」

『もう、あれから2時間は経ってるぞー！』

「……………」

『聞けよー！』

そう、スバルはあれから2時間ずっと展望台で星を見ている

ウォーロックは、そのせいでずっと退屈していた

「ねえ、ウォーロック」

『何だよ?』

「ここだよね」

『何がだよ?』

「ロックと初めて会った場所」

『…そうだな』

「あの時は、ロックがキグナスに追われていて」

『地球に俺が逃げてきた』

「そうそう、その後ロックは僕のトランサーに入ったんだよね」

『そうだったな』

「…僕、ロックに出会えて良かったよ」

『ああん?』

「ロックのおかげで、自分に少し勇気が出たし友達も出来た」

『……元々、お前には勇気があったじゃねえか 俺はその勇気を少し表に出したただけだよ』

「僕に勇気何てあった？」

『ああ いきなり現れた意味不明な物体をトランサーにずっと住ましてくれただじゃねえか』

「……」

『普通、直ぐに逃げたりトランサー自体を変えるだろ？』

「……ロック、それは勇気じゃなくて僕が変わった人なだけじゃない？」

『そつとも言うつかもな』

そう言いながら、ウォーロックは笑った

スバルもそれに釣られて、笑った

「酷いなあ」

『ハッハッハ、気にするなよ』

「分かったよ」

この後、1人と1匹？は星を見上げた

―展望台・スバル達の少し離れた場所―

「…何だか、出て行けないね」

『そうね まあ仕方ないわよ』

「そうだね」

ミソラは家でご飯を食べ、スバルがいる展望台に来ていた

しかし、スバルとウォーロックは何だか楽しいような辛気臭いような雰囲気を出していたので、近付きづらかった

『帰る？』

「そうだね」

ミソラ達は、結局スバル達には会わずに帰って行った

「?????」

「シュツク 何だか遅くないか？」

「あたりまえだろう バルアナ」

「そんなものなのか ならば」

そう言うと、バルアナはテレパシーで誰かを呼び出した

「一体何をしたのだ？」

「Mr・キング、私はテレパシーである奴を呼び出したただけだ」

「成る程な」

すると、扉が開いた

そこにいたのは、全体は金色で髪は黄色で目はブルーで服装は少しチャライような感じだ

「来たか」

「呼んだかい、BOSS?」

「ああ、お前には地球に言って貰う」

「OK、BOSS」

そう言うと、金色の電波体はその場を出て地球に向かった

「あやつは、強いのか?」

「まあまあだな」

「そうか」

そう言うと、バルアナは寝室にMr・キングは研究室に向かった

思い出(後書き)

何か、どうでもいい回だったかもしれませんがね

感想、待ってます！

200年前・オーバーツ戦争？〜？〜（前書き）

最初に前回の過去編で、ロックマンエグゼ、ファイアマン、エレキマン、カリードマン、マジックマンのかぎかつこが「」になっていた事を謝罪しますm（）（）m

よし、過去編に無理矢理しました（笑）

200年前・オーパーツ戦争？〜2〜

「マハラジャの電腦ー

」
『そこまでだ！』

「む？貴様は誰だ？」

『僕はロツクマンエグゼ、ネットセイバーだ！…君は一体？』

「私は、シュツクだ 邪魔をするならお前もデリートするぞ！」

『僕は、そう簡単にはやられないよ！』

そう言うと、エグゼは右手をバスターに変えた

それを見たシュツクは、剣を構え直した

ちなみに、エグゼは先にマハラジャの電腦に来ていたので熱斗達はマハラジャにはいない

『ロツクバスター！』

「ふん！こんなものは！」

シュツクは、そう言ってロックスターを剣で弾き返した

『な!』

「蒼炎流、3の型…」

そう言うと、剣は炎を帯びた

そして、シュツクはその場で剣を下から上に素早く振った

すると、弧を描いた剣の残像はさっきと同じ様に炎を纏った斬撃となった

「飛炎斬!」

『!?!?ぐはああああ!』

無論、エグゼはその技を知らなかったので飛炎斬をもろに喰らった
その衝撃で、エグゼは後ろに吹っ飛び、地面に俯せになって倒れた
シュツクは、エグゼが倒れた事を確認するとエグゼに近づいた

『…』

「終わりだ、ロックマンエグゼ」

『つく！（僕はここで…ゴメン、熱斗君…）』

そう言って、シュックは剣を振り上げると直ぐに剣をエグゼに向かって降り下げた

しかし、エグゼにはいつまで経っても痛みが襲って来なかった

エグゼは恐る恐る見上げると、そこにはメットガードが展開されていた

「…一体何事だ？」

『熱斗君！』

「遅くなって悪いな、ロックマン…でも、ギリギリセーフだよな？」

そう言って、熱斗は笑った

エグゼも「本当、ギリギリだよ」と言って笑った

「よし じゃあ、行くぞロックマン…」

『うん…』

「来るか？」

「ソウルユニゾン、ブルースソウル、スロットイン！」

そう言うのと、ロックマンは光りに包まれた

シュツクは、何かを感じて後ろに下がった

そして、光りから出て来たエグゼは全体が青から赤にかわっていて左手にはソードを右手には小さな盾が付いていた

「変身した？」

『行くぞ、シュツク！』

「…何度来ても同じ事だ…」

『どうかな？』

「ふん！蒼炎流、3の型…蒼炎斬！」

『熱斗！』

「おう！バトルチップ、ソード、ワイドソード、ロングソード、トリプルスロットイン！プログラムアドバンス、ドリームソード！」

熱斗がそう言うと、エグゼは両手を上に上げた
上に上げた両手には、でかいソードが現れた

「何!?!」

『はあああああ!』

そう言って、エグゼは上に上げた両手を降り下ろした
降り下ろしたソードは斬撃を生み、蒼炎斬と激突した
すると、激突した瞬間その場に煙が漂った

「ロックマン、今の内だ!」

『うん!』

「何が今の内だ?」

「『な!?!』」

エグゼは、後ろを降り向くとそこにはシュックがいた

「終わりだ!」

『つく！リフレクト！』

そう言うと、エグゼは右手にある盾を前に出した

すると、その盾は巨大化しエグゼの体ぐらいの大きさになった

しかし、シュックはエグゼが防御するのが分かっていたかのような動きで直ぐにエグゼの後ろに回り込んだ

『な、はやー』

「はあああああ！」

『があああああ！』

エグゼはシュックの動きに全くついてこれず、シュックの攻撃をもろに喰らった

エグゼは、そのままその場に倒れて気を失った

「ふん、なかなかやるやつだったな…デリートするのは勿体ないな」

そう言うと、シュックは剣を鞘に納めた

「連れて行くか」

「ロックマン！、そうはさせるか！PLUGOUTだ！」

そう言って、熱斗はエグゼを自分のPETに戻した

「まあいいだろう」

そう言うと、シュックはオーパーツに向かって歩き出した

『どつする、マジックマン？』

『…大人しくしておこう』

シュックは、オーパーツを取るとその場を去った

200年前・オーパーツ戦争？〜？〜（後書き）

次回は…どっちにしようか

皆さんは、どっちがいいですか？（笑）

感想、待ってます！

200年前・クロスフュージョン（前書き）

やっと出せました、クロスフュージョン！

ってか更新遅かったですね、すいません（-・-;）

200年前・クロスフュージョン

「マハラジャー」

「…ごめん、俺達あの化石を守れなかった」

「ふん、気にするな 俺達もやられたんだからな」

「そつだね、ME達も負けたからね」

「気にしない気にしない、また次があるって！」

「そつです、次がありますよ」

「…つくそ！俺、きっと地球を何回も救って天狗になってたんだ…」

「熱斗…」

『熱斗君！』

「ロックマン」ごめんな

『うっん、気にしないで』

「……」

『それより、科学省に行ってみようよ あいつの事が何か分かるか』

もよ?』

「そうだな 悪いデカオ、カレーはまた今度な」

「だな」

「じゃあ、俺科学省に行つて来るよ」

「待つて熱斗、私も行くわ!」

「分かった」

そして、二人は科学省に向かった

ちなみに、二人は科学省に向かう間一言も喋らなかった

―科学省・研究室―

「ん?熱斗じゃないか!」

「パパ!ちよつと教えて欲しいんだけど!」

「悪い、今はそれどころじゃないんだ」

「え?どういふ事?」

「ある電脳に以上な電波が発見されたんだ。そして、その電波のせいで機械が少しずつ可笑しくなってきたんだ」

「…その電波ってどこにあるの？」

「熱斗、これはパパ達の問題なんだ。熱斗は家に帰ってゆっくりしてる」

「嫌だ！俺は俺達はもつと強くなりたいんだ！…ロックマン、手当たり次第に探すぞ！」

『熱斗君…』

そう言うと、熱斗は研究室を飛び出した

飛び出した熱斗を見て、メールは熱斗を追い掛けようとしたが祐一郎（熱斗の父）に止められた

「メールちゃん、これを」

そう言って、祐一郎は何かをメールに手渡した

「…」

「シンクロチップだ、それもメールちゃん専用のね」

「でも、私ラッシュュシンクロチップでしかクロスフュージョン出来ないんですよ？」

「分かってる、だからそのシンクロチップはラッシュュを詳しく調べて作ったんだ」

「…でも、私なんかが貰ってもいいんですか？」

「ああ…熱斗を頼むよ」

「はい！」

そう言うと、メイルは熱斗を追い掛け始めた

「光博士」

「どうした、名人？」

「以上な電波の周辺に又しても以上な電波が！」

「何だつて!？」

「しかも、こんどは現実世界にも影響がでて現実世界にウイルスが
沢山います！」

「名人、ディメンショナルエリアを頼む！」

「はい！」

名人はそう返事をする、違う部屋に向かった

―秋原町―

「何でウイルスがこつちに!?!?!」

熱斗は、とりあえず家のインターネットから以上な電波を探そうと思いい宅に向かったのだが秋原町に着くとそこには沢山のウイルスが公園や学校を攻撃していた

「つくそ! ロックマン、名人さんに電話だ！」

『うん』

ロックマンは、名人に電話を掛けた

「もしもし?」

「もしもし、名人さん!?! 秋原町にウイルスが!」

「熱斗君、さんは知らない。分かっているよ、ディメンショナルエ
リア展開！」

そう言うと、名人はボタンを押した

ボタンを押すと、科学省にあるアンテナ見たいな物から電波が発射
されその電波は秋原町を覆い囲んだ

すると、秋原町はディメンショナルエリアに包まれたのでようやく
熱斗はロックマンとのクロスフュージョンが可能になった

「行くぞ、ロックマン！」

『うん！』

「シンクロチップ、スロットイン！」

「『クロスフュージョン！』」

すると、熱斗は光りに包まれた

光りから出て来た熱斗は、ロックマンとなっていた

「よし、行くぞ！」

『うん！』

熱斗は、沢山いるウイルスに向かって走り出した

200年前・クロスフュージョン(後書き)

∴科学省って漢字あってますよね？

感想、待ってます！

200年前・戦い（前書き）

今回で200年前、終了かな？（笑）

200年前・戦い

―秋原町・公園―

「バトルチップ、ソード！」

熱斗は右手をソードに変形させ、ウイルスに突っ込んだ

ちなみに、公園にいるウイルスの数はざっと数えて50体ぐらいに及んだ

「はあああああ！」

熱斗は片っ端からウイルスを斬りつけた

しかし、ウイルスの数は多いので反撃を沢山喰らってしまった

「つく、接近戦は無理か！」

『熱斗君、遠距離で戦おう！』

「そつだな！」

そう言うと、熱斗はウイルス達と少し距離をとった

「バトルチップ、スプレッドガン！」

熱斗は右手をソードからスプレッドガンに変形させた

「行っけー！」

熱斗は、ウイルス達に向かってスプレッドガンを3発撃った

公園にいたウイルス達はスプレッドガンに当たり、ダメージを受けたがデリートはされなかった

「何!？」

『熱斗君、多分だけ以上の電波のせいでウイルス達も強くなってるんだよ』

「マジかよ！ それって、ヤバくない？」

『ヤバいね』

「……………」

熱斗は、「俺がデリートされるんじゃない？」「って言う顔をした
しかし、熱斗が気を抜いた瞬間、公園にいたウイルス達が一気にデ
リートされた

「え!?!」

デリートされたウイルス達がいた場所から、一つの影が現れた

「ええい、うつつしいウイルスだ!」

「お前は、あの時の!?!」

そう、熱斗が見たのはシュックだった

「ん?お前は確か、ロックマンエグゼだったか?」

「そつだ!お前を倒す!」

『熱斗君!駄目だよ、逃げて!』

「逃げられるか!バトルチップ、バリアブルソード!」

熱斗は右手をスプレッドガンからソードよりもでかいバリアブルソードに変形させ、シュックに突っ込んだ

「うおおおおお！」

「懲りない奴だな…蒼炎流、3の型 飛炎斬！」

シュックは、突っ込んで来る熱斗に対して炎を纏った斬撃を繰り返した

しかし、熱斗は少し笑った

「それを待ってたぜ！」

「何？」

「バトルチップ、エリアスチール！」

そう言うと、熱斗は一気にシュックの懐に入ったのでシュックが放った飛炎斬には当たらなかった

「くらえ！」

熱斗はバリアブルソードでシュックを斬った

しかし、斬られたシュツクの体は揺らめいて消えた

「何!？」

「蒼炎流、2の型…幻炎斬！」

シュツクは、熱斗の後ろに回り込んで熱斗の背中を炎を纏った剣で斬った

「ぐは！」

熱斗は、斬られた勢いで公園にあるリスの銅像に激突した

「つく、何で…確かにお前を斬ったのに…」

「残念だったな、お前が斬ったのは俺が炎で作った幻影だ」

「何だって!？」

「残念だったな…じゃあ今度こそデリートだ」

そう言ってシュツクは熱斗に近付きはじめた

『熱斗君！しっかりして、熱斗君！』

「うっ、うっ…」

しかし、熱斗はうめき声を上げるだけだった

「バトルチップ リカバリー150」

「ふん、小賢しい…終わりだ！飛炎流、3の型…飛炎ざ「ちよつと待ったー！」…？」

シュツクが飛炎斬で熱斗に止めを刺そうとしたが急に一人の少女が熱斗の前に出て来た

シュツクは、さすがに一般人に向かって飛炎斬を放つ訳にも行かないので飛炎斬を撃つのを止めた

「貴様は誰だ？」

「私は、桜井メール…熱斗、大丈夫！？」

「メールちゃん…俺は大丈夫だから 早く 逃げて」

熱斗は、メールを逃がすために大丈夫だと言ったが実は全然大丈夫

では無かった

「…熱斗はそこで休憩してて」

「!? 駄目だ、メールちゃん! 早く逃げて!」

「行くよ、ロール?」

『うん』

メールは熱斗の忠告を聞かずに、ポケットからシンクロチップを取り出した

「シンクロチップ、スロットイン!」

「『クロスフュージョン!』」

メールは光りに包まれた

光りから出て来たのは、ロールと合体したメールだった

「行くわよ!」

(…さすがにめんどくさくなって来たな それに、バルアナ様も私を待っているだろう…)

「ロールアロー！」

メイルは、右手を弓に変形させシュックに向かってロールアローを放った

「ふん！」

しかし、シュックは簡単に剣でロールアローを薙ぎ払った

「さすがに、これ以上時間を食う訳には行かないか…はあああああ
ああ！」

シュックはそう言つと、力を溜めはじめた

シュックが力を溜め始めると、地面が揺れはじめた

「何？…何が起こっているの」

「はあああ…！」

シュックがそう叫ぶと、シュックの前には黒い穴が出来た

「さらばだ」

そう言うと、シュツクはその穴に飛び込んだ

「待て！」

「熱斗!？」

それを見て、熱斗もその穴に向かって走り出し、穴に飛び込んだ

メールも熱斗に続いて、穴に入った

二人が穴に入ると、黒い穴はスウーッと閉じた

穴が閉じると、秋原町にいた沢山のウイルスは一気に消え去った

―科学省・研究室―

「何? 以上な電波が急に無くなったと?」

「はい、光博士...それと、近くにいた熱斗君とメールさんの反応も無くなりました」

「何だって!？」

そう言うと、祐一郎は熱斗との通信を試みたが、反応が無かった

「熱斗…熱斗おおお!」

その後、約20分間祐一郎は熱斗の名前を叫び続けた

他の研究員達は、祐一郎の叫びを見守るしか出来なかった

200年前・戦い（後書き）

最後、何だか無理矢理でしたね（汗

感想、待ってます！

珍しいミニラ（前書き）

2回目の更新！

題名がおかしい！（・・・）

珍しいミソラ

―翌日、スバル家―

あの後、スバルは家に帰り直ぐに眠った

ミソラはスバルより早く帰りスバルのベッドで寝ていた

「ZZZZZ」

『起きろ、スバルー!』

『起きて、ミソラー!』

「ZZZZZ」

この日は、珍しくミソラも寝ていたのでハーブもミソラを起こさそうと頑張っていた

だが、この日はなぜかミソラもスバル並に起きなかった

『ミソラー、遅刻するわよ!』

『スバル!遅刻するぞ!』

「ZZZZZ」

ちなみに、現在7：40分…

『はあはあ、…今回の事であんたの苦勞が分かったわ…』

『はあはあ、だろ？結構しんどいんだぜ』

『どっつするの？』

『ひたすら叫ぶ！…スバル、スバル！起きろー！』

『…ミソラ！起きなさい！』

「ZZZZZ」

『はああ、どうしたらいいんで！そうだわ！』

ハープは、何かを考え付いたのかミソラの耳元まで近寄った

『ミソラ、早く起きないとー』

「ZZZ！？それは嫌！」

ハーブがミノラ耳元で何かを言うと、ミノラは飛び起きた

『おはよう、ミノラ』

「…おはよう」

『スバル！ 起きねえ…』

『任せなさい』

そう言うと、ハーブはスバルの耳元まで近寄って何かを呟いた

「ZZZ…!？」

スバルは、ハーブに何かを言われ飛び起きた

『おはよう、スバル君』

「…おはよう、ハーブ」

『…お前、何言っただ？』

『あなたは気にしないでいいのよ』

『何だとー!？』

そう言っつて、ハーブはウォーロックを足払った

『ほら、二人とも早くしないと学校に遅れるわよ?』

「え?」

「へ?」

そう言われて、二人は時計を見た：現在7：50分

「遅刻ううううう!?!」

二人は急いで学校に行く用意を始めた

「母さん、朝ごはん出来てる?」

「出来てるわよー!」

「ミソラちゃん、食べに行こう!」

「着替えるから先に行っつて」

「分かつた」

スバルは、ミソラを置いてリビングに向かった

ー スバル家・リビングー

「母さん、おはよう」

「おはよう、さ、早く食べないと遅刻するわよ！」

「うん」

スバルは目の前には、白ご飯、秋刀魚、みそ汁が広がっていた

「いただきますー」

「はい」

その後、スバルはほぼ無言でご飯を食べていた

少しすると、ミソラもリビングに下りてきた

「おはよう、ミソラ」

「おはよう、お母さん」

ミソラも、もう慣れたのかあかねを普通にお母さんと呼んでいる

「うわぁ、美味しそう!」

「早く食べないと遅刻するわよ!」

「あ!いただきます!」

ミソラも、スバルに続いて大急ぎで朝ごはんを食べはじめた

「!」「!」「!」「!」「!」「!」「!」「!」「!」「!」

ミソラが下りてきて10分後には、二人とも朝ごはんを食べ終わった

「じゃあ、行ってきます!」

「行ってきます!」

「いってらっしゃい」

二人は大急ぎで、学校に向かった

ちなみに、委員長達は前回の事があるので先に学校に向かっていた

…現在 8 : 15 分

「これなら、歩いてもギリギリ間に合うね」

「そうだね！」

二人は、時間を見て歩き始めた

ーウエーブロードー

「ほう、あれがロックマンねえ…」

そこには、金色の電波体が立っていた

「…ん？隣にいる girl…very, prettyだぜ！」

金色の電波体は、ミソラを見て叫んだ

「あのgirl 名前は何だろうな」

金色の電波体は、変な目でミソヲを見はじめた

珍しいミソラ (後書き)

…あいつの名前をうしろめ
) > | >
(・ >

感想、待ってます！

猫（前書き）

題名はほとんど意味ないです） - . . . ;
（

猫

「コダマタウン・正門前」

「間に合いそうだね、ミソラちゃん？」

「そうだね、スバル君」

二人は、あれからずっと歩いていたが結構余裕に間に合った

「にしても、今日も勉強かあ」

「ハハハ、ミソラちゃんは勉強嫌いだからね」

「そうなんだよねー 何か事件でも起きないかなー」

「いやいや、起きなくていいよ」

スバルは、笑って答えた

ミソラは、すこし膨れっ面だった

すると、スバルの後ろの方から「その、膨れっ面もvery prettyだぜ！」と聞こえた

スバルは直ぐさま後ろに振り向いた

「誰だ!？」

そこには、金色をした電波体が立っていた

「あ () しまった、ついあのgirlの顔がPrettyだったから」

「君は誰だ!？」

「Are you a ロックマン？」

「Yes I am ロックマン!」

スバルは英語で聞かれたので、英語で言い返した

「Who is this girl?」

「今のつて、私の事?」

「そつだよ She is ミソラ」

「おお、ミソラ!」

そう言うと、金色の電波体はミソラに近づいて「I love you!」と叫んだ

「……へ？」

もちろん、二人の顔は一気にふぬけた

「ミソラちゃん」

「スバル君」

『逃げろ（ましよう）』

二人は全速力で、学校に入って行った

「!？」

二人は急に逃げたので、金色の電波体はポカンと見ているだけだった

「コダマ小学校」

「はあはあ」

「はあはあ」

「ビックリしたね」

「うん」

『何なんだ、あのやろつは』

『ミソラのファンかしら?』

「さあ? ま、何にしても逃げたから大丈夫でしょ、ね、ミソラちゃん?」

(もし、ここでああ言つときつとスバル君はああ言つてくれるから...)

「ミソラちゃん?」

スバルは、ミソラがなかなか返事をしないのでを下から覗くようにミソラを見た

「きゃー!」

ミソラはさすがにビックリして、声を上げた

スバルは、それにビックリして後ろに下がった

「あ、ごめんミソラちゃん」

「…」

しかし、またしてもミソラが返事をしないのでスバルはミソラに近寄った

スバルがミソラに近寄ると、ミソラはスバルに見えない様に手で顔を隠して笑った

「ど、どうしたの、ミソラちゃん!」

スバルは慌ててミソラに近寄った

「スバル君…怖かったよー!」

そう言うと、ミソラは手を顔から離れた

手を離れた顔には、すでに涙がでていたが、勿論この涙は演技だ

そして、ミソラはそのままスバルに抱き着いた

「スバル君 うええええん」

「ミソラちゃん 大丈夫だよ、僕が必ず君を守ってみせるから……！」

「スバルくん……」

「ミソラちゃん」

二人は、甘いムードを出していた

しかし、そこに育田先生がやって来た

「二人ともー、ラブラブなのは良いけど場所を考慮ろー」

「！？せ、先生！」

「……………」

「一応言っとくが、お前達遅刻だからな？」

「はぁ……」

「廊下に立ってる」

「はい…」

（やった、狙い通り！これで、もう少しスバルを独り占め出来る）

ミソラはとても嬉しそうな顔をした

しかし、ミソラはスバルに抱き着いているので誰にもミソラの顔を見る事は出来なかった

「とりあえず、二人とも荷物を教室に置いて来い」

二人は「はい」と返事をすると、ミソラがスバルと離れてから教室に向かった

無論、教室に入ると「何で、スバルがミソラちゃんと一緒に廊下に立つんだよ！」見たいな視線がスバルに向けられていた

「ハハハハは…」

さすがに、スバルは苦笑するしかなかった

「ほら、スバル君、行こう」

「え、あ、そうだね」

そう言つて、二人は廊下に出た

廊下に出ると、ミソラは直ぐにスバルに抱き着いた

「!?!ちよっ、ミソラちゃん!」

「にゃーに?」

「うー!」

スバルは、ミソラの見た事も無いし聞いた事もない猫の様な表情と
言葉遣いに直ぐにやられた

「何でもないよ」

(やったー、効いた!)

ミソラは内心ガッツポーズをした

猫（後書き）

なんだか、毎回毎回題名がおかしいですね）・・・；）

感想、待ってます！

切れたスバル？（前書き）

題名は読めば分かると思います（^| ^:）

切れたスバル？

「1時間目終了」

「ふう、やっと終わったよー」

「そうだね」

スバルとミソラは1時間、廊下に立たされていたので足が痛くなっていた

そして、スバルはチャイムが鳴った瞬間廊下に座り込んだ

「正義のヒーローがだらしないよー」

「だってさあ、さすがに1時間も何もしないで立ってたんだよ…しかもミソラちゃんに抱き着かれてたし」

そう、スバルはあれからずっとミソラに抱き着かれていたのでスバルに掛かっていた体重は約2倍だった

「それは、私が重いつて事かな？」

ミソラは笑顔だが、回りには黒いオーラが出ていた

「え！？そ、そんな事はないよ！ミソラちゃんは軽いよ！」

スバルが慌ててそう言うと、ミソラの周りに放たれていた黒いオーラは無くなり、ミソラの顔は万遍の笑顔だった

「ありがとう、スバル君」

そう言って、ミソラはまたまたスバルに抱き着いた

「ちょっと、ミソラちゃん！？他の人に見られちゃうよ！」

「気にしない、気にしない」

「僕が気にするよ！」

「なんとか、なるにゃ〜」

「うー」

ミソラは、スバルに反論されると直ぐに猫化した

「み、ミソラちゃん、猫化はさすがに」

「にゃあ〜」

「う！…はああ、ま！いいかな」

スバルは、ついにミソラの猫化にやられてしまった

（やった！ 本当に演技が出来るようになって良かった！）

ミソラがそう思っていると、教室の扉が開いた

「ふう、授業疲れたぜ…」

「ゴン太君は寝ていたでしょう？」

「ハハハ、そうだったな！」

教室から出てきたのは、ゴン太とキザマロだった

（ゴン太とキザマロ！？ やばい、今の状況を見られたら！…あれ？
体がさつきより軽いような…）

そう思うと、スバルは自分の体を見た

そこには、ミソラはいなかった

「あ、あれ？」

「何してるの、スバル君？早く教室に入ろうよ！」

「え、あ、そうだね（もう少し、ミソラちゃんの猫バードジョン見たかったな…）」

（猫化はスバル君に効くなあ またしよ！）

ミソラが教室に入ると、スバルも何だかふに落ちないような顔で教室に入った

それから、時間は進み…現在は、放課後…

「うーん、やっと終わった〜」

ミソラは背伸びをしながら言った

それを見ていた、スバルとツカサ以外の男子は目がハートになっていた

そんな中、一人の男の子がミソラに話掛けてきた

「ねえ、ミソラちゃん」

「ええと、君は確か…」

「気にしないで…それより、歌手活動をしばらくの間休止するって本当なの!？」

「うん、本当だよ?」

「そ、そんなあ…ミソラちゃん、考え直してよ!」

そう言うと、その男の子はミソラの手を握って上目使いで言ってきた

(うわ! な、なんか怖いよ! 助けて、スバー!)

ミソラがそう思っていると、急にその男の子の手が離れた

そして後ろから、「ミソラに触れるな…八つ裂きにするぞ!」と言っている、とても低い声が聞こえた

その男の子は、凄く怯えて直ぐさまその場から逃げ去った

ミソラは、その声の主が気になって後ろに振り向いた

そこに立っていたのは…

「ミソラちゃん、大丈夫？」

スバルだった

ちなみに、今の声はいつもどおりのスバルの声だ

「す、スバル君！」

「ん？どうしたの？」

「い、今 私の事を」

「ミソラちゃんの事を？」

「／／／み、ミソラって／／／」

「／／／／！？…まあ気にしないで行こう！」

「っえ！？ちょ、ちょっと！」

スバルはミソラから逃げるように教室から出た

ミソラはそれを追い掛けるようにして教室を出た

そして、教室に残っていた生徒達はスバルがいなくなったのを確認するとスウーと息を吸うと、「スバル、怖！」と叫んでいた

切れたスバル？（後書き）

感想、待ってます！

侵略者はミニミロヴ。(前書き)

今回は短いです。(^ _ ^)
(: :)

侵略者はミソラLove？

―学校・正門前―

「はあはあ」

「はあはあ、ちよつと、スバル君待ってよ」

「はあはあ」

スバルはついに観念したのか、その場で立ち止まった

「はあはあ、さっきさあ私の事　／＼／＼ミソラって言ったよね？
／＼」

「／＼／＼つ、ついね、ごめん／＼」

「／＼／＼い、いいよ、別に（むしろ、呼び捨てで呼んで欲しいぐ
らいだよ）／＼／＼」

「じゃあ、帰ろうか、ミソラちゃん？」

「うん（やっぱり、呼び捨てじゃあないか）　何だか悲しいな…」（

そう言つと、スバルとミソラは家に帰って行くとした

ちなみに、二人は走って来たので他の生徒はまだ下駄箱らへんにいるだろう

しかし、やはり後ろから「STOP!」と聞こえてきた

「また、お前か…お前は一体何なんだ!？」

「I love her!」

「……」

後ろには、やはりあの金色の電波体がいた

「ミソラちゃん、あの電波体の名前を聞いてよ」

「え！わ、私が!？」

「うん」

「はああ。あの、あなたの名前は何なんですか？」

「Meの名前は、パリスさ！」

「だって、スバル君」

「パリス 君は、もしかしてビックバンなの？」

「ビツクバン？」

「!？ そうだったね、You are ロックマン… I m u s
t k i l l y o u ! !」

そう言って、パリスはスバルに飛び掛かった

「トランスコード、シューティング・スター・ロックマン！」

スバルは直ぐさまロックマンに電波変換すると、飛び掛かってきた
パリスに向かってロックバスターを放った

「早い！でも、は！」

そう言うと、パリスは左手をバスターの方に向けた

「チェンジ、シールド！」

パリスがそう叫ぶと、左手には縦長の盾が現れた

パリスは、その盾を握るとバスターから身を守った

「何!?!」

「ッフ…武器チェンジ、スピアー!」

そう言うと、パリスの左手左手に握っていた盾は槍へと形を変えた

「はああああ!」

パリスは、直ぐさま槍の柄の方を持ってロックマンに斬りかかった

「やば!ガード!と、バトルカード、バリア!」

ロックマンは、ガードをしながらバリアを張った

ロックマンはそのおかげで、少し後ろに飛ばされたがダメージはなかった

「スバル君!トランスコード、ハープ・ノート!」

ミソラは、ロックマンが飛ばされたのを見ると直ぐに電波変換した

侵略者はニンニクLove? (後書き)

感想、待ってます

過去からの訪問者？（前書き）

はい、寝てました（・・）zzz

すみません（――）m

過去からの訪問者？

「Oh! YOUも電波変換出来たんですね…それにしても、その姿もPrettyだ!」

「…やっぱ、私この人嫌い ショックノート!」

ハープ・ノートは、パリスに向かってショックノートを放った

しかし、パリスは軽々とそれを避けるとそのままハープ・ノートに近づいた

「HEY! あんな弱っちい子供より、meみたいな強い人に乗り換えたらどうだい?」

「誰があんたなんか! 私はスバル君一筋だよ!」

「なら、仕方ないね 力付くで乗り換えさせるよ」

そう言うと、パリスはハープ・ノートの唇にキスをしようとした

無論、ハープ・ノートは逃げようとしたが両肩を捕まれたので逃げる事が出来ず、涙を流すと目をつぶった

そして、パリスの唇がハープ・ノートの唇に後10cmぐらいの時、

「ハープ・ノートに近づくな！」と言う声が聞こえたかと思うと、
パリスはロックマンによる跳び蹴りで吹っ飛ばされた

だから、ハープ・ノートが目を開けると、視界いっぱい緑色のロ
ックマンがいた

「ロックマン！ありがとう」

「ぐふ！まだ生きてたのか、ロックマン…ん？YOUは本当にロッ
クマンか？」

パリスが見たのは、サイクロンフォースになっているロックマンだ
ったのでパリスはそれがロックマンだとは直ぐには分からなかった

「僕は、真正銘シューティング・スター・ロックマンだ！行くぞ
おおおお！」

そう言うと、ロックマンはパリスに向かって走り出した

「振り返ちなね！」

そう言うと、パリスもまたロックマンに向かって走り出した

「うおおおおお！」

「はあああああ！」

そして、二人の距離が約1mになると二人のちょうど真ん中ぐらいにでかい穴が現れた

「え!？」

「What!？」

二人は、反射的に後ろに下がった

そして、その穴からは青色の人とピンク色の人が見えた

…現れたって言うより、穴から放り飛ばされた

二人は、その場で尻餅をついた

「いててて」

「っもう、何なのよ!熱斗のせいだよ!」

「何で俺!?メールちゃんがついて来たんじゃないか!」

「普通、ついて行くでしょ!」

「そんなの知らないよ!」

「「「……………」」」

元々その場にいたロックマン達は二人の喧嘩をポケットと眺めていた

『スバル、ポケットとすんな!』

『ミソラもよ!』

「「うん」

しかし、二人はやはりポケットとしてしまった

「「「たたく、一体ここはどこだよ」

「私が知るわけないでしょう!」

「だよねー あ!あれって、もしかして…スバル!？」

「もしかして、熱斗君!？」

「おう、懐かしいなー」

「だね!」

二人は、久々に会った事に少し感激していると、メールが「君って、ロールを助けてくれた人だよな？」と聞いてきた

「うん、そうだよ」

「あの時は、ありがとうね」

「どういたしまして」

「??? ロックマン、少し説明して」

ハープ・ノートは過去に行った時、直ぐに帰ってしまったので熱斗とメールの事は知らなかった

「この二人はね、過去の世界でロックマンとロールのオペレーターなんだよ」

「そうだったんだ！成る程ね」

「君も、元気そうだね」

「うん、あの時はありがとうね」

「どういたしまして」

『ちよつと熱斗君』

「何だ、ロックマン？」

『今は、一体何年なの？』

「さあな スバル、今は俺達がいた世界から何年後の世界なんだ？」

「熱斗君達の世界からは、だいたい200年後の世界だよ」

「う、200年!？」

『た、大変なところ来ちゃったね』

「だな」

ロックマン達は、会話を楽しんでいた

…無論、パリスの存在を忘れて

(…:NO!忘れられています!)

過去からの訪問者？（後書き）

やっと、合流出来た！

感想、待ってます！

距離感（前書き）

題名 おかしい！

誰か俺のネーミングセンスを助けて下さい！（・・・）

距離感

「つくー、ロックマン！meを忘れないで下さい！」

「あ！ごめん、完璧に忘れてたよ」

ロックマンは頭を少し下げながら言った

「なんか、普通に言われたら少しShockね　行くよ、ロックマン！」

「来い！」

こうして、二人のバトルは再び始まった

「チェンジ、バスター！」

そう言うと、パリスの右手に握っていた槍を銃に変形させた

「つく、遠距離攻撃は少しきつい　なら！」

そう言うと、ロックマンは素早くパリスに近づこうとした

しかし、パリスの方の攻撃はロックマンが近づくより早く放った

「パニックバスター！」

パリスは、右手の銃から黄色の銃弾を連続で放った

「つく！風神、カマイタチ！」

ロックマンはそう言うと、周りの風邪を使ってカマイタチを無数に作り出し、そのカマイタチを自分の周りに張り巡らせて銃弾を弾いた

しかし、一発だけロックマンに直撃した

「つつ はああああ！」

ロックマンはそう叫ぶと、周りに張り巡らせていたカマイタチを全てパリスに向かって放った

ちなみに、パリスとの距離は2〜3mだったのでギリギリ、カマイタチが届く距離だった

しかし、カマイタチは全てパリスに当たらなかった

それどころか、パリスに届きもしなかった

「何!?!」

「くっくっく、残念だったねロックマン　YOUの距離感はずっと正常じゃないようだね」

「まさか、さっきの!」

「そう、さっきの技は相手の頭の中の信号を狂わせたりする技」

「よく意味が…」

ロックマンは頭の上に?を出していた

「簡単に言うと、YOUは距離感が掴めないって事だよ!チェンジ、スパーク!」

そう言うと、パリスは右手の銃を槍に変形させロックマンに近づいた

「くっく、距離感が…」

「だから言ったろ、距離感が掴めないって!は!」

そう言って、パリスはロックマンをスパイクで突き刺した

「がは！」

「終わりだね、ロックマン！」

「……」

しかし、ロックマンは何も言わなかった

そして、少しすると、突き刺していたロックマンが消えた

「What!？」

「僕はこっちだ！」

パリスは声がした方に顔を向けた

そこには、ケロットとした様子のロックマンが立っていた

「行くよ！」

そう言うと、ロックマンはパリスにダッシュで近づき右手を剣に変形させパリスを斬った

…ロックマンにしたら斬ったはずなのだが、他からしたら斬ったの

は空気だった

「……スバル、変わろうか？」

「え？でも、パリスはもう……あ！……生きてる」

「よし、スバルは下がってる」

「分かった」

スバルはフォースエンジンを解き、ハーブ・ノートとメールがいる場所に行ったが距離感が狂っていたのでハーブ・ノートにぶつかってしまった

「キヤ！」

「あ、ごめん！ハーブ・ノート！」

「ノノ大丈夫だよ、ロックマンノノ（むしろ、ちょっと嬉しいかも）」

「ノノありがとうノノ」

（ふうん、ミソラちゃんってスバル君が好きなんだ）

メールは二人の顔が少し赤いのを見てそう思った

「あそこの雰囲気になにかおかしくないか？」

『そうだね』

「Pretty Girl 何かHappyそうね」

こちらの二人は、ロックマン達を見てそう思った

「よし！行くぞ、ロックマン！」

『うん！』

「来い What's your name？」

「それぐらい、俺でも分かるぜ！My name is 光熱斗
熱斗だ！」

「来い、熱斗！」

こうして、少しグダグダながらも二人の戦いが始まった

距離感（後書き）

今回は、更新が早めですかね？（笑）

感想、待ってます！

威力、高過ぎ？（前書き）

題名は、後で多分分かります

ってか、更新遅くなってごめんなさい！

これからも、よろしくお願いします！！

威力、高過ぎ？

「バトルチップ、エレキソード！」

「チェンジ、スピアー！」

「うおおおお！」

「真っ正面から来るなんて、はああああ！」

熱斗は右手を電気を帯びたソードに変型させると、パリスに向かって走り出した

パリスは、走り出した熱斗に向かって鋭い突きを繰り返すため、力を溜めていた

「行くぞ！バトルチップ、エアースチール！」

「な、消えた！？」

「後ろだ！は！」

「Wha ぐは！」

熱斗は、エアースチールでパリスの後ろに周り込み、パリスを斬った

パリスは斬られると、少しだけ吹っ飛んだ

「つく、やりますね」

「まだまだだぜ！」

「しかし、meもやられっぱなしは流石にNOです！チェンジ、バスター！」

パリスはスピアーを銃に変型させると、直ぐさま力を溜めた

「パニックバスター！」

「まっず！？バトルチップ、バリア1000！」

「小賢しいね うおおおお！」

パリスが叫ぶと、銃からは数十発の球が発射された

「数が多い！？このままじゃ」

「くられ！」

「こうなりゃ…バトルチップ、オーラ！」

「無駄ね！」

「そつちがな！」

「What!？バリアが破れない!？」

「バトルチップ、メガキャノン！くらえええええええ！」

「チェンジ、シールド！」

ロックマンは、バリア100が破れる前にオーラを使ってパニックバスターを回避すると、直ぐさま右手をメガキャノンに変型させパリスに向かって放った

しかし、パリスも直ぐさま銃を盾に変型させメガキャノンをギリギリ防いだ

「やるな」

「あれが決まらないのか どうしようか、ロックマン？」

『 あれ、やってみる？』

「そうするか」

「何がStartするんだ？」

「ふうう ソウルユニゾン、ブルースソウル！」

そう言うと、熱斗を光が包み込んだ

そして、光から出て来た熱斗はブルースソウルになっていた

『成功だね』

「ああ、まさか本当に出来るなんてな」

『本当だよ』

「姿が変わった？」

「行くぜ、パリス！」

「来い！」

「バトルチップ、ソード、ワイドソード、ロングソード！プログラ
ムアドバンス！ドリームソード！」

「でか！？やっぱり来ないで！」

「くらえええええ！」

熱斗は、そう言ってドリームソードをパリスに放った

「シールド！」

しかし、パリスは盾を使ってドリームソードを防ごうとした

しかし、ドリームソードの方が威力がはるかに上だったのでドリームソードは盾を打ち破り、パリスに直撃した

「ぐはあああー！」

そのまま、パリスは消滅した

「…ブルースソウルでソード系使うと、やっぱりスゲー威力だな…」

『だね、熱斗君…』

熱斗は、少し苦笑してクロスフュージョンを解除した

ハープ・ノート達も、パリスが消滅したのを見て変身を解いた

威力、高過ぎ？（後書き）

やっぱり、ブルースソウル強すぎですよね？（笑）

感想、待ってます

目が回る？（前書き）

題名、意味不（・・・；）

今回は、とてもグダグダです（・・・；）

目が回る？

「ふう」

『お疲れ様、熱斗君』

「ああ、ロックマンもな」

熱斗とエグゼはお互いに笑い合って言った

「熱斗ー！」

「メールちゃん」

「お疲れ、熱斗！」

「ありがとう、メールちゃん」

「そう言えば、スバルは治ったのかな？」

「どうだろうね？スバルくん」

スバルとミソラは遠くにいたため、メールは少し声を張ってスバルを呼んだ

「なーに？」

スバルは、そう言うとミソラと一緒に熱斗達がいる所に歩いて来た

「スバル君は、距離感大丈夫なの？」

「今は、少し治って来たけどまだ完全には治ってないかな」

「大丈夫、スバル君？」

「大丈夫だと思うよ、ありがとうミソラちゃん」

「どういたしまして」

「…！ ミソラちゃん、スバル君の手を繋いであげたら？」

「へ？」

スバルとミソラは、声を揃えてびっくりした感じに答えた

「だ、大丈夫だよ！」

「でも、スバル君、足元がフラフラしてるよ？」

「へ？ あれ、目が回って」

「きゃ！」

スバルは、少し目が回ったらしくミソラに倒れ掛かった

「／＼／＼、ごめんミソラちゃん／＼」

「／＼／＼だ 大丈夫だよ、それよりスバル君早く手を繋ご？／＼／」

「大丈夫だよ、ミソラちゃん 駄目、繋ぐの！」 はい」

ミソラが大声で言ったため、スバルは驚いてつつい、はいつて言ってしまった

「さ、行こ」

「／＼／＼う、うん／＼」

二人は手を繋いだ

無論、スバルの顔は凄く赤くなっていたがミソラの顔は、みんなが気付かないだが赤くなっていた

「ほら、メイちゃん達も」

「へ？ あ、うん…行く、熱斗」

「ああ」

こうして、四人はスバルの家に向かった

ースバル家ー

「「ただいまー」」

「「おじゃましますー」」

「あら、お帰りなさいといらっしゃーい」

四人は、あかねにそう言うとスバルの部屋に向かった

しかし、スバルはフラフラとして階段を登ってたため他の三人は階段を登るだけで疲れてしまった

「ここが、スバルの部屋かー 宇宙関係の本がいっぱいだな」

「そうねー、熱斗ではありえないくらいの本の数ね」

「そうだな、こんなに本を読んだら、目が回っちまうよ」

「ハハハ（フフフ）」

三人は、声を揃えて笑った

「?????」

「バルアナ様、ただ今戻りました」

「うむ、ご苦労。それで、オーパーツは？」

「あります、これです」

そう言うと、シュツクはオーパーツを出してバルアナに渡した

「これで、ようやく揃ったか」

「はい」

「しかし、これだけオーパーツの力の反応がでかいとはな。奴もそろそろ気付く頃か……」

「奴？」

「お前は知らんでよい…よし、ようやく揃った事だ、さっさと準備を進めるぞ」

「は！」

バルアナとシュックは、王座がある部屋から違う部屋に向かった

「?????」

「この反応は オーパーツか!？」

そこにいた少年は、そう呟くとその場から立ち去った

目が回る？（後書き）

グダグダでしたよね（・・・）

感想、待ってます！

少しの成長（前書き）

題名の意味は、最後の方で分かります（^| ^ ;）

ってか、更新遅くてすいませんm（| |）m

少しの成長

「スバルの部屋」

「にしても、俺達はどこで寝泊まりする？」

「どっしょっ？」

「じゃあ、僕ん家に住んだら？」

「え？いいのか？」

「僕、母さんに聞いてみる」

そう言うと、スバルはあかねがいる台所に向かった

「ねえ、熱斗？」

「何、メールちゃん？」

「スバル君って、何の曲が好きなのかな？」

「え！？」

「？？どうしたの、ミソラちゃん？」

「／／／な、何でもないよ／／／」

「うっそだ〜、ミソラちゃん顔が赤いよ？」

メイルは笑いながら、ミソラをからかった

「お！こんな所にCDプレイヤーが！」

「熱斗、音出してよ！」

「／／／や、止めて、熱斗君！／／／」

「止めてと言われたら、やりたくなるのが人間！ そりゃ！」

『熱斗君』

熱斗がそう言うと、エグゼは苦笑しながら言った

そして、熱斗がCDプレイヤーから音を出すと 聞き慣れた声で、
「飛び交うシグナル それぞれの今日を乗せて 同じ周波数 重ね
あい君と話す 迷い ためらいを振り切り そこに あるはずの道
を行こう 見上げる空は 心に 積もる 願いの色 描く 夢を映
し出す 必ず いつか この手に 触れる明日への地図 強く 高
く 届くまで 輝いて」と流れた

「……この声って」

「ミソラちゃんって歌手なの!？」

「／／／う、うん／／／」

「スゲーいい歌だ!な、ロックマン?」

『うん!素敵な歌だよ!』

「そうね!私、この曲好きになっちゃった!ね、ロール?」

『うん、私も好きになっただわ!』

「／／／ありがとう／／／」

二人と2体?は、笑いながら、ミソラは照れながら言った

そして、スバルの部屋で三人が楽しく会話をしているとスバルが帰ってきた

「どうだった、スバル?」

「寝る場所が狭くていいなら、いいわよだってさ」

「俺は全然かまわないけど、メイルちゃんは?」

「私がかまわないわよ」

「じゃあ、母さんに言って来るよ」

「俺も行くよ」

「私も」

「じゃあ、ミノラちゃんはここで待ってて」

「うん」

そして、三人は台所に向かった

「台所」

「母さん！」

「何、スバル？」

「二人とも、全然かまわないって」

「そう、なら私も全然いいわよ」

「ありがとうございます、スバルの母さん。これから、よろしくお願ひします」

「ありがとうございます、スバル君のお母さん。これから迷惑をかけると思いますがよろしく願います」

熱斗とメールは頭を下げた

「こちらこそよろしくね。あと、そんなにかしこまらなくていいわよ？ あ、スバル？」

「何、母さん？」

「ご飯が出来たから、ミソラちゃんを呼んで来てくれない？」

「分かった」

スバルは、あかねに言われるとミソラを呼びに部屋へ向かった

「スバルの部屋」

「ミソラちゃん！」

「！？ スバル君が、びっくりした」

「い、いめ？」

「いいよ、で、どうしたの？」

「ご飯が出来たから、したに来てだって」

「分かった　！スバル君！」

「ん、何？」

「おんぶして？」

「…え？」

「だから、おんぶして？」

「／／／な、何で？／／／」

「ちょっと、足をくじいちゃって　駄目？」

「う！（その、上目遣いと涙目は　負ける！）…絶対にしなきゃ駄目？」

「お願い　スバル君」

もちろん、これも上目遣いと涙目　それに小さな声で言った

「…分かった、でも目をつぶって？」

「え、何で？」

「いいから」

ミソラは、スバルに言われた通り目をつぶった
すると、いきなりミソラの体が宙に浮いた

「きゃー！」

「じゃあ、行くよ?」

「／／／ちよつと、待って、何でお姫様抱っこなの!?!?／／／」

「……………」

スバルは無言でリビングに向かった

ちなみに、スバルの顔はとても赤くなっていた

「／／／ちよつと、スバル君!／／／」

しかし、スバルは反応せずリビングに向かっている

(…スバル君、何だか顔つきが男の子らしくなって来てる 私はスバル君に釣り合うのかな…)

(ミソラちゃん、抱っこして気付いたけど 顔つきが女の子らしく
なってきたる…僕は、ミソラちゃんに釣り合うのかな)

二人は、全く逆の事を考えていた

ーウェーブロードー

「くそ、オーパーツはどこに消えたんだ！」

そこには、全体は黒で髪は白の電波体？がいた

「くそ、今度はあつちを探すか…」

そう呟くと、その電波体？はウェーブロードを掛けて行った

少しの成長（後書き）

『俺を出せー！』

ウォーロック、いきなりどうした？

『俺を出せー！』

無理矢理だな、我慢してウォーロック
もう無理だー！』

『うるさい、ウォーロック！』

『げ、ハープ！？』

『ほら、行くわよ！？』

『離せー ……』

…が、頑張れ、ウォーロック！

…最近、亀更新ですね（＾ー＾・）
すみません

感想、待ってます！

夕食（前書き）

やっぱり、亀更新になって来てる……（……）

な、何とかしないと！

夕食

ーリビングゲー

「あれ？、何でミソラちゃんがスバル君にお姫様抱っこされてるの？」

メイルは、スバルにお姫様抱っこされて下りて来たミソラを見て、すでに椅子に座っていた熱斗に尋ねた

「俺が知るかよ、スバルに聞いたらどう？」

「そうね まぁいいわ」

「いいのかよ！」

『熱斗君、助けて〜』

「どうした、ロックマン？」

熱斗がメイルにツッコむと、PETからエグゼの悲痛の叫び声が聞こえた

「ロールちゃんが、離してくれないよー」

エグゼは少し泣きそうな声で言った

「? いいじゃん、そのぐらい」

『でも、かれこれ1時間は離してくれないんだよ』

『まだ1時間よ』

「∴ ロックマン、頑張れ!」

『見捨てないで、熱斗君!』

しかし、熱斗はその後エグゼの叫び声を無視し続けた

「／／／はい、ミソラちゃん／／／」

「／／／ありがと／／／」

そんな事をしていると、スバルがミソラを椅子まで抱っこして連れてきた

そして、そのままミソラを椅子に座らせるとスバルはミソラの隣に座った

「ありがとう、メールちゃん。もう座ってて良いわよ？」

「そうですか？、じゃあお言葉に甘えて」

メールは、あかねの料理を運ぶのを手伝っていたがあまりにも量が多かつたためあかねはもういいと言った

そして、メールは熱斗の隣に座った

ちなみに、席は

ミス

あ

メ熱

となっている

「母さん、今日は何か料理が多いね」

「そうよ、だって熱斗君達が来たんだから慌てて作ったわよ」

スバルがそう質問するとあかねは、笑いながら答えた

ちなみに、今日の晩御飯は白ご飯、鶏肉の照り煮、唐揚げ、鯖の煮込み、サラダだった

それらの品をテーブルに並ばせるとあかねも席に座った

「……いただきます!」「」「」

「はい」

そう言つと、みんなご飯を食べはじめた

「そう言えば、熱斗君?」

「何?スバルの母さん?」

「熱斗君とメールちゃんって付き合ってるの?」

「ぶ!」

「ん!?」

熱斗は飲んでいたお茶をスバルにおもいつきり吹いた

メールは、食べていた白ご飯が喉に詰まった

「め、メールちゃん!?!早くお茶を」

そう言つと、ミソラはお茶をメールに差し出した

「んん、ゴクゴク　ぷはあ！し、死ぬかと思った」

「大丈夫、メールちゃん？」

「うん、ありがとうミソラちゃん」

「どういたしまして」

「…熱斗くん！」

「わ、わりいスバル」

「スバル、顔を洗ってらっしゃい」

「そうするよ」

そう言うと、スバルは席を立ち洗面所に向かった

「で、どうなの？」

「「っ、付き合ってますん！」」

二人は顔を赤くしながら答えた

「そうなんだー、付き合ってるって思ってたわ」

「な、ないない、俺がメイルちゃんなんかと…」

『熱斗君!』

「何だ、ロックマン?」

熱斗が全力であかねにそう言つと、いきなりエグゼが熱斗を呼んだ
まるで、熱斗が地雷か何かを踏んだかの様に

「熱斗おー!」

「へ?」

熱斗は、メイルの声にびっくりして後ろを向いた

「熱斗の 馬鹿ああ!」

「ぎゃふ!」

熱斗が振り向くと、メイルは直ぐさま平手打ちを熱斗に喰らわした

勿論、熱斗は反動で椅子ごと後ろにこけた

「いったー！」

「ふん！」

メイルは熱斗に謝らず、何もなかったかのようにご飯を食べ始めた

「あらら、ごめんなさいね」

あかねは、さすがにやり過ぎたかと思って謝ったが少し遅かった

それから、スバルが帰って来るまでみんな無言で食べていた

「…何でみんな無言なの？」

「き、気にしないで早く食べよ、スバル君」

「う、うん」

その後、みんなは食べ終わるまで無言だった

夕食（後書き）

∴ 戦いじゃあない場面って何か書きやすいです（笑）

感想、待ってます

ウイルス発生（前書き）

やっと更新出来ました（・・・・・）

ウイルス発生

「スバルの部屋」

スバル達は、夕ご飯を食べ終わり片付けをすると直ぐさまスバルの部屋に向かった

「…何だか、ご飯を食べてたら疲れたよ」

「そうだね、スバル君 私も疲れたよ…」

「た、確かに疲れたな」

「これもそれも、全部熱斗のせいでしょ!」

「お、俺かよ!?!」

「そうでしょ!」

「いやいや、メイルちゃんが俺の事を叩くか「何か言った?」…何もありません、全て俺のせいです すいませんでした」

「よろしい」

メイルは、凄く笑顔だったが背後にはどす黒いオーラが発生していたので熱斗は抵抗を直ぐさまに止めて雰囲気的にスバル達に謝った

それを見て、スバルとミソラは熱斗を見て苦笑していた

『おい、スバル』

「何、ロック？」

『ウイルスだ』

「何だつて！？ 行くよ、ロック！」

『当たり前だぜ！』

「私も行く！」

「俺も！」

「私も！」

「うん、みんな行こう！トランスコード、シューティング・スター・ロックマン！」

「トランスコード、ハーブ・ノート！」

スバルとミソラは、直ぐに電波変換をして窓から外に出た

しかし、熱斗とメイルはまだ家の中にいた

「…俺達は、どうやって変身するんだ？」

「さ、さあ…」

『熱斗君、シンクロチップを使ったら？』

「でも、あれはディメンショナルエリアがないと発動出来ないだろ
」？」

『でも、こつちの世界に来た時はクロスフュージョン出来てたよね』

「そうだったな！よし、やるぞロックマン！」

『勿論だよ！』

「シンクロチップ、スロットイン！」

「『クロスフュージョン！』」

「私達も行くよ、ロール？」

『勿論よ』

「シンクロチップ、スロットイン！」

「『クロスフュージョン！』」

二人がそう言うと、まばゆい光が熱斗とメイルを包みこんだ

光から出て来たのは、クロスフュージョンした熱斗とメイルだった

「出来た!」「」

『熱斗君、急ごう!』

「ああ、そうだな!」

そう言うと、熱斗とメイルは窓から外にでていった

―公園―

「…見たことのない種類のウイルスだね…」

熱斗達が来るより先に公園に来たスバル達が見たウイルスは、青色で頭にヘルメット見たいな物を着けているウイルスと灰色の獣の様な姿をしたウイルスが沢山いた

「そうね…でも!」

ハープ・ノートはそう言うと、空高く飛び上がった

「ショックノート！」

ハーブ・ノートは上空からショックノートを放った

しかし、青色のウイルスは頭に被っているヘルメットみたいな物を使って防いだ

灰色のウイルスは、素早いスピードでショックノートを完全に避けた
すると、上空にいるハーブ・ノートに向かって灰色のウイルスが一斉に炎を放った

「っやば！」

「オーラ！」

ハーブ・ノートに攻撃が当たる前にロックマンがジャンプしてハーブ・ノートの前に来るとオーラを直ぐに使った

しかし、沢山の炎を一斉に放たれたのでロックマンは少しダメージを受け、ハーブ・ノートとロックマンは地面に着地した

「大丈夫、ロックマン！？」

「うん、このくらい」

『しかし、これは気を引き締めて行かねえとヤバいぞ、スバル!』

「うん、分かってる」

『ミソラも、気を引きしめてね!』

「うん、勿論よ」

しかし、目の前に広がるウイルスを見てロックマンとハーブ・ノートは、顔が青くなっていた

そして二人は「熱斗君、メイルちゃん 早く来て!」と思っていた

ウイルス発生（後書き）

…、亀更新で申し訳ありませんm | | m

感想、待ってます！

心の力(前書き)

題名変ですね) . . . ;)

更新が全然出来ない、すみませんm | |) m

心の方

「バトルカード、マッドバルカン！」

「シヨックノート！」

ロックマンは灰色のウイルスに、ハープ・ノートは青色のウイルスに攻撃をした

しかし、青色のウイルスがシヨックノートを頭のヘルメットで防ぐと、防いだヘルメットから衝撃波が出た

その衝撃波は、ロックマンのマッドバルカンを全て打ち落とした

「ウイルスなのに、感心する程連携プレイが上手だね」

「そ、そうね……」

「なら……フォースチェンジ！」

そう言うと、ロックマンを灰色の光が包み込んだ

そして、光から出て来たロックマンは灰色になっていた

「フォースチェンジ、パニッシャーフォース！」

『一気に決めるぜ、スバル!』

「うん!」

「ロックマンだけ変身して、ずるいよ!」

「え!?そ、そんな事言われても…」

「むう…」

ハーブ・ノートはロックマンを見ながら頬を膨らました

「ハハハハハ…」

それを見たロックマンは、苦笑しか出来なかった

『スバル、来るぞ!』

『ミソラ、構えて!』

「「え?」」

ロックマンとハーブ・ノートは、二人の世界に入っていたのでウオーロックとハーブの声を聞いて、少し驚いてからウイルス達を見る

と目の前には炎を放とうとしている灰色のウイルス達が出た

「やばー！」

「な、なんとかしてロックマン！」

「…マシンガン Spredd！」

ロックマンは、腰のホルダーから2丁の銃を取り出すとそう叫びながら2丁の銃の引き金を引いた

引き金を引いたのと同時間ぐらいに灰色のウイルス達も炎を次々に放った

「うおおおおおー！」

「頑張つて、ロックマン！ ショックノート！」

ハーブ・ノートも少しでもロックマンの負担を軽くしようとしてショックノートを放った

しかし、それはあまり炎には効果がなかった

そして、無数の炎とマシンガン Spredd はぶつかり合った

「うおおおおおー！」

「ロックマン」

ハーブ・ノートは、ロックマンの苦しそうな顔を見て自分の無力さに唇を噛み締めた

（私、もっと強くなりたい！そしてロックマン スバル君を助けるぐらいに強くなりたい！）

ハーブ・ノートは、心でそう誓った

「…、ハーブ・ノート？」

「何、ロックマン？」

「に…げて」

「…へ？」

「もう、駄目 早く…逃げ て」

「私、逃げない！」

「!？」

「私、ロックマンがない世界なんて耐えられないよ」

そう言うと、ハープ・ノートは涙を流した

「ハープ・ノート（僕は、やっぱりこの子を守りたい！）うおお
おおおお！」

「ろ、ロックマン？」

「はああああ……バトルカード、PFB！」

ロックマンは、そう言うといきなりマシンガン Spreッドを放つのを止め直ぐに1丁の銃に変形させた

「シューティングオーバーレーザー！」

ロックマンがそう叫ぶと、1丁の銃からは青色のレーザーを放った

そして、シューティングオーバーレーザーは炎を全て消し去り、灰色のウイルスも半分ぐらいデリートした

心の力（後書き）

…何かグダグダな展開じゃないですか？（-.-;）

感想、待ってます！

ギリギリ(前書き)

更新出来ました!(^| ^)

ギリギリ

「はあはあ」

「大丈夫、ロックマン!？」

ロックマンは、シューティングオーバーレーザーを放つと地面に膝を着いた

「だ 大丈夫 だよ…はあはあ」

「大丈夫に見えないよ…」

『スバル、しんどいだろうがウイルスはまだまだいるぜ』

「うん、分かってる…フォースチェンジ!」

そう言うと、ロックマンを風が包み込んだ

「ロックマン…」

ロックマンが風に包まれて行くのを見てハーブ・ノートは一人呟いた

「はあああああ！フォースチェンジ、サイクロンフォース！」

ロックマンは風を切り裂いて出て来た

その姿は全体が透き通る様な緑だった

「行くよー！」

『おうー！』

「サイクロンスラッシュ！」

そう言うと、ロックマンは青いウイルスとの距離を素早く詰めて手当たり次第に斬って行った

「はあああああー！」

「す、凄い……」

ハーブ・ノートはロックマンを見て素直にそう思った

しかし、灰色のウイルスがロックマンを狙って炎を放った

「甘い！エアロシールド！」

ロックマンは直ぐさま風のバリアを全身に張った

『スバル、いくら何でもこの量は防げないだろ…』

「大丈夫 風を使うから」

『へ？』

「は！」

ロックマンはウォーロックにそう言うと、エアロシールドに当たる寸前に風を使って炎の起動を少し変えた

そのおかげでエアロシールドに当たったのはほんの少しだった

そして、起動を変えられた炎は青いウイルスに向かって行った

「そのまま当たれ！」

『上手いぜ、スバル！』

「でじょっ？」

しかし、次の瞬間全ての青いウイルスが頭のヘルメットで炎を防いだ
そしてそのまま衝撃波がエアロシールドを張っているロックマンに
放たれた

『スバル!』

「やば」

『おい!』

「ぐは!」

ロックマンが張っていたエアロシールドは青いウイルスの衝撃波に
よって破壊され衝撃波はロックマンに貫通した

ロックマンは衝撃波を受けると、空に浮いた

その瞬間を待っていたかのように灰色のウイルスは炎を放った

「ロックマン!」

「うっ」

「エアラスチール!」

その声が聞こえると次の瞬間、クロスフュージョンした熱斗がロックマンの所に瞬間移動したかと思うと、ハーブ・ノートが瞬きをした瞬間にハーブ・ノートの隣にロックマンを抱えている熱斗がいた

「ふう、ギリギリだな」

「ね、熱斗君!？」

「よう ミソラちゃん だよな?」

「今更!？」

「ははは、気にすんな」

「するわよ!」

「熱斗」

「あ、メールちゃん」

「早いよ」

クロスフュージョンしたメールが熱斗の後ろから走ってきた

なぜか、その隣にはアシッド・エースもいた

「何で暁さんが!？」

「驚くのは後だ、ハープ・ノート」

「は、はい」

「行くぞ!」

「僕も、まだやれます」

アシッド・エースの声にロックマンが声を上げた

「無理をするな、ロックマン」

「無理じゃないです 行けます」

そう言うと、ロックマンは「ありがとう」と言いながら熱斗の手から降りた

ちなみに、ロックマンのフォースチェンジは解けている

「ロックマン」

「僕は大丈夫です!」

「無理はするなよ?」

「はい！」

「よし、それじゃあみんな…ちゃっちゃと終わらせるぞ！」

「」「」「はい！」」「」

アシッド・エースが言うと、ロックマンとハーブ・ノートと熱斗と
メイルは声を揃えて返事をした

ギリギリ（後書き）

…何か変な展開ですね……

…ってか更新ペースが全然上がらない（泣）

感想、待ってます！

暁、頑張る？（前書き）

∴ タイトルは読めば多分分かります（笑）

「**暁、頑張る？**」

「バトルカード、キャノン！」

「シヨックノート！」

「ギザホイール！」

「バトルチップ、スプレッドガン！」

「ロールアロー！」

5人は、それぞれ攻撃をウイルスに向かって放った

勿論、狙ったのは青いウイルスではなく灰色のウイルスだ

この攻撃を灰色のウイルス達はまともに受けた

「灰色のウイルス達をデリートしたよ、ロックマン！」

「そっだね」

「これがヒーローの力だ！」

「ヒーローって…」

「暁さん、いつたい何歳なの」

ハープ・ノート、ロックマン、アシッド・エース、熱斗、メイルの順で言った

これで、灰色のウイルスは全てデリートされた

しかし、ロックマン達が会話をしているときいきなり青いウイルスが手にシヨベルを持ちそれを地面にたたき付けた

すると、たたき付けられた所からは衝撃波が現れた

その衝撃波はロックマン達を目掛けて向かって放たれていた

「危ない！」

「「「「え？」「」「」

それに気付いたのはロックマンだけだったため、他の四人は全く気付いていなかった

「つく、バトルカード、オーラ！」

ロックマンはみんなを庇うように立ち、オーラを使った

しかし、当たり前だがオーラで全ての攻撃を防げる訳ではなく衝撃波はオーラを破ってロックマンに直撃した

「がは！」

衝撃波が直撃したロックマンはその場に倒れ込んだ

みんなは、ロックマンが時間を稼いでくれたおかげで攻撃を避ける事が出来た

しかし、ハープ・ノートはアシッド・エースに手を捕まれてその場を離れていた

「ロックマン！」

ハープ・ノートは直ぐさまロックマンに駆け寄った

他の三人は、青いウイルスに向かって行った

「ロックマン、直ぐに片付けるぞ！」

『うんー！』

「ソウルユニゾン、ブルースソウル！」

そう言うと、熱斗を光が包み込んだ

その後、光から出て来た熱斗はブルースソウルに変身していた

「バトルチップ、ソード、ワイドソード、ロングソード！ プログ
ラムアドバンス！」

『ちよっ、熱斗くーー』

「ドリームソード！はあああ！」

熱斗は、ドリームソードを使って青いウイルス達を攻撃した

勿論、それで全体がデリートされる訳では無かったが、その威力を
目の前にしたアシッド・エースは目を疑った

「…………アシッド」

『何ですか、シドウ？』

「俺、ヒーロー止めるかも」

『そうですか…』

そういう会話をした二人はその後、熱心にウイルス退治をしていた

「ロックマン、ロックマン！」

「うう…ハーブ ノート？」

「ロックマン！良かった！」

ロックマンは、衝撃波を受けて倒れ込んだ後、気を失っていたのでハーブ・ノートがずっと介抱していた

「大丈夫、ロックマン？」

「多分 大丈夫だよ…」

「今癒してあげるからね！」

「ありがとう」

「ヒーリング・ソング」

ハーブ・ノートはそう言うと、綺麗な歌声で歌を歌い始めた

その歌を聞いていたロックマンは、徐々に体の痛みが抜けて行つたそして、ハーブ・ノートが歌を歌い終わるとロックマンは完全ではないが痛みが抜けていた

「どう、ロックマン？」

「ありがとう、おかげで凄く体が楽になったよ」

『良かったわね、ミソラ？』

「うん！」

ハーブに聞かれると、ハーブ・ノートは笑顔で答えた

その笑顔にロックマンがドキッとしたのは、言うまでもない

「おい、大丈夫かー？」

そう熱斗が言うと、熱斗とメイルとなぜかくたくたになっているアシッド・エースが走ってロックマンとハーブ・ノートの所にまで来た

「大丈夫だよ それより、暁さんが大丈夫ですか？」

「俺は、大丈夫だ！何たってヒーローだからな！」

そう言ったアシッド・エースは、体中汗だくだった

(本当に大丈夫かな)

「良かったね、ミソラちゃん？」

「うん、メールちゃん」

二人は、笑いながらそう言った

「よし、帰ろうぜ？」

「そうだね」

『シドウ？』

「え？ あ、そうだったな…熱斗、メール」

「はい？」

ロックマンと熱斗が帰ろうと言う話をしていると、アシッド・エースが熱斗とメールに話し掛けてきた

「二人とも、明日からはコダマ小学校に通ってくれ」

「…え？」

「二人の転校の手続きはもうしてある」

「ちょっと待って下さいよ、暁さん！」

「どうした、スバル？」

「な、何で暁さんが熱斗君とメールちゃんがこっちの世界に来てるのを知っているんですか？」

「ああ、それはだな…いや、悪い！それは言っちゃいけないだよ」

「え！？」

「でも、いづれ分かるだろう」

「何てあやふやな答え…」

「っと、いつ訳で二人ともちゃんと学校行けよ…じゃあ！」

そう言つと、アシッド・エースはその場からいなくなった

「」「」「」

「…とりあえず帰ろうよ！ね、ロックマン？」

「そつだね」

そう言つと、四人はスバルの部屋に帰って行った

「?????」

「シュック」

「何でしょう、バルアナ様？」

「お前にこれをやる。それを使って奴を攪乱するのだ」

そう言って、バルアナはシュックに変なエネルギーっぽいものが入った小さなビンシュックに渡した

「これは、何ですか？」

「それは、オーパーツのエネルギーをコピーしたものだ」

「…分かりました」

そう言うと、シュックはその場を後にした

「?????」

「っく、なぜオーパーツの反応が掴めないんだ!…もっと集中して
みるか…」

そう言うと、少年はその場で目をつぶった

「!?!?何だ 急にオーパーツの反応が…行ってみるか」

そう言うと、少年はオーパーツの反応がした所に向かった

暁、頑張る？（後書き）

分かりましたよね？（笑）

…ってか、更新が遅くてすみません！m（ ）（ ）m

鈍感（前書き）

今回は、更新が早めに出来ました！！

…やっぱり、戦闘より日常の方が書きやすいです！

鈍感

「…なんだか疲れたね」

「…「そうだな（ね）」」

『『『『そうだな（ね）』』』』』

部屋に帰ってきたスバルが言った言葉に、他の7人？はハモって答えた

「…もう、お風呂に入って寝ようか」

「スバル君、お風呂してないってお母さんが言ってたよ？」

「え！？ 何でミソラちゃんがそんな事知ってるの！？」

「だって、トイレに言った時に聞いたからね」

「いつの間にトイレに行ったの！？」

「さっきだよ？」

「そ、そうなんだ（全体気付かなかった…）」

「じゃあ、風呂はどうすんだ？」

「そっね…」

「銭湯にでも行く?」

「…ミソラちゃん、自分の職業言ってみて?」

「え? 学生?」

「歌手でしょ!」

「ああ、そっちな」

ミソラは、右手をグーにして自分の額を軽く叩くと舌を出して「忘れてた」と言った

((か かわいい!!))

その仕草に、スバルだけではなく熱斗も顔が赤くなった

「!!!…熱っ斗〜!」

「へ? め、メールちゃん!??」

それを見たメールは、熱斗の背後に立つときいきなり熱斗の頭をグーで叩いた

「痛！」

「制裁よ！」

「んな！なら、スバルはどうなんだよ！？」

「スバル君はいいの！」

「差別じゃねーか！」

「熱斗、あんたって本当に鈍感ね」

そう言うと、メイルは嘆息してからまたさっきまで座っていた場所に座った

「いい、熱斗？」

「あ、ああ」

なぜか、メイルが熱斗の方を向いて説教みたいなものが始まった

「まずね、ミソラちゃんはスバル君が好きなのは分かるわよね？」

「／／／ちよつ、メイルちゃん！／／／」

「そ、そうだったのか」

『熱斗君』

メイルが熱斗にそう言つと、ミソラは顔が赤くなりエグゼは苦笑した

スバルは…本を読んでいる

だが、なぜかスバルの顔も少し赤い

「それで、スバル君もミソラちゃんが好きなの」

「…え、ええええええ！そうだったのか!？」

「『…熱斗(君)』」

熱斗がそう叫ぶと、メイルとエグゼは呆れた表情をしている

勿論、ミソラとスバルの顔は真っ赤だ

「なるほど、だからスバルはいいのか!」

「そう言つ事!…で話を戻すけど、お風呂でつするの?」

「今から用意すればいいじゃんか」

「それもそうね…私、用意してくる」

そう言うと、メールは下の階に向かった

「……………」

「……………」

「……………」

(き、気まずい…)

なぜか、スバルの部屋には変な空気が漂っていた

「(助けてくれ、ロックマン!)」

『(そ、そんな事言われても困るよ!)(』

熱斗は、小声でエグゼと会話を始めた

「(そう言わずにさ、なあ、頼む!)」

『(ゴメン、熱斗君…僕にはどうすればいいか分からないよ)(』

「(えええええ!ロックマンが頼りだったのに…)」

『(ゴ、ゴメン熱斗君)』

「(仕方ない…こうなったら!)」

『(こうなったら?)』

「(…メールちゃんの所に向かおう!)」

『(へ?)』

そう言くと、熱斗は立ち上がってメールがいる下の階に向かった

そして、部屋はとても気まずい空気になった

『……………』

『……………』

「……………」

「……………」

『だああああ!何なんだよ、この雰囲気は!』

『ロツク、黙りなさい!』

『げぶ!』

ウォーロックがいきなり大声を出したので、ハーブが思いつ切りウォーロックの頭を叩いた

『いつてえな！』

『黙りなさい！』

『！？、はい…』

ウォーロックは、ハーブの後ろの黒いオーラ見たいのが見えたので直ぐに言うことを聞いた

（うわー、何か私顔赤いよね…うん、絶対赤いよ。こんな顔、スバル君には見られたくないな…）

ミソラがそう思うと、スバルがいきなり本を閉じてミソラに近付いてきた

（え、え！？ 何かスバル君、近付いて来てるよね？ な、何で！？）

「ミソラちゃん」

「ひゃい！」

ミソラは、なぜか緊張していたので「はい」を囁んでしまった

「…もう無理！」

「へ？」

そう言うと、スバルはいきなりミソラに抱き着いた

「／／／ちよつ、す、スバル君！？／／／」

「／／／ゴメン、もう少しこのままでいさせて？／／／」

「／／／う、うん／／／」

(…両手に収まるんだもんなあ やっぱり、僕がミソラちゃんを守らなきゃ！)

スバルがそう思っていると、下の方から「ボン！」と言う音が聞こえた

その音のせいで、スバルはミソラに抱き着くのを止めた

「何の音！？」

「分からない 行ってみようよ！」

「うん！」

そう言うと、二人は下の階に向かった

ー風呂場ー

「何が起きたの!?!」

スバルとミソラが風呂場に向かうと、そこにはアフロ頭の熱斗とメイルがいた

「ケホ、ケホ」

「ケホ、最悪」

「ふ、二人とも大丈夫？」

「ああ、大丈夫だけど…風呂場が」

「…爆発しちゃった」

「おかしい、オーパーツはこんなに移動するはずは…まあいい、見
つければ分かる事だ」

そう言うと、銀髪の少年はオーパーツの移動する反応に向かうスピ
ードを上げた

鈍感（後書き）

何か、スバルがミソラを守るって何回も言ってますね（笑）

感想、待ってます！

銭湯（前書き）

深夜更新です（＾|＾；）

最近、時間が取れる様になって来ました（*＾o＾*）

銭湯

ーコダマ銭湯ー

「おお、思ったよりでかいな！」

「そうね」

「ミソラちゃん、まだ帽子取っちゃだめだよ？」

「分かってるよ 何て言っただって、スバル君が私の言う事を何でも一つ聞いてくれるんだしね」

「ははははは…」

スバルはミソラの発言に、苦笑をした

何で、こういう事になったかと言うと…

ー回想ー

「私、帽子は被りたくない！」

「え！？何でさ！？」

「だって、髪の毛がくしゃくしゃになるんだもん！」

「いいじゃん、直ぐにお風呂に入るんだから！」

「スバルが良くても、私は良くない！」

「何でさ!?!」

「女の子はそういうもんなの!」

「そうなの、メールちゃん!?!」

「え、私!?!」

「そう、メールちゃん!」

「私は、どっちでも…!」

「ほら、ミソラちゃん聞いた?」

「うっ…スバル君の」

「僕の?」

「バカー!」

「何でそうなるの!?!」

ミソラはそう叫ぶと、その場に入たれ込んで泣きはじめた

無論、演技だが…

「え！？ちよつ、ええ！？」

パニックに陥ったスバルは、とりあえずしゃがんだ

「わ、悪かったよ ミソラちゃん」

「うっ、なら帽子被らなくていい？」

「帽子は被って！ でも、そのかわりに」

「そのかわりに？」

「僕が、ミソラちゃんの言う事を何でも一つ聞いてあげる」

「！？ じゃあ被る」

そう言うと、ミソラは直ぐに笑顔になると、立ち上がって帽子を被った

「ミソラちゃん！？ あれ、演技！？」

「うん、演技」

「…まあ、いいか」

「頑張れ、スバル！」

この様子を見ていた熱斗とメイルは見事にハモって言った

ー回想終了ー

「じゃあ、ミソラちゃんまた後で」

「うん」

「じゃあね、メイルちゃん」

「うん、また後で」

そう会話すると、スバルと熱斗は男湯にミソラとメイルは女湯に向かった

ー男湯ー

「おお、中もでかいぜ！」

「そうだね！」

二人は、更衣室に入ると直ぐに着替えて風呂場に入った
勿論、ハンターV.GとP.E.Tはロッカーに入れている

「ほら、さっさと洗って入ろうぜ！」

「そうだね！」

その後、二人はせっせと体を洗った

「よし、早く入ろうぜ！」

「そうだね」

「まずは…電気風呂だ！」

「最初が!?!」

「そうだ！」

そう言つと、熱斗は電気風呂に向かった

「じゃあ、僕は普通のお風呂に入ろう」

スバルは、電気風呂の隣の風呂に向かった

「うががが、じびれる〜」

(あれ、電気風呂ってそんなに痺れたっけ?…まあいいか)

「ズバルもごいよ〜」

「僕はいいや」

「ぞつか〜」

「…にしても、やっぱり銭湯のお風呂は気持ちいいや」

「ぞつだな〜」

「…熱斗君、もう出たら?」

「ぞつぞつ〜」

そう言つと、熱斗は電気風呂からスバルがいる普通の風呂に入って来た

「ふうー、何か疲れたがとれた感じだぜ」

「良かったね」

「ああ、じゃあサウナでも行くか？」

「でも、あれって別料金なんじゃ？」

「大丈夫、俺達は金がいっぱいだから！」

「…あ！そうか、さっきウイルスをたくさん倒したから」

「そういう事だ、行こうぜ！」

「そうだね」

そう会話すると、二人はサウナに向かった

「うわー、暑いな」

「サウナだからね」

「よし…スバル、勝負だ！」

「何の？」

「どっちが長くここにいられるか！」

「（それやって何の意味があるんだろっ…）いいよ」

「よっしゃ、負けた方はジューズ奢りだからな！」

「ええ！？…分かった！」

そう言うと、二人は空いている所に並んで座った

銭湯（後書き）

まだまだ、銭湯は続きます（ ）

『熱斗君、倒れなきゃいいけど……』

『スバルもな……』

感想、待ってます！

『俺（僕）達は無視！？』

銭湯くさくさ (前書き)

なかなか早く更新出来ました!!! ()

ってか、一日が終わらない! (- . . .)

銭湯くさ

―男湯・サウナ―

「熱斗君、結構きつそうだけど大丈夫？もう出た方がいいんじゃないか？
い？」

「へへん、俺はまだまだ余裕だぜ！ スバルこそきつそうだけど、
出た方がいいんじゃないか？」

「僕も余裕だよ」

「意地を張らなくてもいいんだぜ」

「そっちこそ、張らなくていいんだよ？」

「張ってねーよ」

「僕もだよ」

とか言ってる二人は、実は結構きつかったりしている

だが、ジュース1本の奢りがかかっているためかそれとも意地のせ
いか、二人とも全く出る気配がなかった

「そろそろ、温度上げますね」

そう言ったのはここの従業員で、お湯を持って入って来た

「!?!」

これを見た二人は、お互いに顔を見合わせると、風のごとくサウナを出た

「はあはあ」

「はあはあ　まあ勝負は引き分けだな」

「そうだね」

そう会話をしながら、二人は水風呂に入った

「ふあゝ、気持ちいい」

「だね」

「よし、露天風呂に行くか!」

「そうだね!」

二人は、水風呂をでると露天風呂に向かった

「女湯」

「うわ、広いね」

「ミソラちゃん、あまり大声出さない方がいいんじゃない？」

「そうだね、少し抑えよ」

「じゃあ、体洗って早く入ろうよ」

「うん！」

ミソラとメールは、まず体を洗い始めた

「うわ、ミソラちゃん髪の毛サラサラあ」

「ありがとう でも、メールちゃんもサラサラだよ」

「本当？ありがとう」

その後、二人はさっさと体を洗った

「じゃあ、お風呂入る？」

「うん」

「まずは あれ！」

「あれって、電気風呂だよ？」

「うん、電気風呂入る！」

「一番最初に入るもんじゃないんじゃ」

「ほらほら、行くよ」

そう言うと、メールがミソラの手を掴んで電気風呂まで歩いた

「じゃあ、先に入るね」

「…私、隣のお風呂に入ってるね」

「りょうか〜い」

メールはミソラに敬礼らしきものをしながらそう言うと、メールは電気風呂にミソラは普通の風呂に入った

「どう、メールちゃん？」

「きもちいいよ〜」

「（電気風呂って、言葉が変わるほど痺れたっけ？）そ、そう」

「ミゾラちゃんも入っただら？」

「わ、私は遠慮しとくよ」

「ぞろ」

ミゾラはお得意の演技で笑顔を作ってメールに言った

（10分後）

「ぞろぞろ出るね〜」

「うん」

「ふう、気持ち良かった」

「そ、そっなんだ（あれは気持ち良かったの？）」

「ねえ、露天風呂行こ？」

「うん、良いよ」

二人は露天風呂に向かった

ちなみに、スバルと熱斗もちょうど露天風呂に向かっていた

―女湯・露天風呂―

「わあ、誰もいない！」

「珍しいね」

「スバル君達も露天風呂にいるかな？」

「呼んでみたら？」

メイルがそう言うと、ミノラは「すう」と息を吸って「スーパール君」と言った

―男湯・露天風呂―

「え？」

「今のは、ミノラちゃん!？」

「呼ばれてるぜ？」

「う、うん」

スバルはそう言うと、「なーに？」と叫んだ

そして、返って来た言葉は「そっちに行ってもいい？」だった

ちなみに、男湯と女湯の仕切はただ木が重なっているだけなので、やろうと思えば木を登ってこっちに来れるのだ

「ちよつ、え!？」

「す、スバル！」

「分かってるよ！」

「ならいいが」

そう言うと、スバルは「駄目！」と叫んだ

―女湯・露天風呂―

「ほら、駄目って返って来たでしょ?」

「うっ」

ミソラはメイルに言われて、少し泣きそうだった

「そんなに直ぐに会いたいなら、さっさと上がればいいんじゃない?」

「…そうだね!」

そう言ったミソラの目は輝いていた

そして、ミソラは「じゃあ、早く上がってね!」と叫ぶと直ぐに「分かった」と聞こえた

「で、メイルちゃんは熱斗君と付き合わないの?」

「ノノノななな、何で私が熱斗と付き合うの!?!ノノノ」

「へえ〜でも、付き合いたいんでしょ?」

「／／／うん／／／」

「…なら、告白しちゃうなよ?」

「／／／そんなの、急に／／／」

「大丈夫だよ、私も急に告白してOKだったから」

「へえ、そうなんだ」

「だからね、告白してみたら?」

「／／／うん／／／」

「じゃあ、上がるっか?」

「／／／そうだね／／／」

そう会話すると、二人は露天風呂を後にして更衣室に向かった

―男湯・露天風呂―

「で、スバル?」

「何?」

「分かったって言うちまったけど、まだ俺達入って2分ぐらいしか

経ってないぜ？」

「…あ！、ゴメン」

「いや、まあ良いけどさ」

「ゴメン」

「じゃあ、上がるか」

「うん」

二人は、ミソラとメールより早く露天風呂を後にして更衣室に向かった

銭湯くさくさ (後書き)

ふう、やっとここまで来た…

「…俺を出せ」

へ！？き、君はソ「名前 出してもいいのか！」

良くないね、うん良くない

「早く俺を出せ」

いやいや、剣を突き出さないでくれ！

このまま行ったら、命がなくなるので！

感想、待ってます！

「逃げるな！」

銭湯くろく（前書き）

今回は、ほとんど銭湯関係ないです（＾―＾；）

銭湯くさく

「銭湯・休憩所」

「いや、気持ち良かったなスバル？」

「そうだね」

スバルと熱斗は、コーヒーミルクを持ちながら銭湯の休憩所のソファーに腰掛けていた

ミソラとメールはまだ出てきてはいない

「そういえばさ」

「何だよ、スバル？」

熱斗はそう答えると、手に持っていたコーヒーミルクに口をつけた

「熱斗君ってメールちゃんと付き合ってるの？」

「ブーーーーー！」

熱斗は、スバルの質問に飲んでいたコーヒーマルクを吐き出した

「な、何だよいきなり！」

「いや、気になってさ」

「…付き合ってたねえよ」

「えー？そうなんだ（付き合ってたと思ってた）」

「……………」

「…メールちゃんの事好きなの？」

「…どうなんだろうな」

「え？」

「自分でも分かんねえだよ　ただ、メールちゃんを自分の命に変えても守りたいってのはあるかな」

「そうなんだ（それって好きって事なのかな？）」

「はははは、自分でもよく分かんねえや」

「そ、そうなんだ」

「あ、スバル君！」

「熱っ斗〜」

スバルと熱斗が会話をしていると、ミソラとメールが向かって来た
ちなみに、ミソラはちゃんと帽子を被っていた

「あ、ちゃんと帽子被ってる」

「うん だからスバル君、後で言うこと聞いてね」

「…うん（ミソラちゃん、目が何か怖いよ…）」

「じゃあ、帰ろう?」

「うん」

そう言うと、4人は銭湯を後にした

―公園―

「あ!、忘れ物しちゃった!」

公園に着いたらいきなりメイルがそう言った

「熱斗、ついて来て」

「え？」

熱斗がそう言うと、メイルは熱斗の腕を引っ張った

「スバル君ミソラちゃん、助けてー！」

「頑張つて！」

「先に帰ってるねー」

そう言うと、スバルとミソラは先に帰って行った

―公園・入口―

「熱斗」

「何、メイルちゃん？」

熱斗はメールに呼ばれて隣にいたメールに振り向いた

そこには、暗くてあまり分からなかったが熱斗にはメールの顔がほんのりと赤くなっているのが見えた

「メールちゃん、顔赤くない？」

「／／／熱斗？／／／」

「何？」

「／／／熱斗は好きな人いる？／／／」

「うーん、あまり分かんねえけど守りたい人ならいるよ」

「／／／そうなんだ／／／」

「うん」

「／／／熱斗 好き／／／」

メールは、熱斗に聞こえないように言った

「え？、何か言った？」

「／／／ 熱斗、好き！／／／」

メールはそう言うと、熱斗に抱き着いた

「／／／え！？ちよつ、ええ！？／／／」

「／／／熱斗は私の事嫌い？／／／」

「／／／いや、嫌いじゃねえよ　むしろ、好きだと思つ／／／」

「／／／じゃあ　／／／」

「／／／俺と付き合つて下さい／／／」

「／／／喜んで！／／／」

そう言うと、メールは熱斗にキスをした

無論キスされた熱斗は、顔を赤くしその場に気絶した

「／／／ちよつと、熱斗！／／／」

『完璧に気絶してるわね』

「…仕方ないな、シンクロチップ、スロットイン、クロスフェュー
ジョン！」

『え！？』

メールがそう言うと、メールは光に包まれた

その光から出て来たのはクロスフュージョンしたメールだった

「よし、熱斗を連れて帰らなきゃ」

『そうね』

そう言うと、気絶した熱斗の左手を肩に回した

「バトルチップ、エリアスチール」

そう言うと、メールと熱斗はその場からいなくなった

「スバル家」

「「ただいま」」

「おかえり」

スバルとミソラが帰って来ると、あかねが明るく迎えてくれた

「スバル君、早く部屋に行って寝ようよ」

「え、あ、うん（ミソラちゃん、何かお願いを言っかと思っただのに 何も無いのかな？良かった）」

「ほら、早く」

そう言うと、ミソラはスバルの服を掴んで部屋に連れて行った

ースバル部屋ー

「じゃあ、寝ようか」

「スバル君、忘れてない？」

「何を？」

「私の言っ事を聞っつて事を」

「いや、覚えてるよ？」

「そっ、なら…」

「なら？」

「／／明日、デートしよ？／／」

「え？（デートって…ミソラちゃんってばれたら僕が殺されるよ…）
それは、ちょっと…」

「約束」

「…はい」

こうして、スバルは明日学校が終わるとミソラとデートする事になった

その後、気絶した熱斗を抱えてメールが帰宅するとみんな直ぐに眠った

「?????」

「バルアナ」

「何だ、キング？」

「Mr. を付ける」

「いいだろう、たかがMr. ぐらい」

「まあいい それより、前から開発していた例の力がついに完成したぞ」

「何？では、それを使えば」

「地球から、絆、と言う物が無くなるだろうな しかしこれを使うには、この力を何かに込めなければ いや、大丈夫か」

「何、どういう意味だ？」

「ふっふっふ、響ミソラを使えばいいのだよ」

「なるほどな」

バルアナはMr・キングの意図を読み取ると、その場で高笑いを始めた

「フハハハハ！楽しみだ」

「しかし、響ミソラを使うにはあのロックマンがどうしても邪魔だな」

「心配するな、私が行く」

「それは安心だな 頼むぞ、バルアナよ」

「頼まれてやるっ」

そう言うと、玉座からバルアナは立ち上がった

ーベイサイドシティ・ウエーブロードー

ここでは、シュックと銀髪の少年が向かい会っていた

「…おかしいと思えば、こつ言つ事か」

「ツフ、貴様がブライか？」

「ああ、そつだ…」

「なるほどな、あの方に聞いていた通りだな」

「黙れ！」

ブライと呼ばれた少年が叫ぶと、どこから出したのかブライの右手には剣が握ってあった

「行くぞ！、オーパーツを返してもらつ！」

「それは、無理だと思っがな」

こうして、ブライとシュツクの戦いが始まった

銭湯くろく（後書き）

：何か、告白がおかしかったですね（・・・）

物語も、もう終盤に入って来そうです！！

感想、待ってます！

ささやかな平穩（前書き）

…まさかの、一日に2話更新 頑張りました（o^ ^o）

ささやかな平穩

―翌日―

「ふわぁ〜…」

先に起きたのは、やっぱりミソラだった

ちなみに、昨日はスバルのベッドにスバルとミソラが寝て、一枚新しく布団を引いてそこに熱斗とメールが寝た

「うーん、今は…7:30分 朝食の用意しなきゃね…」

そう言ったミソラだが、自分の今は状況を見てやっぱり止めた

ミソラの今の状況は、スバルとミソラがお互い向き合って抱き合っている感じだ

(ふふふ、朝食作るよりスバル君の寝顔見てる方が楽しいよ…あれ、目がとろ〜んと…ZZZZ)

ミソラはそのまま寝てしまった

18:00分

「みんなー、朝よー！起きなさい！」

あかねがリビングから大声でスバル達を呼んだ

その声で、ミソラとメイルは直ぐに起きた

しかし…例によってスバルと熱斗は起きなかった

「んもう、スバル君ったら…えい！」

ミソラはそう言うと、スバルの鼻を摘んでスバルにキスをした

「ZZZ…んん！？んんんんんん！（ええ！？息が出来ない！）」

「ん？ おはよう、スバル君」

スバルが起きたのを確認すると、ミソラはキスを止めて手を離れた

「おはよう、ミソラちゃん」

「ほら、早く用意してリビングに行く」

「そうだね」

「…ミソラちゃん、何て大胆…」

メイルはミソラのした事に、顔を赤くしていた

「なら…ん!」

「ZZZ……んん!?んんんんん!? (何!?メイルちゃん!?)」

「///ん、おはよう、熱斗///」

「///お、おはよう///」

「ほら、二人とも顔を赤くする前に早く用意しないと」

「「あ!」」

熱斗とメイルは、ミソラの一言でさっさと用意をした

そして、スバル達は用意が終わると4人でリビングに向かった

「おはよう、みんな」

「「「「おはよう(いじょういます)」」」」

「ほら、早く食べなさい」

「「「「はい…いただきます！」」」」

「ぞぞぞ」

4人は席に着くと、直ぐに朝ごはんを食べはじめた

「おはよう お！君達が光熱斗君と桜井メールちゃんか？」

「おはよう、大吾さん」

「おはよう、父さん」

「おはよう、お父さん」

「「スバル君のお父さん？」」

「え？あ、まだ会ってなかったね。そうだよ、あの人は僕の父さんだよ」

「「初めまして」」

「光熱斗です」

「桜井メールです」

「ははは、まあこれからよろしく頼むよ」

「「こちらこそ、よろしくお願いします」」

「ははは で、話は変わるが スバル？」

「ひゃひ、ほうさん？（何、父さん？）」

スバルは、口にご飯を食べていたのでちゃんと喋れなかった

「いやな、学校が終わったらスバルとミソラちゃんとメールちゃんもWAXAに来て来れ」

「「「「え！？」「」「」」

「いやな、渡したい物があるんだ」

「「「「分かった（分かりました）」「」「」」

「悪いな」

と会話していると、あかねが「早く食べなさい」と言ったので、みんなさっさと食べ始めた…無論、大吾も含めて

「「「「」ちそうさまでした」「」」

「お粗末様」

大吾を除く4人はみんな一斉に食べ終わった…ミソラは、なぜかわかりをしていたような…

「じゃあ、みんな学校に行こう」

「「「うん（ああ）」「」」

スバルがそう言ってみんなが返事をする、そのまま家を出た

「「「「」行ってきまーす！」「」」」

「「「行ってらっしやい」「」」

そう行って家を出ると、4人は学校に向かった

ささやかな平穩（後書き）

m 明日から15日まで修学旅行なので、更新出来ませんm（| |）

感想、待ってます！

バルアナ襲来(前書き)

修学旅行終わったー()

バルアナ襲来

―学校・校門前―

「ふああああ、今日も学校か…」

「いやいや、熱斗君は今日が初めてなんじゃ?」

「いゝや、俺の時代では昨日まで学校に行ってたぜ?」

「…なるほどね」

ミソラとメールはスバルと熱斗の会話を見てお互い笑っていた

そして、4人は学校に入って行った

―近くのウエーブロード―

「ふふふ、あれが響ミソラか…」

そこには、不気味に立っているバルアナがいた…

「よし、今日はまず転入生を紹介するぞ」

スバルとミソラが教室に入ると、先生が直ぐに教室に来てそう言った

「では、入って来れ」

そう言われて入って来たのは、もちろん熱斗とメールだ

「転入生の光熱斗です。これからよろしく!」

「同じく、転入生の桜井メールです。これからよろしくお願いします!」

「よし、なら光と桜井の席は…(ん?なんか聞いた事のある苗字だな…まあいいか) そうだな、星河の左側が空いてるからそこに机を置いて座ってくれ」

「はい」

二人は言われた通りにどこから持って来たか分からないが、机と椅子をスバルの左側に席を置いた

これにより、スバルの横の列は左から、熱斗、メイル、スバル、ミソラ、キザマロ、委員長と言う何とも言い難い席になった

―学校・2時間目―

今は、2時間目で算数の時間だ…無論、熱斗はうめき声を出している

「ようし、じゃあこの問題を…光、解いてみる」

「ええ!？」

ちなみに、問題は6分の2×3分の1÷6分の3だ

「ええと…分かった、6分の1!」

「違!違!違!わ、この馬鹿ものが!」…へ?」

今の言葉を聞いたクラスのみんなは窓の外を見た

なぜなら、今熱斗を馬鹿と言ったのは先生の声ではなく外から聞こえた声だったからだ

「…あんた誰？」

「我か？我は ビックバンの王のバルアナだ」

そこにいたのは、バルアナだった

「『『『ええええええええ！？』』』」

今の発言を聞くと、熱斗とスバルとミソラとメイルは同時に叫んだ
他のみんなはビックバン自体知らないので、あまり驚かなかった

「…さて、我は響ミソラに用がある」

「わ、私に何か用？」

「我と一緒に来い」

「…嫌だと言ったら？」

「…この学校が廃墟になるぐらいかな」

「そんな事はさせない！ミソラちゃんもこの学校も守る！」

「お前は、誰だ？」

「僕は…ロックマンだ！行くよ、ロック！」

『おう、いつでも来いや！』

「トランスコード、シューティング・スター・ロックマン！」

そう言うと、スバルはロックマンに電波変換した

「行くぞ、バルアナ！」

「来い、ロックマン」

そう言うとバルアナは、下のグラウンドに降りた

「スバル君 私も！」

「ミソラちゃんは、ここで待っててね」

そう言うと、ロックマンはみんなから「頑張れ！」と言う声援を受けながら窓からグラウンドに飛び降りた

「熱斗、私達も行くわよ」

「当たり前だぜ、なあロックマン？」

『そうだね!』

「シンクロチップ、スロットイン!」

「『クロスフュージョン!』」

そう言うと、熱斗とメイルはクロスフュージョンをした

しかし、直ぐにクロスフュージョンは解除されてしまった

「な、何で!？」

「もしかして…故障？」

「最悪だああああ!」

熱斗は嘆き悲しんだ事は、スバルとバルアナは知らない

ー学校・グラウンドー

「行くぞ、バルアナ!」

「今まで、負けた行った者たちの分まで仇をとってやるか…」

バルアナ襲来（後書き）

無理矢理でしたかね… すいません

あ、ブライとシュックの戦いはもう少し後の方で書きます

感想、待ってます！

スバルVSバルアナ(前書き)

前回は変なところで切ってます(前書き) m

スバルVSバルアナ

「バトルカード、ブレイクサーベル」

「剣か…ならば、我は刀と行こうか」

バルアナはそう言うと、どこからか出した刀を右手に握った

ロックマンは、右手をブレイクサーベルに変形させた

「行くぞおおおおお」

「来い、ロックマン！」

ロックマンはそう叫ぶと、バルアナに向かって走り出した

そして、バルアナを射程距離に捕らえるとブレイクサーベルをバルアナに向かって何度も振り下ろした

しかし、バルアナは右手に握っている刀でブレイクサーベルを何度も弾いて簡単に防いだ

攻撃を弾かれたロックマンはバルアナと少しだけ距離をとった

「そんなものか？」

「つく！なら バトルカード、ロングソード！」

ロククマンは左手をロングソードに変形させると、バルアナに突っ込んだ

「まだまだあああああ！」

「今度は二刀流か…なら、ライジング！」

バルアナがそう言うと、右手に握っている刀にパリパリと音を立てた電撃が走っていた

「な、電撃！？」

『スバル、気をつけろ！』

「もう遅い！ライジングソニック！」

「っな！？」

バルアナがそう叫びながら刀を振り下ろすと、電撃を帯びた斬撃がロククマンに向かって放たれた

ロックマンは斬撃を避けようとしたが間に合いそうになかったので左手のロングソードで防ごうとしたがロングソードに斬撃があたりロングソードは折れて斬撃はロックマンに直撃した

「ぐはあああああ」

直撃したロックマンは、その場に倒れた

「この程度か？ふん、つまらん！」

「…まだ…まだだ」

「何？」

そう言うと、ロックマンはその場に右手のブレイクサーベルを杖代わりにしてふらふらしながらもその場に立ち上がった

「まだ、僕はやれる！はあああああ、フォー스チェンジ！」

そう言うと、ロックマンの周りには風が吹き始めると、風がロックマンを包み込んだ

ロックマンが風を切り裂いて出てくると、その姿はサイクロンフォースになっていた

「フォースチェンジ、サイクロンフォース！」

「なるほど、まだ楽しめると言う訳か…」

「はあああああ、サイクロンスラッシュ！」

「風属性の攻撃か…ライジングスラッシュ！」

ロックマンとバルアナはそう叫ぶと、お互いに向かって走り出した

そして、ロックマンとバルアナがお互いの射程距離に入るとお互い自分の武器で相手を斬ろうとした

しかし、お互いがお互いを斬ろうとしたためつばぜり合いとなった

「はあああああああ！」

「…この程度か？」

「何!?!」

「はあああああああ！」

「な!?!」

バルアナが刀に力を込めると、ロックマンの右手のソードは真っ二つに折れてしまった

そのため、サイクロンスラッシュは不発に終わりロックマンはライジングスラッシュをもちに受けてしまった

「ぐはあああああああ！」

「まだ行くぞ、うおおおおお！」

「な…何だ…？」

バルアナが右手に持っている刀を地面に刺すと、右手に力をため始めた

そのためバルアナには隙が出来たが、もはやロックマンにその隙を攻撃するほどの体力は残っていなかった

「終わりだ、ロックマン…デリートブラスター！」

バルアナがそう言うと右手からは凄まじいエネルギーのレーザーがロックマンに向かって放たれた

ロックマンは、その場から逃げようとしたが後ろが学校のため逃げる事が出来なかった

「っく、エアロシールド！」

「無駄だ！」

ロックマンはすぐさまエアロシールドを使ったが、バルアナの言ったとおり直ぐにシールドは破られた

「うわあああああああ！」

ロックマンは、デリートブラスターをもろに受けその場に倒れこみ意識を失った

学校は、ロックマンがデリートブラスターを全て受けたので壊れることは無かった

スバルVSバルアナ（後書き）

∴ ロックマン惨敗です（- -∴）

ちなみに、バルアナが使ったライジングはシュックよりも強力です

感想、待ってます！

崩された平穩（前書き）

今回ぐらいからは、終盤編です…多分ですけどね（＾・＾・）

崩された平穩

「ふん、ロックマン この程度か」

『スバル、スバル!...このやろう、許せねえ!』

「なら、コスモウエーブから我らビックバンの基地に来るがいいでは、本来の目的をこなすでしょうか」

そう言うと、バルアナは校舎の方にジャンプした

―学校・6 - B―

「響ミソラ、来てもらおうか」

「待って、スバル君はどうしたの!？」

「さあな、グラウンドに墓でもあるんじゃないのか？」

「!？」

バルアナがそう言うと、教室内は「スバルが ロックマンが負けた!？」などの声が飛び回った

その言葉を聞いた熱斗は教室を飛び出した

それを見たメイも熱斗を追いかけて教室を飛び出した

ちなみに、今日はツカサは家の用事でゴン太は食べ過ぎの腹痛で学校を休んでいた

「さあ、響ミソラ…来るんだ」

「嫌よ！ハープ！」

『ポロロン 分かってるわよ』

「トランスコード、ハープ・ノート」

「はああ、めんどろだな・・・」

そう叫ぶとミソラはハープ・ノートに電波変換をした

「スバル君のかた ！？つく・・・」

『ミソラ！』

ハープ・ノートが言い終わる前に、バルアナが刀を逆手持ちにしてハープ・ノートを攻撃してハープ・ノートを気絶させると、バルア

ナはハーブ・ノートを担いだ

そして、バルアナはハーブ・ノートを担いだまま外にあるウェーブロードに飛び移ると、そのまま姿が見えなくなった

ー学校・グラウンドー

「スバル！」

「待って、熱斗！」

グラウンドにいるのは、電波変換が解けていて気絶しているスバルとウォーロックと、今走ってきた熱斗とメールがいる

熱斗は、倒れているスバルを見つけると直ぐに駆け寄った

「スバル、おいスバル！」

「うう」

「熱斗、病院に運ぼう！」

「そうだな！」

そう言うと、熱斗とメイルはスバルに肩を貸して病院まで急いだ

「コスモウエーブ」

「あゝあ、ついにロックマンが負けちゃったかあ　しかし、まさかサイクロンフォースがあんなに簡単に負けるとな…あのバルアナって言うやつはちょっとまずいな」

そこには、あの電波商人がいた

「　　しゃあないな、WAXAにでも行くか」

そう呟くとそこには、もう電波商人はいなかった

崩された平穩（後書き）

久々にあの電波商人が出ました

あいつの正体はそろそろ分かります ^ - ^

感想、まっています！

病院：（前書き）

久々です（ ）

の割には…

病院：

ーとある病院・集中治療室前ー

現在このスバルはこの病院の集中治療室にいる

だが、スバルは大ダメージを受けているが熱斗とメイルがなるべく早くに病院に連れて行ったおかげで命に別状はなかった

今は、熱斗とメイルとこの事を聞いた暁がソファアーに座っていた

「良かったー」

「ああ…」

「どうした、熱斗？」

「暁さん 俺は何でクロスフュージョンが出来なかったんですか！
？もし、俺がクロスフュージョン出来ていたら結果は代わってたか
もしれない！」

「『『『熱斗（君）…』』』」

「暁さん、教えて下さい！」

「悪いな、熱斗…俺にも良く分からないんだよ だが、とりあえず
はこれを使え」

そうやって暁は熱斗とメールにシンクロチップに似たチップを手渡した

「これは？」

「これはだな、お前達のシンクロチップを元にして作った、シンクロチップ改だ！」

「今までのとどう違うんですか？」

「今までのより、多分だがバトルチップの転送が早くなっているはずなんだ」

「…何か、微妙ですね」

「結構しんどいんだぞ！」

暁は、熱斗に対して指を指して言った

それを見ていたメールは思わず笑ってしまった

「よし、ここでくよくよしても仕方ないぜ…ロックマン、特訓だ」

『うん、そうだね…』

そう言つと、熱斗はPETを握つてどこかに向かつて走つて行つた

「待つて熱斗！」

そう言つと、メイルは熱斗を老いかけて行つた

「ふう、そろそろ俺も帰るか……」

暁がそう言つと、席を立ち上がつて帰ろうとすると、どこかから「この子の保護者さんはいませんか？」と言つ看護師がいた

暁は気にせずとその看護師の前を通ろうとすると、看護師が「あなたが保護者ですか!？」といきなり行つて来た

「え!?!いや、俺は「ほら、早く来て下さい!」えええええええ!?!」

そう言われると、暁は看護師に無理矢理病室に入れられた

そこには、スバルのライバル?のソロが眠っていた

「(な、何でソロが!?!)」

『（分かりません、とりあえず看護師さんに話を聞きましょう）』

「（ああ、そうだな）」

暁とアシッドは他の人には聞こえない様な小声でしゃべった

「あつ、この子は一体どうしたんですか？」

「それが、あまり分からないんですよ」

「へ？」

「いえね、この子は近くにいた人がですね通報してくれたんですよ」

「通報？」

「はい、ある人が「大変です！子供が大怪我を負って倒れています！」って電話をしてくれたんです」

「そ、そうだったんですか…」

そう言われた暁は「そうですか」と言っただけで病室を出た

「どう思うつ、アシッド？」

『…あまり分かりませんね　とりあえず、ソロが目を覚ますのを待

「ちまじょう」

「ああ、そうだな」

そう言うと暁は病室のソファーに腰掛けた

「ベイサイドシティ・ウェーブロードー

「あれ、WAXAってどこやったっけな？…やばいな、完璧に忘れてもつたな…とりあえず、他の電波に聞いて見るか」

謎の電波商人は、完璧に迷っていた

「…電波商人もなぜかいないな　っていうか、ここで何かあったんか？」

そう、ここにはなぜかクレーターみたいなものや斬り傷みたいなものが
沢山あった

「はああ、そりゃ電波がない訳だ…どないしよかな？」

そう言つと、謎の電波商人は辺りをトボトボと歩き始めた

病院：（後書き）

感想、待ってます！

記憶喪失（前書き）

遅くなりましたm（
|
）
m

記憶喪失

―病室―

「ふああ…暇だな」

暁はそう言いながら、欠伸をした

その直後、ソロがうめき声を出しながら目を覚ました

「うっ…ここは？」

それを見た暁は、ソファから立ち上がりソロに近付いた

「やっと起きたか？」

「…お前は誰だ？」

「へ？」

暁はソロに言われた言葉に対して変な声が出てしまった

「…お前、自分の名前が解るか？」

「……俺は誰だ？」

(嘘おおおおおお！)

暁はソロが言った言葉に心の中で凄く叫んだ

そして、心から驚いた

「アシッド、これって記憶喪失だよな？」

『はい、そうですしょう』

「…マジかよ ぶっする、アシッド？」

『…とりあえず、WAXAに連れて行きましょう』

「ああ、WAXAなら色々と検査も出来るしな」

『はい』

「よし…じゃあ、ソロ？」

「…ソロって言うのは俺の名前か？」

「ああ、そうだと、ソロには来てもらいたい所があるんだが」

「ああ、どうせ行くところも無いしな」

「じゃあ、とりあえず準備をしてくれ」

「ああ」

そう言っていると、ソロはベッドから起き上がると服を着替え始めた

『しかし、シドウ？』

「何だ、アシッド？」

『勝手に外出して大丈夫でしょうか？』

「ああ、それはだな」

暁が何かを言おうとすると、部屋のドアをコンコンと叩かれると看護師が部屋に入って来た

「失礼しま…って、何着替えてるんですか!？」

「ああ、すいません　しかしですね」

そう言っていると、暁は懐から何かを出した

それを見た看護師は少し驚いて「何でも無いです」と言って部屋を出た

『シドウ、何をしたんですか?』

「いやな、サテラポリスの手帳見たいなのを見せたただだよ」

そう言つと、暁はうまい棒を取り出して食べはじめた

「サクサクサクサクサクサク」

『…はぁあ』

暁がうまい棒を食べていると、ソロが着替え終えて暁に声を掛けてきた

「着替え終わったぞ」

「サクサクサクサク　じゃあ行くか」

「あぁ」

そう言つと、暁とソロは病室を出てWAXAに向かった

ちなみに、向かう道にうまい棒を売っている店があり暁はそこでうまい棒を大人買いをした

それをみたソロは、なぜか頭痛を覚えた

ーバイサイドシティ・ウェーブロードー

「…WAXAはどこやあああああー！」

謎の電波体はそう叫びながらひたすら走りまくっていた

回りにいた電波君達は、なぜか哀れむ様な目つきをしていた

記憶喪失（後書き）

感想、待ってます！

身体検査？（前書き）

久々です
|
:

身体検査？

「サクサクサクサクサク…着いたぞ」

「思ってたより、でかいな」

「そうか？まあいい」

そう言うと、暁はソロを連れてWAXAの中に入っていった

「WAXA・司令部」

「ここは？」

「ここは、WAXAの司令部だ…しかし、博士は一体どこにいるんだ？」

「博士？」

「ああ、ここにはヨイリー博士って言う人がいるんだよ」

「…それと俺の記憶喪失は関係あるのか？」

「何でだ？」

「だって、博士と医者は関係ないだろ？」

「ああ、それなら心配ないさ」

「なぜ？」

「まあ。そのうち分かるさ」

「適當かよ」

ソロは、深くため息をついた

すると、司令室にあるエレベーターが開いた

「あら、暁ちゃんじゃない」

「博士、待っていました」

「……このおばさんがヨイリー博士なのか？ この施設大丈夫なのか
（？）

「どづしたの暁ちゃん？」

「それがですね カクカクシカジカで」

「ふんふん、なるほどね」

（分かったのか！？）

「とりあえず、ソロちゃんを検査しましょう」

「分かりました」

そう言うと、ヨイリーはさっさと司令室から出て診察所に向かった

「よし、行くぞソロ」

「ああ」

それを見て、二人も診察所に向かった

— WAXA・診察所 —

「じゃあ、まずここに寝ていてね」

「分かった」

そう言うと、ソロは近くにあったベッドに寝た

「博士、これって」

「脳内を見る装置よ」

「いや、それは分かっていますよ」

「ならいいじゃない」

「はあ……」

こうして、ソロの身体検査が始まった

身体検査？（後書き）

感想待ってます!!

身体検査？〜？〜（前書き）

今回は、早めに更新できました^ - ^

正直、身体検査関係ないです - | - :

身体検査？〜2〜

―15分後―

「…おい」

「どうした？」

「結局何か分かったのか？」

「どうなんですか、ヨイリー博士？」

「何も分からなかったわ」

「……おい！」

「しいて言えば、ソロちゃんの体は健康ってことが分かったわ」

「……もういい」

そう言つと、ソロは診察室を出ようとした

「待て待て、ソロ！」

そう言つと、暁はあわててソロの右手を掴んだ

「何だ？」

「と、とりあえず今日はここに泊まって行け…どうせ、行く所がないんだろっ？」

「…そうだな、じゃあ部屋に案内してくれ」

「（結構、扱いやすいな）ああ、ついてきてくれ」

そう言つと、暁はソロの右手を放してソロに部屋に歩き始めた

その後をソロはついて行った

— WAXA・病室 —

「ここは？」

「単なる病室だよ…個室でよかったよな？」

「ああ」

そう言つと、ソロはベッドに座った

「じゃあ、俺はちょっと行くところがあるから」

「ああ」

そう言いつと、暁は病室を出た

― WAXA・入り口 ―

「そろそろ、俺も帰って寝るか」

『シドウ、早くしないと、時間が…』

「っげ！ 早くしないと!!」

『はい』

そう会話すると、急いで走って駅に向かった

身体検査？〜（後書き）

はい、今回はこんな感じで終わって見ましたー…：

感想待っています！

スバル・起床(前書き)

やっとスバルが起きます ネットばれじえねえか(殴

スバル・起床

「翌日、とある病院・病室」

「うん…」

スバルはあれから治療を終えて、普通の病室に移されていた
その部屋は、個室だが近くには熱斗とメールが寝ていた

「…ここは？」

『起きたか、スバル！』

スバルが目を覚ますと、直ぐにウォーロックがスバルに向かって話しかけた

「ロック　ここは、一体？」

『病院だ、お前はバルアナに負けて熱斗たちに運ばれたんだよ』

「…じゃあ、ミソラちゃん？」

『…バルアナに連れて行かれたよ』

「ミソラちゃん…っく！」

スバルは、そう言つとベッドの上でうずいた

『大丈夫か、スバル！？』

「うん…行かないと」

『っな！？』

そう言つと、スバルは服を着替え始めた

それを見たウォーロックは、熱斗とメールをすぐに起こした

「うん…おはよう、ウォーロック」

「おはよう、ロック君」

『ああ、おはよう…じゃなくて！早くスバルを止めてくれ！』

「っえ！？スバル、何着替えてんだよ！」

「いや、ミソラちゃんを助けに行かないと きっと僕を待ってる」

「でも、そんな体で何が出来るんだよ！」

「…でも、僕はミソラちゃんを守るって決めたんだ！」

「今行っても、死ぬだけだろ！」

「僕は、ミソラちゃんを助けるまで死なない！」

「スバル…じゃあ、ちょっと待ってる！」

「え？」

「俺も行くからよ」

そう言うと、熱斗は笑顔で握った右手をスバルに向けて親指を立てた

「俺も行く、そして俺はお前を助ける！」

「熱斗君…ありがとう」

「ちょっと、私も忘れないでよね！」

「あ！…ごめんごめん」

「っもう、熱斗ってば…いいよね、スバル君？」

「二人とも、ありがとう！」

「「気にすんなよ（しないで）」

『はああ、お前らなあ』

「ごめん、ロックでも行かなきゃならないんだ！」

『スバル…よし、なら俺も行ってやるぜ！』

「ロック！　ありがとう！」

『おう！』

「なんか、ウォーロックにいいところもって行かれたなあ」

「そうねえ」

『気にすんなよ』

「「「ははは」」」

スバルの病室に、三人の笑い声が響き渡った

スバル・起床(後書き)

感想待ってます！

フォースPGMとエースPGM(前書き)

ううん、題名がおかしい…

まあ、気にしないで下さい！(^ ^)
| ^ ^)

フォースPGMとエースPGM

「よし、行こう！」

「おお！」

「ちょっと待ってもらおうか」

「！！？」

スバル達が今にも病室を出てミソラを助けに行こうとしたら、部屋の外から声が聞こえた

声が聞こえると、直ぐにその声の主は病室に入って来た

「暁さん！？」

「ああ、お前らどこに行く気だ？」

「……」

「僕達は、ミソラちゃんを助けに行きます！」

「……そうか」

「え！？」

「どろした？」

「いや、何かあっさりとした解答だったから…ねえ？」

「うん 私はてっきり絶対に行かせないとか言うのかなあって思ってたし」

「ハハハハ、そんな訳ないだろう…だが、スバル」

「はい？」

「出かけるのは、もう少し待ってもらおうかな」

「嫌です、僕はミソラちゃんをー」

「お前は、ミソラがどこにいるのか知っているのか？」

「っ！？……知りません」

スバルは暁の指摘に言葉を飲んだ

「だろう？もう少しで分かるから、少し待ってろ」

「え？、もう少しって？」

「今、調べてるんだよ…指令室でな」

「僕も指令室に行きます！」

「ん？ああ、別に良いぞ」

「スバルが行くなら俺も！」

「私も！」

「ああ、どんどん来い！」

「どんどんって……」

暁が言った言葉にスバルは苦笑した

「じゃあ行くか」

「……はい！」「……」

暁がそう言うと、スバルと熱斗とメイルは声を揃えて返事をした

― WAXA・指令室 ―

「着いたぞ」

「こんにちは、スバルちゃん、熱斗ちゃん、メイルちゃん」

「こんにちは、ヨイリー博士！」

ヨイリーに挨拶をされると、スバルは直ぐに返事をした

また、熱斗達も少し戸惑いながら返事をした

「それで、ヨイリー博士、ミソラちゃんの居場所は？」

「まだ分かってないの ごめんね」

「そう ですか…」

ヨイリーの解答を聞くと、スバルは少し落ち込んだ

スバルが落ち込んでいると、不意にどこから声が聞こえた

「あんたがロックマンか？」

「「「「「！？」」「」「」

その声を聞くと、スバル達の顔は引き締まり直ぐに回りを警戒した

だが、声の主はそれを見ると直ぐに姿を現した

「どうも」

「お前は誰だ！？バルアナの手下か！？」

そいつが現れると、スバルは声を震わせてそう言った

「バルアナ？…いやいや、違う違う」

「本当に？」

「こんな格好をした手下がいてたまるかいな！」

「…確かに」

そいつの格好は、まるで電波商人みたいだった

「ふう で、アンタがフォースを使ってるロックマンやな？」

「な、何でフォースを知ってるだ！？」

「だって、フォースPGM作ったのワイやし」

「……ええええええええ！？」

「んで、ワイはフォースPGMを少し改良しようかなって思って」

「改良？」

「そうや、フォースPGMを改良してノイズ対策をもう少し加えるんや」

それを聞くと、ヨイリーは直ぐに言った

「なら、このエースPGMの機能を入れてちょうだい」

「ちょっと見せてもらおか？」

「ええ」

そう言つと、電波証人はコンピュータに入つてあるエースPGMの詳細を見はじめた

フォースPGMとエースPGM（後書き）

感想、待っています！

正体（前書き）

今回、やっと電波商人の正体が判明します!!（b^I。）

……更新遅くてすみませんm（）（）m

正体

「うーん、この機能を全て入れるのはちょっときついなあ」

「そう……なら、このファイナライズの機能だけならどうかしら？」

「それやったら、問題あらへんわ」

「じゃあ、ファイナライズ機能を入れてちょうだい。ファイナライズ機能自体にも少しぐらいならノイズ対策が着いてるし」

「せやな……なら、善は急げやな」

そう言うと、その電波商人はスバルのハンターV-Gに入った

『うわ、何だてめえは！？』

「ちよっとくすぐりたいでえ」

『ちよつ、てめえひゃはあああ！』

「こんな奥にあるんか」

『ひゃはああ、いいかげんうひゃひゃひゃ！』

「……ロック、大丈夫かな？」

「大丈夫だろ」

「だといいけど……」

「よっしゃ、取れたで」

『はあはあはあ、てめえはいつかぶった斬る……』

電波商人はフォースPGMを取り出すと、ウォーロックを無視してスバルのハンターV.Gから出て来た

「じゃあ、悪いけどこの機械を借りるで？」

「ええ」

電波商人がそう言うと、ヨイリーは直ぐに返事をした

「…にしても、この姿やったら流石にやりにくいな……っほ！」

電波商人がそう呟くと、電波商人の姿がみるみると変わって行った

その姿は、熱斗が良く知っている姿だった

「パパ!？」

「ん？ ああ、そう言えば、君は光博士の息子さんやったね」

「ど、どうして？」

「ああ、簡単だよ…ワイは、光博士の分身みたいなもんやからね」

「ぶ、分身？」

「そつや、ワイの知能は元々、光博士の知能なんよ」

電波商人がそう言うと、ヨイリーが「だから、フォースPGM何て高度なプログラムを造れたのね」と言った

「そつ言う訳やな…うーん、少し時間がかかるなあ」

「それなら、スバルちゃんと熱斗ちゃん」

「はい？」

「二人で、勝負をしたらどうかしら？」

「へっ！？」

「ほら、新旧ロックマン対決ってやって見たくない？」

「僕は別に『やるぜ、やるに決まってるだろ！』……ロック…」

『どつする、熱斗君？』

「……………（フルフル）」

『ね、熱斗君？』

「うおおおおお！ 燃えてきたあああああ！」

『……………熱斗君』

「やってやるぜ！」

「『はあ、全く……………』」

ウォーロックと熱斗が燃える中、スバルとエグゼは少し呆れていた

『ほら、スバル、善は急げだ！』

「はいはい、分かったよ……」

「ロックマン、行くぜ！」

『全く、しょうがないなあ』

「ふふふ、決まった様ね……………じゃあ、こっこの部屋でやってちょうだいね」

「『おっ！』」

ウォーロックと熱斗は、ヨイリーが指した部屋に孟ダッシュで向かった

それに続いて、スバルはゆっくりと部屋に向かった

「…博士、本当はこの二人の勝負が見ただけなんじゃ？」

「ふふふ、当たり前じゃない。何て言っただって、新旧ヒーロー対決よ？」

「んな！ ヒーローなら、俺もです！」

『シドウ、ここで出て行ったらみんなからKYと言われますよ？』

「っつ！？ ならしょうがないか…」

そう言つと、渋々だが暁はヒーロー勝負に向かうのを止めた

「……そうだ、良い事を考えた」

そう言つと、暁はどこかに向かった

「ふふふ、じゃあ、あの部屋のTV中継をONにして……これなら、例え宇宙や地下にいても見れるわよね？」

ヨイリーは一人そう呟いた…

その呟きは、メールにも聞こえた…

(ミソラちゃんも、見れるよね?)

— WAXA・病院 —

「おい、起きてるかぁ？」

「……勝手に部屋に入って来るな……」

暁の目の前には、明らかに今起きた感じのソロがいた

「それより、良いもんが見れるぞ！」

「良いもの？」

「とりあえず、来い！」

「ああ」

その言いつと、ソロはベッドから出て、
暁の後に続いた

正体（後書き）

……何だが、展開が凄い事になってる気がする、作者こと充です（^| ^ ;）

次回はなるべく早くに更新したいと思います（ . . . ; ）

新旧ロックマン対決！？（前書き）

題名どおり、新旧ロックマン対決です！

って言うても、まだ戦闘には入ってませんが……

新旧ロックマン対決!?

「WAXA・実験室」

「結構広いね」

『ああ。これなら、結構暴れられるぜ!』

「熱斗君、本当にやるの?」

「当たり前だぜ!こんなにわくわくするのは久しぶりだぜ!」

『熱斗君...』

『「さあ、行くぜ!」』

『「はあ、しかたないか(ね)」』

「トランスコード、シューティング・スター・ロックマン!」

「シンクロチップ、スロットイン!」

「『クロスフュージョン!』」

そう言うと、二人は光に包まれた。そのおかげで、部屋は光でいっぱいになった。

― WAXA・司令室 ―

「さあ、始まるわよ。天地ちゃん、よろしくね。」

「分かりましたよ。」

そう言うと、天地はパソコンを操作した。すると、テレビには実験室の様子が映し出された。

― スバル家 ―

「あら？ いきなりチャンネルが変わったわ…これって、スバルじゃない!？」

「どうした、あかね？」

「大吾さん！ スバルが、スバルがテレビに！」

「そうか…これは面白そうな戦いだな。…ふむ、新旧ロックマン対決ってとこだな」

「大吾さん。なんでそんなにのん気なんですか!？」

「あかね、スバルは大丈夫だ。…なんて言っただって、俺たちの息子だからな」

「…大丈夫かしら…」

「まあ、見守るつぜ。」

「ええ、そうですね…（スバル、頑張つて！）」

―ルナ家―

「委員長、大変だ！ テレビに、テレビにスバルが写つてやがる！」

「何ですって!?!」

そう言うと、ルナはテレビの部屋までダッシュした。

そこには、ゴン太とキザマロが座っていた。

「ほんと、ロックマン様じゃない！ 何でテレビに?」

「さあ、分かりません。」

「なあ、もう一人のやつは誰なんだ?」

「さあ…はっ！ ま、まさか!」

「どつしたのよ、キザマロ?」

「あれって、200年前のロックマンじゃないですか!?!」

「そんなわけ……そういうば、転入生の名前、何て言ったっけ!？」

「確か…光熱斗って…あっ!」

「2000年前のロックマン様…」

「よく分かんねえけどさあ。これって新旧ロックマン対決ってこと
でいいのか？」

「た、確かに!」

「がんばれ、スバル! 勝ったら、牛井おごってやるぞ!」

「頑張つて、ロックマン様あ!」

(委員長の言ってるロックマンは多分、スバル君の方ですよね?)

ー日本ー

「あれって、ロックマンじゃないか？」

「本当だ! ロックマンだ!」

「もう一人は…ロックマン!？」

「ど、どっとなってるんだ!？」

日本では、何でロックマンが二人いるんだ！？ という騒ぎが起きていた。

「?????」

「起きろ、響ミソラ」

「……うっ……ここは……はっ！ バルアナ！」

「威勢がいいやつだな」

ミソラは起きると、まず自分の状態を確認した。ミソラは手を縛られており、バルアナに抵抗する事が出来ない状態だった。

「っく！」

「まあ、そう怖がるな……今からいいものが見れるぞ？」

「いいもの？」

そう言うと、バルアナがミソラの後ろを指で指した。ミソラもそれにつられて振り向いた。

そこには、スバルと熱斗が映し出されたテレビがあった。

「スバル君!？」

「新旧ロッキーマン対決だ…楽しませて貰おうじゃないか」

この二人の戦いは後に奇跡の一戦として崇められることになる。

新旧ロックマン対決!?(後書き)

感想お願いします!

新旧ロックマン対決！~~~~~（前書き）

やっと戦闘です^^^

新旧ロックマン対決！???

—WAXA・実験室—

光が薄くなっていくと、実験室には二人の少年が立っていた。

「行くぜ、スバル！」

「いつでもいいよ！」

「へへっ。バトルチップ、ソード！ スロットイン！」

「バトルカード、ソード！」

そう言うと、熱斗とスバルは左手をソードに変えた

すると、熱斗とスバルはお互いに向かって走り出した

「うおおおおお！」

「はあああああ！」

「食らえ！」

「やああ！」

二人はお互いが射程距離に入ると、すかさず攻撃を放った。

二人のソードはお互いにぶつかり、つばぜり合いになった。

「うおおおおお！」

「はあああああ！」

二人とも、全く引けをとらない状態だった。

しかし、二人ともが力を入れすぎて、先にソードにヒビが入った。

「このまま行くぜ！」

「っな！？ ぐは！」

スバルはヒビが入ったソードを見て、後ろに下がろうとした。

しかし、その瞬間に熱斗はヒビが入ったソードでスバルを斬りつけた

斬られたスバルは、反動で少し仰け反った。

熱斗は、そこをまた連続で斬りつけようとした。

だが、流石にスバルはそれをヒビが入ったソードで跳ね返した。
すると、お互いのソードの限界が来てソードが砕け散った。

「まだまだ！ バトルカード、ウィンディアタック！」

「っな！？ がっ！」

スバルはソードが折れて、隙を見せた熱斗にウィンディアタックを使って反撃をした。

熱斗はガードする暇も無く、攻撃を受けた。

攻撃を受けると、熱斗は風に乗せられて、壁にぶつかった。

『大丈夫、熱斗君！？』

「ああ、もちろんさ！」

『スバル、来るぞ！』

「うん…（こっちがフォースチェンジが出来ない以上、相手の方が有利に決まってる。だから、隙を突いて攻撃しないと…）」

「ソウルユニゾン、サーチソウル！」

そう言うと、熱斗の体は青から緑に、そして右手にはライフルが装備されていて、まるでスナイパーみたいだった。

「スナイパー？」

「そうだぜ！　くらえ！　スコープガン！」

「！？　バトルカード、インビジブル！」

「無駄だ！」

「えっ！？　ぐはっ！」

熱斗はスバルに向かってライフルを構えて何発か放った。

それを見たスバルはインビジブルで攻撃を避けようとした。

しかし、インビジブルで攻撃が当たらないはずのスバルに、熱斗が放った弾は直撃した。

「な、何で…」

「スコープガンは、対インビジブル、対水中攻撃性能を持っているんだよ」

「な、なるほど…（こねって、すくまずいんじゃ）」

「行くぜ！ スコープガン！」

「くっ！ バトルカード、マッドバルカン！ はああああ！」

熱斗がまたスコープガンを使って攻撃をすると、スバルはマッドバルカンで攻撃を打ち落とした。

「まだまだああ！」

「くっ！」

熱斗は打ち落とされても、直ぐにスコープガンを放った。

スバルは、弾丸を全て使ってしまったので、直ぐには対処できなかった。

「間に合うか？ バトルカード、ヘンゲノジュツ！」

「っな！」

そう言うと、スバルは攻撃を受けると、そこにいたスバルは狸になっていた。

そして、スバルはすかさず熱斗の懐にもぐりこんだ。

「食らえ！」

「っ！？ バトルチップ、バリア！」

「っな！」

スバルが反撃をすると、熱斗はバリアで攻撃を防いだ。

攻撃を防がれたスバルは、熱斗と距離をとった。

「なかなかやるな、スバル！」

「まあね！」

「これからだぜ！」

「こっちだつて！」

『行くぜ、スバル！』

「うん！」

「ロックマン、俺達も負けてらんねえぜ！」

『そうだね、熱斗君』

「」「行くぞおおおお！」「」

二人のロッキーマンは、声を上げて走り出した。

新旧ロックマン対決！~~~~~（後書き）

グダグダですね…すいません。

質問なんですけど、ロックマンのソウルユニゾンでフォルテ版ってありましたよね？

あれって、やっぱりフォルテソウルなんですかね？

新旧ロッキーマン対決！~~~~~（前書き）

まさかの二日連続投稿…こんな内容でいいですか？>|<

新旧ロックマン対決！~~~~~

「うおおおおお！」

「行くぜえええ！ スコープガン！」

二人はお互いに向かって走っている。

そして、熱斗は距離がまだある内にスバルに攻撃を放った。

「行くよ、ロック！」

『おう！』

「バトルカード、エドギリブレード！」

「『ウォーロックアタック！』！』」

そう言うと、スバルの左手はエドギリブレードに変化した。

さらに、スバルは一気に熱斗の前にまで瞬間移動をしていた。

「っな！？」

「やああ！」

「バトルチップ、バリア！」

「早い！？」

スバルが熱斗に斬り掛かると、熱斗は寸前でバリアを出して避けた。

「でも、まだまだ！」

「どうかな！？」

「つく！？」

スバルは、熱斗に下から上に向かって斬り掛かったため、スバルの左手は上にある

熱斗はスバルの左手を自らのライフルをつつかえ棒みたいにして、下に振れなくした。

「バトルチップ、キャノン！」

「しまっ！？」

「くらええええええ！」

「がはっ！」

スバルは熱斗からの攻撃を避ける事が出来ずに、もろに喰らった。そのため、スバルは吹っ飛ばされ、壁にたたき付けられた。

「ててて。流石にきついね…」

『ああ、流石は200年前のロックマンだな』

「だね……でも、フォースが使えたら、まだ勝ち目があるかも知れないのに……」

『ああ。だが、無いものねだりしても仕方がねえ』

「まあ、そうだね……」

そう言っていると、不意に頭に「フォースPGMダウンロード、開始します」と聞こえてきた

「…ロック、時間を稼ぐよ！」

『ああ！』

「バトルカード、グラウンドウェーブ！」

「っお！ なら…バトルチップ、メットガード！」

スバルは、ツルを出現させて地面を叩いた。

すると、地面から熱斗に向かってショックウェーブが発生した

しかし、そのショックウェーブは熱斗が出現させた盾の様な物で跳ね返された

跳ね返されたショックウェーブはスバルに向かってきた。

「くっ、バトルカード、ブラックホール！」

スバルはそう言って、自分の前にブラックホールを出現させた

ショックウェーブがそのブラックホールに飲み込まれると、ブラックホール共々消滅した

「はあはあ」

「流石はスバルだな！」

「ははは、流石は200年前のヒーローだね…はあはあ」

「えっ！？ 俺って、この時代でそういわれてるのか？」

「え？ あ、うん」

「そうだったのかあ…聞いたか、ロックマン？」

『うん。まさか、僕達がここまですごい人になってるなんてね』

「だな…さてそろそろ時間稼ぎも終わったか？」

「えっ！？ 気づいてたの？」

「だって、お前等の会話…駄々漏れだったしなあ」

「……ま、まあこの際はいいや！ じゃあ、行くよ。ロック！」

『ああ！』

確かに、エグゼと熱斗が話をしている間にダウンロードは完了していた

「フォースチェンジ！」

スバルがそう言うと、スバルは灰色の球体に包まれた

— W A X A ・ 司令室 —

「おお、無事にダウンロード出来たんか。良かった、良かった」

「もう終わったの？」

「まあな。元々、ワイの頭の中で何度も実験してたからな」

「流星は光博士の頭脳ね」

「ははは、それってワイは褒められてないで？」

「そうね。ありがとう…ええっと、あなたの名前は何かしら？」

「ワイの名前？ …ワイの名前はライトや」

「そう。ライト、ありがとうね」

「いやいや、かまへんで」

「…それより、なかなか見所のある戦いね」

「…俺って、もしかしてヒーローじゃない？」

「…だろっな」

「うそだあああああ！」

ソロにそう言われると、暁はその場に倒れこんだ

「…なんなんだ、一体…」

その状況に、ソロは訳が分からなかった

新旧ロックマン対決！〜〜〜（後書き）

感想待ってます！

新旧ロックマン対決！~~~~4~~~~（前書き）

この戦いはまだまだ終わりません！

……本編いかね（泣）

新旧ロックマン対決!??4

灰色の光がスバルを包んで約10秒がたった。

すると、スバルを包んでいた灰色の光が弾けた。

中からは、灰色になったスバルが出て来た。

「フォースエンジン、パニッシャーフォース!」

「へえ。何かサーチソウルに似てるなあ」

「そついえばそうだね…じゃあ、行くよ!」

「おう、来い!」

「バスターズナイプ!」

「スコープガン!」

二人は互いのスナイパーから銃弾を何発か放った。

しかし、二人の銃弾はお互いに届く前に必ず相殺してしまっていた。

「これじゃあキリがない。…なら!」

スバルはそう言うと、スナイパーを普通の右手に戻した。

そして、腰のホルダーに入れてある2丁の拳銃を取り出した。

「マシンガン Spreddo！」

「なっ!?!」

スバルは両手に持っている拳銃から、何十発もの銃弾を放った。

熱斗はあまりの多さに少しびびりした。

「なら、バトルチップ、バルカン、バリア！」

熱斗は右手をスナイパーからバルカンに変えると、バリアを張った。

そして、マシンガン Spreddo に向かってバルカンを放った。

「おりゃああああ！」

「無駄だよ！」

「何っ!?!」

スバルがそう言うと、バルカンの弾が当たったマシンガン Spredd は拡散してバルカンの弾を逆に撃ち落としていた。

なので、マシンガン Spredd は半分ぐらいは熱斗に直撃した。

熱斗はバリアを張っているが、マシンガン Spredd のあまりの多さと拡散機能にバリアも破られた。

「うわあああああ！」

熱斗はマシンガン Spredd の反動で、後ろにのけ反った。

「はあはあ、やるなスバル！」

「まあね！」

『大丈夫、熱斗君？』

「ああ、まあな」

『どつする、熱斗君？』

「そうだなあ…流石にサーチソウルじゃきついな…だけど…」

『だよね…』

熱斗とエグゼが言っている意味は…ソウルユニゾンには、パニッシ
ヤーフォースみたいな連射が出来る姿がないのだ。

ナパームソウルでも、マシンガン Spredd には負けるだろう。

「どうする？」

『どうしようか？ …ちょっと待って、熱斗君』

「どうした、ロックマン？」

『通信だよ』

「へっ？」

「熱斗君、苦戦してるなあ」

「あんたは…確か…」

「ライトっちゆうねん。よろしくな」

「ああ、ライトね。こちらこそ、よろしく」

「っで、今回はワイから君にプレゼントや」

「プレゼント？」

「大事に使いや」

そう言われると、熱斗の右手の拳が光だした。

熱斗は右手の拳を解いてみると、そこには「MEMORYチップ」と書かれたチップが2枚あった。

「これは？」

「まあ、簡単に言ったら君のロックマンの記憶の物をバトルチップでも姿でもコピーする的なアレや」

「…何か適当だな」

「気にしたら負けやで！」

「ははは、まあそつだね。ありがとう、おじさん」

「ええつて。まあ頑張りや」

「おつー！」

そう言つと、通信が途絶えた。

そして、熱斗はMEMORYチップ1枚を直した。

そして、もう1枚にはある姿を記憶させた。

「行くぞ、ロックマン！」

『うん、熱斗君！』

『来るぞ、スバル！』

「うん！」

そして、熱斗とエグゼは高らかにこう叫んだ。

「『MEMORYチップ、ソルクロスロックマン！』！」

熱斗はまばゆい光に包まれた。

新旧ロックマン対決！？～4～（後書き）

や、やってしまった…（^| ^ ;）

確か、ソルククロスロックマンって太陽が出ていたらチップの威力が上がるんですよ？

後、チャージショットが、チップのガンテルソルになるんですよね？

感想待ってます！（^| ^ ;）

新旧ロックマン対決！~~~~5~~~~（前書き）

やっと書けました！

ってか、まだ続きます、このバトル（笑）

新旧ロックマン対決！~~~~5

『気をつける、スバル！』

「うん、分かってる！」

スバルがそう言うと、熱斗がまばゆい光から出て来た。

その姿は、今までのサーチソウルでもノーマルスタイルでもない、新たな姿だった。

そして、背中には赤いマフラーがあり、全体の色はオレンジに変わり、頭は髪の毛が逆立っていた。

「…ロックマン」

『うん』

「『行くよ！』」

『来るぞ！』

「分かってる！」

そう言うと、スバルは両手に持ってある拳銃を熱斗に向けた。

熱斗は右手を空に向けた。

「一体何を…」

「太陽おおおおお！」

「!?!」

熱斗がそう叫ぶと、空には太陽が現れた。

ちなみに、この太陽はあまり熱くない。

「太陽が出た!?!」

「行くぜ！ バトルチップ、バルカン！」

そう言って、熱斗は空に向かって挙げていた右手をスバルに向けた。

「くっ、マシンガン Spreddo！」

お互いが叫ぶと、熱斗からはバルカンがスバルからはマシンガン Spreddo が放たれた。

「無駄だよ！ さっきもそれで失敗したじゃないか！」

「それはどうかな！」

「えっ！？」

熱斗がそう言うと、スバルは驚いた。

なぜ驚いたかと言うと、先程はマシンガンスプレッドがバルカンに勝ったと言うのに、今の状況はバルカンにマシンガンスプレッドが全弾撃ち落とされていた。

「そ、そんな…」

「バトルチップ、キャノン！」

熱斗はスバルが驚いている間にキャノンを発射した。

スバルは熱斗を見ていなかったので、直撃を受けた。

その衝撃で、少し後ろに飛ばされた。

「がはっ！」

『大丈夫か、スバル！？』

「う…な、何とか…。でも、何かおかしい」

『ああ、確かにな。あいつの攻撃力が上がってやがる』

「何でだ？ ……そうか！」

『何か分かったのか？』

「太陽だ！」

『太陽？ …なるほどな。でもどうするんだ？』

「太陽を撃ち落とす！」

『…へっ。面白そうだ！』

「行くよ！ バトルカード、PFB！」

そう言うと、スバルは両手にある2丁の拳銃を一つの拳銃に組み換えた。

「シューティングオーバーレーザー！」

「っ！？」

スバルがそう叫ぶと、拳銃からは青いレーザーが放たれた。

熱斗はいきなりの光景に少したじろいだ。

しかし、熱斗もバカみたいに立つのではなく、バリアのバトルチップを転送した。

「残念だけど、僕が狙っているのは熱斗君じゃない！」

「何!？」

「ぶっ飛ばえええええ！」

そう言うと、シューティングオーバーレーザーは太陽をぶち抜き、太陽を撃ち落とした。

撃ち落とされた太陽は、姿を消した。

「これで、熱斗君のバトルチップの攻撃力は上がらない！」

「なるほど、よく分かったな、スバル」

「行くよー！」

「少しは会話を成立させようよー！」

「もう一発！ バトルカード、PFB！」

「つく！ こうなったら、ロックマン！」

『何、熱斗君？』

「セルフ리카バリーシステムに、全力を注ぐぞ！」

『…なるほどね。分かったよ、熱斗君！』

「喰らええええ！ シューティングオーバーレーザー！」

そう言っつて、スバルは熱斗にシューティングオーバーレーザーを放つた。

それに対して、熱斗は手を前でクロスさせて、バリアを張っているだけだった。

なので、スバルが放ったシューティングオーバーレーザーは、熱斗に直撃した。

シューティングオーバーレーザーは、直撃すると辺りに煙りを発生させた。

「ど、どうだ！ 流石に、バリアと手だけじゃあ防ぎきれないと思うけど」

『ああ、そつだな』

スバルがウォーロックと話していると、不意に煙りの中から人影が見えた。

「……ま、まさかね」

『いや、そのまさかだろうな』

ウォーロックがそう言うと、人影が煙りを追い払った。

そこには、無傷の熱斗がいた。

「嘘でしょ!?!」

「いやあ、流石にヤバかった」

「一体、どうやって…」

「簡単だよ。ダメージを受ける前から、体を治癒し続けたんだ。そのおかげで、ダメージを受けても直ぐに全回復って訳だ」

「…何、そのチートみたいな能力…」

「まあまあ、気にすんなよ。これ、結構精密な作業だからそう何回も使えないし」

「へえ、そうなんだ」

「さてと、じゃあ行きますか！」

そう言うと、熱斗はスバルに向かって飛び出そうとしたが、不意に熱斗の体が光出した。

「えっ？」

そして、熱斗の頭には、'Memory Over' と聞こえた。

そして、光出した熱斗の体はソルクロスロックマンから、ノーマルスタイルのロックマンに戻っていた。

「『『えっ!?!』』」

流石に、この状況にはスバルとウォーロックも驚いた。

「な、何で!?!」

「俺が知るか!」

『熱斗君、通信だよ』

「こんな時に、一体誰だよ…」

『ええっと、ライトさんだよ』

「ライト、さつさと説明しろお！」

「うああ、いきなりやな！」

「あたりまえだ！」

「ほな、説明を。Memoryチップには時間制限があるんや」

「時間制限？」

「そうや。そして、その時間は大体15分つてとこやな」

「15分…さつきのも、15分たったのか？」

「せやで。だから、大事に使いつて言ったやろ？」

「時間制限の事を言えよ！」

「悪い悪い。忘れてたわ」

「…はあ。まあいいけどさあ。じゃあ、どうやったらもう一回使えるんだ？」

「簡単や。1時間ほっとけば、また使えるようになるで」

「なるほどね。そういえば、もう一枚は使えないのか？」

「んにゃ。使えるで」

「へえ。ありがとう、おじさん」

「気にしないでいい。ほなな」

そう言うと、通信が切れた。

「…スバル、聞こえてた？」

「うん、全部聞こえてたよ」

「じゃあ、もう一枚使わせてもらっせー」

「っ!？」

「ロックマン!」

『っん!』

「『Memoryチップ、フォルテクロスロックマン!』」

二人は、先程とは違い黒い光に包まれた。

新旧ロックマン対決！〜5〜（後書き）

フォルテクロスロックマンの能力って、何かありましたっけ？

感想、待ってます！

新旧ロックマン対決！〜6〜（前書き）

まだまだ続きます！

新旧ロックマン対決！???6

そして、黒い球体を破って出て来た熱斗の姿は、ノーマルスタイルから変化していた。

「おお！ まさか、フォルテクロスロックマンVerゴールドになるとはな！」

『どっちゃってVersionシルバーになるんだろっね』

「さあな。まあ、やっていく内に分かるだろう」

『熱斗君…』

熱斗の姿は、一言で言えば「フォルテ」に似ている。

違うのは、体の真ん中にあるマークはそのままで、頭にあるコウモリみたいな部分を始め、肩、腕、足が金色になっていた。

もちろん、マントは装着してある。

「…熱斗君、流石に変身しすぎじゃない？」

「まあ、気にすんな。お前も変身してるじゃねえか」

「ま、まあそうだけどさあ…」

「じゃあ、行くぜ！　まずは、バトルチップ、ロングブレード！」

そう言つと、熱斗の右手は長く薄赤色をしたソードに変化させた。

「うおおおおお！」

「うそ！？」

そしてそのまま、熱斗はスバルに突っ込んだ。

もちろん、スバルは驚いたが直ぐに手にある拳銃を2丁に戻すと、両方から一発ずつ放った。

しかし、熱斗はその弾をもろに受けたがのけ反らず、熱斗に飛び込んだ。

「なっ！？」

「はっ！」

「がはっ！」

「まだだ！　もう一発！」

「ぐぶっ！」

熱斗は一撃を与えてスバルがのけ反った所に、さらに追い討ちをかけた。

スバルは一撃目を防げなかったので、自然と二撃目も受けた。

スバルは、斬撃を受けると後ろに吹っ飛んだ。

「くっ…。流石に強い！」

『スバル、何でかは知らねえがこっちの攻撃は聞いていないみたいだぜ』

「うん、分かってる。…でも！」

そう言うと、スバルは両手の2丁拳銃を熱斗に向けた。

「マシンガン Spreddo！」

そう叫ぶと、拳銃からは何十発もの弾が熱斗に向けて放たれた。

それを見た熱斗は右手をソードから戻すと、右手を無数の弾に向けた。

「シューティングバスター！」

そう言うと、熱斗の右手からも無数の弾が放たれた。

そして、シューティングバスターはしいて言うなら散弾のように飛んでいった。

そして、マシンガンスプレッドとシューティングバスターは相殺した。

「：パニッシャーフォースじゃあ、きついね・・・」

『なら、サイクロンだ！』

「だね！ フォースチェンジ！」

そう言うと、スバルは風に包まれた。

時を同じくして、熱斗もエグゼと話をしていた。

「なああ、ロックマン？」

『どつしたの、熱斗君？』

「Version変えるか？」

『どっせしてっ。』

「そりゃ…Versionチェンジ！　って言って」

熱斗がそう言つと、熱斗を黒い光が包んだ。

そして、二人は風や黒い光から出てくるとスバルはサイクロンフォースに、熱斗はフォルテクロスロックマンVersionシルバーに変身していた。

「フォースチェンジ、サイクロンフォース！」

「Versionチェンジ、Versionシルバー！」

スバルは、全体を緑主体としていて右手は既にソードになっていた。熱斗は頭にあるコウモリみたいな部分を始め、肩、腕、足が銀色になっていた。

『よしっ、行くぜ！』

「うん！」

「俺達も行くぜ！」

『了解、熱斗君！』

スバルが右手を構えると、熱斗は自分の右手をバスターに変えて構えた。

「行くぞ！」

新旧ロッキーマン対決！〜6〜（後書き）

…多分、次でやっと終わります

はてはて、決着はどうなるんでしょうかね？

・・・正直、全く決めていません> - <

感想、待ってます！

新旧ロックマン対決！~~~~~（前書き）

ついに決着です^^^

新旧ロックマン対決！???77

「シューティングバスター！」

熱斗は、スバルに向かってシューティングバスターを放った。

スバルは、それを見ると直ぐに風を身にまとった。

「風神、カマイタチ！」

そう叫ぶと、スバルの体からは無数のカマイタチが放たれた。

だが、カマイタチよりシューティングバスターの方が数が多いのは明らかだった。

「それじゃあ、俺の攻撃は防げないぜ！」

「防ぐ必要はないよっ！」

「なっ!?!」

スバルがそう言うと、カマイタチはシューティングバスターの一点だけを攻撃した。

そうすると、その一点だけ弾が無くなった。

「サイクロンダッシュ！」

そして、スバルはその一点に向けてすばやくダッシュした。

勿論、無傷でシューティングバスターを回避した。

そして、そのままスバルは熱斗に突っ込んだ。

「サイクロンスラッシュ！」

「くっ！」

そう言うと、熱斗は自分から後ろに飛んでダメージを軽減した。

「ちっ！ まだまだあああああ！」

「俺だって！ バトルカード、メガキャノン！」

スバルは攻撃が直撃しないのを見ると、すぐに熱斗に向けて走り出した。

それに対して、熱斗は後ろに下がると即座に、メガキャノンを使った。

「無駄だよっ！ エアロシールド！」

「んなっ!?!」

スバルはそれを見ると、体にさつきより多くの風をまとわせてエアロシールドを作った

エアロシールドはメガキャノンを完璧に防いだ。

「くそっ!」

そう言うと、熱斗は斜め後ろに回りながら飛んだ。

そして、スバルのサイクロンスラッシュをギリギリの所で避けた。

「ちてと、どうするかな……」

「…よ、避けた。あれだけ不意を付いたのに…」

『流石は、200年前のヒーローだな』

「だね…」

スバルは、ウォーロックと会話をしている間、ずっと苦笑いだっただけだ。それに対して熱斗は右手をバスターに変えると、スバルに対して構えた。

「ヘルズローリング！」

「えっ！？ リング！？」

熱斗はスバルに対して、黒いリング状のものを放った。

それを見たスバルは直ぐにエアロシールドを張った。

「無駄だぜ！」

「えっ！？」

しかし、ヘルズローリングはエアロシールドに何回も当たってエアロシールドを破壊した。

ヘルズローリングはそのままスバルに直撃した。

「うわあああああ！」

そして、そのまま後ろに飛ばされた。

後ろに飛ばされると、スバルは壁に激突する直前に体勢を立て直した。

「はあはあ… ロック、ファイナライズだ」

『それは無理だ、スバル』

「え？ どうして!？」

『ここにはノイズがないんだ』

「そんなあ…」

スバルはそう言うと、何かを決めた感じも顔になった。

「じゃあ、これが最後の攻撃だっ!」

『おっっ!』

「来るか？」

「バトルカード、SFB!」

そう言うと、スバルは熱斗に向けて竜巻を横に向けてを放った。

流石に熱斗も襲い掛かってくる竜巻は避けきれず竜巻に直撃した。

「がはっ！」

スバルは竜巻が当たったのを確認すると、竜巻を上に向けて熱斗を閉じ込めた。

「はあああああああ！」

そして、スバルは熱斗を閉じ込めると熱斗を風の力で素早く、そして何回も斬り付けた。

「ぐわあああああ！」

『熱斗君、上だ！』

「何!?!」

熱斗がエグゼに言われて上を見ると、そこにはスバルがいた。

「これで終わりだっ！ サイクロントルネード！」

「なっ！？ こうなったら、こっちもMAXパワーだ！」

そう言うと、熱斗はスバルが放った竜巻に向けてバスターを構えた。

「はあああああ！ ヘルズローリング、MAXパワー！！」

そう言うと、サイクロントルネードとヘルズローリングが衝突した。

そして、二つが爆発すると熱斗えお閉じ込めていた竜巻も爆発し大規模な爆発を起こした。

「うわあああああああ！」

そして、部屋には煙が充満した。

少し経つと、その煙も晴れてきた。

晴れた部屋には、変身が解かれた二人のロックマンが、ボロボロの状態で片方のひざを立てながらしゃがんでいた。

「はあはあ」

『おい、大丈夫かスバル！？』

「うん…何とかね」

『大丈夫、熱斗君！？』

「ああ…なんとかな」

二人は肩で息をしながら言った。

「でも、正直きついよ」

「だけど、結構やばい」

「だから」

「これで」

「「最後だっ！」「」

そう言うと、二人はお互いのバスターをお互いに向けて構えた。

「「はあああああ！ チャージショット！」「」

そう言うと、二人はお互いに向けてチャージショットを放った。

二人のチャージショットは、お互いの顔をすれすれで通過して後ろにある壁に当たった。

二人は、チャージショットが壁に当たると同時に、地面に対してうつ伏せの状態で倒れると、そのまま気を失った。

新旧ロックマン対決！~~~~~（後書き）

∴ 結局引き分けという事で^^^∴

感想待っています。

襲撃一日前（前書き）

やっと更新です・・・。

でも、スランプ気味なので話が・・・。

襲撃一日前

WAXA・病室

「ううん……」

『おっ、目が覚めたか』

「ロック？ ……ここは？」

『WAXAの病室だ』

「何で、病室に……」

『お前は、チャージショットを撃つたら気絶しちゃったんだよ』

「ああ、なるほどね」

ちなみに、今スバルが寝ている病室には、他に熱斗もいるのだがスバルは気づいていない。

「そういえば、熱斗君は？」

『お前の隣に寝てるぜ？』

「えっ？」

そう言うと、スバルは隣を見た。

そこには、気持ちよさそうに寝ている熱斗とそれを見て、少しあきれているメールがいた。

「はははは……。そういえば、勝敗はどうなったの？」

『引き分けた』

「アレだけやっても引き分けか…なんだか勝てる気がしないね」

『いや、ファイナルフォースライズさえ使えていれば、俺達が勝つてたぜ！』

「そうなのかなあ……」

『そつだ！』

「まあ、どっちでもいいけどね」

『よくないだろっ！』

元々、スバルはそんなにやる気が無かったので、あまり関心が無かった…。

が、心の中では「ファイナルフォースライズを使っても、勝てなか

ったと思うのは僕だけかな……」 っと思っていた。

「それより、僕は何日ぐらい寝てたの？」

『それよりってなあ………2日だ』

「そんなに!?!」

『ああ』

「こっしちゃうられない!」

そう言うと、スバルはベッドから降りた。

『何を急いんだ?』

「こっしている間にもミソラちゃんに、何かあるか分からないじゃないか!」

『でも、どうやってバルアナのいる所に行くんだ?』

「そ、それは………」

「それやったら、ワイに任せとき!」

『「えっ!?!」』

その時、病室にライトの音が聞こえた。……まあ、放送だが。

「その声は……」

『あの、電波商人!?!』

「ライトや。で、あいつ等の居場所は」

「い、居場所は!?!」

「宇宙や!」

「宇宙!?!」

『なんだか、ありきたりだな……』

「まあ、そう言っつなはね。で、そこに行くための装置を作ってるんやけどな」

「はあ」

「その装置が出来んのは、少なくとも明日や。今日はゆっくりじと〜き〜」

「えっ!?!」

「ほなな」

そう言つと、ライトの声は聞こえなくなった。

「明日……」

「ついに、明日か」

「うん、そうだね……って、熱斗君!？」

「よし」

「起きてたの!？」

「ついさつき起きた。……で、ついに明日だな」

「うん。絶対にバルアナを倒す!」

「その意気だ。まあ、俺も手伝っけどな」

「熱斗君、ありがとう」

「気にすんな」

「……所で、熱斗君？」

「どっした？」

「痛くないの?」

そう。今、熱斗のお腹にはメイルが「熱斗おー！」と言いながら、思いっきりダイブしたばかりだ。

「……我慢してんだよ」

「そ、そうなんだ」

まあ、その約20秒後には熱斗の音が、病室に木霊したのだが……。

「つで、結局、今日はどうすんだ？」

「僕は一回家に帰るよ」

「そうか」

そう言うと、スバルは家へと変える準備を始めた。

『にしても、驚くだろうな』

「何が？」

『いやな、お前は知らないだろうが、俺達の戦いは、テレビで報道されてたんだよ』

「……………へっ?」

『だから、報道されてたんだよ、俺達の戦いが!』

「それって、つまり……………」

『ああ?』

「僕と熱斗君の戦いが皆に見られてたって事!？」

『だから、そう言ってるだろうが!』

「じゃあ、母さん達は

『お前が倒れたの知ってるぞ?』

「最悪だ! 最悪だよ! 最悪です! の三段活用!」

『何か違うねえか!?』

「気にしないで!」

そう言いつつも、スバルは電波変換して、家へと向かった。

襲撃二日前（後書き）

こんなので、すみません・・・。

夏休み中のは何とか完結させたいです（汗

事件発生（前書き）

結構早めに更新出来ました！

……まあ、駄文ですがね。

事件発生

「ただいま……」

「あら、スバル。おかえり」

スバルはあの後、何事もなく家に帰って来たのだが……スバルが思っていたより、茜の態度はやわらかなものだった。

「あれ？ 母さん、僕の事怒ってないの？」

「怒る？ どうして？ そんな事より、はやく宿題やっちゃいなさいよっ」

「う、うん……（あれ？もしかして、僕が気絶したの知らない？）」

「ああ。それと、お疲れ様」

スバルが少し考え事をしていると、茜が微笑みながら言った。

「えっ！？ やっぱり、知ってたの！？」

「当たり前よ。……お願いだから、もう無茶はしないでね……」

「母さん……」

「お願いよ」

スバルは「約束する」と言いかけたが、言うのを止めた。

なぜなら、明日は敵の本拠地に襲撃する日だ。

これを無茶と言わずに、何と言っだろう。

スバルはそれを思いだして、言うのを止めた。

……だが、スバルは変わりに

「母さん、僕は何があっても絶対この家に帰って来るよ」

と、言った。

「スバル…当たり前よ、このバカ！」

まあ、こちらも当たり前だが茜はスバルを頭の上を軽く殴ると、「晩ご飯の支度があるから、さっさと部屋行って勉強なさい」と言った。

「はあい」

そう言うと、スバルは自分の部屋に帰って行った。

- - スバルの部屋 - -

「母さん、ゴメン」

スバルは自分の部屋で一人呟いた。

「でも、僕は絶対帰って来る。そして、約束したんだ…僕はミソラちゃんを守るって！！ だから、絶対に助け出す！」

『ああ。その意気だぜ、スバル！』

「ロック…。明日は今までとはケタ違いに強いけど…絶対に勝つよ！」

『ああ、勿論だぜ！』

その時、部屋の外から少し物音がしたが、スバルは全く気にしなかった。

…リビング…

リビングには、茜と大吾がいた。

大吾は先程スバルに話があるつと言って、スバルの部屋に向かったのだが、なぜかスバルと話はず戻って茜に言った。

「やっぱり、スバルは行っちゃうのね…」

「ああ、そうみたいだな」

「…あの子つたら、私達に何の相談もなく」

「…それがスバルの決めた、道、何だろうな」

「…道…」

「スバルが自分で決めて、自分で歩いていく、道、だ」

「…ふふふ」

「ど、どうした？」

大吾が、結構真剣な話をしていると茜が急に笑い出した。

「だ、だって…あなたのプロポーズを思い出したんですもの」

それを聞いて、大吾は顔を真っ赤にした。

「なっ！？ わ、忘れる！ 今すぐに！」

「確か…僕と、一緒「わあああああああ！」」

茜が大吾のプロポーズを言いきる前に、大吾が大声をだして言葉を遮った。

「びっくりするじゃない！」

「いやいやいや！ あの状況なら、絶対みんな大声を出すだろ！」

「そんなに恥ずかしいなら、言わなきゃ良かったのに」

「うっ！ あ、あの時はあれしか思い浮かばなかったんだ！ もういいだろう、この話は！」

そう言って、大吾は無理矢理話を終わらせた。

その後、茜は晩ご飯の支度に、大吾は自分の部屋に戻って行った。

・スバルの部屋・

「そう言えば、メール見てなかったっけ」

そう呟いたスバルは、軽い気持ちでメールを開いた。

そこには新着メール62件と出ていた。

「……ろ、62!？ な、何でこんなにメールが来てるの!？」

『そりゃ、やっぱりお前の事を心配してくれてんじゃねえか？』

「…なるほど。…みんな、ありがとう」

そう言うと、スバルはメール全てに返信をした。

しかし、一件だけ返信が出来なかった。

そのメールとは…

「面白いものを見せて貰ったよ、ロックマン。では、今度は私達が面白いものを見せてやるっ」

と言う内容だった。

しかし、このメールには相手の名前が書いていなかった。

「いったい、誰のメール何だろう」

『さあな』

その時、外で何か大きな音が聞こえた。

「!?!」

『スバル、行くぞ!』

「うん!」

そう言うと、スバルは下に行き家から飛び出した。

-. - ? ? ? ? ? - . -

「ふっふっふ。どうかね、ロックマン? 私からのお礼だよ…。な
あ、ミソラよ?」

そう言ったバルアナの隣には、ミソラが立っていた。

「…………はい」

「これも、お前の歌のおかげだ。感謝するぞ」

「…………ありがとうございます」

「ロックマン、早く我々の所まで来い！ ……ふっふっふ。はあっ
はっはっはー！」

この基地に、バルアナの笑い声が木霊した。

……………ミソラの不気味な微笑みと共に…。

事件発生（後書き）

ここらで、アンケートを。

現在、ソロは記憶を失っているわけですが…そのソロが最終的にはどうなって欲しいか、についてのアンケートです。

- 1、記憶を失ったまま孤独を止めてスバル達との絆を取る。
- 2、記憶は戻るが、孤独からスバル達との絆を取る。
- 3、記憶が戻り、孤独のソロに戻る

感想、待っています！

襲来者、来る（前書き）

はい、最近文章がへっぽこ化しております。

ちょっと泣きそつです。。。

襲来者、来る

ーコダマタウンー

「ど、どうなってるの?」

『さあな』

スバル達が外に出ると、そこには人と人が殴り合つてるともシユールな光景があった。

「ロツク……WAXAに行こう!」

『ああ、そつだな!』

「トランスコード、シューティング・スター・ロツクマン!」

そう言うと、スバルは青い戦士ヒーローのロツクマンに電波変換した。

「じゃあ、行くよ」

『ああ……急ぐぞ』

「そつだね!」

そう言うと、スバルはすぐにWAXAに向かった。

――WAXA・指令室――

すでにここには、熱斗とメール、ヨイリー博士と暁とソロが揃っていた。

そして、そこにスバルが普通の姿で現れた。

「やっと来たか、スバル」

「うん…って、ソロツ!？」

「何だ？」

「な、何で君がここにいろの!？」

スバルが慌てていると、暁がスバルに簡単に説明をした。

「落ち着け、スバル。こいつは今、記憶喪失なんだよ」

「記憶…喪失? 本当なの?」

「ああ、そうらしい」

「そ、そう……（これは……ソロに絆を認めさせるチャンスなんじゃあ……）」

「どっした？」

「な、何でもないよ」

「？ そうか、ならいいが」

「そ、それより、今はどうなってるの？ 町の皆が暴動していたけど……」

「そうなの……。これを見てちょうだい」

そう言うと、ヨイリーは機械を操作して画面にいくつかの映像を映し出した。

「じ、これって」

「そう。……この世界の所々で暴動が起きているのよ……それも、サテラポリスの人達もね」

「そ、そんな事って」

「残念だけど、これは事実なのよ……」

「そんな……でも、何でこんなことに?」

「さあ、そこまでは分からないけど……暴動が起こる前には、ミソラちゃんの歌がながれていたそうよ」

「ミソラちゃんの!?!」

「そうなの」

「……一体、どうなってんだ」

スバルは、この事実を聞いて少し驚愕していた。

それれも、そうだろう。なぜなら、彼女の歌は少なくともスバルにとっては一番素敵な歌だからだ。

「……とりあえず、ビックバンの本拠地にでも行ってみるか?」

と、いきなりライトが話を切り出した。

「っえ? もう、行けるんですか!?!」

「そうや。……まあ、一人だけやけどな」

「なら、僕が行きます!?!」

「そう言つと思つたわ。ほな、ちょっと待つとき」

そう言つと、ライトは奥へ向かった。

ライトが居なくなると、熱斗が「俺はどうすればいい？」と話を切り出した。

「そうねえ」

ヨイリーがそう言つと、直ぐに爆発が起こつた。

その爆発のせいで、WAXAの入り口の扉が吹き飛んだ。

「い、一体、何が!？」

「皆、落ち着け! とりあえず、入り口へ向かおう!」

暁がそう言つと、スバルたちはすぐさま入り口へと向かった。

WAXA・入り口

「久しぶりだな、200年前のロックマン」

「おつ、こいつは……誰だっけ？」

『シユツクだよ、熱斗君！』

「ああ、そうだった！」

「……お前、私をバカにしてるのか？」

「いや、別にそういうわけじゃないんだけどな……」

「お前は……」

「ん？ ああ、貴様はあの時私が倒したやつか」

「お前が……俺を？」

「……何だ、お前は覚えていないのか？ まあ、どうでもいいがな。クツクツク」

「何しに来た!？」

シユツクが笑っていると、暁が声を上げた。

それを聞いたシユツクは、平然と答えた。

「そんなもの、決まっているだろう。このWAXAを破壊に来たのさ」

「なっ
」

「そんなことはさせないぜ！ ロックマン！」

『うん！』

「シンクロチップ、スロットイン！」

「『クロス・フュージョン！』」

そう言うと、熱斗は光に包まれた。

襲来者、来る（後書き）

確か、ブライブレイクって、剣での攻撃でしたよね？

違ったら教えてくれるとうれしいです。

感想、待ってます。

戻った記憶（前書き）

久々です！

……はい、勿論駄文ですよ（汗

戻った記憶

光から出てくると、熱斗は200年前の戦士^{キロー}へと変身した。

「行くぞ！」

「また向かってくるか……」

「当たり前だ！ バトルチップ、ロングソード！」

熱斗は左手をロングソードに変形させると、シュックに突っ込んだ。

「ふん。無駄だ」

そう言うと、シュックは右手に剣を構えると、剣に炎を纏わせた。

「蒼炎流、3の型、飛炎斬！」

そう言って、シュックは熱斗にむかって、炎を灯した斬撃を飛ばした。

それを見た熱斗は、少し微笑むと右手を斬撃に向けた。

「バトルチップ、アクアソード！」

そう言うと、熱斗の右手が水を纏ったソードに変わった。

「何かいつものアクアソードと違うような気がするけど、あえて気にしないで行くぜ！ はっ！」

そう言いながら、熱斗はアクアソードを飛炎斬に向かって振り下ろした。

すると、飛炎斬は消滅しシュックへの道が開かれた。

「なっ!?!」

「行くぜっ!」

勿論、熱斗はそのままシュックに突っ込んで行った。

そして、距離が縮まりロングソードが届く範囲になると、ロングソードをシュックに向かって振り下ろした。

しかし、シュックはそれを刀の腹で受け止めた。

結果、二人は鏝ぜり合いに陥った。

「スバル、先に行け!!」

「えっ!?!」

「早く!!」

「……分かった!!」

スバルは、そう言うと直ぐに指令室へ向かった。

「ちっ! そうは行くか!!」

「なっ!?!」

シュツクがそう言うと、とたんに刀が炎を帯びて熱斗を退けた。

「飛炎斬!!」

そして、スバルに向かって飛炎斬を放った。

「させるかあっ!!」

しかし、飛炎斬が放たれたと同時に暁が電波変換しアシッド・エースとなり飛炎斬をソードで受け止めた。

「はあっ！」

そして、横からソロがいつの間にか電波変換してラプラスをソードに変換させ飛炎斬を弾いた。

「ふん、つまらん」

「そ、ソロ!? お前、どうやって電波変換したんだ!？」

「気軽に話し掛けるな。邪魔だ」

「……ま、まさかお前記憶が……」

「何を言っている?」

「………な、なあアシッド?」

『………多分、記憶が無かった時の記憶が無いんでしょう』

「………嘘おおおおお!？」

「うるさい、黙れ。お前から斬るぞ」

「わ、悪い……」

「ふん」

しかし、暁は今だに内心「俺の苦勞は何だったのおおおお！」と叫んでいた。

「そこの青いのも邪魔だ」

「なっ!?!」

「コイツは俺が殺^やる」

「……分かった」

熱斗は、ソロ（ブライ）から出る殺氣と怒りのオーラを見ると、渋々下がった。

「行くぞ」

「ふん、またやられに来るのか……それもいいだろう」

「黙れ!」

そう言うと、ブライはラプラスソードを握り締めシュックに向かって飛び出した。

・ ・ W A X A ・ 指令室 ・ ・

「ライトさん！」

「おう。準備は出来とるで！」

「ありがとう。行くよ、ロック！」

『ああ、行くっぜー！』

「トランスコード、シューティング・スター・ロックマン！」

スバルがそう叫ぶと、スバルはロックマンへと電波変換した。

「使い方は・・・」

「大丈夫です。こういうの、一回使った事がありますから！」

「へっ？」

そう言うと、スバルはその機械へウェーブインした。

「……ああ、そういえばそうやったな！」

ライトは前の事件の時の事を思い出して、一人頷いた。

戻った記憶（後書き）

確かウエーブオンでしたよね？

感想待ってます。

VS シュック (前書き)

久々です！

つてか、夏休みの間で終わらせるって言ったのに・・・すみません！

こんな作者ですが、どうか見捨てないてください！

V S シュツク

- - WAXA・入り口付近 - -

「行くぞ！」

「ふんっ。来い」

ブライは、シュツクに向かって、ラプラスブレードを構えると、一直線に突っ込んだ。

「ふん。まあいいだろう……蒼炎流、1の型……熱風斬！」

シュツクがそう言うと、シュツクの剣は炎を帯びた。

そして、その刀をブライに向けて振るうと、ブライに対して熱風が襲い掛かり、熱風の竜巻がブライを閉じ込めた。

「くっ！」

「はあっ！」

そして、そのままブライを炎を纏った剣で竜巻ごとブライを斬ろう

とした。

「誰かを忘れてないか!？」

「なっ!」

しかし、そこに熱斗が竜巻とシュツクの間に見れて、アクアソードで攻撃を防いでいた。

「邪魔だ! 退けっ!」

「誰が退くか! お前の相手は俺だ!」

「いや、俺だ」

「へっ?」

熱斗が間抜けの声を出すと同時に、竜巻からブライが出てきた。

「な、何っ!？」

「早っ!」

「ふん。こんな物、直ぐに破れる」

そして、ブライはラプラスブレードを握り締めて、また走り出した。

「邪魔だ、退け！」

「こっちからも!？」

「はっ！」

「マジかよ!？」

ブライは、熱斗が退く前にラプラスブレードを振りかざした。

それを見た熱斗は、素早く、多分この世界に来て一番素早く退いた。

「ぐはっ！」

「まだだ! ブライブレイクっ！」

すると、ブライはシュックがよるめいている間にジャンプをした。

そして、シュックがそれに気づいたのは、ブライが目の前まで来たときだった。

「がはっ！」

そして、シュックはブライブレイクをもろに受けた。

そのまま後ろに吹っ飛んで、壁に衝突した。

「つ、強ええ〜」

『ほ、本当だね』

熱斗とエグゼは、ブライの強さに驚いていた。

「くっ……なぜだ、前より強くなっている」

「ふん。お前の戦い方は、もう見切っている」

「なっ!」

「ふん。お前はもう俺の敵じゃあない」

「……ふっ、ふははははは」

「な、何がおかしい!？」

「俺の戦い方を見切ったぐらいで、俺に勝った気になっていることが、おかしくてな」

「どづいづことだ!?!」

「ふんっ。さあな」

そう言うと、シュックはフラフラとした足付きで、その場に立ち上がった。

「蒼炎流……終焉の型!」

「「終焉!?!」」

「突然変異・炎龍!」

そう言うと、シュックの体を炎が包んだ。

そして、咆哮と共に炎の中から、炎を身に纏っている龍が現れた。

「な、何で龍!?!」

『お、落ち着いて、熱斗君!』

「あ、ああ」

「ふん。姿が変わっても同じだ」

そう言うと、ブライは炎龍に向かってラプラスブレードを投げた。

「ラプラスソード！」

そして、ラプラスブレードは炎龍にぶつかった。

しかし、ラプラスブレードは跳ね返って、ブライの足元に突き刺さった。

「なっ！」

『ギャオオオオオオオ！』

「くっ！」

「なんて硬さだよ……」

『熱斗君。僕たちも行くよ！』

「でも、あれだけ硬いのに、どうやって

『なら、その硬さを超えよう！』

「そんな無茶苦茶な」

『あれ？いつもの熱斗君なら、これぐらの事言ってるでしょ？』

「っ!?! …… そうだな! 俺、何かビビッてたみたいだ」

『仕方ないよ。 ……じゃあ行こう!』

「ああ! ソウルユニゾン、ブルースソウル!」

そう言うと、熱斗はブルースソウルへと変化した。

「行くぞ! バトルチップ、ソード、ワイドソード、ロングソード、スロットイン! プログラムアドバンス! ドリームソード!」

熱斗はそう言うと、両手を上に上げた

上に上げた両手には、でかいソードが現れた

「いつけええええええっ!」

そして熱斗は、ドリームソードを炎龍に向かって振り下ろした。

ドリームソードは、炎龍に直撃した。

しかし、炎龍は傷を少し負っただけだった。

「なっ!?!」

「……………」

それを見たブライは、ラプラスブレードを拾った。

するとその直後に、炎龍の咆哮が辺りに響いた。

『ギヤアアアアアアアア！』

すると、地面から炎の柱が出てきて熱斗たちを攻撃し始めた。

「あぶねっ！」

「くっ！」

しかし二人はギリギリの所で避けていた。

そのまま避けていると、炎の柱は収まった。

「ふう……………しかし、どうするかな」

『だね……………熱斗君、MEMORYチップを使おう！』

「ああ、忘れてたぜ！」

そう言うと、熱斗はMEMORYチップ、ソルクロスロックマンを取り出した。

「『MEMORYチップ、ソルクロスロックマン!!』」

そして、熱斗はソルクロスロックマンへと変化した。

ソルクロスロックマンになった事で、空には擬似太陽が現れた。

「よっしゃ、行くぜ!」

「おい」

「へっ?」

「お前、あの太陽をもっとでかくしろ」

「はっ?」

「時間は俺が稼いでやる!」

そう言うと、ブライは炎龍に向かって走り出した。

「な、何なんだよ」

『でも、やるしかないよ!』

「……しゃあねえな!」

「『太陽おおおおお!』」

熱斗が片手を挙げると、熱斗とエグゼは声を上げて叫びはじめた。

「あっちもやっているな……行くぞ!」

ブライはそう言うと、ラプラスブレードを握り締めた。

VSシュツク(後書き)

感想待ってます！

VS炎龍(前書き)

お久しぶりです！

・・・最近もう一個のほうばかり更新しているから、こっちなでの書き方がおかしくなってます(泣)

V S 炎龍

「グラウンドブレイクソード！」

そう言うと、ブライは姿を消した。

いや、正確に言うと、とてつもない速さで上空に向かってジャンプした。

そして、上空から剣を振り下ろし、凄まじい衝撃を炎龍に発生させた。

そして、その衝撃は炎龍に直撃し辺りに煙を起こさせた

『ギアアアアアアッ！』

「なっ！？ 無傷なのか！？」

煙が晴れると、炎龍は雄たけびを上げた。

しかも、炎龍には傷ひとつ付いていなかった。

流石のブライも、かすり傷程度は与えられると思っていたので、この状況にはびっくりしているようだった。

「クソ！ なら……」

『ウギアアアアアアッ！』

「……なっ!？」

ブライが何かを仕掛けようとする前に、炎龍はブライに向かって炎を吐いた。

しかし、それは攻撃範囲が大きいが、スピードは全くなかったのでブライは簡単に避け、炎龍との距離をとった。

「ふん。そんなものか……しかしあの装甲はやはりあの太陽をぶつけるしかないのか……」

そう呟くと、ブライはチラッと熱斗を見た。

しかし、熱斗は「はああああああっ!」と言いつつ、まだエネルギーを溜めている。

それを見たブライは、もう少し時間を稼ぐことにした。

そう思っていると、急に炎龍が咆哮を上げた。

『ギヤアアアアアアア!』

「っ！ いちいちうるさいやつだ……ブライバースト！」

そう言うと、ブライはその場でアッパーを繰り出した。

すると、そこから衝撃波が発生し、その衝撃波は炎龍に直撃した。

だが、やはり、炎龍にはダメージを負っている様子はなかった。

そして、炎龍は口をブライに向けると、まるで自分の牙を見せ付けるかのように、口を開いた。

「挑発のつもりか？ ふん！ 下らん！」

そう言うと、ブライは炎龍に向かって走り出した。

それを見た炎龍は、口を閉じて口の中にエネルギーを溜め始めた。

しかし、ブライはそれには気づかなかった。

「はあああああっ！」

そう言いながら、ブライは上空に向かってジャンプした。

そして、炎龍は空に飛んだブライに向け口を開いた。

すると、口からはレーザーの様なものがブライに向かって発射された。

そのレーザーは、さっきの炎より範囲は狭いがスピードははるかに速かった。

ブライがレーザーに気づいたとき、レーザーはもう目の前まで迫っていた。

「なっ……ぐふっ!?!」

ブライは攻撃を受けて、地面に叩き落された。

……横からの攻撃によって。

「ふう、ギリギリだったな」

キャノンを構えながら、そう言ったのは、自称ヒーローの暁が電波変換した、アシッド・エースだった。

「っ……貴様、何のつもりだ?」

ブライが、立ち上がりながらアシッド・エースに向かって言った。

「ん？ いや、あのままレーザーを食らうより、マシだったたる？」

そう言いながら、アシッド・エースは上を指差した。

それにつられて、ブライも上を見ると、そこには屋根があったはずなのに、屋根が跡形もなく無くなっており、空の一点だけ穴が開いていた。

「ふん。余計なことをしてくれたものだ」

「な！？ お前、折角助けてやったって言うのに！」

「誰がお前に助けてほしいなんて言った？」

「おまつ！ 可愛くないやつだなあ」

「男が可愛くても仕方がないだろ」

「まあ、それもそうだが……」

「ふん」

そう言うと、ブライは炎龍に振り向いた。

「しかし、こいつ相手に時間稼ぎをするには、俺だけじゃ少しまついか……おい」

「何だよ？」

「お前、時間稼ぎに協力しろ」

「命令形かよっ!？」

「早くしろ」

「くっ! 分かったよ!」

そう言うと、アシッド・エースも剣を構えて炎龍に振り向いた。

「行くぞ!」

「分かってる!」

こうして、ブライとアシッド・エースのコンビが誕生した。

・・・その頃の、熱斗・・・

「はぁはぁ」

『だ、大丈夫、熱斗君？』

「あ、ああ。まだまだだぜ！」

『うん、頑張ろう！』

「『うおおおおおおお！』」

熱斗は片手を上げていたが、途中から両手に変えていた。

そして、今の大きさは大体半径1Mぐらいだった。

VS 炎龍（後書き）

感想、待ってます！

番外編 Merry Christmas (前書き)

お久しぶりです、充です。

今回は、クリスマスつと言うことでこの番外編を書いてみたんですが……何だか変な感じになっちゃいました。

しかも、本編も全然更新してないし……orz

それでも、頑張っていくので今後とも、よろしくお願いします！

番外編 Merry Christmas

「このお話は平行世界での」

「僕と」

「私の」

「クリスマスの日のお話」

「うーん……もう朝？」

「そうだよ、朝だよ！」

「うにゃ！？ しゅ、しゅばる君！？」

「か、噛み過ぎだよ、ミノラちゃん」

「い、ごめんなさい／＼」

「ま、まあ、いいけど可愛かったしね／＼」

「そ、それより、今何時！？」

「今？ 今はあ……」

そう言うと、スバルは部屋にある時計を見て、ミノラに時間を告げた。

「今は、10時だよ」

「や、やばっ！ライブに遅れる!?!」

「ウェーブロードを通過していけば、余裕で間に合うよ」

「それは開始時間にでしょ!?! 私は、開始時間の30分前には、コンサート場に入らないといけないの!」

「えっ!?! そ、それだったら……やっぱり余裕じゃない?」

「えっ?」

「だって、開始時間は1時で、今は10時だよ?」

「……てへ」

そう言って、ミソラは右手でグーを作って頭を殴るような形にして、舌を出した。

「ミソラちゃん、慌てすぎだよ(今の可愛すぎノノ)」

「ま、まあいいじゃん！ほら、朝ごはん……って言う時間じゃないよおね……」

「朝ごはんなら、下にあるよ?」

「え？」

「ついでに言っと、僕もまだ食べてないよ」

「な、何で？」

「簡単だよ」

そう言っと、スバルはミソラを見つめた。

「ミソラちゃんと一緒に食べたかったから」

「す、スバル君／＼／」

「ほら、行こう！」

「う、うん／＼／」

そう言っと、ミソラはベッド（スバルの）から出ると、スバルと一緒に下の階に降り始めた。

そして、下の階に着くと大吾と茜はクリスマスデートらしい。

この話を聞いたときのスバルたちの一言目は、「ラブラブ過ぎ！」だったそうだ。

「じゃあ、食べようか」

「うん！」

「いただきます！」

この後、二人は仲良くご飯を食べ始めた。

余談だが、ウォーロックはハーブによって黙らされている。

それから、時間が経ち、今は大体12時、ミソラは出かける時間だった。

「じゃあ、私はそろそろ出かけてくるけど、ライブにはちゃんと来てよね！」

「うん、約束するよ」

「じゃあ、行って来ます！」

そう言いつつ、ミソラは元気良く出かけていった。

「さてっと、じゃあ僕もクリスマスプレゼントを用意しないとね」

『ふう、やっとハーブから開放されたぜ』

「ははは、お疲れ様」

『さてつと、そろそろ行くんだろ?』

「うん、そうだね。そろそろ行かないとライブに間に合わなくなっちゃうからね」

『さてさで行つちまおうぜ』

「うん、そうだね」

そう言うと、スバルはハンターV Gを取り出した。

「トランスコード、シューティング・スター・ロックマン！」

そう叫ぶと、スバルはロックマンへと変身した。

『おらめ! 飛ばすぜえ!』

「うん」

ロックマンは、ウェーブロードの上を駆けて行った。

---PM12:35・コダマタウン・バス停前---

「……」

「（お、おいキザマロ！）」

「（な、何ですかゴン太君！）」

「（言いたいことは分かるだろお！？）」

「（はい、凄く分かります！）」

「（この空気、たまんねえよな！）」

「（ええ、たまりません！）」

「（スバル（君）早く来て！！）」

「遅おおおいつ！」

「委員長が切れた！？」

「スバル君！ アイツはいつつもいつつも！ スバル君が愛しの口ツクマン様だなんて信じられない！」

「ごめん！ ちょっと遅れた！」

ここで、タイミング悪く、ルナの機嫌が悪い根源が現れた。

ゴン太とキザマロは（やっと来たあ！）と内心、死ぬほど喜んだと言っ。

「遅い、遅すぎるわ!」

「ええ!? 5分しか遅れてないのにその言いようは何なの!?!」

「罰として……そ、そのお」

「????」

「ろ、ロックマン様になって、私をライブ会場まで運びなさい!」
／／

「……まあ、仕方ないよね。遅れたのは僕達だし」

「じゃ、じゃあ!」

「うん、いいよ」

『……チツ! しゃあねえな』

「じゃあ、早く行こ……って、ツカサ君は?」

「ツカサ君なら、先に行ったわよ?」

「ああ、なるほどね」

「じゃあ、行きましようか」

「うん(委員長、何だか機嫌がいいみたいだね)」

「おう、行くぜ！」

「ゴン太君、僕を落とさないでくださいよ？」

「ああ、忘れてた。キザマロをおんぶするんだったな」

「ちょっと！ 頼みますよ!?!？」

「ああ、任せろって！」

「トランスコード、シューティング・スター・ロックマン！」

「トランスコード、オックス・ファイア！」

二人はそう言うと電波変換が完了し、スバルはロックマンへ、ゴンはオックス・ファイアへと変身した。

「じゃあ、行こうか」

「「「ええ（おう）」「」」」

すると、ロックマンはルナをお姫様抱っここの形で抱っこすると、オックスはキザマロをおんぶした。

そして、そのままウエーブロードに乗ってライブ会場まで駆けつけた。

「会場に着いたけど……」

「……何この人数!??」

スバルたちは会場に着くと、電波変換を解いて会場前で並んでいるのだが……人数が多すぎて、会場にじゃ入れるの? と言う疑問を皆が抱いていた。

まあ、入場券があるから入れないわけが無いのだが、時間的に開始時間に間に合うかが分からなかった。

「い、今何時だ?」

「1、12時45分です!」

「な、何とか間に合いそうね」

「……アハハハ……」

三人は苦笑するしかなくなつかと言つ。

それから10分ぐらいして、ようやくライブ会場に入れたそうだ。

「ふう、やっと席につけたわ……」

「やあ、みんな。遅かったね」

「……ツカサ（君）！？」「……」

「どうしたの、みんな？」

「なんでアンタこんなに早いのよ！」

「何でって言われても……電波変換して、普通にそこから入ってきただけだよ？」

そう言うと、ツカサは天井を指した。

そこには、ウエーブロードがあった。

「も、もしかして、電波変換した状態ならここに直行で来れたの？」

「うん」

「……んなアホな……ッ！」「……」

4人の叫び声が、ライブ会場に木霊した。

あれから、時間は結構経ち、ライブも最終曲を迎えていた。

「みんなー、今日はありがとうー」

《うおおおおおおお！》

「次で最後の曲だけど、最後まで盛り上がって行こうねえ！！」

《ミ・ソ・ラ！ ミ・ソ・ラ！ ミ・ソ・ラ！》

「飛び交うシグナル それぞれの今日を乗せて 同じ周波数 重ね
あい君と話す 迷い ためらいを振り切り そこに あるはずの道
を行こう 見上げる空は 心に 積もる 願いの色 描く 夢を映
し出す 必ず いつか この手に 触れる明日への地図 強く 高
く 届くまで 輝いて」

ミソラが歌いきると、会場はテンションは最大まで上がった。

「ふう……。みんな、今日はありがとうー」

《ミ・ソ・ラ！ ミ・ソ・ラ！ ミ・ソ・ラ！》

「じゃあ、またねー」

そう言っていると、ミソラは舞台のそでへと帰っていった。

こうして、3時間にも及ぶミソラのライブは、幕を閉じたのだった。

そして、帰ろうとしたスバルのハンターV.Gにメールが来た。

「誰だろう?」

そして、メールを見ると、差出人はミソラだった。

【今日の夜、7時に展望台で待ってる】

「ミソラちゃん……よし、今夜だね」

『ちゃんと渡せよ?』

「う、うん!」

「スバル君? どうしたの?」

「べ、別になんでもないよ?」

「おう? じゃあ、いいわ。帰るわよ!」

「さっ」

こうして、スバルたちは皆でゆっくりと帰っていった。

・・・PM：7時・展望台・・・

「うう、寒い」

『全く、早く来すぎなのよ』

「うう、だって」

『だって何も無いわよ。自分から7時って言ったのに、自分は6時に来るなんて』

「だ、だって、こんなに早くに打ち上げが終わるなんて思わなかったもん！」

『はああ、じゃあ別にここにいらなくてもよかったんじゃない？』

「……い、言われてみればそうだね。喫茶店にでも行っていれば良かったね」

『本当よ。全く、アンタはスバルの事になると、周りが見えないんだから』

「う、うるさいなあ／＼」

『ふふふ、それだけ一途って事ね』

「もう、ハープってば！／／／」

『はいはい、そろそろ時間よ』

「ええ！？ も、もう！？」

『……時計を見てみなさいよ』

「はう！ もう7時だよ……、こゝ心の準備が」

『頑張りなさいよ』

「う、うん！」

「み、ミソラちゃん！？ 早いね」

「す、スバル君！ う、うん。スバル君に早く合いたかったから／／」

「み、ミソラちゃん／／／」

「あ、あのね、私がここに呼んだり、理由はね」

「ま、待って、ミソラちゃん！」

「え、ええ？」

「僕から先に言わせて」

「う、うん」

「ミソラちゃん、改めて言います」

「う、うん」

「僕は、ミソラちゃんが……だ……大好きです！／＼／」

「す、スバル君／＼／」

「だ、だから、もし僕が科学者になって、ミソラちゃんがまだ僕のこと好きだったら……僕と結婚してください！」

「スバル君！！／＼／」

「んん！？／＼／」

スバルが顔を赤くしながら告白をすると、すぐさまミソラがスバルにキスをした。

「私はずっと、ずううつとスバル君のことが大好きだよ！！／＼／」

「み、ミソラちゃん／＼／」

「だから、早く科学者になってね？　そして、早く結婚しようね」

「ミソラちゃん……これ／＼」

「え？」

そう言うと、スバルはミソラに何か箱みたいなものを手渡した。

「スバル君、これって」

「……今は、こんなおもちゃみたいな指輪だけど、いつかは本物を手渡すよ」

「スバル君／＼」

「ミソラちゃん！／＼」

「「大好きだよ！！」」

チュ

~~~~~  
Fin  
~~~~~

番外編 Merry Christmas (後書き)

感想、よろしくお願いします！

V S 炎龍 後編

あれから何分経っただろうか。

今この場にいる、ブライとアシッド・エースはボロボロになり炎龍は無傷とまでは行かないが、ほぼ無傷だろう。

そして、熱斗達による、巨大な太陽作りはようやく完成に近づいていた。

「ロックマン！」

『熱斗君！ これで完成させよう！！』

「おう！」

「『太陽おおおおおおおっ！』」

熱斗たちがそう言うと、太陽は半径5Mぐらいの太陽になっていた。

「で、出来た……出来たぞ、ブライ！」

そういうと、ブライは傷ついた体を引きずりながら、熱斗に近づいてきた。

「よ……うやくか……。なら、それ……をあいつにぶつけ……る」

そういい残すと、ブライは電波変換を強制的に解かれ、その場に倒れこんだ。

「ぶ、ブライ!? おいつ! 大丈夫か!？」

『熱斗君! 今は、ブライ君の頑張りを無駄にしないように、この太陽をアイツにぶつけよう!』

「……ああ、そうだな!」

そういって、熱斗は辺りを見渡した。

しかし、そこにはアシッド・エースの姿が見当たらなかった。

「あ、暁さんは!？」

『あ、あそこで倒れてるよ! 早く助けよう!』

「ああ、そうだな! バトルチップ、エアースチール!」

そういって、熱斗はその場からアシッド・エースがいる場所に瞬

間移動した。

「暁さん！ 大丈夫ですか!？」

「っ……ひ、熱斗か」

「暁さん、しっかり!」

「お、俺は大丈夫……だ。それより、早く……こ、コイツを」

そう言うと、アシッド・エースは電波変換を解かれて、暁に戻った。

「くっ……エリ asteer!」

そう言うと、またまた熱斗は瞬間移動をした。

そして、暁を安全なところに非難させると、太陽の近くまで戻ってきた。

「……行くぜ、ロックマン!」

『うん!』

「バトルチップ、エアースューズ!」

そう言つと、熱斗の足からブースト見たいなものが出て、熱斗は空を飛んだ。

「行くぞ！ バトルチップ、ソーラーレイ！ スロットイン！」

そう言つと、熱斗の右手が赤く光りだした。

「行くぞおおおおおおお！」

『はあああああああ！』

二人が叫びながら右手を太陽に向けると、そこからは赤いレーザーが放出した。

「『うおおおおおおお！』」

そして、そのままレーザーは太陽にぶつかり、少しずつ太陽は炎龍に向かって移動を始めた。

そのまま、移動スピードはだんだん速くなってきた。

炎龍に近づいていくと、流石の炎龍も気が付いたのか、太陽に向

かって口から炎を吐き出した。

『ギヤオオオオオオオオオオ！』

「『はあああああああ！』」

そして、二つの力が重なったが、少しずつ炎龍に向かって動き始めた。

『ギヤアアアアアアアア！』

「ここまで来たんだ……」

『ここで負けるわけには……』

「『いかないっ！ フルシンクロー！』」

そう言つと、熱斗の体は光りだした。

「『真・ソーラーレイ……！』」

そう言って放たれたレーザーは、さっきのレーザーより太く、何より輝きが違った。

非常な戦いゝ前編ゝ（前書き）

またまた一部構成です

非常な戦い〜前編〜

・コスモウエーブ・宇宙・

「こ、ここは？」

スバルはあの後、あの機械へとウエーブインして気がつくところ
に立っていた。

「うわあ、星がいつぱいだ！」

『おいおい、この調子で大丈夫かよ……』

「だ、大丈夫だよ！ 早くしないと、地上で戦ってくれてる皆に申
し訳ないよ！」

『……目を星にしているやつに言われても、全く説得力が無いぜ？』

「はっ！」

そう言われると、スバルは目をこすった。

「……行くよ、ロック！」

『おっ……』

そして、スバルは走り始めた。……目の前にある、黒い居城に向かって。

・コスモウエーブ・宇宙・黒い居城前・

「どっやって入るっ……」

『普通に入ればいいだろ？』

「でも、普通こういう扉には鍵みたいのがあるよね……？」

『……まあ、一回やってみようぜ』

「まあ、いいけどさあ」

そう言うと、スバルは扉に手を掛けた。

すると、いきなりスバルの姿がその場から消え去った。

「……？……？」

「……あ、あれ？」

スバルは気がつくのと、周りが宇宙みたいで、道が無い場所の一部に立っていた。

「こ、ここは？」

「ふっふっふっ……良く来たな、ロックマン！」

「こ、この声は……バルアナッ……！」

スバルはどこから聞こえてきたバルアナの声に対して、身を構えた。

しかし、バルアナは楽しそうに……まるで、今から芝居でも始まるのかと言うくらい気楽そうな声で、こっぴいった。

「さあ、決戦の時は来た！ さあ、おたがいにいい殺し合いにしようじゃないか！」

「僕はお前を倒す！ そして、ミノラちゃんと地球を守ってみせる！」

「ふっ。だそうだが、ミノラ？」

バルアナがそう言うと、スバルは背後から何者かの気配を感じた。

スバルは、気配を感じたほうへバスターを構えた。

しかし、そこから現れたのは、黒い、ハーブ・ノートだった。

「は、ハーブ・ノート!? で、でも……こんなに黒いはずが無い
!」

「……私は、ダークノート。……バルアナ様の命により、ロックマ
ン。アナタを倒ころします」

「なっ!?!」

『来るぞ、スバル!』

「くっ!?! 戦わなくちゃいけないのかっ!?!」

「さあ、シヨ一の始まりだ!」

「……行きます」

そう言うと、ダークノートは黒いギターを構えた。

「……ダークシヨック」

そう言って、ギターを弾くと黒い音符がスバルに向かってきた。

「なっ！？ スピーカーを出さずに！？」

『スバル、早く打ち返せ！』

「くっ、ロックバスター！」

スバルも、黒い音符に対してバスターを撃った。

しかし、黒い音符は威力が高く、バスターをはじき返した。

「なっ！？」

『避ける、スバルッ！？』

「くっ！？」

スバルは本当にギリギリの所で攻撃をかわした。

「……………外した」

「はあはあ。あ、危なかった……………」

『スバル、フォースチェンジだ！』

「……………」

『スバル!!』

「……くっ！ フォースチェンジ、サイクロンフォース」

スバルはそう言うと、サイクロンフォースへとフォームを変えた。

「……ダークストリング」

ダークノートがそう言うと、黒いギターから6本もの弦スバルに向かって伸びてきた。

「エアロシールド!」

「……無駄」

「なっ!?!」

黒い弦は、エアロシールドを貫通して、スバルを捕らえていた。

そしてダークノートは、弦でスバルの両腕と両足を縛って宙吊り縛りにし、スバルの自由を完全に奪った。

「……これで終わり」

「っ！？ ミソラちゃん、正気に戻るんだ！」

「……私はダークノート。……アナタもここで終わり」

そう言うと、ダークノートはスバルとの距離をつめるために、スバルに歩み寄ってきた。

……T o b e c o n t i n u e .

非常な戦い〜後編〜（前書き）

少々のグロテスクな表現があったり、なかったり・・・。

非常な戦い〜後編〜

「くっ!?!」

『スバル、カマイタチだ!』

「くう…ぼ、僕は……」

「……ダークカード、ダークソード」

ダークノートがそう呟くと、右腕には黒いソード見たいなものができた。

その剣は、ブウンっとな音を立てつつ、存在感が異常であった。

「み、ミソラちゃん! その剣は……!?!」

「……私は、ダークノート。……何回も言わせないで」

「違う!」

「っ!?!」

「君は…君は……」

『スバル……っ』

「僕の大好きなミソラちゃんだああああああああっ！」

スバルがそう言うと、スバルの体から大量の光が漏れ出した。

そして、その光は黒い弦を、浄化、した。

その光を見て、ダークノートは後ろに後ずさり始めた。

「なっ！？ そ、そんな事が……！？」

「あ、あれ？ 今のは……？」

『さあな。でも、丁度いいじゃねえか。このまま行くぞ！』

「……ミソラちゃん。もう止めよう」

「……わ、私はダーク……」

「君は、僕の大好きなミソラちゃんだ！ 誰がなんと言おうと、君は僕の大好きで、とても大切なミソラちゃんだ！」

「……っ！」

スバルがそう言うと、ダークノートは頭を抱えてその場で膝を着いた。

それを見たスバルはダークノートに近づき始めた。

「うっうっ……。わ、私は…ミソ…」

「フンツ。つまらん。もう、お前は用済みだ」

バルアナがそう言った瞬間、ダークノートを赤い光線が貫いた。

その光線が直撃した、ダークノートはその場に倒れこみ、口からは血を吐いた。

「み、ミソラちゃん!？」

スバルはそう言うと、フォースを解除してダークノートに近づき、ダークノートを抱きかかえた。

「す、スバル…君……。ごめん…ね？」

「ミソラちゃん！ もう、しゃべらないで！！ 今、リカバリーを使うから！」

「も、もう…私は…ダメみた…。い。…ゴフツ！」

「ミソラちゃん！ 死んだらダメだ！」

「ごめん…ね。…これで…最後…。…だから」

ミソラは、そう言ってスバルにキスをした。
キスをしている二人の顔には、涙があった。

「……バイ……バイ」

そう言い残すと、ミソラは息を引き取った。

「み、ミソラちゃん？ ……ねえ、ミソラちゃん！？ ミソラちゃん
ああああんっ！？」

「クッハッハッハッハッ！ 面白いものを見せてもらったよ、ロツ
クマン」

「……………いい」

「ん？ 何か言ったかね？」

「僕は……………お前を許さないッ！！」

そう言つと、スバルはミソラをその場に寝かせて立った。

「うおおおおおおおおおお！！」

……カナシミ、イカリ、ウラミヲカクニン……

……フォースP G M停止。ダークフォースP G Mダウンロード開始
……完了。

……ダークフォースP G M始動。

そう聞こえると、スバルの周りにはドス黒い霧が辺りを舞い始めた。

「ダークフォースチェンジ！　ダークサイクロン！」

そう叫ぶと、スバルは鮮やかな青色から、サイクロンフォースのほとんどが黒く、目は赤くて獲物を狩りに行く様な目で、右腕は自由に出したり出来るようになっていた。

「……うおおおおおおおおおっ！」

スバルはミソラを抱き抱えてそう叫ぶと、周りの空間にひびが入った。

そして程なくして、その空間は消滅し辺りは広い空間だった。

「……ここは？」

「フッフ、まさかあの空間から自力で出るとはな」

「バルアナ!!」

スバルは、バルアナを見つけた瞬間、ミソラをその場に寝かせるとバルアナに突っ込んだ。

「クツクツクツ。いいだろう、来い！」

「ぶち殺してやるっ！ ダークサイクロンソード！」

そう言うと、突っ込みながらスバルの右腕には黒い風を纏った、黒い剣が装備されていた。

それを見たバルアナは、どこからか刀を取り出した。

「ダークスラッシュ！」

「ライジング！」

そして、二人はつばぜり合いの状態となった。

非常な戦い〜後編〜（後書き）

感想、お待ちしております。

最終戦〜1〜（前書き）

受験終了!! 受かってたら良いな

最終戦〜1〜

「うおおおおおおお!!」

「クツクツクツ！ 中々面白い力だ！」

そう言うと、バルアナは刀と共に自分の体を後ろへと退けた。

しかし、それに素早く反応したスバルはダークサイクロンソードをバルアナへ、飛ばした、

「なっ!?!」

「ぶっ殺してやる!!」

「フンツ!! 小賢しい!!」

バルアナはそう言うと刀を振ってダークサイクロンソードをはじき返した。

そして、はじき返した後、バルアナは見た。

スバルが、二丁の拳銃、を構えているところを。

「ダークスプレッド!!」

「何！？ 間に合うか！？」

スバルの姿はダークサイクロンからダークパニッシャーへと変わっていた。

そして、スバルは二丁の拳銃から無数の禍々しい色のした弾が放たれた。

バルアナは刀を右手から左手へ投げ移すと、そのまま放たれた弾を切り裂いた。

しかし、弾は切れ裂かれると、その場で爆発した。

「ぐはっ！？」

「…ダークスナイプ」

それを見たスバルは、拳銃をホルダーに直して右手をスナイパーに変えてバルアナに対し弾を放った。

またしても、この弾の色は禍々しい色だった。

バルアナは爆発に巻き込まれていたのでコレに気づかず、攻撃をまともに受けた。

「がつ!?!」

そうつめき声を上ながら、バルアナは後ろへと吹っ飛んだ。

スバルは右手を普通に戻してバルアナへと近づき始めた。

「……クツクツク」

「? 何がおかしい?」

「ハーツハツハツ!」

「……ついに頭がおかしくなったか?」

「面白い、面白いぞ! こうでもしてくれなくては、全然面白くないわ!?!」

「何を言っているんだ、お前は!?! 面白いだと!?! 人をこんなにもしておいて、何を言っているんだ!?!」

「ん? 何のことだ?」

「なっ!?!?」

「ああ、ミノラのことか? あれはつまらん、物、だったな」

「ミノラちゃんは物なんかじゃない!?!」

「ふん。あれよりは、地球に存在している人類のほうが面白い事をしてくれるわ」

「面白い事？」

「ああ、面白いさ。見てみる、これが今の地球の人類だ」

バルアナがそう言うと、バルアナの後ろに巨大なモニターらしきものが現れた。

そしてそこに映されていたのは、人類が争いを始めて傷ついていく様だった。

「なっ！？ こんなにもみんなが！？」

「フッフッフ。こう考えれば、ミソラは良い仕事をしてくれた」

「どういう意味だ！？」

「簡単だよ。負の力…主に人を信じる心を潰す力をアイツの歌に乗せて流したんだよ」

「……そういえば、あのときにミソラちゃんの歌が流れてた」

「そう！ あの時だ！ そして、この歌を聴いたものは人を信じられなくなり、しまいにはこの世界自体が信じられなくなる！ そして、人々は争いを始める！」

そう言うと、バルアナは両手を上に掲げた。

「こんなに素晴らしい事があるか!? 素晴らしい! そして面白い!」

「許さない! みんなの心を。そして、ミソラちゃんの歌をこんなことに使った事も!」

「許さなければどうすると言っただ?」

そう言いつつ、バルアナは両手を下ろした。

「さっきから言ってるだろ!? お前だけは、ぶっ潰す!!」

「ははは、やってみるがいい。……しかし、私もそろそろ本気を出そう!」

そう言うと、バルアナの周りをオーパーツが舞った。

「な!?! そ、それは!?!」

「そう。オーパーツだ。さて、質問だがお前はコレをどうやって使っていたかな?」

「その力を使って、姿を変えて……ま、まさか!？」

「そう。トライブオンだ!!　そして、島は三つのオーパーツがある!」

そう言うと、バルアナは両手を再び掲げ高らかに叫んだ。

「トリプルトライブ!」

バルアナを光が包み込んだ。

最終戦〜1〜(後書き)

感想、お待ちしております。

最終戦〜2〜(前書き)

受験、合格しました^ - ^

最終戦く2

光に包まれたバルアナは、少しすると光から出てきた。

光から出てきたバルアナは、スバルがトリプルドライブした姿にやはり似ていた。

「クツクツク！ さあ、2回戦と行こうではないか！！」

「くっ！ ダークスプレッド！！！」

スバルは二丁の拳銃をホルダーから引き抜くと、トリプルドライブをしたバルアナにダークスプレッドを放った。

しかし、スバルが放った瞬間にバルアナの姿が見えなくなった。

「なっ！？」

「後ろだ」

「！？」

スバルが気づく前にバルアナはスバルの後ろへ超スピードで移動していた。

バルアナは、右手の大剣でスバルを切り上げた。

「がはっ！」

そして、スバルは胸を上を反る形で上空へ飛ばされた。

そこに、バルアナは追撃を加えるように斬撃を繰り返した。

「オーバースラッシャー！」

「ぐはああああああっ!？」

その攻撃を死角から放たれたスバルは、当然避けられるはずもなく、攻撃を背中からもろに喰らってしまった。

攻撃を受けたスバルは、バルアナがいる地点から約40mほど飛ばされ、地面に胸から衝突した。

「フツハハハハ！ この力、素晴らしい！ 素晴らしい過ぎる！」

「ぐ……くっ」

スバルはうめき声を上げながらも、倒れていた場所から立ち上がった。

「流石だな、ロックマン。あの攻撃を受けても立っているとは」

「（おかしい！ 確かにトライブキングの攻撃力は高かった。でも、あの攻撃があれだけの威力を持っていたとは思えない！ それに）」

「これほど速く動けない……か？」

「なっ！？」

「貴様の考えていることなんぞ、手に取るように分かる。簡単な答えだよ、ロックマン」

「簡単……だつて？」

「ああ、簡単さ。使うものの器量が待ったく違うのだよ！」

「！？ だ、だからって、僕は負けるわけには行かないんだ！」

「フンッ。これほどの力の差を見せ付けられて、まだ向かってくるか。……それは勇気ではない。それは無謀だと言うのだ」

「だから何だ！ 無謀でも何でも、僕は勝つー！」

「……ならば仕方が無い。コレで決めてやろう……カイザーデルタブレイカー！」

バルアナが右手の大剣で三角形を描き始めるのを見た瞬間、スバル

は二丁の拳銃を1つのショットガンのような形をした銃に組み替えた。

「……バトルカード、ダークフォースヒックパン DFB ダークシューティングレーザー！」

スバルがそう言い終わると同時に、バルアナは三角形を描き終えた。

そして、三角形のレーザーをスバルに放った。

スバルも、禍々しい黒い色をしたレーザーを放った。

そして二つのレーザーはぶつかり合った……が、2秒も持たずに黒いレーザーがかき消された。

「!?!」

「終わりだ、ロックマン」

「うわああああああっ!?!」

そして、三角形の形をしたレーザーは、スバルを撃ち抜いた。

最終戦くっく

カイザーデルタブレイカーに撃ち抜かれたスバルは、叫び声を上げるとその場に前屈みの姿勢で倒れこんだ。

スバルは、すでに電波変換が解かれ、体中はボロボロになっていた。

その側に現れた者がいた。

その者というのはウォーロックで、自らも傷ついているのにも関わらず、スバルの身を揺すったりしてスバルを心配していた。

「スバル！ おいつ、スバル。しっかりしろ！！」

「……………」

「スバル、スバル！！」

「フン！ ようやく、死んだ、か……………」

「っ！？ スバルは死んでねー！！」

「ならば、そいつは息をしているのか？」

「っ！？」

「そつだ。そいつは息をしていない。それは紛れも無く、死、だ」

それを聞いたウォーロックは、頭の中で何かが切れた。

『……さねえ』

「？」

『許さねえっ！！！』

そう叫ぶと、ウォーロックはバルアナに向かって行った。

しかし、バルアナはそれを難なく避けると、ウォーロックを左手で殴った。

殴られたウォーロックは、本当に殴られただけなのか？ と疑問に思うほど後ろに飛ばされ、スバルの近くで倒れた。

『くっ！？』

「そこで、お前も死んでいる」

『（………やべー。意識が朦朧としてきやがった……。俺もここで死ぬのか？）』

ウォーロックは、ここに来て自分の死を覚悟した。

それと同時に、悔しさや悲しさが込み上げてきた。

『（俺は…スバルを守れなかった。…俺のせいでスバルは死んじまうのか…よ）』

最後にちくしょうと思いつつ、ウォーロックは瞼を下ろした。

（……お前、諦めんのか？）

そう思った瞬間に、ウォーロックの頭の中に声の流れ込んできた。

『（！！？　だ、誰だ！？）』

（俺か？　俺は……まあ、その内分かるって。で、話は戻るが、お前はここで諦めるのか？）

『（……俺は…）』

（うじうじしたしたやつだなあ。ハッキリと言っちゃまえよ、諦めたくないって）

『（……でも、俺はスバルを…）』

（コイツか？　……うん、こいつ生きてるからね？）

『(何！？ それは本当か！？)』

(ああ。でも、もう生きることを諦めてやる)

『(なっ！？ スバルの野郎！)』

(まあ、仕方が無いのかもしれないがな。でも、本心ではコイツもこのままで終わっていいわけが無いって事ぐらい分かってるはずだ。だから、後はお前が何とかしてやれ)

『(俺が？ でも……)』

(お前、自分には何も出来ないかと思ってんのか？ なら、その幻想を俺がぶっ壊してやるよ！)

『(えっ?)』

(うおおおおおおおっ！！)

声の主がそう言うと、ウォーロックの意識は渦へと巻き込まれていった。

異世界・?????

「ふう。これで、いいかな」

「？ どうしたんだ、いきなり？」

「ん？ ああ、別に何でもねえよ当麻。さっさと帰るんぜ」

「ああ、そつだ
」

「あーっ！ アンタ、勝負しなさいよね、勝負！ー！」

「げっ！？ ビリビリ！？ そして、何で俺だけ！？ コイツも俺と同じ右手を持つてるじゃん！」

「ま、まずはアンタからよ！ー！」

「不幸だあああああつ！」

「まあ。頑張れ、当麻。……それと、あいつらもな」

これは、また違う世界で起こった話である。

最終戦くっく (後書き)

最後の世界の話は、流ロクが終わってから書きたいと思っています。

最終戦〜4〜(前書き)

おお、中々いい調子に投稿できてるぞ E

最終戦〜4〜

スバル・精神世界

そこには、世界が水で覆われており、スバルは水の中で蹲っていた。

「（……………僕は、負けちゃいけなかったんだ……………。なのに……………
……………！？）」

スバルは、自分の負けに今まで以上の悔しさと悲しさ……………それとミ
ソラへの申し訳なさで胸がいっぱいいっぱいになっていた。

「（……………うつつ。ミソラちゃん…僕、負けちゃったよ。……………ごめん…
ごめん）」

『諦めてんじゃねえぞ！！』

「え？」

スバルは聞きなれた声を聞こえた気がしたので、辺りを見渡し始めた。

「今の声って……」

『スバル!!』

「ウォー……ロック?」

『しっかりしやがれ、スバル!!』

そして、二人は精神世界で再開を果たした。

しかし、ウォーロックから見たスバルは明らかにいつものスバルではなかった。

『ほら、行くぜ!!』

「……無理だよ。バルアナには勝てないよ……」

『ふざけんな!!』

「っ!?!」

『お前は何だ!?!』

「僕は……」

『ロックマンだろ!?! 今まで世界を3度も救ったヒーローだろ!?!』

「……………今までが出来すぎてただけだよ。現に、僕は負けたじゃないか……………」

『今までも、何回か負けてきたじゃあねかつ!! それでも、這い上がって、勝つために努力して今までも勝って来たじゃあねえか!!』

「……………」

『それにな! 今地球で戦ってくれてる、光や暁、それにソロは誰に最後の戦いを任せた!? お前だろうが!!』

「……………熱斗君たちがここにきていたら……………」

『いい加減にしやがれ!!』

「つ!?!」

『本当はお前も分かってんだろ!? ここに来れたのは、バルアナを倒すのは俺達しかないって、みんなが、信頼、してくれたからだろうが!!』

「……………うん」

『なら、俺達が今することは何だ!?!』

「……………みんなの期待に応える……………でも!!」

『ああ、俺達は今までもみんなの期待に応えてきた。でもなあ、それは俺達だけの力じゃあねえだろうが!!』

「……………」

『俺達は、みんなとの絆の力で期待に応えて来たじゃねえか!!
なら、今度も簡単だ! 絆を信頼すればいい! そして、あいつを
倒せばいいだけだ!!』

「でも…………でも!!」

『それに、俺達がさっき使った力は、憎しみや悲しみから来る復讐
心を力にしていたからだ! 次は、勝てる!!』

その言葉には、全くの根拠は無かった。

だが、スバルを再び立ち上がらせるには十分すぎる程の力を持つて
いた。

「…………そう…だね! 行こう、ウォーロック!」

『ああ!!』

水で覆われていた世界が、一変し太陽に辺りいろんな花が、植物が、
生き物が現れた。

『ふん。ようやく息を吹き返したか』

「『えっ!?!』」

スバルたちは、その一変した世界でいきなり聞こえて来た声に驚くと、声の主を探した。

そして、そこには……………。

「AM三賢者と、ウインドにアーク!？」

『な、何でここに!？』

そこには、スバル達の仲間がいた。

最終戦〜4〜(後書き)

感想、お願いします！

最終戦〜5〜(前書き)

ううん……今回はちょっと読みにくいかもです^ - ^ :

最終戦く5く

「ほら、速くあんなやつ倒せよな」

「そうだぞ、スバル。バルアナなんて、速く倒してしまえ！」

「……一応、君達の前の上司じゃないの？」

「そんなことは知らねえ！」

「何かごめんなさい！！」

『……スバル』

なぜか、心の中でスバルは心底謝っていた。

『……にしても、あんたらがいるとはな』

そう言うと、ウォーロックはAM賢者の3人を見た。

『まあ、そういうでない。我々も、お前達を心配しておるのだ』

『ふうん……まあ、いいんだけどな』

『……レオ・キングダム。あんまり時間がありません。用件を速く済ませましょう』

レオ・キングダムをたしなめる様に言ったのは、ペガサス・マジックだった。

『ああ、そうであったな。……スバル』

「は、はい」

レオにまじめの口調で呼びかけられたスバルは、少し緊張した口調で答えた。

『ソナタに言うておくことがある』

「僕に言うておくこと?」

『そうだ。……単刀直入に言おう。響ミソラは完全に死んではないな
い』

「『えっ!?!?』」

『しかし、完全に死んではないだけで、生きているわけではありません』

そう言ったのは、ドラゴン・スカイだった。

「それって、どう言う……」

「ああ！ もう、めんどくせえ！ 生き返らせるなら、今って事だ
！……」

「み、ミソラちゃんを生き返らせる……」

「ああ。でもなあ、そんなにチンタラしてらんねえ！ だから、お前はさっさとバルアナの野郎をぶっ飛ばせ！」

「……………」

「そつだ。お前達がバルアナと戦っている間ぐらいは、響ミソラは我々が何とかする」

「そんな事が出来るの……」

『我々を誰だと思っているのだ？』

「……………うん。出来そうな気がしてきたよ」

『しかし、我々の力でも持って15分ぐらいだ』

「15分……………」

『それぐらいあったら、十分だぜ……！ なあ、スバル？』

「……いや、それは無理だ」

『なっ!?!?』

スバルがそう言うと、ウォーロックは心底驚いた。

しかし、他のみんなは驚いている様子は無かった。

なぜならば、今のスバルの目は、しっかりと前を見つめていた。

「バルアナを相手にする以上、今の僕達のカじゃあ勝つのがって難しい。増してや15分以内は絶対に無理だと思う」

『スバル……』

ウォーロックはスバルの話聞いて、怒鳴りつけた勢いが無くなった。

ウォーロックも、心のどこかでは分かっていたのだろう。

しかし、それを聞いた他のみんなはあまり驚いてはいなかった。

そして、レオが口を開いた。

『そのことについては心配するな』

「えっ？ それってどういう事？」

『それは目が覚めれば分かるはずですよ』

「……うん、分かった！ それじゃあ、僕達は行くよ」

『行ってくるぜ！』

『『『『「頑張ってきて！」「』『』』』』

そして、スバルは意識を失った。

「くっ……」

「な、何！？」

スバルは、目を覚ますと体をゆっくりと起き上がらせた。

そして、スバルの方を向いていたバルアナは驚いていた。

「き、貴様！？ 何故生きている！？」

「言ったでしょ？ 僕は……負けられないんだって……！」

そう言い切ると、いつの間にかスバルに近くにハンターV Gの中にいたウォーロックが外に出でてきた。

『俺も言ったよな！？ お前を許さねえって！！』

「行くよ、ロック！」

『おう、スバル！！』

強力ナ希望、絆ヲ確認。全テノ、フォースP G Mヲ廃止。シヤイニング・コード、ダウンロード開始。・・・完了。コードナンバー・・・000。

「『シヤイニングコード、000！ シヤイニング・スター・ロックマン！』」

光が、スバルとウォーロックを包み込んだ。

最終戦〜6〜（前書き）

もうそろそろ終盤です！！

最終戦〜6〜

「『はああああああつ！！』」

「い、いったい何が起きていると言うのだ!?!」

スバルが光に包まれると、辺りを光が包んだ。

それは不意に起きたことなので、バルアナは腕をクロスさせて目を庇った。

そして、光が少しずつ弱まって来ると、バルアナは腕を下ろし始める。

腕を下ろし始めたバルアナが見た、スバルの姿は今までに見たことの無い姿だった。

「な、何だ貴様は!?!」

「僕達は」

『俺達は』

「『シャイニング・スター・ロックマン！ お前を倒す!?!』」

シャイニング・スター・ロックマンは、今までのロックマンの青い

ボデイが色鮮やかな金色に、そして、バイザーはそのままの赤で、背中には不死鳥を連想させるような金色の羽と、大剣というよりは少し細目の剣が付いていた。

「ロツク、15分以内だよ！」

『ああ、分かってるさ！』

「くっ！？ この死に底無いが！」

バルアナはそう叫ぶと、スバル目掛けて右手の大剣を振り下ろした。

すると、その軌道で斬撃がスバル目掛けて飛ばされた。

しかし、スバルは右手を開いて斬撃に当てた。

斬撃はスバルに右手に当たると、その場からかき消された。

「なっ！？」

「時間があまり無いんだ！ 一気に決めさせてもらおうよ！」

スバルはそう言うと、バルアナに向かって飛び出した。

バルアナは大剣を構えてスバルに対抗しようとした。

しかし、バルアナが構えるより速く、スバルはバルアナの顔に右手を叩き込んだ。

「がはっ!？」

パンチを食らったバルアナは、後ろに吹っ飛ばされた。

スバルは、後ろに飛ばされるバルアナを直ぐに追いかけて、追いついた。

そして、そのままバルアナの背中を蹴り上げた。

「ぐふっ!？」

そして、蹴り上げられたバルアナは、重力がある建物の中で、重力に逆らうように上空へと飛んでいく。

バルアナが飛んでいくことを確認していたスバルは、背中の翼を広げてそのまま上空へと飛ばたい。

上空へと飛ばたいスバルは、バルアナの少し上に辿り着くと、バルアナに対して踵落としを繰り返した。

「はあっ!！」

「チイツ!？」

バルアナはその攻撃に気付き、何とか大剣でガードした。

しかし、踵落としの威力は大剣のガードでは殺し切れず、バルアナは地面へと叩き付けられた。

叩き付けられた場所は、地面が壊れた。

「はっ!？」

スバルは叩き付けられたバルアナに向かい、上空から急降下し膝をバルアナに減り込ませた。

すると、その威力を象徴するかの様に地面が更に弾け飛んだ。

「がはっ!？」

膝を減り込ませたスバルは、その後バルアナと距離をとった。

すると、バルアナが不気味な笑みを零しはじめた。

「……くっくっく」

「？ 何が可笑しい？」

『それとも、今の連撃でMにでも目覚めたか！？』

「流石はロックマンと言った所か」

バルアナはウォーロックの言葉を華麗にスルーすると、そう言いながら倒れていた場から立ち上がった。

「こうなれば、私も本気を出すとするか！」

『そんな虚仮威しに乗ると思ってるのか！？』

「ロック、多分本気だ！！」

「流石はロックマンだ」

『俺もロックマンだ！！』

「見せてやろう！！」

『無視するんじゃないっ！！』

「ハアアアアアッ！！」

「来るよ、ロック！」

『分かってるよ、コンチクシヨ！！！』

スバルがウォーロックにそう言うと、ウォーロックはやけくそに叫んだ。

そして、バルアナの周りには黒い光が輝いていた。

最終戦〜6〜(後書き)

感想待ってます!!

最終戦くっ

「はあああああっ！」

バルアナがそう叫ぶと、バルアナは黒い光に包まれた。

『スバル！今のうちに攻撃だ！！』

「うん！フォース・バスター！」

スバルは左手を黒い光の塊へ向けると、今まで通りにバスターを放った。

するとどうだろう。

今までの、約3倍ぐらいの威力があるであろう赤色の弾が発射された。

しかし、フォース・バスターは黒い光に当たると、左右へと攻撃がそらされた。

「くっ！？」

『スバル、もう一発だ！！』

「うん！」

「無駄だ」

「『なっ！？』」

スバルは、ウォーロックに言われた通りに、もう一発フォース・バスターを放とうとした。

しかし、放つ前にバルアナがスバルのフォース・バスターを否定した。

そして、バルアナは黒い光をかき消して姿を現した。

しかし、スバルにはバルアナの姿が元に戻ったようにしか見えなかった。

『けっ！ やっぱりハッターか！！』

「それはどうか、なっ！！」

「『っ！？』」

ウォーロックがそう言ってバルアナを挑発すると、バルアナは右手を振り上げた。

すると、バルアナの目の前から衝撃波がいきなり現れ、スバルに向

かって突撃してきた。

それも、高速で。

「がはっ!?!」

「フンツ!?!」

「くっ!?! はあっ!?!」

スバルに衝撃波が当たるのを確認したバルアナは、左手を振り上げてまたもや衝撃波をスバルへ飛ばした。

しかし、スバルもそれに気づくと、ギリギリのところまで背中を羽を広げ、空中へ逃げた。

「ふん。はあああっ!?!」

「!?!」

しかし、バルアナが上げた両手を勢いよく下へ下ろすと、スバルへたくさんの炎の弾が空から降り注いだ。

スバルはそれに気づくと、空中を駆け回りそれを避けようと試みた。

しかし、炎の弾は数が多く、全てを避けきるのとは不可能だともっ

たスバルはダメージを最小限にするため何個かは当たることを覚悟していた。

スバルは炎の弾を効率避けて、そして、これには当たろうと言っ炎が来たとき、いきなり炎が姿を消した。

「えっ!?!」

「甘い!?!」

「しまっ!?!」

スバルが呆気にとられると、その隙を突いてバルアナが飛び上がった。

そして、右手から黒く輝く大剣を取り出すと、バルアナは大剣を振りかぶった。

バルアナの行動を見ていたスバルは、背中に背負っている剣を右手で持とうとした。

「ふんっ!」

「がはっ!?!」

しかし、その行動はバルアナがスバルを切り裂く事で防がれた。

バルアナはスバルを切り裂くと、空中で何回もターンをし、更にスバルを切り裂いた。

そして、最後に踵落としを繰り返した。

「はああああっ！」

「ぐわああああっ！」

そして、スバルは地面にたたき付けられた。

その後、バルアナは地面にたたき付けられたスバルに左手を手ををパーの形にして向けた。

「これで終わりだ、ロックマン」

「ぐっ……」

『スバル、しっかりしろスバル！』

バルアナの左手には、エネルギーが集合し始めていた。

スバルは、うめき声を上げるだけでバルアナの行動には気づいてはいない。

最終戦〜8〜

「これで終わりだ！ グレイシング・ブレイザー！！」

『スバル！！』

バルアナの左手からは、オレンジ色をしたエネルギーの塊がレーザー状にスバルに向かって放たれた。

そして、それはスバルのところまで行くと、ドゴオオオオッと音を立てて爆発した。

「ふっ。ロックマンも、ここまでのようだな」

バルアナは、そう言うと空中から地上に降りてスバルに向けて背中を向けた。

そして、この部屋を去ろうとしたその時、後ろからガチャ。つと瓦礫の音がした。

その音に気づいたバルアナは驚くような形相で後ろに振り返った。

「ま、まさか……！？」

「僕は、まだ死んでない！！」

バルアナの視線の先には、金色の体をし、右手には今まで背中に背負っていた、鏢のところがまるで不死鳥の羽の様な形の剣が抜かれていた。

「な、なんだと!? ま、まさか……」

「そう。この剣で弾いたのさ! あのレーザーが放たれたとき……」

「くっ……はっ!? な、何あれ!?!」

『スバル!! 急いで背中の剣を前に出せ!!』

「う、うん!!」

そう言って、スバルは背中の剣を寝た状態から剣を抜いた。

そして、その剣でレーザーを受け止める形で前に出した。

すると、レーザーは剣に当たりスバルの両サイドに別れた。

これにより、スバルへのダメージは手が痺れるぐらいだった。

「つてな感じだよ!!」

「くっ!?! ならばこれで終幕にしてやるっ!!」

「……僕もそろそろ終わりにする気でいたよ。行くよロック。これで終焉だ!!」

『おっ!!』

「サンダーボルトブレイドオオオオオ!!」

バルアナはスバルから事のいきさつを聞くと、歯軋りをした。

そして、右手の大剣に電気を帯びさせると、その大剣でスバルに切りかかった。

スバルはそれを見つめるだけだった。

そして、スバルに大剣が当たりそうな時、スバルは右手に持っている剣で、普通、に弾き返した。

「なっ!?!」

「これで、終わりだ!!」

よく見ると、スバルが持っている剣は、さっきよりも光り輝いてい

た。

「エクスカリバー。それがこの剣の名前。そして、お前を倒す技名は」

「っ!？」

「シャイニング・ザ・ブレイカアアアア！」

「ぐはあああああああ！」

スバルがそう叫ぶと、スバルの剣 エクスカリバーが強く光り輝き、そのままバルアナを切り裂いた。

そして、切り裂かれたバルアナはよろめきつつ後ろへと下がっていく。

「がはっ……き、貴様は……なぜここまで強い……?」

「……僕は強くなにか無い。もし、お前が僕が強いと思うなら、それは絆があるか無いかの差だよ」

「絆……だと?」

「そう、絆。僕はみんなとの絆があるから戦える。みんなを守りたいと思うから強くなれるんだ!」

「絆……」

「……君にも絆はあつたはずだ。シュック達との絆が」

「!?!?」

「君はその絆を大切にはしなかった。それが君の敗因だよ」

「……ふつ。きず……な……か……」

そう言い残すと、バルアナはこの世から消え去った。

『スバル！ もう直ぐタイムリミットだ！！ 早くミソラを』

「っ!?!? うん！ って、ミソラちゃんは!?!?」

『あそこだ！ あそこで……光ってる!?!?』

「何で!?!?」

スバル達の視線の先には、寝かしている体の光っているミソラがいた。

「と、とりあえず！ 早くミソラちゃんに近づいて!?!?」

『あ、ああ！ そうだな!?!?』

スバルは、少し驚きながらも走ってミソラに近づいた。

そして、スバルはミソラの近くまで来るとしゃがみこんでミソラのお腹の上に手を置いた。

「……分かる。この光は、ミソラちゃんの体を守ってくれてたんだ」

『な、なるほどな』

「そして、どうやってミソラちゃんを生き返らせるかも分かった！
はあっ！！」

スバルは、そう叫ぶと右手に意識を集中した。

そして、集中したはずの意識は次第に薄れていき、スバルはミソラの上に倒れこんだ。

『スバル？　おい、スバル！？』

生死の世界

「この門をくぐれば、私は本当に死ぬんだよね……」

そこには、一人の少女がいた。

そして、少女の目の前には大きな門があり、その門は少しだけ開かれていた。

「……死ぬ前に、もう一度スバル君に会いたかったなあ。もっとスバル君と話したかった」

そう呟く少女の瞳には、綺麗な雫が溜まっていた。

「もっと……もっと！ スバル君と……う、うっ……」

「じゃあ、もっと話そうよ」

「えっ!?!」

少女の肩に手が置かれ、そう発せられた言葉。

その言葉を聞いた少女は、驚き振り返る。

そこには、少女が一番愛し、一番会いたかった人物であった。

「さあ、帰ろうっ?」

「うつつ……うん！」

その時の少女の顔は、目に雫を溜めながらも美しく可愛い笑顔をしていたと言う。

現実世界・ビッケバンの基地

「うつつ……あれ？ ここって」

『気がついたか、スバル！！』

スバルは気がつくのと、さっきまでいた世界に戻っていた。

そして、体を起こしミソラから退くと、ミソラの体を抱き起こした。

「ミソラちゃん！？ ミソラちゃん！？」

「……す……ばる……君？」

「ミソラちゃん！！」

「へへ……ただいま」

「お帰り……！」

そして、少女はこの世に戻ってきた。

最終戦〜8〜（後書き）

ってか、これ無理やりじゃね？（^^）
（∴）

感想、お待ちしております！

地球、4度目の危機！？～1～（前書き）

ようやく更新です^ - ^：

地球、4度目の危機!??1

「ミソラちゃん、大丈夫?」

「うん、なんとかね」

そう言うと、ミソラはスバルの肩を借りながら立ち上がった。

ちなみに、二人とも電波変換は解かっていた。

「じゃあ、帰ろうか?」

「うん、そうだね」

「トランスコード003! シューティング・スター・ロックマン
!」

「トランスコード004! ハープ・ノート!」

二人はそう叫ぶと、電波変換を完了した。

しかし、電波変換が完了した時、基地内で放送が流れ出した。

『警告、警告。ただいまより、この基地の舵を地球にとります。基

地内におられるお方は、至急脱出してください。繰り返します

□

「「っえ!?!」」

「す、スバル君!! 大変だよ!」

「と、とりあえず、ここを出よう!」

「どっやって!?!」

「……バトルカード、ブレイクサーベル!」

そう言うと、スバルの右手はブレイクサーベルに変化した。

そして、そのままブレイクサーベルで壁に穴を開けた。

穴の先は、都合よくウェーブロードがあった。

「ミソラちゃん、行こう!」

「うん!」

二人はその穴から基地を脱出した。

そして、スバルたちが脱出すると、その穴は修復されていた。

「す、スバル君。これからどうするの!?!」

「……とりあえず、地球に戻るっ!」

そう言うと、二人はウェーブロードを駆け抜け、地球へのかえるポインターを見つけた。

「行こう、ミソラちゃん」

「うん! きゃっ!?!」

そういうと、スバルはミソラをポインターへ入るように押した。

「スバル君!?!」

「ばいばい、ミソラちゃん。またね」

「スバル君!! スバ……」

ミソラは、ポインターによって地球へと返されいていった。

「ロックバスター!」

そして、ミソラが地球へ帰ったことを確認すると、ポインターを口ツクバスターで破壊した。

WAXA・司令室

ここには今、ヨイリー博士、暁、熱斗、メイル、ソロ、ライトやその他の研究者達が集まっていた。

「早く宇宙での映像を写せないの!?!」

「もう少し待って下さい、博士! 今、回線を!」

「早く! 今がどういう状況なのかを知りたいの!?!」

「了解です!?!」

ヨイリー博士と研究者達が討論をしていると、ミソラが宇宙から帰ってきた。

「ミソラちゃん!?!」

と叫んだのは、ソロとライト以外のみんなだった。

「みんな！ スバル君が！ スバル君が！！」

「スバルがどうしたんだ！？」

『落ち着いて、熱斗君！！』

「落ち着いてられっか！！ ロックマン、俺達宇宙へ行くぞ！！」

「それが出来ないの！！」

「なっ！？」

「スバル君が向こうで何かをしたみたい」

「なんだって！？」

「それじゃあ、スバル君は……」

「うん、一人で……そういえば！」

「「「ん？」「」「」

「地球が危ないの！！」

「え？」

「は？」

「！？」

「んん!?!」

「ふん……」

「まあ、そつちやるつな」

ソロとライト以外は、ミソラの言葉を聴いて驚愕した。

しかし、ソロはどうでもいいという感じで鼻であしらい、ライトはいかにもこうなると分かっていたと言っ感じであった。

そして、みんなの心の中では「スバル(君)無事でいろよ(いてね)」と繰り返し、繰り返していた。

1002

宇宙

「行くよ、ロックー!!」

『ああ、分かってるぜ!』

「……これで、全て終わるんだよね?」

『……この世に負の感情がある限り、こういう事件は無くならないのかもしれない』

「……………うん」

『でもな、それは生物が生きている以上、仕方ないと思う。でもなスバル？』

「うん？」

『今、この事件を解決しないと、地球がなくなっちゃう。なら、話は簡単だ』

「……………うん、そうだね」

「『今は、地球を守る！！ 後のことは、後に考えればいい！！』」

『行くぜ、スバル！！』

「うん！」

「『シャイニングコード、000！ シャイニング・スター・ロックス
クマン！！』」

宇宙に、新たな光が輝いた。

地球、4度目の危機!??1 (後書き)

感想、お願いします!!

地球、4度目の危機!???

「行くよ、ロック!!」

『いつでもいいぜ!!』

スバルは、ロックの返事を聞くとビックバンの基地へ向けて右手を向けると、バスターへと変形させた。

「フォース・バスター!!」

スバルは、基地に向かって何発ものバスターを放った。

しかし、基地に攻撃が当たっても直ぐに修復されるので、攻撃をしても基地が壊れることが無かった。

「くっ!?!」

「無駄だロックマン! そんな攻撃では、この要塞……デッドバイトは墜とせまい!!」

「そ、その声は……Mr・キング!?!」

スバルが攻撃を仕掛けたとき、ビックバンの基地……デッドバイト

(笑) から声が響いてきた。

その声は、スバルも知っているあのMr・キングだった。

「(笑) ってなんだ!?!」

「何言ってるの!?!」

「……コホンッ! 星河スバル、貴様と地球もここで終わりだ!」

「くっ!?! まだ諦めないぞ!」

『ああ、その息だスバル!』

「エクスカリバー!」

スバルは、そう叫びながら背中にある、バルアナを斬った剣を引き抜いた。

「これで終わりにする!」

スバルは、その場から少し浮くと、デッドバイトへ向かって飛び出した。

そして、スバルはこう叫ぶ。

「シャイニング・ザ・ブレイカアアアア！」

その剣は、バルアナを斬ったときと同じくらい輝いていた。

……しかし、その攻撃が繰り出される前にスバルは気づかなければならなかった

「死ぬがいい！」

「っ!？」

デッドバイトについてある銃口という銃口がスバルに向けられていることを。

「ファイグ・ジザース!!」

「くっ!？ はあああああっ!!」

そして、全ての銃口からスバルに向けて、何十発もの砲弾が放たれた。

勿論、不意を突かれたスバルは交わすことは出来なかったが、右手に持っているエクスカリバーで弾をはじき返していった。

しかし、それも長くは続かず、しまいには弾がスバルに当たり始め、スバルは蜂の巣となった。

「うわああああっ!?!」

そして、下のほうにあったウェーブロードへと落ちて行った。

「ふっふっふっ……ふはははははっ!! これで私の邪魔をするものはいなくなった。さあ、地球の最後だ!!」

スバルがやられる、少し前のWAXA司令部

「博士、博士!」

「できたの!?!」

「はい! 今そのモニターへ今の宇宙の映像を送ります!!」

研究員がヨイリー博士にそう言うと、司令室の一番大きいモニターに、今の宇宙の様子を観測した映像を映し出した。

そこには、デッドバイトへ向かって行く、光り輝いたスバルが映し

出された。

「スバル君！」

「おお、光つてやがるぜ！」

『あの二人はどこまで強くなるんだろうね』

「さあな。俺達も負けてられないぜ！」

「でも、あれはマズいんじゃないか？」

「……『えっ!?!』」「」

みんな（ソロとライト以外）がスバルのこの攻撃で終わると思っていた時、ソロの一言にライト以外のみんなが驚いた。

「せやな。これはマズいわ」

「よく見てみる、あのでかい基地を。銃口が全てロックマンに向けてられている」

「……『っ!?!』」「」

そして、ソロがそういった後、Mr・キング命名「ファイグ・ジザース」がスバルに向かって放たれた。

「危ない！」

「いや、スバルなら……！」

『うん、スバル君なら……！』

「大丈夫だよね……！」

「無理だな」

「『！？』」「『！？』」

「うん、これは俺でも分かる」

ミソラ、熱斗、エグゼ、マイルがそう呟いた瞬間、またもやソロが
そっぴい捨てた。

「あんな回避行動が、そう長く続くわけがな」

《うわああああっ！？》

「言った通りだ」

「『スバル君！』」「『！』」

「『スバル！』」「『！』」

「スバルちゃん!!」

司令室に、叫び声が木霊した。

地球、4度目の危機！??22（後書き）

感想、お願いします。

地球、4度目の危機！???

宇宙

「ここ宇宙では、スバルは何か下のほうにあったウェーブロードへと落ちていた。」

そして、ダメージが大きすぎて、スバルは片膝を立てて座り込むのが精一杯だった。

「スバル！ 大丈夫か！？」

「ロック…僕は、もう限界だよ……」

「っ！？」

「だから…君は、地球へ……戻って、違う人と一緒に……地球を」

「バカなこと言ってるんじゃないか！？」

「……でも、これしか方法はないだろ！？」

「まだまだ！ まだ俺達ができるはずだ！！」

「無理だよ！ 現に、僕の最高の力を持ってしても勝てなかったんだよ！？」

『なら、もつと強い力を手に入れればいい話じゃねえか!』

「……分かるんだ。僕はここで限界なんだって……」

『甘ったれるんじゃないじゃねえ!』

「なら君は、勝ち目がない戦いに一緒に来てくれるのか!？」

『ああ、行ってやるさ!』

「!？」

『俺の相棒はお前しかいねえ! この世界のどこを探してもお前だけだ!! だから、死ぬまで一緒に居てやるよ!』

「ロック……」

『で、お前はどうしたいんだ!? この地球を』

「守りたいさ! ……守りたいんじゃないんだ」

『? 最後、何て言ったんだ?』

スバルは思い出していた。

地球のこと。地球にいる友達や家族。そして、彼女を。

「そうさ、守りたいんじゃない! 守るんだ! 地球を! 友達を

！ 家族を！ そして 世界で一番大事な彼女を！！」

『ふんっ！ ならすることは決まったな！』

「うん。もう一度……いや、何回でも挑んでやる！！」

スバルはそう心に硬く決めると、背中の羽を大きく羽ばたかせて、上空へ飛んでいった。

WAXA・司令部

「『『スバル君！』』」

「『スバル！』」

「スバルちゃん！」

「ふん」

ここ、司令室のモニターには、スバルがデッドバイトへ飛んでいく姿が映し出されていた。

「よっしゃ！ 行けー、スバル！！」

『スバル君、頑張れー!』

「頑張つて、スバル君!」

それを見た熱斗、エグゼ、メイルはスバルを応援した。

しかし、他のみんなは分かっていた。

……今のスバルでは、デッドバイトを破壊することは出来ないだろうと。

だが、それを口にするには無かった……ただ一人を除いては。

「みんな、聞いて!」

「「「「「?」」」」」

「このままじゃあ、スバル君はまた負けちゃう!」

「なっ!」

『えっ!』

「何を言ってるの、ミソラちゃん!」

「……聞いて。多分、そっちの4人は分かっていると思うんだけど、このままじゃあスバル君は勝てないの」

「どづいづことだよ？」

『確かに、あの剣を使った必殺技は一直線上に攻撃するから、カウンターを取られやすいけど。その必殺技を使わずに、少しずつ攻撃していけば』

「それじゃあダメなの」

「『』?」「」

「あの要塞は、ダメージを与えても直ぐに回復しちゃうの」

「「なっ!?!」」

「なるほどな。何かあるとは思ってはいたが……」

「っチ！ 厄介な能力だ」

「アイツも抜かりが無いなあ」

『それじゃあ、僕が言った方法は取れないってわけだね……』

「うん。だから」

そして、ミソラは告げる。

「みんなの力を……地球のみんなの力をスバル君に与えよう!」

そう告げたミノラの声には、いつも以上に力があり、そして希望を見出せた。

地球、4度目の危機！??33（後書き）

感想、おねがいします！

地球、4度目の危機！??4（前書き）

久々更新！

これからは、またちよくちよくと更新していきますね！

地球、4度目の危機!??4

「みんなの力を……地球のみんなの力をスバル君に与えよう!」

その言葉を聞いたみんなは、目を見開いた。

しかし、誰もその言葉を否定はしなかった。

そして、ヨイリー博士が話を始めた。

「ミソラちゃん、私も……いえ、私達全員その意見に賛成よ!」

その言葉を聞いたミソラは、更に力強くこう言った。

「博士、みんなに私の言葉を伝えられますか?」

「ええ、私達に任せなさい! やるわよ、暁ちゃん!」

「サクサクサクサク、ゴクン。はい!」

そう言うと、暁はうまい棒(コーンポタージュ味)を食べ終わると、すぐにパソコンへ向かった。

そして、5分ぐらいすると暁がみんなのほうへ振り向いた。

「出来たぞ！ ミソラ、後はお前の心の準備が出来たら、全てのモニターの回線につなげ、世界中のモニターへとこの様子を中継する！」

「ありがとう、暁さん、ヨイリー博士！」

『ミソラ、準備は出来ているわよね？』

「うん！」

「よし、じゃあ回線をつなげるぞ！」

そして、世界中のモニターと言うモニターにはWAXAの司令部…
…正確に言えば、ミソラ一人が映し出されていた。

そして、世界中の人はそれに続々と気づき始めた。

「みなさん、聞いてください。今、Mr.キングの要塞が地球に向かってきています。そして、要塞が地球に衝突すると、地球は跡形も無く消滅すると思われます」

この言葉を聞いた世界中は勿論、意味が分からなかった。

が、話しているのは、あの響ミソラである。

勿論、みんな嘘とは思わずがない。

そして、世界中の人々の心の中にはある思いが生まれていた。

絶望、死、終焉などの負の感情が。

しかし、ミソラは負の感情が生まれることも分かっていた。

だから、彼女はこう言葉を続けた。

「しかし、今宇宙では要塞を止めるために、ある一人の少年が戦っています。その少年と言うのは、私の大切な人。スバル君……いえ、ロックマンです」

この言葉を聞いた人々には、また新たな感情が生まれ始めていた。

「彼は今までに何度も何度も私達の代わりにこの地球を守ってくれました。しかし、今回の危機は、彼一人では倒せないぐらい強力です」

この時、WAXAにいるみんなの心に一つの疑問が生まれていた。

なぜこんなに人々の不安を煽るのだろうか。

「では、私達はそのまま待っていることしか出来ないのでしょうか？」

ここで、少し言葉を区切るとミソラは少し深呼吸をし、

「　　いいえ、私達も戦うことは出来ます！」

と力強く言葉を発した。

「たしかに、一人一人は強くありません。しかし、みんなの力を合わせることで、力は何倍にも、何十倍にも、何百倍にもなります！
！　だから、みんなでこの地球を守りましょう！！！」

その言葉を聞いた人とは、自分がどうすればよいのかを分かり始めていた。

「そして、戦いに勝って帰ってきたロックマンに、みんながありがとうとおかえりを言いましょー！！！」

そして、人々の思いはレゾンとなって英雄へと送り込まれる。

ロッキングマンにありがとうと、お帰りを！

地球、4度目の危機！？～4～（後書き）

感想、待ってます！

地球、4度目の危機!?? 最終決戦 (前書き)

ふう、今回は文字が多いです (汗)

そして、後1〜2話ぐらいで完結です!!

……多分^ - ^ :

地球、4度目の危機！?? 最終決戦

宇宙

「フォース・バスター！！」

「無駄だ！ そんなチンケな技では、デットバイトは墜とせまい！
」

「僕は諦めない！！」

ここ宇宙では、壮大な銃撃戦が行われていた。

スバルは宇宙を飛び回りながらフォース・バスターを連発し、Mr・キングは要塞に装備されてある全ての砲撃を使って攻撃していた。

しかし、戦況はとても悪く、とてもスバルに勝ち目があるような状況ではなかった。

が、今のスバルの表情はとても諦めている様な顔ではなかった。

そのうえ、他の誰かが今のスバルの表情を見ると、みんな揃ってこう思うだろう。

スバルには、何か勝つための考えがある、と。

勿論、それはキングにも言える。

だから、キングが攻撃の手を休めることは無かった。

『スバル！ 上だ！！』

「っ！？」

「これで終わりだ！！」

「ぐっ！！」

スバルは、上から砲撃を避ける出来なかった。

避けることは出来なかったが、スバルは背中の中の羽で自分のみを守るようにして砲撃から身を守った。

しかし、その行動で隙が出来た瞬間をキングは見逃さなかった。

「食らえ喰らえくらええええええっ！！」

『っ！？ スバルッ！！』

羽を防御に回したスバルは、その場に止まることしか出来なかった。

そこへデットバイトの全砲撃をまたしてもスバルに対して発射したのだ。

「ぐわあああああつ!!！」

『スバル!!』

全砲撃を全方位から受けたスバルは、そのままウエーブロードへと落ちて行った。

そして、ウエーブロードに落ちたスバルの姿は、シャイニング・スターではなく、シューティング・スターの姿で、もう体はボロボロであった。

「くっ……!!」

「な……!?!? 何故立ち上がれる!?!」

しかし、スバルは立った。

ボロボロになった体で、ゆっくりとだがその場で立ち上がった。

そして、スバルの目はやっぱり死んではいなかった。

「ぼ……僕は地球を…守るんだ…」

「な、何故そこまでして、地球を守る!?!」

「地球には…大切な仲間が、大切な人がいるから…大切な人が住んでいる地球を僕は」

そしてスバルは、力強く言う。

「守る!!」

「絆が何だと言うのだ!! そんなもの、私がぶち壊してやるわ!!」

キングがそう言うと、デットバイトの中心部が少し開いた。

そして、そこからは巨大なレーザー砲が姿を現した。

「わはははははは!! コレで貴様の後ろにある地球ごとぶっ飛ばしてやるわ!!」

「くっ!!」

確かに、スバルの後ろには地球が青く輝いていた。

「まだまだ! まだ、僕は諦めない!!」

そう言いながら、スバルは右手のバスターをデットバイトに向けて構えた。

「ふん。そんなバスターでデットバイトを墜とせると思っているのか？」

「……………」

「ふん。まあ、どうでも良いのだがな！」

実際のことを言うと、バスターで勝てる可能性は、ほぼ0%だ。

この状況で、少し前のスバルなら「勝てるわけ無い」と考えるだろう。

しかし、今のスバルは無意識に「勝てる可能性が0じゃないなら、諦める必要は無い」と考えていた。

「はぁああああっ！…！」

そして、スバルはチャージショットを撃つために、力を溜めていた。

しかし、そこで思わぬことが起きた。

「な、何だこの光は!？」

「この光って……」

地球が強く光出したのだ。

そして、その光は束となってスバルを包み込んだ。

「な、何が起きているのだ!？」

「この光は、やっぱり地球の……」

その光の中でスバル達は感じた。

『この思いは、大吾達だな』

「うん……! 地球のみんなが、僕達に力を貸してくれてるんだよ
」!

地球にいる、自分を支えてくれている、大切な親や友達……そして、
彼女の思いを。

そして、スバルの体の中に思いが力になっていくのを感じた。

そして、光から解き放たれたスバルの姿は、シャイニング・スター・
ロッキーマンになっていた。

「なっ!?!」

「……心の奥から湧いてくる。これなら……」

スバルはそう言うと、背中の羽を勢い良く広げた。

広げた羽は、いつもの羽の二倍以上は大きくなっていった。

「……僕は、この戦いを通じて分かったことが2つある」

「何?」

「1つは、人間が生きている限り悪はなくならないって事」

「ふん! それ当たり前なのだ! 人間は愚かなのだ! だから、私が地球を破壊して、人類を消滅させる!」

「確かに人間は愚かだよ。でも、愚かだから人と助け合い、正義を見つめる! だから、正義も人間が生きている限りなくならない! それか2つ目だ!」

「それは詭弁だ!」

「詭弁だと思うなら、僕を倒せば良い!」

「ああ、貴様もろとも地球を破壊する!」

「でも、僕は倒れない！　そして、お前の考えが詭弁じゃないことを証明してみせる！」

「ほざけ！！　デス・オーバー・グレネード！！」

キングがそう叫ぶと、デットバイトから巨大なレーザー砲が放たれた。

しかしスバルは、特に焦った様子を見せずに右手をパーにしてレーザーの方向に向けると、二人で高らかに叫んだ。

「『シャイニング・ストリーム！！』」

スバル達がそう叫ぶと、背中が輝きだしレーザーを放った。

そして、右手から放ったレーザーに、羽から放たれたレーザーが巻きつき、文字通り「ストリーム」になった。

デットバイトが放ったレーザーと、スバル達が放ったレーザーは直ぐに衝突した。

「ぐぬぬぬっ！！」

「Mr・キング！　お前の野望も、この一撃で終わりだ！」

「ま、負けるだど！？　また、お前に負けるだど！？」

「お前は、僕だけに負けたんじゃない、地球のみんなに負けたんだ！」

「っ!？」

「はあああああああつ!！」

「ぐ、ぐおおおおおおつ!？」

スバルが言ったとおり、スバルが放ったレーザーは、デットバイトが放ったレーザーを飲み込んでデットバイトに直撃した。

「わ、私が死んでも悪は滅びぬぞー!！」

そういつて、デットバイトは破壊された。

「……確かに、君が死んでも悪は滅びないよ。でも、悪が滅びないって事は正義が滅びないって事にもなるんだ」

『ああ、そうだな』

「だから、これから先の未来で地球が危機に陥っても、正義の心を持った人が何とかしてくれるよ。僕たちがそうだった様にね」

『……お前に正義なんてあったっけか?』

「ロック、それを今言っちゃう？」

『ははは、悪いな』

「そりゃ、確かに最初は無かったよ？ でも、君と一緒に戦っているうちに正義が出てきたんだよ」

『なんだよ、それは』

「あはは、いいじゃんか。そういう事にしておいてよ？」

『ふん、しゃあねえな』

二人は、そう言いながら笑いあっていた。

そこには、さっきまで命を掛けて地球を守っていた英雄ヒーローの顔は無く、友達と話している顔があった。

「さつてつと。じゃあ、そろそろ」

『ああ、そうだな。そろそろ』

「『地球に帰ろう（帰るか）！』」

そして、スバル達は羽を羽ばたかせ、地球へ向かった。

地球、4度目の危機！?? 最終決戦 (後書き)

感想、お願いします！

帰還（前書き）

なでなで、この作品ももう少して終わりを迎えようとしています！

帰還

少し前の地球・WAXA・司令室

《『『シャイニング・ストリーム!!』』》

ここ、地球では宇宙での戦いが全てのテレビで配信されていた。

しかし、スバルが「シャイニング・ストリーム」を放つと、その力の波動で中継用のカメラが壊れてしまっていた。

「博士、博士!! スバル君は、スバル君は!?!」

「み、ミソラちゃん! 落ち着いて! 今、大急ぎで復旧作業をしているから!」

「ううううう」

ミソラはそう言って、少しの間はジツとしていたが、2〜3分経つと「もう待てない」と叫ぶと、外へ出て行った。

「わ、私も!」

「お、俺も!」

『うん！ 僕たちも行こう！』

「ったくっ！ 俺を忘れるなよ！！」

「…………ふんっ」

「ったく、しゃあないなあ」

そう言いながら、一人、また一人と司令室を出て外に向かって行った。

「…………ここじゃ、外が見えないよ！？」

「どこか違う場所に行かないと…………」

「い、コダマタウンに行こうぜ！」

『そうだね！』

「善は急げだ！！」

「ふっ、騒がしいやつらだ」

「ほないくで！」

ライトがそう言うのと、この場にいる全員が電波変換&クロスフュー

ジョンを完了させた。

そして、すぐさまにコダマタウンへ向けて出発した。

「……………悪いなあ、シドウ」

「なあに、気にするな。さあ、急ぐぞ!」

……………ライトは変身できないので、暁におぶってもらった。

コダマタウン

「い、意外と早くに着くものね」

「ああ、あれから5分ぐらいしか経ってないぜ」

「……………」

「ミノラちゃん?」

「どうしたの?」

コダマタウンに着いたミノラ達は少し一服とばかりにその場に座っていた。

しかし、ミソラだけは経ち続け、尚且ななかつ空を見続けていた。

「……あ、あれって!!」

ミソラがそう言いながら、空を指差した。

無論、その場にいたみんなはミソラが指差した空を見上げた。

そこには……

「いちいちうるさいなあ。ちゃんと大気圏は抜けたからいいじゃん
!」

『テメエ！ 俺を前に出すから、俺の口がちょっと火傷しちゃった
じゃねえか!!』

「だから！ 後でちゃんとアイス上げるって言ってるじゃん？」

『それで許されると思ってんのか!？』

最後の戦いを終え、地球へと帰ってくる英雄の姿があった。

そして、英雄はミソラ達より少し離れた場所に着地した。

英雄は、ミソラ達には全く気づかずに相棒と話していた。

「全く、ロックは……」

『いやいや！　今回悪いのは全面的にスバルだからな！』

「えっ!？」

『何だよ、その今知りましたあゝ、みたいな顔は!』

「ふう、疲れた」

『俺のほうが疲れたわ!』

「あはは、そうだね。……さつとつと、それじゃあ、そろそろ」

「スバル君!」

「へっ?」

そう言われて、英雄は後ろを振り向いた。

そして、振り向いた先には英雄が一番守りたかった笑顔があった。

そして、英雄はクスツと笑うと両手で彼女を迎えた。

「おかえり、スバル君!」

「うん、ただいま!」

そして、英雄は地球に帰ってきた。

帰還（後書き）

感想、お待ちしています!!

最終話（前書き）

これにて、流星のロックマン〜地球、4度目の危機！〜
す！！ 完結で

最終話

あの地球4度目の危機を回避した日から、1週間が経った。

WAXA・司令部

「さてつと、じゃあそろそろ帰るわ」

「熱斗君、またどこかで会えるといいね」

「会えるさ、絶対にな！」

「そつだね！」

ここ、司令部では熱斗とメイルを過去へと返すための機械が完成し、熱斗達は過去へ帰ろうとしていた。

勿論、見送りには一緒に戦った仲間たちがいた。

「にしても、案外早く機会が作れたのね？」

「ヨイリー博士たちによれば、前にスバル君が過去へ行った機会を応用して作つたらしいよ」

『ああ、あの時ね。あの時は、スバル君に助けてもらったわね』

『ロールちゃん、僕も助けに行っただけ……』

『知ってるわよ？　ありがとね、ロックマン』

「あれ？　ロックマンのやつ、どこ行ったんだ？」

「熱斗……。ロックマンなら、私のPETの中にいるわよ」

「ん？　あ、そうなんだ。なら心配ねえか」

「さてつと、それじゃあ、そろそろマシンを起動するぞ……サクサクサクサク」

「さてつと。……じゃあな、みんな！　また会おうぜ！！」

「バイバイ、みんな！」

「バイバイ！！」

「またねー！！」

そういうお別れの言葉を交わすと、二人は機械の中へと入っていった。

「熱斗…熱斗おおお！」

「何、パパ？」

「えっ！？」

ここ、200年前では祐一郎が叫んだ直後に、熱斗達は研究室へと姿を現した。

「ね、熱斗！？ お前、どうしてここに！？」

「……そういえば、何でここに来たんだろ？」

「確かにそうね……何で、熱斗のお父さんの研究室に？」

『もう、いいじゃない別に！ 帰ってきたんだからさ！』

『うん、そうだね！』

「まあ、それもそうだな」

「そうね」

「……お前達、何の話をしてるんだ？」

「『『『内緒だよ！』』』」

「うん、200年前の世界にも平和が訪れた。」

現代

「さてつと、それじゃあそろそろ私もライブに行かなきゃ」

「あつ、そうか！ 今日だったね、ミソラちゃんの1夜限りの復活ライブ」

「そう だから、そろそろ私も行くね」

「うん。それじゃあ、僕も委員長たちと合流して見に行くよ」

「りょうか〜い！ それじゃあ、また後でね」

「うん〜！」

そう言つと、ミソラはライブ会場であるベイサイドシティへと向かって行った。

「それじゃあ、暁さんライトさん！ 失礼します〜！」

「ああ、またなスバル〜！」

「ほなな！」

そして、スバルもこう明るく言うとWAXAを後にした。

「さてっと、それじゃあそろそろワイも宇宙に帰るとするわ」

「ん？ ここにいればいいんじゃないのか？」

「ワイな、縛られるのは好きとちゃうねん」

ライトは笑いながらそう言つと、「ほな、またな」と言つてWAXAを去つて行つた。

「ふう。さてっと、俺はうまい棒でも買ってくるかな」

そして、暁も司令室を後にした。

バイサイドシティ・ライブ会場

「全く、スバル君のせいで遅れそうになつたじゃない！！」

「いっ、いっめんってー!」

「委員長。でもスバル君のおかげでこんなにいい席に座れるんですよ?」

「うっ!」

「委員長も、少しはスバルに感謝しないな!」

「うっ、うっ、うっさいわね!! キザマロにゴン太! そこになおりなさい!」

「「なんでえー!?!?!」」

「あはははは!」

と、一番前の席でこんな会話をしていると、一気に会場の電気が消され会場は真っ暗になった。

真っ暗になると、ステージの上にライブ衣装を着たミソラが姿を現した。

「みんなー! 今日が集まってくれてありがとうー!」

《うおおおおおっ!》

「それじゃあ、一曲目行くよー!」

《うおおおおおっ！》

「飛び交うシグナル それぞれの今日を乗せて 同じ周波数 重ね
あい君と話す 迷い ためらいを振り切り そこに あるはずの道
を行こう 見上げる空は 心に 積もる 願いの色 描く 夢を映
し出す 必ず いつか この手に 触れる明日への地図 強く 高
く 届くまで 輝いて」

《うおおおおおっ！ ミ・ソ・ラ！ ミ・ソ・ラ！》

「盛り上がってきたー！ーッ！ じゃあ、次の曲は」

《な、なんだあれ！？》

「へっ？」

ミソラは、観客が指差す方向を見た。

そこには……。

《メットー！》

《う、ウイルスだ！！》

大量のウイルスが姿を表していた。

《に、逃げるーっ！》

「待って！」

そのウイルスを見た観客達は、すぐさまにこの会場を離れようとしたが、それをミソラが引き止めた。

「みんな、心配しないで！ この会場には……私の一番好きな人がいるから！」

《……って事は、この会場に星河スバルが！？》

《なら、安心だな！》

《っていうか、生でロックマンの戦いが見れるのか！？》

《やべー！ 何か興奮してきた！》

「それじゃあ、みんなで呼びましょう！！」

そう言うと、ミソラは一回一番前の席にいるスバルを見た。

そして、片目ウィンクをスバルに送った。

「……………はあ」

『何ため息なんてしてやがるんだ？』

「本当よ、ほらさっさと片付けてらっしゃい！」

「なんなら、俺が行くか？」

「はあ、ゴン太君は空気を読めないんですか？」

「何！？」

「あはは。じゃあ、行ってくるよ」

「」「頑張って」「」

「ロックマーン！」

《ロックマーン！》

「行くよ、ロック！」

『おう！ 暴れるぜ！』

「トランスコード003！ シューティング・スター・ロックマン

「！」

〜FiFi〜

最終話（後書き）

今まで、たくさんのご声援……本当に、本当にありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2642j/>

流星のロックマン～地球、4度目の危機!?!～

2011年7月28日09時01分発行